

諏訪神社本殿移築・久米山墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 諏訪神社遺跡 久米山遺跡群

—諏訪神社御旅所地区—

2007年3月

高松市教育委員会



諏訪神社古墳 第2堅穴式石槨



諏訪神社古墳 土器枕



久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区— 箱式石棺墓



久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区— 土器棺墓 1～5

## 例　　言

- 1 本報告書は、石清水神社が計画した諏訪神社本殿移築・久米山墓地造成工事に伴う発掘調査報告書で、高松市東山崎町に所在する諏訪神社遺跡（すわじんじやいせき）・久米山遺跡群（くめやまいせきぐん）—諏訪神社御旅所地区—の報告を収録した。
- 2 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。  
【諏訪神社遺跡】  
調査地：高松市東山崎町1074番地  
発掘調査：平成2年11月7日～平成2年12月10日  
【久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—】  
調査地：高松市東山崎町1095番地1  
発掘調査：平成3年3月12日～平成3年4月23日
- 3 発掘調査および整理作業は高松市教育委員会が担当した。発掘調査費用は石清水神社が、整理費用は高松市教育委員会が負担した。
- 4 発掘調査は、諏訪神社遺跡を高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員山元敏裕が担当した。久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—は同専門員川畠聰が担当し、同非常勤嘱託中西克也と末光甲正（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。整理作業はそれぞれ調査担当者があたった。
- 5 本報告書の執筆・編集は、第Ⅰ部・第Ⅲ部・第Ⅳ部第1・2章を川畠が、第Ⅱ部第1章～第2章第4節・第Ⅳ部第3章を山元が行った。ただし、第Ⅰ部第2章は、本市教委報告書第71集「久本古墳」から抜粋・修正した。また、第Ⅱ部第2章第5節については、徳島県立博物館学芸員魚島純一氏から玉稿をいただいた。
- 6 発掘調査から整理作業および報告書執筆を行うにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）  
石清水神社、香川県教育委員会、魚島純一、大久保徹也、大山真充、國木健司、濱田延充
- 7 挿図として、国土地理院発行1/25,000地形図および高松市都市計画図1/2,500「新田2」を一部改変して使用した。
- 8 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は第1～3・107図が真北を、それ以外は磁北を示す。
- 9 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。  
SD: 溝　　SK: 土坑　　SP: 柱穴　　SX: 不明遺構
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 11 諏訪神社遺跡で検出した竪穴式石槨2基および久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—で検出した箱式石棺墓1基は、石清水神社の御好意によって、諏訪神社境内に移築保存されている。

# 目 次

## 第Ⅰ部 はじめに

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査と整理作業の経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

## 第Ⅱ部 諏訪神社遺跡

第1章 調査の成果	
第1節 第2次試掘調査の概要	7
第2節 調査の方法	8
第3節 調査の概要と基本層序	10
第4節 調査の成果	
(1) 弥生時代前期から後期前半の遺構と遺物	10
(2) 弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物	26
(3) 古墳時代後期の遺構と遺物	48
(4) 遺構に伴わない出土遺物	53
(5) 所属時期不明の遺構	55
(6) 出土地不明遺物	55
第2章 まとめ	
第1節 S D O 3 の機能について	57
第2節 諏訪神社遺跡における弥生時代の集団墓（木棺墓）群について	59
第3節 諏訪神社古墳について	62
第4節 諏訪神社遺跡における遺構の変遷について	65
第5節 諏訪神社古墳出土の土器枕に付着した赤色顔料の蛍光X線分析	74

## 第Ⅲ部 久米山遺跡群 — 諏訪神社御旅所地区 —

第1章 調査の成果	
第1節 調査の方法	77
第2節 調査地の概要と基本層序	77
第3節 遺構と遺物	
(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	82
(2) 古墳時代後期の遺構と遺物	94
(3) 奈良時代の遺構と遺物	98
(4) 室町時代の遺構と遺物	98
(5) 所属時期不明の遺構	99
(6) 掘乱土層出土の遺物	100
第2章 まとめ	
第1節 土器棺墓について	103
第2節 箱式石棺墓について	104
第3節 遺構の変遷について	110

## 第Ⅳ部 久米山遺跡群周辺の調査

第1章 久米山遺跡群 — 丘陵西側斜面地区 —	113
第2章 川添浄水場遺跡	115
第3章 久米山遺跡群 — 久米山東墓地地区 —	116

# 第 I 部　はじめに



# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

平成2年度に石清水神社によって東山崎町に所在する諏訪神社本殿の移築が計画された。当該地は、諏訪神社本殿裏古墳として遺跡台帳に登録されていたため、高松市教育委員会と石清水神社は周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱について協議を行った。その結果、高松市教育委員会が事前に試掘調査を実施することで合意した。試掘調査は平成2年10月1日～12日にかけて実施し、古墳の主体部である竪穴式石槨を確認し、諏訪神社本殿が鎮座する丘陵頂部全体が古墳である可能性が考えられた。この試掘期間中、諏訪神社から約150m南にある久米山墓地造成工事現場（諏訪神社御旅所跡）において箱式石棺墓の検出と弥生土器の出土が高松市教育委員会に伝えられた。当該地も、久米山5号墳として遺跡台帳に登録されていたことから、高松市教育委員会と石清水神社は再度協議を行った。その結果、当該地についても高松市教育委員会が事前に試掘調査を実施することで合意し、諏訪神社の試掘調査と合わせて実施し、箱式石棺墓以外にも弥生の土器棺墓2基を確認し、工事予定地全体に包蔵地が広がると考えられた。以上の結果をもとに、高松市教育委員会は香川県教育委員会に対し試掘調査結果を送付するとともに、石清水神社から提出された埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条2第1項<当時>）を進達した。香川県教育委員会より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、発掘調査実施の旨の回答が高松市教育委員会にあり、石清水神社に伝達した。

これを受け、高松市教育委員会は石清水神社と協議を行った結果、諏訪神社と久米山墓地とともに、切土による工事手法に変更を加えることが難しいことから、工事着手前に発掘調査を実施することで合意し、諏訪神社は平成2年11月に、久米山墓地は平成3年3月に発掘調査協定書を締結した。業務名は「諏訪神社本殿移築に伴う発掘調査協定書」および「久米山墓地造成に伴う発掘調査協定書」とし、高松市教育委員会は発掘調査・整理作業の実務を行い、発掘費用負担および契約・支払事務については石清水神社が行うこととした。

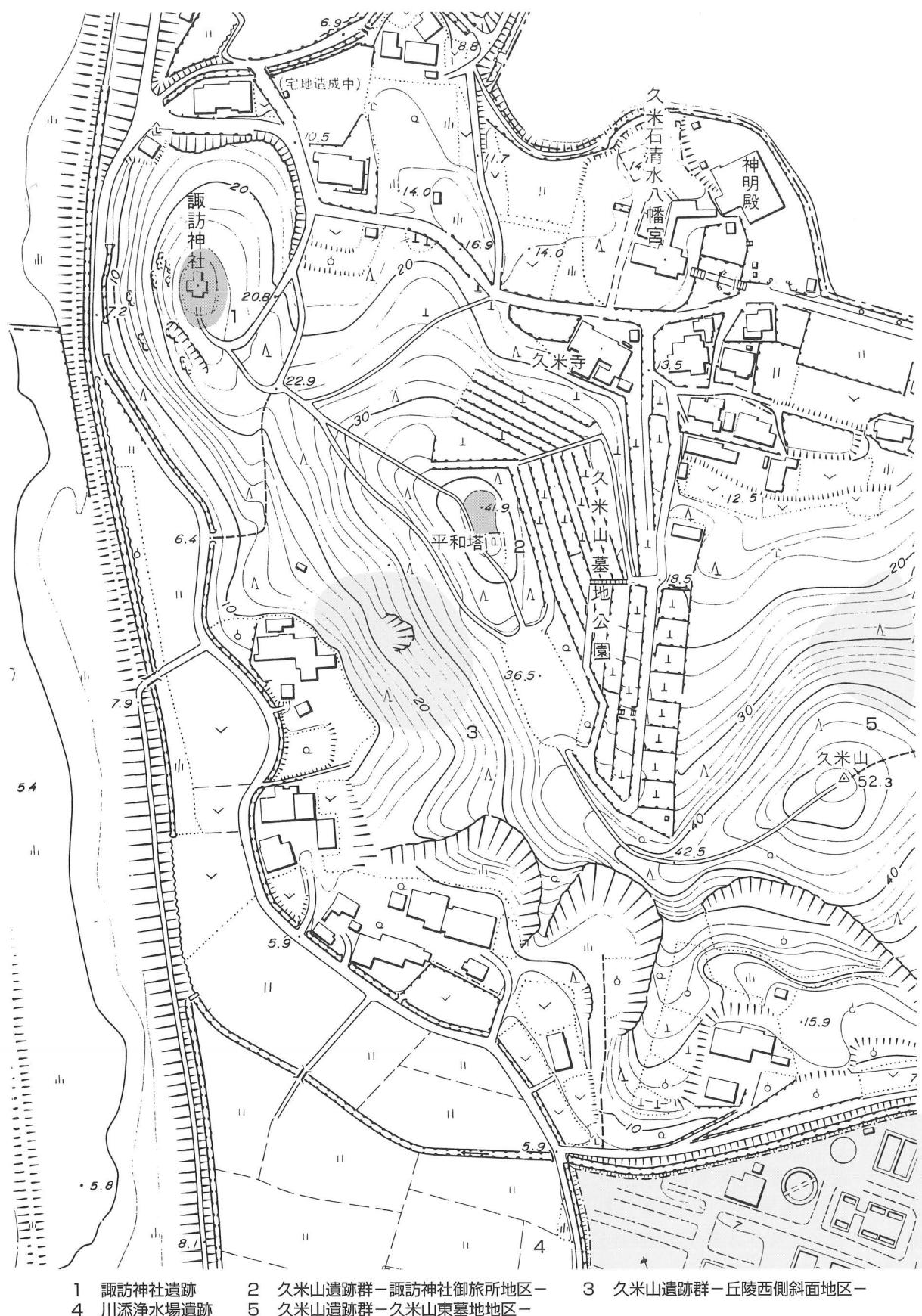
## 第2節 調査と整理作業の経過

諏訪神社の発掘調査は平成2年11月7日から開始し、12月10日に全体の調査が終了した。調査面積は、850m<sup>2</sup>である。久米山墓地の発掘調査は平成3年3月12日から開始し、4月23日に全体の調査が終了した。調査面積は、272m<sup>2</sup>である。

整理作業は、発掘調査終了後から隨時行ったが、調査担当者の人事異動による中断等も生じたことから、平成18年3月に至って整理作業を終了することができた。その後、報告書執筆を行った。



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺地形図（縮尺 1/2,500）

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置し、南は讃岐山脈が控え、北は瀬戸内海に面している。高松市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野によって占められている。気候が温かなこと也有って、讃岐三白（綿・塩・砂糖）の産出が有名であった。高松平野は、東を立石山、雲附山等に、南を日山、上佐山、西を五色台山塊に遮られ、北に瀬戸内海を望み、南北約20km、東西約16kmを測る。平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の独立山塊は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食開拓から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。安山岩の一部はサヌカイトとして特に有名であり、五色台は日本有数の原産地として知られている。

また、高松平野は、四国中央部に東西に連なる讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地である。高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。特に香東川が平野の形成に大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川の沖積作用によるものであると言わされている。現在、石清尾山塊の西側を直線的に北流する香東川は、17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には、石清尾山塊の南側から回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等によると林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。一方、諏訪神社遺跡等の位置する高松平野北東部は、春日川、新川の東岸にあたる。春日、新川の両河川は水量に乏しく、西側の香東川のように大規模な扇状地は見られない。その流域一帯は、自然堤防地帯と三角州地帯で、茶臼山、久米山付近で分けられるようである。

諏訪神社遺跡等の所在する高松平野東部は、寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、その頃の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、屋島は島として描かれている。寛永14（1637）年に生駒藩の西嶋八兵衛は、堤防を築き、堤防より南の干拓を行った。堤防はのちに志度街道として利用されており、現在の県道牟礼中新線付近まで干拓されたことがうかがえる。生駒氏の改易後、高松藩主となった松平頼重は、寛文7（1667）年に干拓を進め、現在の高松琴平電気鉄道志度線あたりまでが陸地化されたことが知られている。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として、香西成資が古老の話を元に享保4（1719）年に成立させた『南海通記』がある。その中に天正10（1582）年頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山兩受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは、現在の高松市新田町小山にあたると考えられ、この小山近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと想定できる。なお、小山の北西には堀江という地名が残っていることからも当時の海岸線を復元する手がかりになる。

北を屋島に面した海岸（旧地形による）、東を立石山山塊、南を久米山丘陵、西を新川、春日川によって限られた高松平野の一角は、古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが、天正16（1588）年の生駒親正による高松城築造以後は、城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。現在、古高松地区の北部については干拓により、高松市の中心部から平地が続いており、急速に宅地化が進んでいる。一方、古高松地区の南部については丘陵が西へ大きく張り出しており、張り出した丘陵部の先端には各開拓谷から流れ出る水を貯水する久米池が平野部の大部分を占めている。このため、北部に比べ、比較的散村的状況をよく残した地域である。

当該遺跡は、古高松地区の最南端に位置する。地形的には高松平野東境にある標高200～300mの立石山塊から西に派生する丘陵の一つ、久米山から北西へのびる尾根の先端部にあたる。丘陵西に隣接して、新川が流れている。現状では内陸部に見えるが、新田町小山から約1.5kmと近く、原始・古代には海浜部に近い地域であった可能性が考えられる。

## 第2節 歴史的環境

当該遺跡は高松平野の東部にあたり、平野中央部北寄りに位置する石清尾山塊と共に遺跡の多い地域として早くから認識されてきた。周辺の遺跡の大部分は弥生時代から古墳時代にかけてのものであるが、旧石器時代・縄文時代の遺物・遺構も若干知られている。さらに、近年の大規模開発に伴い数多くの遺跡が発掘調査され、その様相が解明されつつある。

旧石器時代については本格的な遺構は知られていないが、表採資料や後世の遺構に混入した状態での出土例が見られる。久米池南遺跡、前田東・中村遺跡、池戸八幡神社遺跡等においてナイフ型石器を主体とした後期旧石器が出土している。縄文時代については、小山・南谷遺跡や奥の坊奥池西遺跡において落とし穴状の土坑が検出されている。

弥生時代前期の遺跡としては、今回報告する諏訪神社遺跡のみである。中期前半では羽間遺跡において銅剣の出土が知られている。集落としては多量の土器・石器とともに分銅形土製品が出土した奥の坊遺跡が見られる。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡があり、絵画土器や鉄斧の出土で知られる。後期前半では、大空遺跡、大空南（スペリ山南）遺跡、南谷遺跡、小山・南谷遺跡、奥の坊現前遺跡、久米山遺跡群がある。後期後半では牟礼町で、漆が付着した土器が数多く出土した原中村遺跡があげられるほか、前田東・中村遺跡では旧河道中から多量の土器が出土している。

古墳時代になると、高松平野北東部では、集落遺跡は発見されていない。一方、古墳としては、高松平野では積石塚として有名な石清尾山古墳群があるが、平野北東部では積石塚は造られず、盛土で築かれている。平野北東部で最古の古墳としては諏訪神社遺跡で検出された3基の竪穴式石槨がある。また、高松市茶臼山古墳は全長75mの前方後円墳で、後円部には竪穴式石槨が2箇所設けられており、第1主体からは鍬形石2点、画文帶神獸鏡1点などが出土している。鍬形石は県内唯一の出土例で、その石槨構造とともに畿内的な特徴を持った古墳との評価を受ける要素の一つとなっている。さらに、屋島には九州の阿蘇石の石棺をもつ長崎鼻古墳が見られる。後期に属する古墳としては、複室構造をもつ小山古墳や天井石を1枚の石で架構した山下古墳、石棚をもつ久本古墳といった単体で所在する巨石墳と、長尾古墳群、岡山古墳群、平尾古墳群といった中小規模の横穴式石室墳から構成される古墳群が見られる。また、瀧本神社古墳はT字形の石室をもつことで知られる。この他にも平野東部の丘陵帯には数多くの古墳の存在が知られるが、調査例が少なく実態が不明なものが多い。

古代においては、当該地域は山田郡に属する。この山田郡の郡衙としては「宮廻郷」が有力視されており、現在の前田地区付近と考えられている。また、屋島には『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られており、近年の屋島基礎調査事業において石墨や城門などの遺構が発見されている。その他、山田郡内には古代寺院が多く、そのうち山下廃寺や宝寿寺跡が比較的近距離に位置し、前田東・中村遺跡においても瓦等が出土しており、宝寿寺跡の一部と考えられている。なお、新田本村遺跡、小山・南谷遺跡、奥の坊現前遺跡では高松平野の条里地割（N-11° - E）に先行し、方向の異なる条里地割（N-5° - E）が発見されており、この地割は奥の坊現前遺跡の調査で7世紀後半にさかのぼると考えられている。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く、数多くの戦いが行われている。まず、源氏と平氏が寿永4（1185）年に屋島で戦い、那須与一や佐藤継信の戦い振りが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが、建武2（1335）年、北朝方の細川定禪の挙兵により落城した。喜岡城は、その後も代々高松氏の居城となるが、天正10（1582）年、秀吉の四国征伐時に落城している。また、山田郡は十河氏の勢力範囲内で、十河氏から分家した前田氏が前田城を築いている。調査された遺跡としては、中世末～近世初頭にかけての溝で区画された屋敷が検出された川南・西遺跡や東山崎・水田遺跡があげられる。

近世になると、天正16（1588）年に生駒親正により高松城が築かれる。生駒氏の治世においては、西嶋八兵衛により香東川の付け替えや木太町から新田町の干拓等の大規模な土木工事を行っている。その後、高松藩主となった松平頼重も干拓や治水、新田開発に取り組んでおり、発掘調査された遺跡としては川南・東遺跡がある。



第3図 周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	主な遺物	備考
1	諏訪神社遺跡	高松市東山崎町	弥生・古墳	竪穴式石槨・土坑墓・壺棺墓・溝	弥生土器・管玉	1990年調査
2	久米山遺跡群	高松市東山崎町	弥生～中世	土器棺墓・木棺墓	弥生土器・須恵器・陶磁器	1991年調査
3	川南・西遺跡	高松市春日町	中世～近世	屋敷跡・井戸・溝・土坑	土師器・輸入磁器・鐔	1996年調査
4	川南・東遺跡	高松市春日町	近世	屋敷跡・溝・土坑	陶磁器	1996年調査
5	新田本村遺跡	高松市新田町	縄文～近世	掘立柱建物・条里溝	土師器・須恵器	1996・1997年調査
6	小山・南谷遺跡	高松市新田町	縄文～中世	掘立柱建物・条里溝・井戸	弥生土器・土師器・須恵器	1993～1995年調査
7	長尾1号墳	高松市高松町	古墳	円墳・横穴式石室		
8	長尾2号墳	高松市高松町	古墳	円墳・横穴式石室		
9	長尾3号墳	高松市高松町	古墳	円墳・横穴式石室		
10	奥の坊権現前遺跡	高松市高松町	弥生・古代	竪穴住居・掘立柱建物・旧河道・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器	1996・1997年調査
11	奥ノ坊古墳	高松市高松町	古墳	円墳	須恵器横瓶	1955年出土・消滅
12	奥ノ坊2～4号墳	高松市高松町	古墳	円墳3基	須恵器	2002年調査・消滅
13	奥の坊遺跡	高松市高松町	弥生・古代	竪穴住居・掘立柱建物・旧河道・溝・土坑	弥生土器・石器・鉄器	1998～2002年調査
14	金川潤古墳	高松市高松町	古墳	円墳径10m	須恵器	1995年調査・消滅
15	奥の坊奥池西遺跡	高松市高松町	縄文～近世	落とし穴・土坑・溝	繩文土器・瓦器・土師器	2000年調査
16	大空北遺跡	高松市高松町	弥生	土坑・溝	弥生土器	1999年調査
17	大空古墳	高松市高松町	古墳	円墳径11m	須恵器	1995年調査・消滅
18	スベリ古墳	高松市高松町	古墳	円墳	須恵器壺	1954年出土・消滅
19	大空遺跡	高松市高松町	弥生	土坑	弥生土器・石鎌・貝	1954年調査
20	大空南遺跡	高松市高松町	弥生		弥生土器	1955年出土
21	南谷古墳	高松市高松町	古墳	円墳	須恵器横瓶	1955年出土・消滅
22	南谷遺跡	高松市高松町	弥生			1976年出土
23	石塚古墳	高松市新田町	古墳	円墳	円筒埴輪・土器片	消滅
24	小山古墳	高松市新田町	古墳	円墳・横穴式石室（複室）	須恵器長頸壺	1950年消滅
25	山下古墳	高松市新田町	古墳	横穴式石室		1977年調査
26	山下廐寺	高松市新田町	古代		瓦	
27	岡山小古墳群	高松市新田町	古墳	円墳15基・箱式石棺？		2006年調査
28	岡山1号墳	高松市新田町	古墳	前方後円墳18m	土器片	
29	岡山2号墳	高松市新田町	古墳	円墳・横穴式石室		
30	岡山3号墳	高松市新田町	古墳	円墳		
31	岡山4号墳	高松市新田町	古墳	円墳・横穴式石室		
32	岡山5号墳	高松市新田町	古墳	円墳・横穴式石室		
33	丸山1号墳	高松市新田町	古墳	円墳		大正年間消滅
34	丸山2号墳	高松市新田町	古墳	円墳		大正年間消滅
35	大谷山古墳	高松市新田町	古墳	円墳3基		1930年消滅
36	漆谷古墳群	高松市新田町	古墳	円墳3基・横穴式石室	土師器・須恵器	1989年調査
37	久本山東峰古墳	高松市新田町	古墳	箱式石棺		
38	久本古墳	高松市新田町	古墳	円墳・周溝・横穴式石室・石棚	陶棺・銅鏡・須恵器	1970・2003年調査
39	久米池遺跡	高松市新田町	弥生～近世	掘立柱建物・旧河道・溝	弥生土器・須恵器・陶磁器	2002年調査
40	喜岡城跡	高松市高松町	中世			
41	川添淨水場遺跡	高松市東山崎町	弥生		弥生土器	1973年調査
42	茶臼山8号墳	高松市新田町	古墳	円墳		消滅
43	久米池南遺跡	高松市新田町	弥生	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	弥生土器・絵画土器	1987～1988年調査
44	高松市茶臼山古墳	高松市前田西町	古墳	前方後円墳75m・竪穴式石槨・箱式石棺	鏡・鍼形石・鉄劍・鉄刀・玉	1969年調査
45	茶臼山古墳群	高松市前田西町	古墳	円墳5基程度		
46	北山西古墳	高松市前田西町	古墳	円墳径18m	須恵器甕	1969年消滅
47	北山古墳	高松市新田町	古墳	円墳径13.5m・粘土櫛	鉄刀・鉄劍・鉄斧・櫛	1972年調査・消滅
48	瀧本神社古墳	高松市前田西町	古墳	円墳・横穴式石室（T字形）	石製骨蔵器	
49	東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	中世～近世	掘立柱建物・溝・土坑・井戸	土師器・須恵器・陶磁器	1988年調査
50	宮廻八幡宮境内古墳	高松市前田西町	古墳	円墳	須恵器	消滅
51	岡崎古墳	高松市前田西町	古墳	円墳	須恵器	消滅
52	田楽古墳	高松市前田西町	古墳	円墳・横穴式石室		
53	金石6号墳	高松市前田西町	古墳	箱式石棺	人骨	「前田郷土誌」1号・消滅
54	金石1号墳	高松市前田西町	古墳	箱式石棺		同2号
55	金石2号墳	高松市前田西町	古墳	円墳径11m・横穴式石室		2006年調査・同3号
56	平尾1号墳	高松市前田西町	古墳	円墳径13m・横穴式石室	須恵器	2006年調査
57	平尾2号墳	高松市前田西町	古墳	円墳・横穴式石室		
58	平尾3号墳	高松市前田東町	古墳	円墳径15m・横穴式石室		
59	平尾4号墳	高松市前田東町	古墳	円墳径12m・横穴式石室		
60	平尾小古墳群	高松市前田東町	古墳	円墳		
61	山本古墳	高松市前田東町	古墳	円墳・横穴式石室		
62	椿神社古墳	三木町風呂谷	古墳	円墳径11m		
63	前田城跡	高松市前田西町	中世	空堀・土塁		
64	宝寿寺跡	高松市前田東町	古代	土壇・礎石	瓦	
65	前田東・中村遺跡	高松市前田東町	縄文～近世	掘立柱建物・旧河道・方形周溝墓・平窯	緑釉陶器・墨書き土器・瓦	1988～1991年調査
66	西浦谷遺跡	三木町池戸	弥生	竪穴住居・土坑・溝	弥生土器・石器	1995～1997年調査
67	権八原古墳群	三木町池戸	弥生・古墳	台状墓・円墳	弥生土器・土師器・須恵器	1980・1981年調査
68	吉尾山古墳	高松市前田東町	古墳	円墳	鏡・玉	1912年出土
69	高尾権現社古墳	三木町池戸	古墳	円墳		
70	池戸八幡神社古墳群	三木町池戸	古墳		刀剣・須恵器・埴輪・玉	大正年間消滅
71	池戸八幡神社1号墳	三木町池戸	古墳	前方後円墳43m		
72	池戸八幡神社2号墳	三木町池戸	古墳	円墳径8m		
73	池戸八幡神社3号墳	三木町池戸	古墳	円墳径8m		
74	池戸八幡神社4号墳	三木町池戸	古墳	円墳径12m		

第1表 周辺の遺跡一覧表

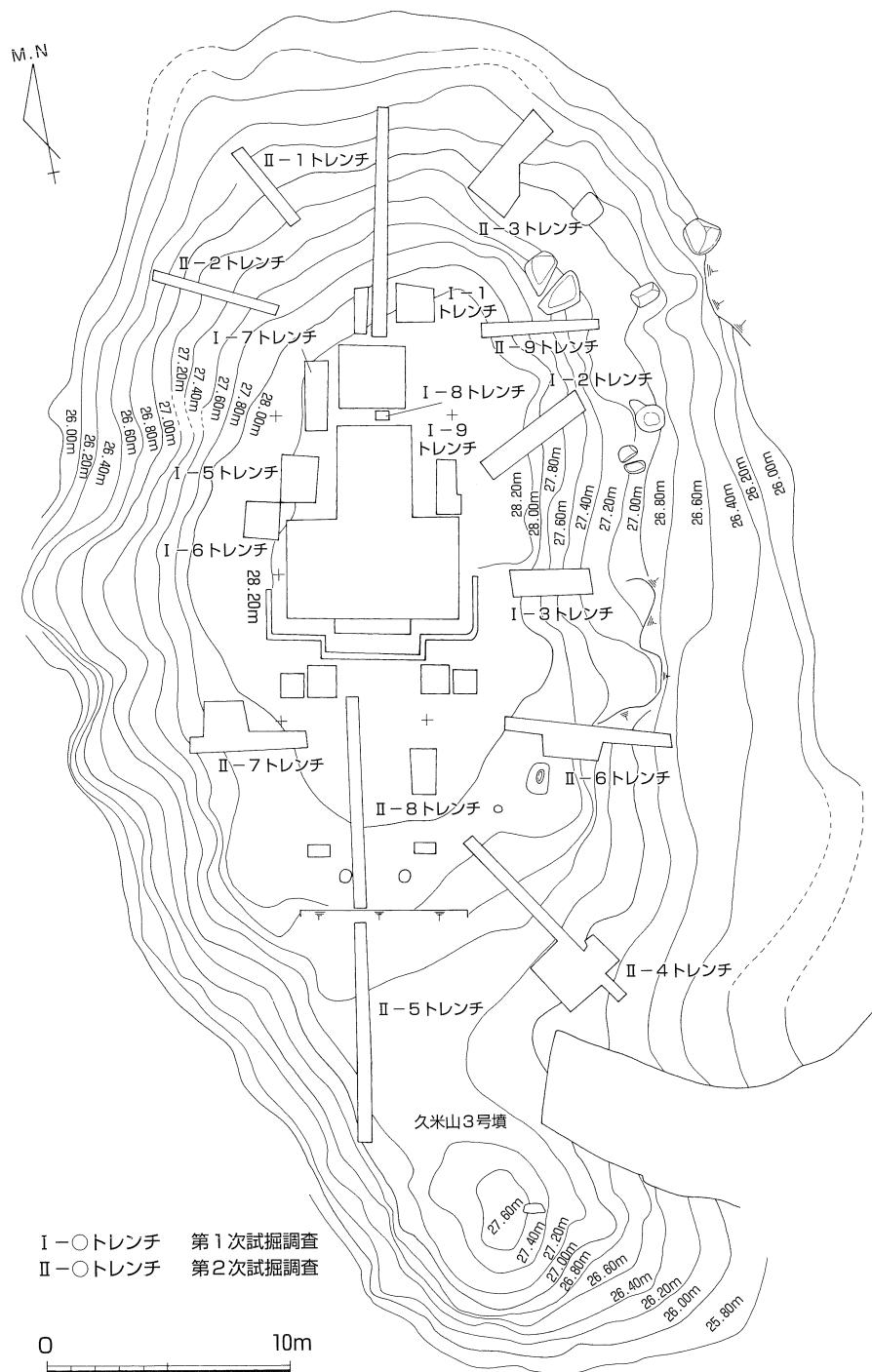
## 第Ⅱ部 諏訪神社遺跡



## 第1章 調査の成果

### 第1節 第2次試掘調査の概要

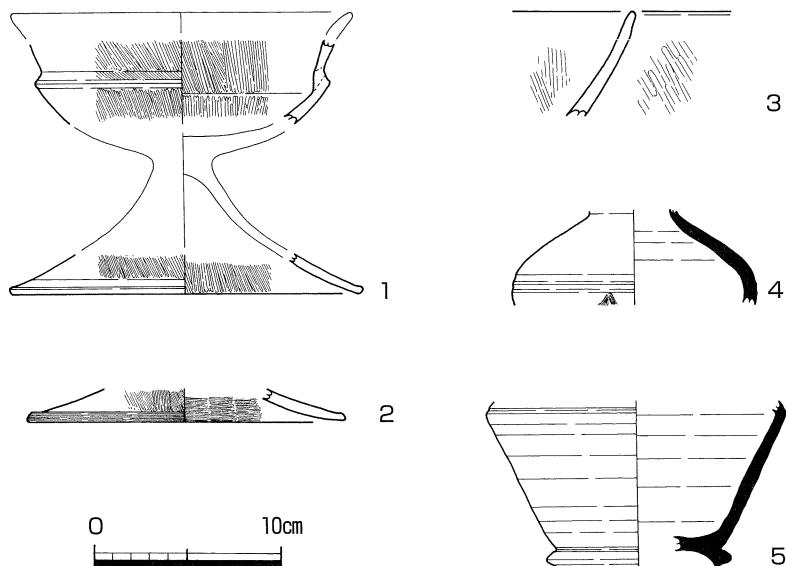
平成2年10月1～12日の期間において実施した第1次試掘調査によって対象地の北側にある諏訪神社の社殿下を中心として複数の埋葬主体部をもつ古墳の存在を明確にしたが、第1次試掘調査では、調査期間中に新たな試掘箇所（本書第III部報告 久米山遺跡群－諏訪神社御旅所地区－）が発生したこともあり、当初設定した確認調査の期間では、調査対象地の北半部の状況を明確にするにとどまった。



第4図 諏訪神社遺跡試掘調査トレンチ配置図（縮尺 1/200）

その後、第1次の試掘調査の成果をもとに香川県教育委員会文化行政課と調査対象地における遺跡の取り扱いについて協議をもった。この中で確認した古墳の規模等が明確でないこと、対象地の南側における遺跡の広がりが不明確であることから、対象地全域における遺跡の詳細を把握するため、第2次の試掘調査を平成2年10月18～25日の期間に実施した。第2次試掘調査では、北側の斜面部および南半部の平坦地から斜面部にかけて合計9箇所にトレンチを設定して実施した（第4図）。2次にわたる試掘調査の結果、調査対象地における遺跡の広がりを確定した。その結果、対象地の丘陵全域に遺跡が広がっていることが判明した。

#### 試掘調査出土遺物（第5図）



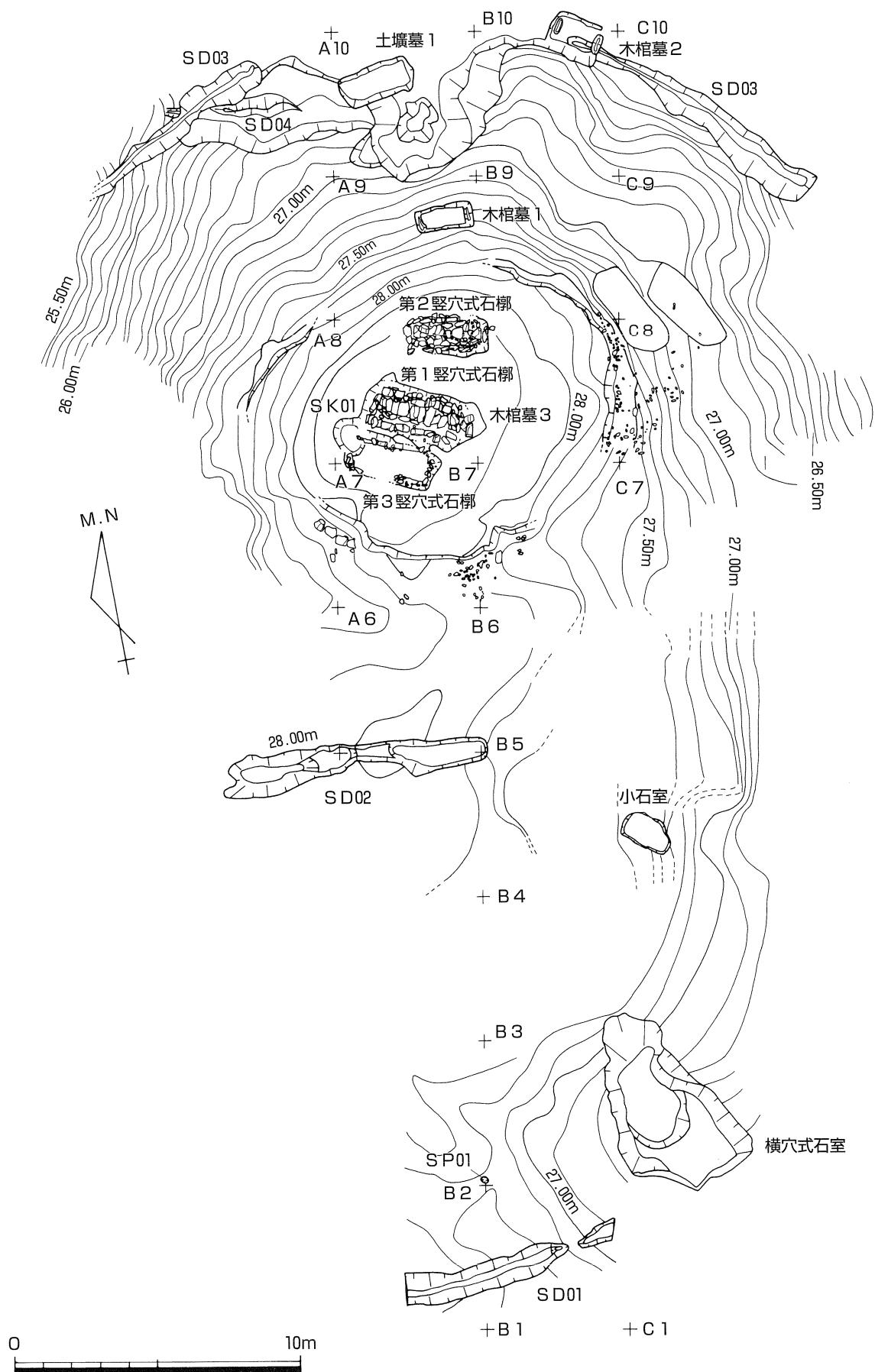
第5図 第2次試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/4）

第1次試掘調査での出土遺物は、いずれも細片で図示できるものではなく、第5図に示した土器は、いずれも第2次試掘調査により出土したものである。出土遺物のうち、第6トレンチから出土した4以外の遺物は第3トレンチから出土している。他のトレンチの遺物については出土していないか、細片であるため図化していないかである。

1は弥生土器高杯の杯部および脚部の破片である。直接つながる部分は存在しないが、特徴のある細かなミガキ調整から同一個体と考えた。杯部は屈曲する段を持ち、脚部は低く開く。杯部・脚部ともに内外面に細かな縦方向のミガキが認められる。2は高杯の脚部である。1と同様、低い脚部をもち、外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。3は弥生土器の鉢であると考えられる。外面はミガキ、内面はハケメ調整を行う。4は口縁部と底部を欠損するが須恵器ハソウであると考えられる。最大胴径部分に沈線2条、その下には波状文が認められる。5は須恵器長頸壺の体部～底部の破片である。体部最大部分には屈曲がきつく、その上部に沈線が1条認められる。底部は外側へ踏ん張る高台がつく。灰白色を呈し、精良な胎土で製作されている。

#### 第2節 調査の方法

前述のとおり2度にわたる試掘調査を実施した結果、諏訪神社の社殿が鎮座する丘陵頂部全域に遺跡の広がりを確認した。これらの結果を元に事業者である石清水八幡宮と協議を持ち、調査期間は1ヶ月程度とし、周辺部における造成工事との関係で、調査終了後の一括の引渡しができないことから、調査対象地の中央付近で南北に分割して、先に南半部分の調査を行い、南半部分の調査が終了した段階で、北半部分に先行して引き渡すことで合意し、調査を実施した。



第6図 諏訪神社遺跡遺構配置図（縮尺1/200）

### 第3節 調査の概要と基本層序

(第6～8図)

丘陵頂部は表土である暗黄褐色花崗岩バイラン土が薄く堆積している。これらの土は腐葉土の堆積、遺構の埋土および地山である花崗岩が長年の風化によってできたものである。丘陵頂部はこの表土を除去した段階で遺構を確認したが、東側および北側斜面部においては堆積土が厚く、特に北側斜面では暗黄褐色花崗岩バイラン土・茶褐色花崗岩バイラン土などが20～40cm堆積しており、それを除去した段階で遺構を確認した。調査が進展するに伴い、堆積土が厚い北側斜面部での遺構検出が進み、第6・7図に示すとおり試掘調査で把握していたよりも多くの遺構が存在していることが判明した。

調査により確認した遺構は溝4条、木棺墓3基、土器棺墓、土壙墓、土坑各1基、古墳3基である。これらの遺構が所属する時期は出土遺物から弥生時代前期から古墳時代にかけてのものである。この他、遺構に伴うものではないが旧石器時代のナイフ形石器や奈良時代の須恵器なども確認した。これらの遺構の確認状況や出土遺物から当丘陵が長期にわたって使用されていたことが判明した。

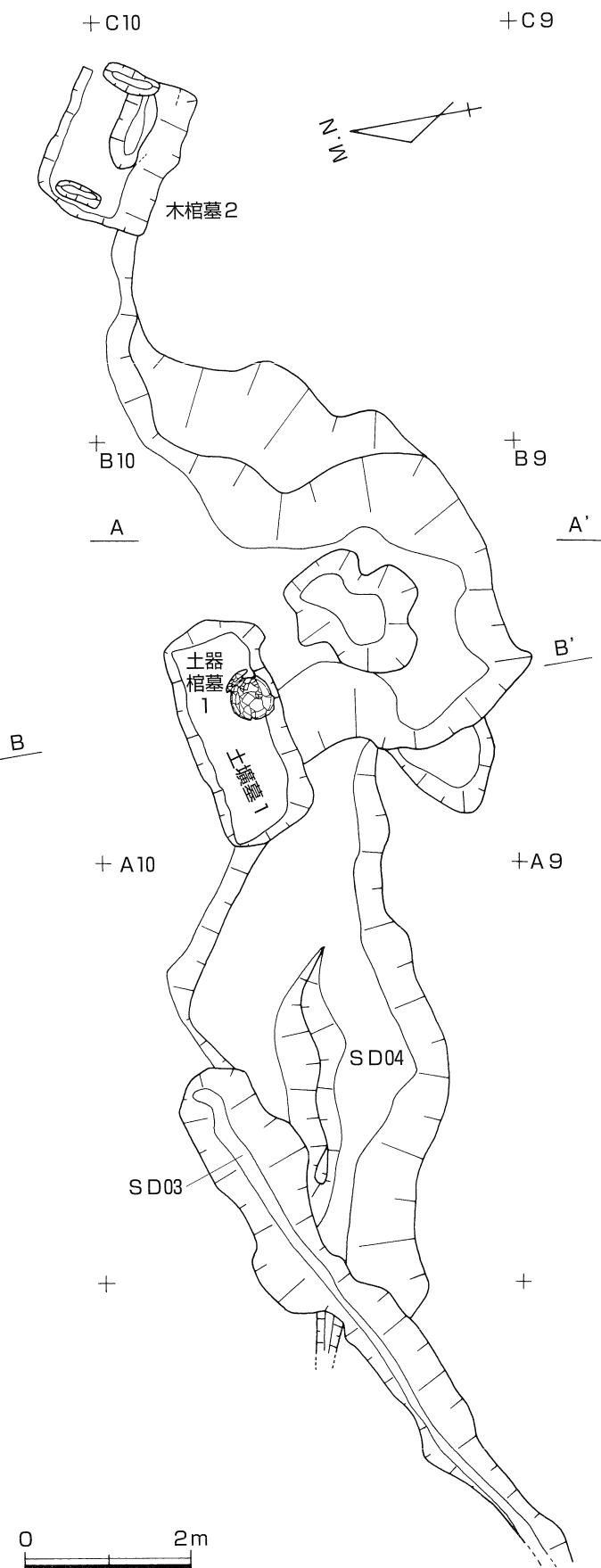
以下、所属する時代ごとに報告を行うこととした。

### 第4節 調査の成果

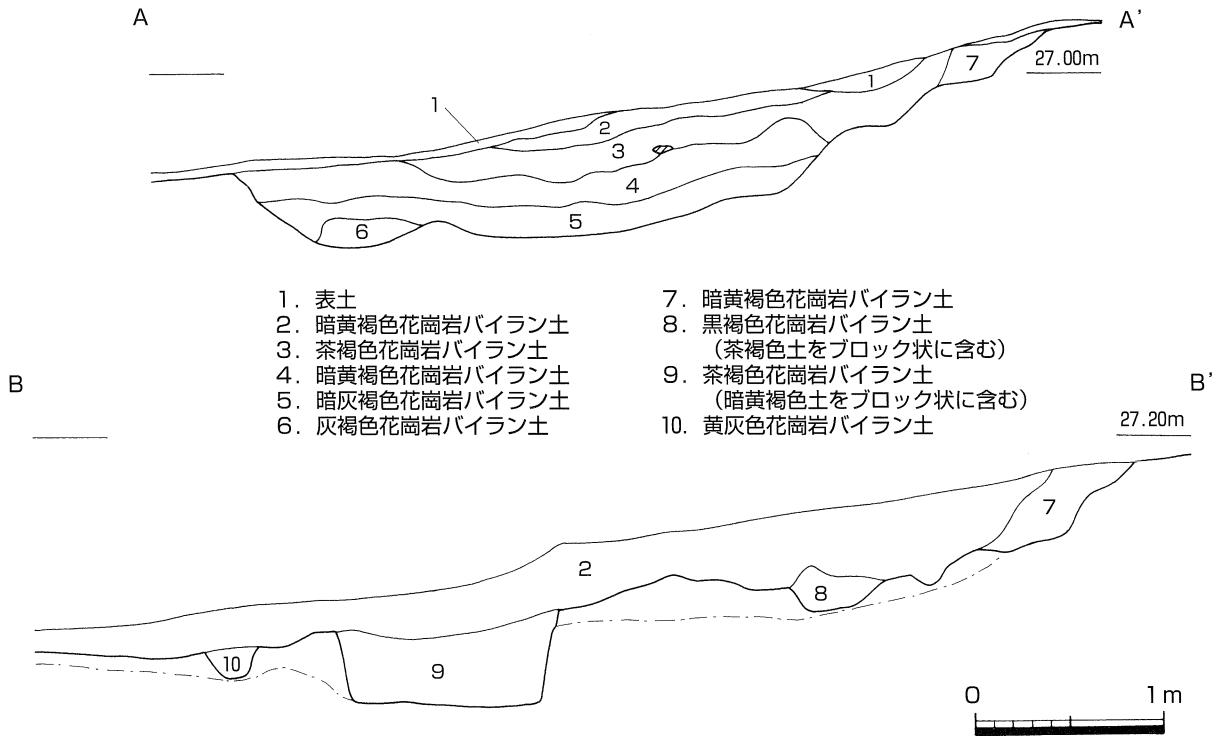
#### (1) 弥生時代前期から後期前半の遺構と遺物

##### S D O 1 (第9・10図)

調査区南端で確認した東西方向の溝である。検出範囲の東端近くで途切れる部分が存在する。東西とも調査対象外へ伸びるものと想定され、やや狭くなった丘陵頂部を横断するように開削された位置関係にある。溝の規模は幅1m、深さ40cmである。土層埋土は暗黄灰色花崗岩バイラン土と黒褐色花



第7図 諏訪神社遺跡北端部遺構配置図 (縮尺1/80)



第8図 諏訪神社遺跡北端部土層図（縮尺1/40）

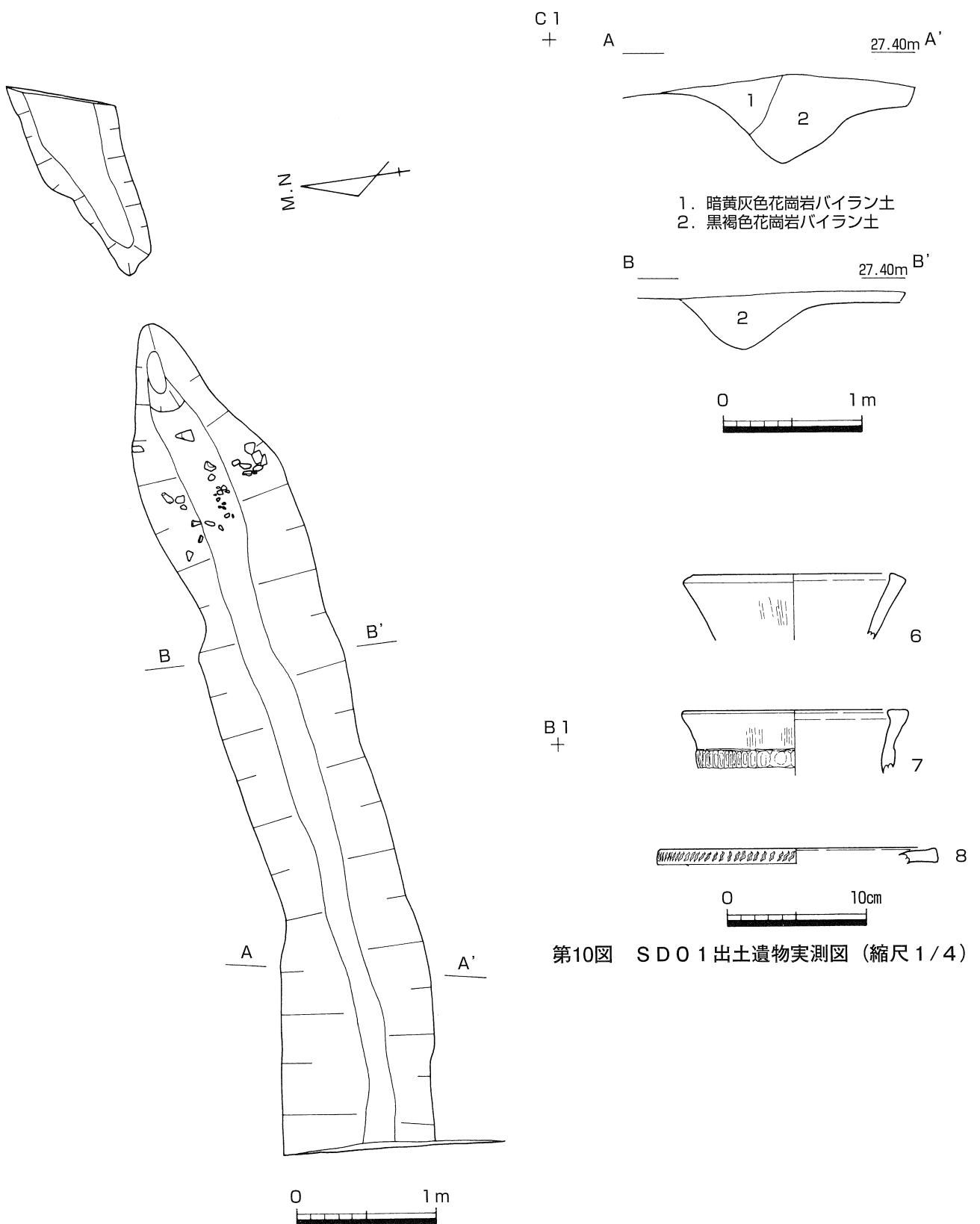
岡岩バイラン土の2層に分層できるが、溝の堆積土のうち、暗黄灰色花崗岩バイラン土は上層や一部の堆積に認められるのみで、堆積土の大半は黒褐色花崗岩バイラン土が占める。図示できる遺物の量は少ないが、溝が途切れる東側付近で土器の破片が集中して出土した。

第10図に示した土器がSD01出土遺物である。いずれも弥生土器である。6・7は直口壺である。6の方が外側に開く。いずれの土器も口縁端部内面が内側にやや張り出し、7の頸部には押圧突帯文が1条巡る。8は広口壺の口縁部である。口縁端面に二枚貝の殻によると考えられる刺突文が巡る。出土土器からは弥生時代中期前半の時期が考えられる。

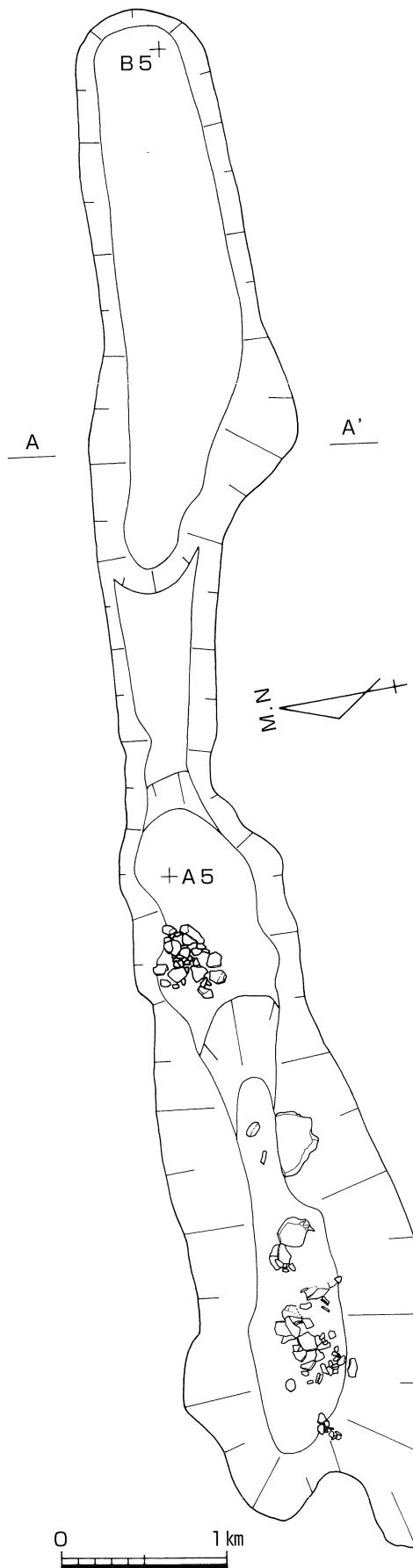
### SD02（第11・12図）

調査区中央部で確認した東西方向の溝である。当遺構はSD01とは異なり、調査区内で完結する。溝の規模は全長9.4m、幅は0.6~1.4mと差があり、中央部付近が狭く、両側が広い。深さは40cmで土器が多く出土した西側が深い。土層埋土は表土を除き2層に分かれ、上層は暗茶褐色花崗岩バイラン土、下層は暗黄灰色花崗岩バイラン土である。遺物の出土は東半部において集中して出土した。出土遺物の中には、完形に近い状態で出土するものもみられた。

第12図に示す9~31がSD02の出土遺物である。9~11は直口壺である。口縁端部外面に3条程度の凹線文が認められる。12~16・18は広口壺である。12・15・18のように口縁端部を上下に拡張するものと13・14・16のように口縁端部の上方のみ拡張するものがみられる。口縁端部外面の施文は16にキザミ目がみられる以外は全て凹線文が施されている。13・16の口縁部内面には、2個一対の円形浮文が認められる。頸部では、16にヘラ状圧痕文が18には凹線文3条が認められる。体部上半部の施文は16がハケ状工具による列点文、17・18にはヘラ状工具による押圧文が認められる。全体の器形が想定できる16・18のうち、16は上半部がハケメ、下半部はミガキ調整であるが、底部外面はタテミガキなのに対して最大径付近はヨコミガキである。18は頸部から底部までミガキであるが、最大径付近のみヨコミガキである。内面は全てナデである。19は水差し型土器である。体部は算盤状を呈する。把手は円柱状にした粘土紐を体部内面に取り込み固定している。調整は内外面ともハケ調整である。20~24は甕である。口縁端部外面が無文である20・21と数条の凹線文を施す22~24に分かれる。



第9図 SDO 1 平面・断面図（縮尺 1/40）



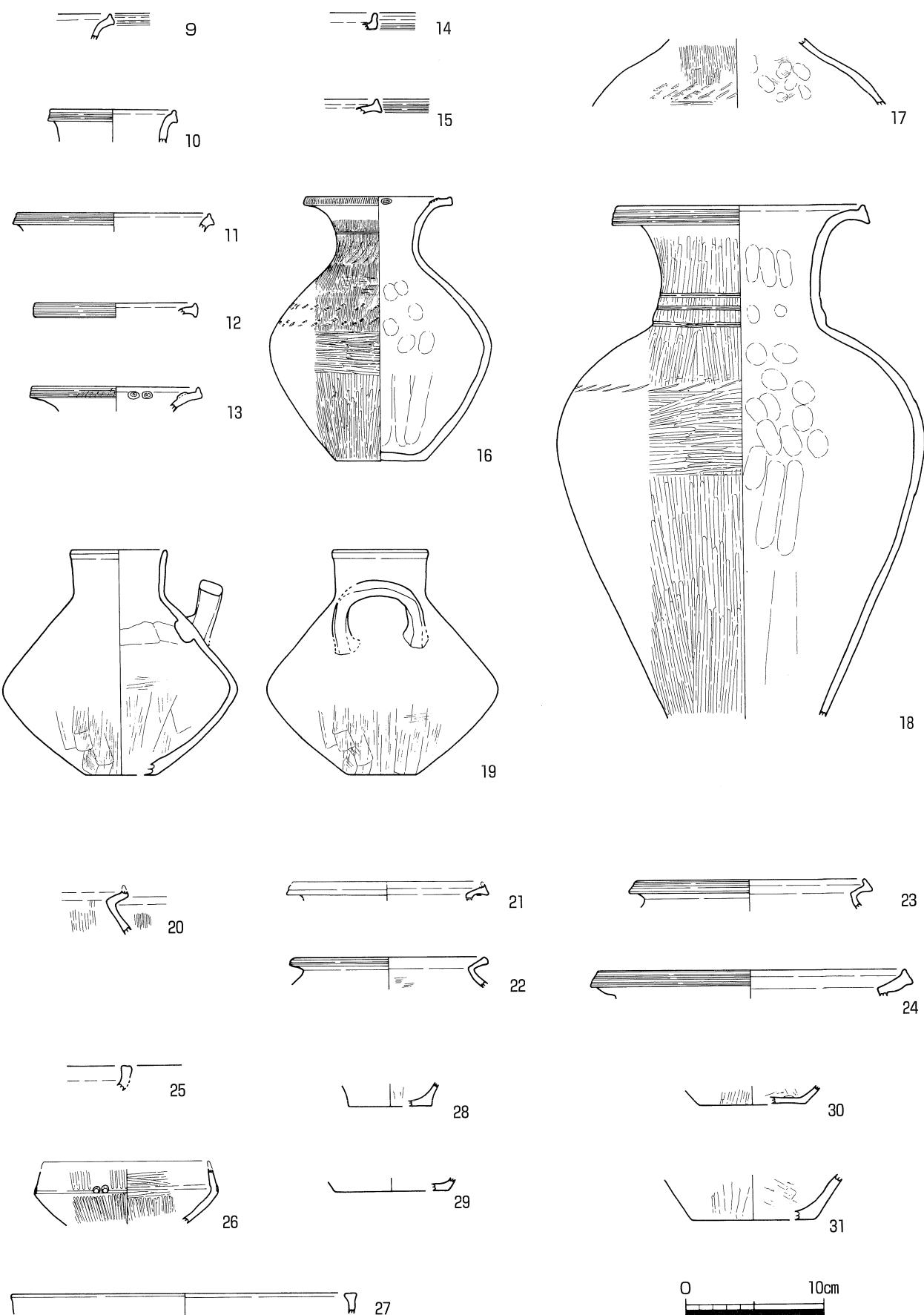
第11図 S D O 2 平面・断面図 (縮尺 1/40)

25~27は高杯である。25・27は口縁端部をやや肥厚させる。26は口縁屈曲部外面に2個一対の円形浮文がみられ、細かなミガキ調整が認められる。28~31は底部である。28・31が甕で、それ以外は壺であると考えられる。30・31の内面にはヘラケズリが認められる。多くの土器の口縁部外面に凹線文が認められることなどから弥生時代中期後半頃の時期が考えられる。

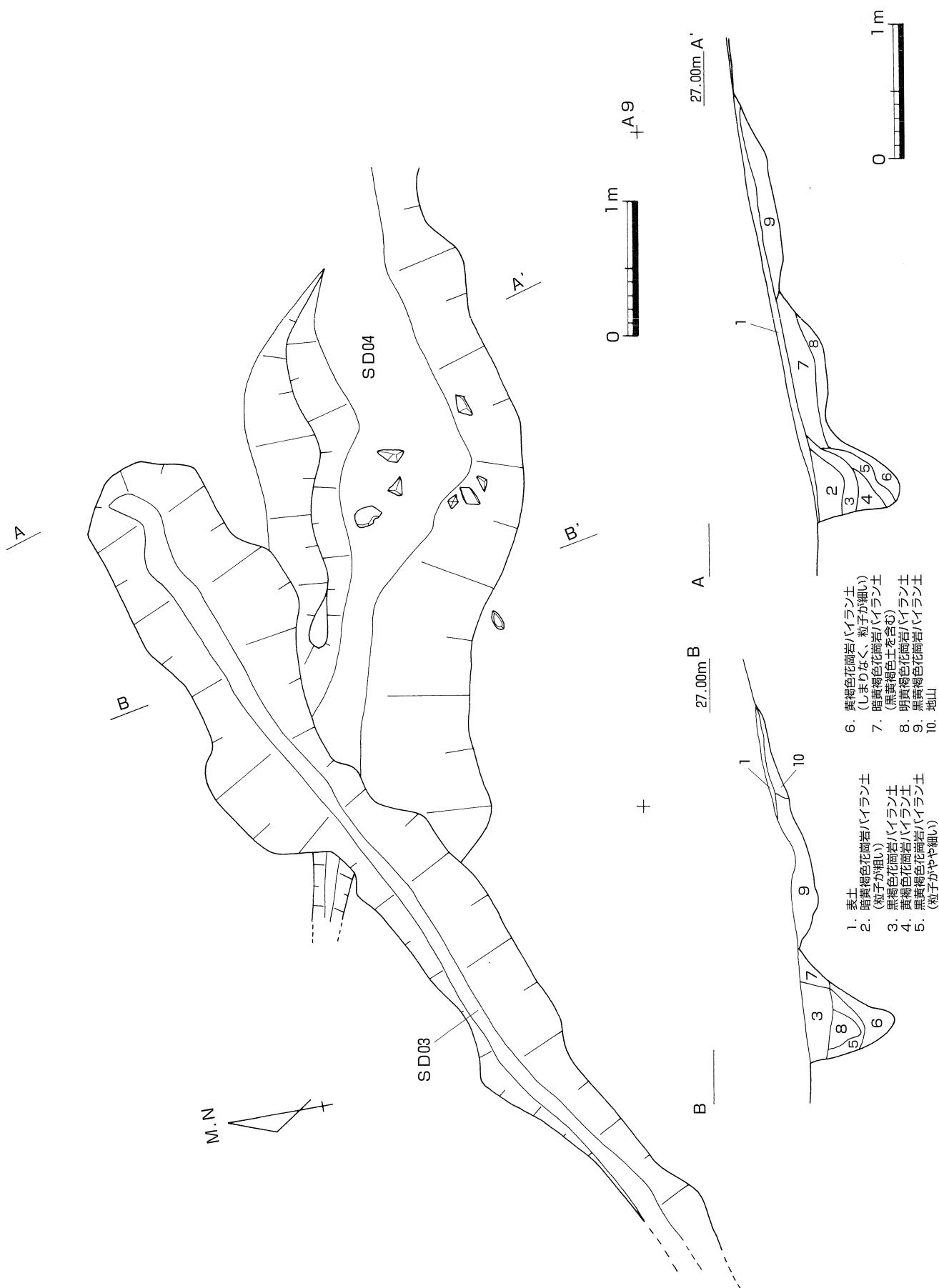
#### S D O 3 (第13~17図)

調査区北端で確認した溝である。平面形は標高の最も高い中央部で木棺墓2に切られるなどして、その痕跡がつかめない状況にある。残存する両側の状況から弧状を呈するものと想定される。確認ができた西側が7.5m、東側が10mであり、間に断続している部分が10.5m存在する。この部分も含めると延長28mとなるが、調査時には確認できていない。溝は箇所によって規模が異なる。西側斜面部では、幅70~120cm、深さ60~70cmであり、東側斜面部では、幅50~140cm、深さ45cmである。第13・14図に示したとおり、溝の堆積土は場所によって多少異なり5~8層の堆積が認められる。土層断面図を作成したいずれの箇所の土層も徐々に埋没した状況が認められる。出土遺物の量は多くないが、最下層である溝底付近に堆積する第6層部分から出土するものが多く、遺物取り上げ区(第56図参照)の3・5・6区などのように場所によって集中する箇所もみられる。遺物の出土状況から溝の機能を停止したのち、それほど期間を置かずして土器が混入したものと考えられる。

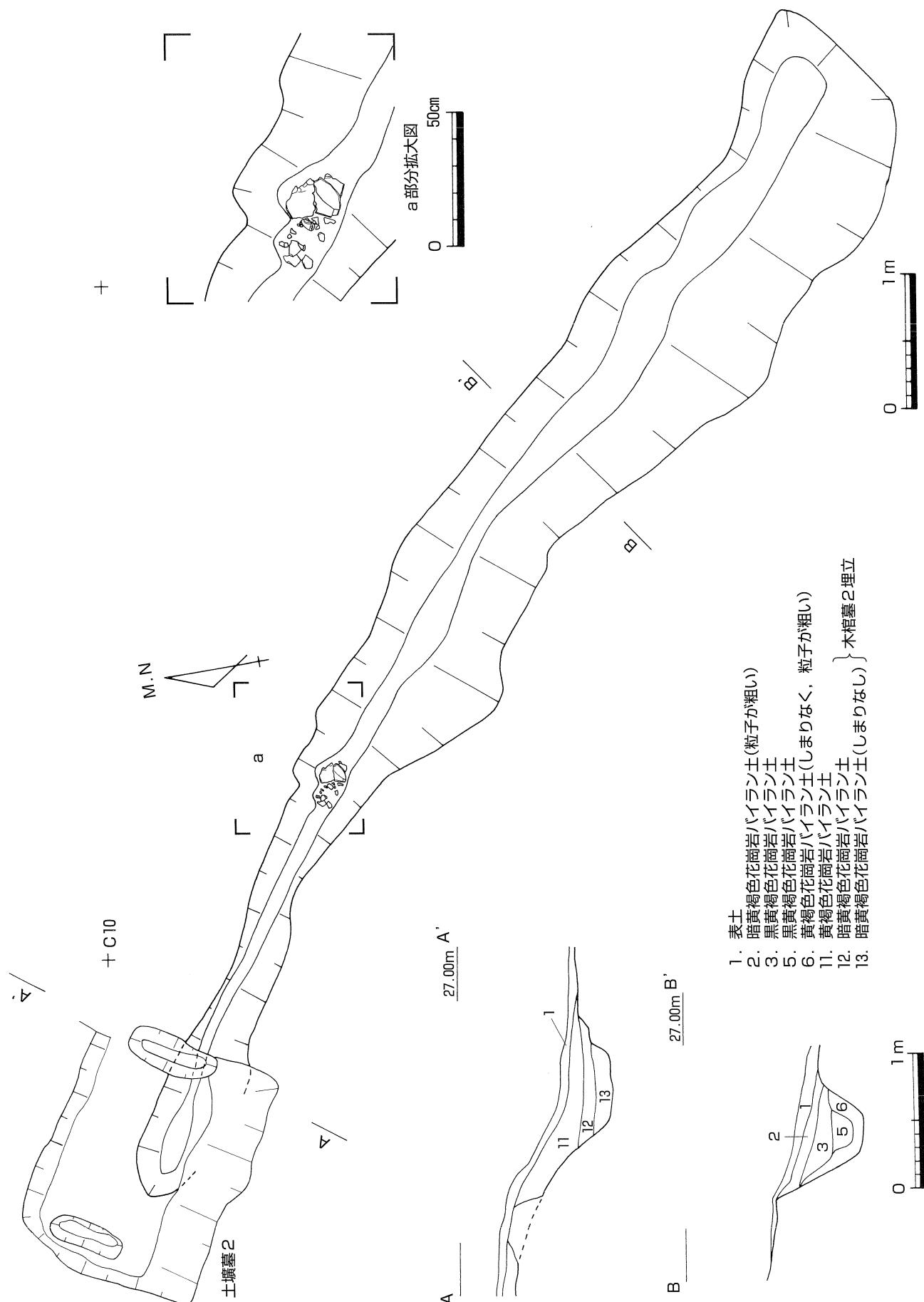
第17図に示した32~44がS D O 3出土遺物である。32・33は壺である。32は口縁部に2孔一対の穿孔が、頸部の最小径付近にヘラ描沈線文を3条巡らせる。33は一部繋がらない部分が存在するが、同じ場所から一括で出土し、胎土も同じであることから、同一個体で間違いないと考えられる。器形は、口縁部を欠損するが口縁部から頸部と頸部から体部への屈曲が緩く、段をなさない。体部外面上半には木の葉文が描かれている。34~37は甕である。如意状を呈する34・35に対して、頸部に屈曲が



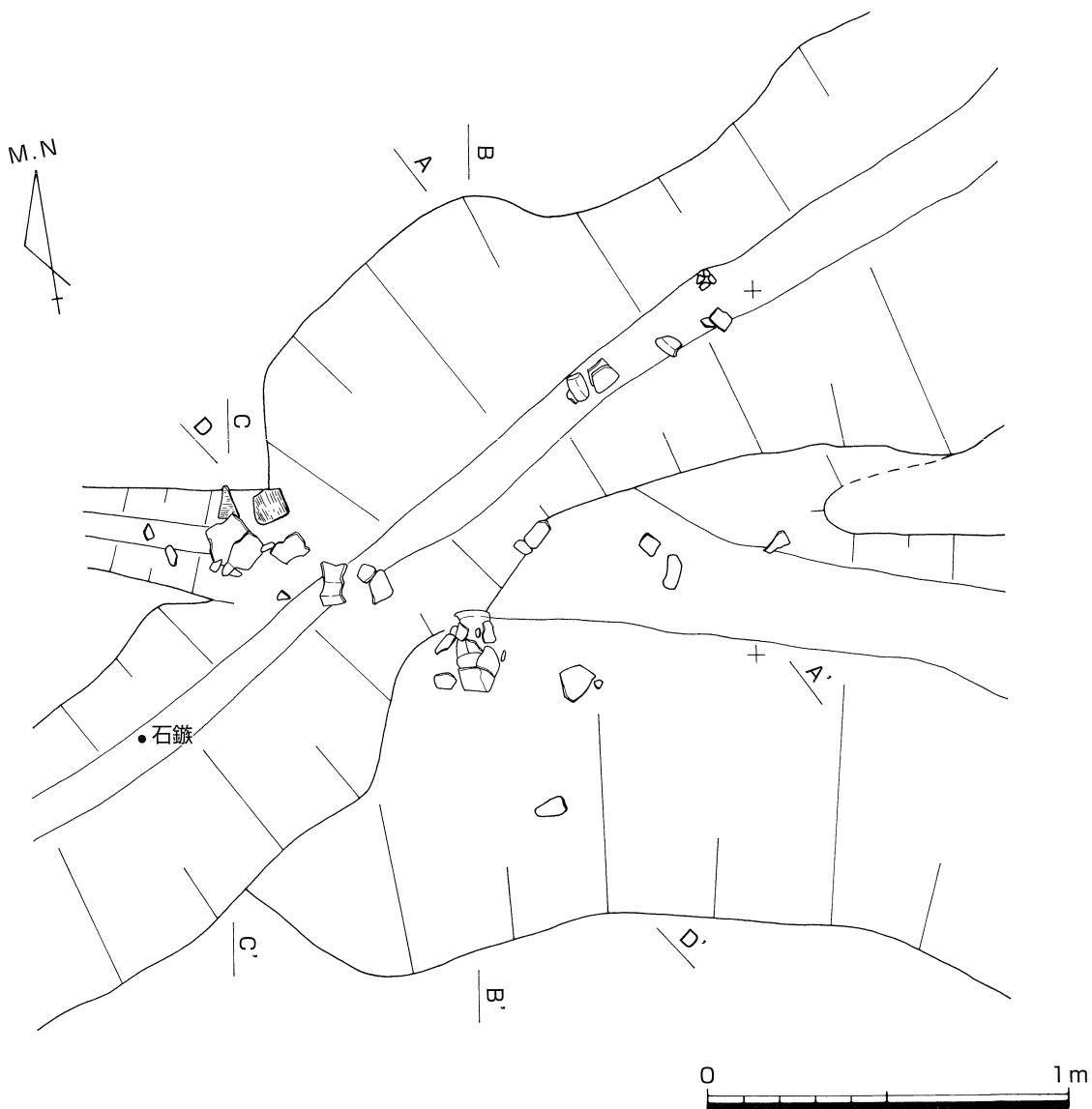
第12図 SDO 2出土遺物実測図 (縮尺 1/4)



第13図 SD03（西半）・04平面・断面図（縮尺1/40）



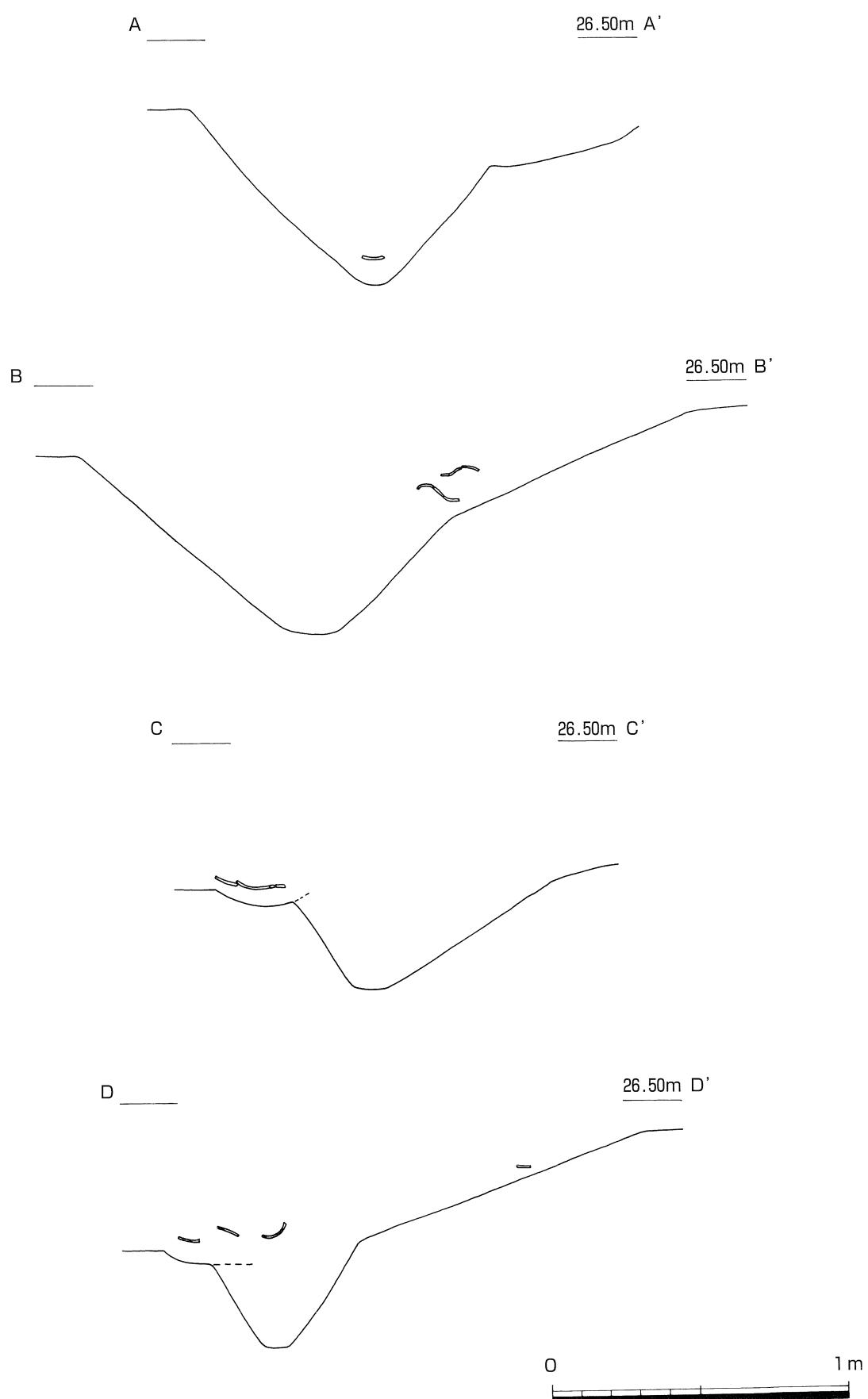
第14図 SD03 (東半) 平面・断面図 (縮尺 1/40)



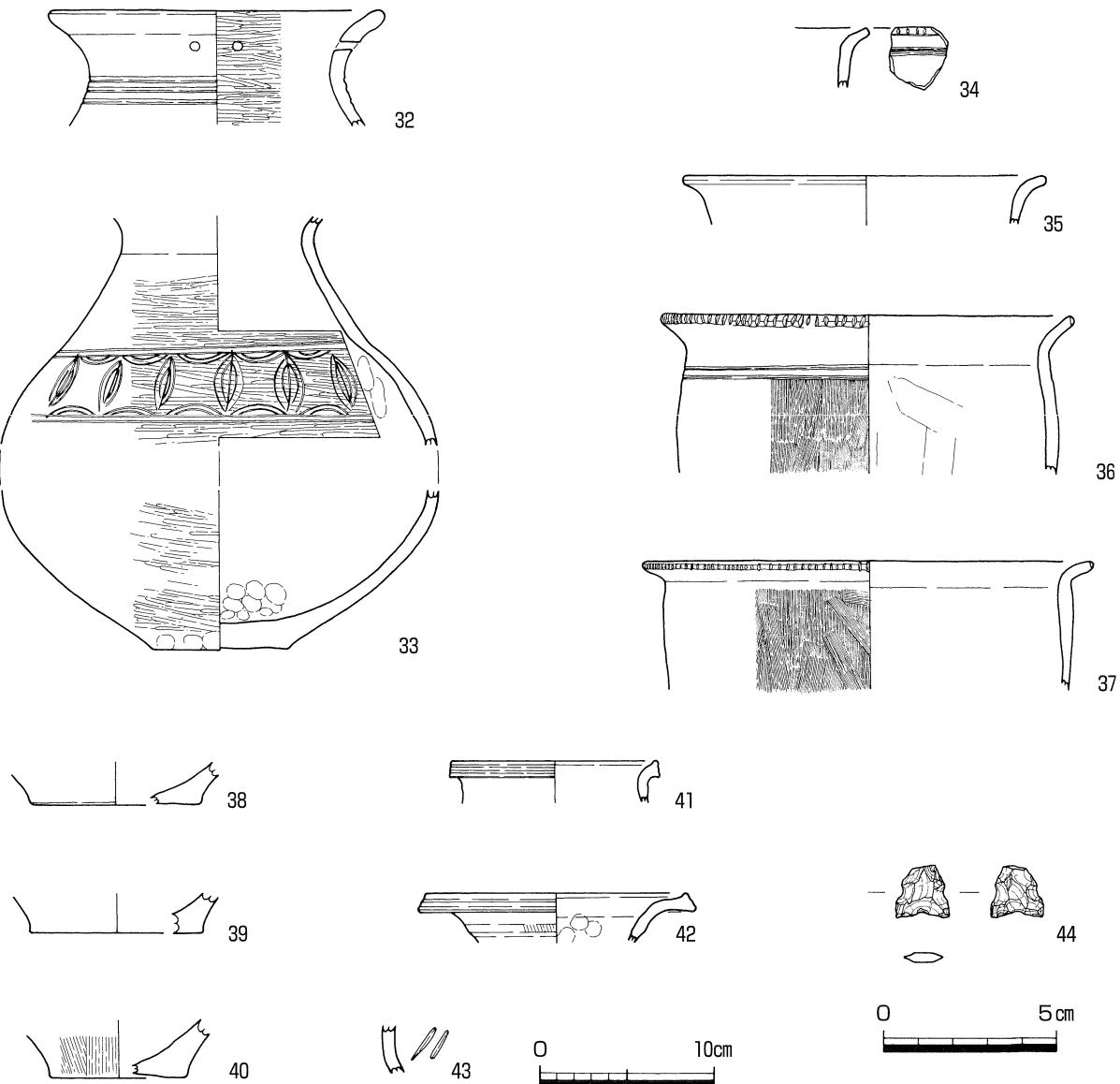
第15図 SD03・04 遺物出土状況図（縮尺 1/20）

認められる36・37があり、口縁部～頸部の形状にも個体差がある。体部についても36は体部が膨らむが、37は膨らまない。施文については35以外の口縁端部に刻目を34・35の頸部の屈曲付近には2条のヘラ描沈線を巡らす。調整がある程度わかる36・37の体部外面はハケメ、内面はナデである。38～40は底部である。41～43は4区出土である。41は直口壺である。口縁端部は上下に拡張し、拡張した外面に凹線文を2条巡らせる。42は広口壺である。大きく外反した口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張し、外面には2条の凹線文を巡らせる。43は壺の頸部と考えられ、外面にヘラ状の圧痕文が認められる。41～43の土器は他の土器と明らかに所属時期が異なる。遺構の項でも触れているが、4区では木棺墓2と重複関係にあり、SD03出土として取り上げた土器のうち、41～43の土器の出土場所が木棺墓2と同じ4区に限られ、他の地区からはこの時期の土器は一切出土していないことから、これらの土器も本来は木棺墓2に伴う遺物であった可能性が極めて高いものと考えられる。44は先端部を欠損する凹基式の石鎌である。石鎌の規模は全長1.45cm、幅1.5cm、厚さ3mmである。両側面には抉りが認められる。

出土遺物からみたSD03の所属時期については、調査時における木棺墓2出土遺物との分離不足により混入したと考えられる弥生時代中期後半の時期のものである41～43を除いた出土土器をみた場合、壺頸部および甕頸部下に認められるヘラ描沈線が2条もしくは3条と条数が少ないとことから、弥生時代前期後半前葉頃の時期が考えられる。



第16図 SD03・04 遺物出土状況断面図（縮尺 1/20）

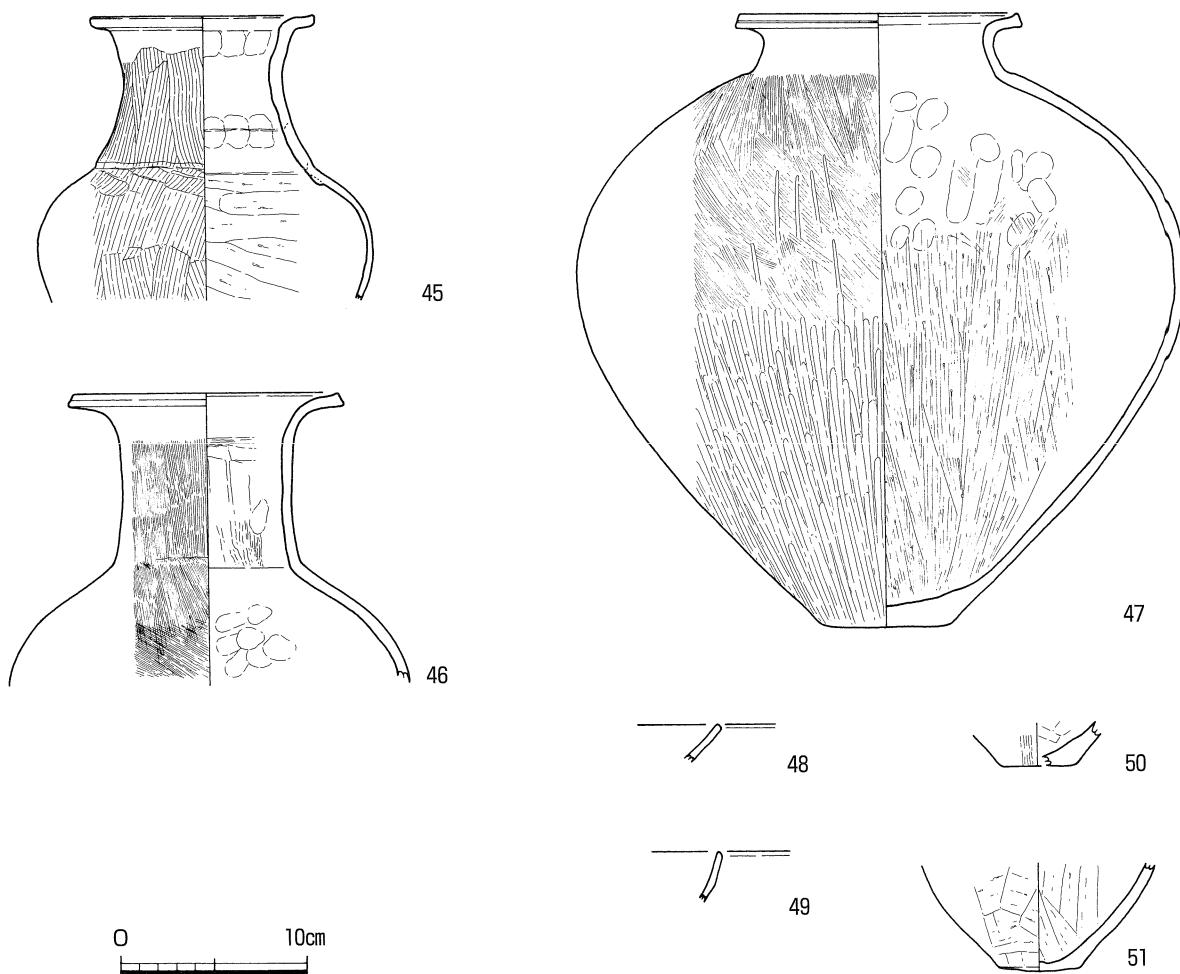


第17図 SD03出土遺物実測図（縮尺1/4, 44は1/2）

## SD04（第13~16・18図）

調査区の北端で前述のSD03（西側部分）に重複して確認した溝である。本来は弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構・遺物の項で取り上げるべきであるが、遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図など前述のSD03との検出位置関係から重複して作成したものが多く、項を改めると、記述に重複する部分が多くなることからSD03に統合して報告する。遺構の前後関係は、当然ながらSD03に後出する。遺構の規模は残存長7m、幅1.1~1.5m、深さ10~20cmである。遺構の西側はSD03を切る辺りで急傾斜となり、幅を狭めて消滅する。一方、東側も土壙墓・土器棺墓1や自然地形による窪みが存在し、延長部分を確認できていない。東側のSD03には、重複していないことから、自然地形による窪み辺りで終るものと考えられる。両延長部分は不明ながら確認できた範囲では、直線状を呈する東西方向の溝である。土層埋土は黒黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。

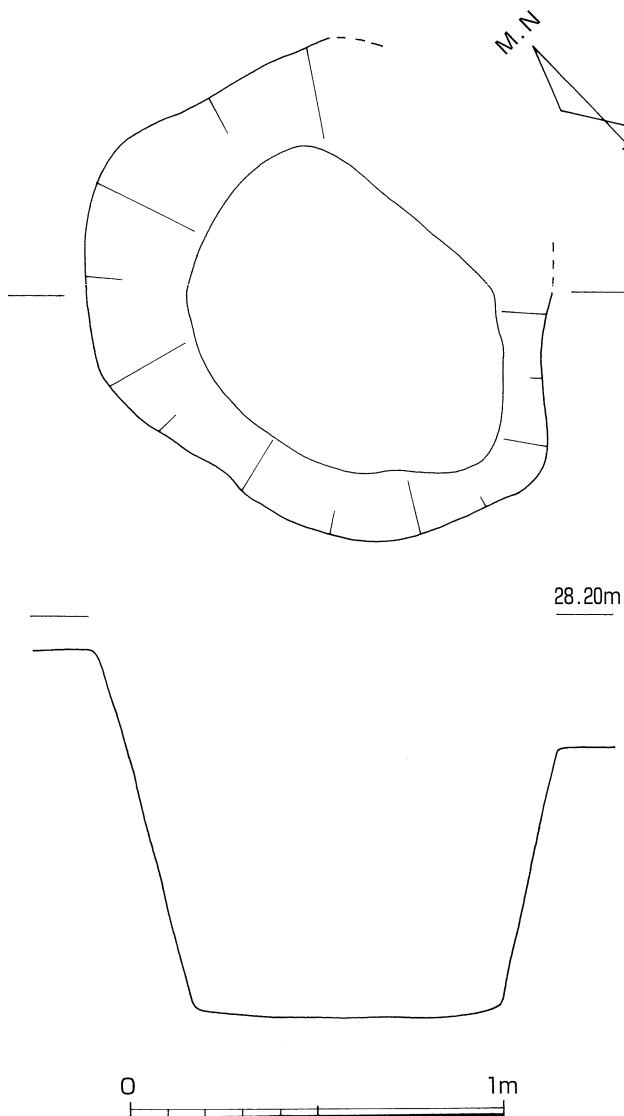
平面的な遺物の出土状況は第15図に示すとおりSD03に交差するように認められ、遺物の断面状況は第16図に示すとおり、表層近くで認められる。SD03とSD04が交差する部分でも、両遺構における遺物が出土する垂直的な位置には何層かの間層が認められること、重複する箇所については遺物出土状況図を作成し、各遺物を個体ごとのまとまりでNo.取り上げを行ったことが有効に働き、特に2つの遺構が交差する部分からの出土遺物には混在は認められず、別の溝であるとの判断をした。



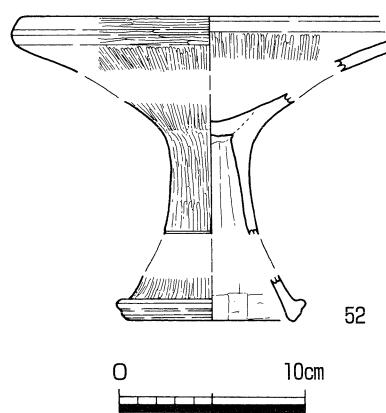
第18図 S D O 4出土遺物実測図（縮尺1/4）

出土した遺物は完形に近い状態まで復元できたものが多い。各出土遺物については後述するが、出土した完形に近い土器の器種が壺のみであるという偏りが認められる。SDO 4を確認した位置が調査対象地の北端であり、SDO 4が墓の一部であると想定するならば、今回、削平が行われず、調査対象とならなかった北側丘陵部分に埋葬主体部である遺構の本体が存在している可能性も想定される。そのような想定が可能であるならば、SDO 4は墓の南側を区画する溝としての性格が想定可能である。

第18図に示す土器がSDO 4出土遺物である。45・46は長頸壺である。両土器には器形・調整技法に違いがある。45は頸部中央部ですぼまり、口縁部にむかってやや外傾しながら立ち上がり、屈曲して水平に開き、短い口縁部となる。口縁端部は上方へややつまみあげる。口縁部は大きく歪んで橢円形を呈する。体部は上半部の上側に最大径がある。調整は外面粗いハケメ、内面の口頸部は粗いナデを施しているため、接合痕やナデによる指頭痕が顕著に残る。体部は頸部との境までヘラケズリが行われている。46は45に比べ、頸部はほぼ直立し、口縁部は外反する。口縁端部は上方に弱くつまみあげる。調整は外面頸部～体部は細かなハケメ、口縁部はナデ、口頸部内面はナデ、頸部内面には整形時のシボリ目が残り、体部はナデによる指頭圧による痕跡が顕著である。47は頸部の短い広口壺である。短い頸部は内傾し、外側に開く口縁部は上方へつまみあげる。体部最大径はやや上方にあるが、体部中央に近い。底部は角がとれ丸底傾向をもつ。調整は外面の上半部ハケメ、下半は下方のハケメを消すようにミガキが行われている。内面は上半部のナデ、下半部からのヘラケズリが最大径付近まで及んでいる。48・49は小片であるが鉢であると考えられる。48は浅く、49は深い形状を呈するものと考えられる。50・51は底部である。50は底径が小さく、角が取れ丸底傾向をもつ。51は底部の角は残るもの、底面が平らとはならず、不安定である。外表面は板ナデ、内面はヘラケズリを施す。



第19図 S D O 1 平面・断面図（縮尺 1 / 20）



第20図 S D O 1 出土遺物実測図（縮尺 1 / 4）

S D O 4 の所属時期は遺構から出土した土器のうち、45・46の体部内面調整にヘラケズリが認められ、特に45については体部上半の頸部との境まで及ぶなど新しい様相をもつが、口縁端部が上下に肥厚し、口縁部の形態もしっかりしたものであり、底部に平底を残していることなどを合わせて考えると弥生時代後半頃のものと考えられる。

#### S K O 1 (第19・20図)

諏訪神社古墳第1主体部および第3主体部の墓壙西側掘方に切られる形で確認した土坑である。

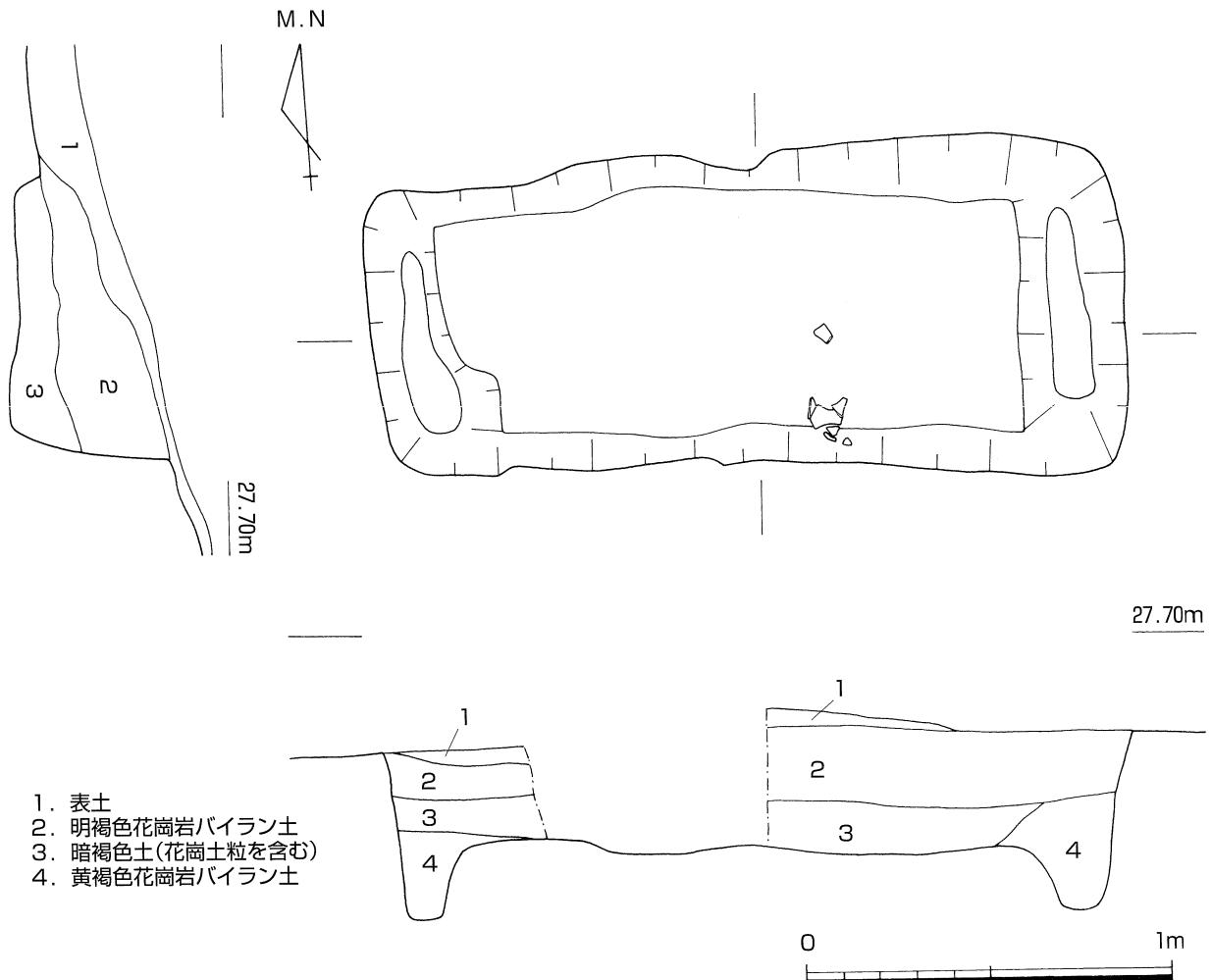
平面形はやや歪な円形である。土坑の規模は長軸1.4m、短軸1.25m、深さ1mである。弥生時代の一般的な土坑の平面規模に比べて、深さがあることから、井戸の可能性も考えられるが、丘陵の頂部に立地すること、発掘調査時において土坑底部からは水の滲みだしは確認できなかったことから、その可能性は低いと考えられる。このため、現状では遺構の性格は不明である。遺物は全容がわかる弥生土器高杯が1点出土している。

第19図に示したのがS K O 1出土の高杯である。脚部端は肥厚し、端部外面に凹線文2条を巡らす。この他、欠損して不明であるが、脚部中央部に沈線1条が残存する。狭い径から立ち上がる脚部をもち、杯部は斜め上方に開き、「く」の字形に屈曲する口縁部をもつ。杯部と脚部は一体で作られ、見込の穴は円盤充填で塞ぐ。調整は口縁部外面に横方向のミガキを施す以外は、杯部内外面は縦方向のヘラミガキを施す。脚部外面も同様に縦方向の細かなヘラミガキを施す。内面は下部にヘラケズリ、上部はシボリ目が認められる。

S K O 1 の所属時期は唯一の出土遺物である弥生土器高杯の口縁部が「く」の字形に内側へ屈曲し、脚端部に凹線を2条巡らすなどの形態・文様など特徴をもち、脚部内面のヘラケズリ調整の状況などから弥生時代中期後半の時期が考えられる。

#### 木棺墓 1 (第21・22図)

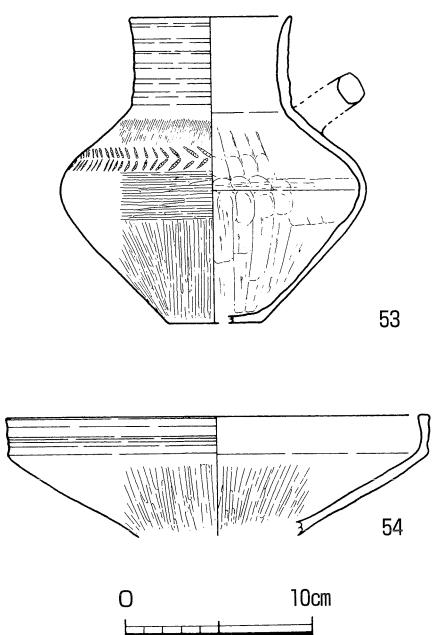
諏訪神社古墳第2主体部北側、遺構中央部を通る標高27.25mの等高線に平行する形で



第21図 木棺墓1平面・断面図（縮尺1/20）

確認した遺構である。遺構の底面両側において小口板を埋設するための掘り込みが認められたことから木棺墓とした。平面形は長方形状を呈する。墓壙の主軸方位はN - 89° - Wであり、ほぼ東西方向を指向する。墓壙の規模は長さ2.05m、幅90cm、深さは残りの良い南側が43cm、北側は17cmである。両側の小口部はさらに深くなり、それぞれ底面から東側22cm、西側18cmである。小口板の幅が約50cmであることから、想定できる木棺の内法規模は長さ約1.6m、幅約50cmである。木棺墓の埋土は表土を除き3層に分かれる。遺物は中央南寄りの上部層で弥生土器水差し型土器、高杯が各1点出土している。

第21図に示したのが木棺墓1出土土器である。53は水差し型土器である。平底の底部をもち、体部は算盤玉状を呈するが、体部最大径付近はS D O 2出土のものに比べて屈曲が弱い。直立した口頸部をもち、端部は肥厚せず丸く終る。文様は口頸部外面に擬凹線文6条、体部上半に綾杉文を巡らす。調整は体部外面上半部ハケメ、下半部縦方向のヘラミガ



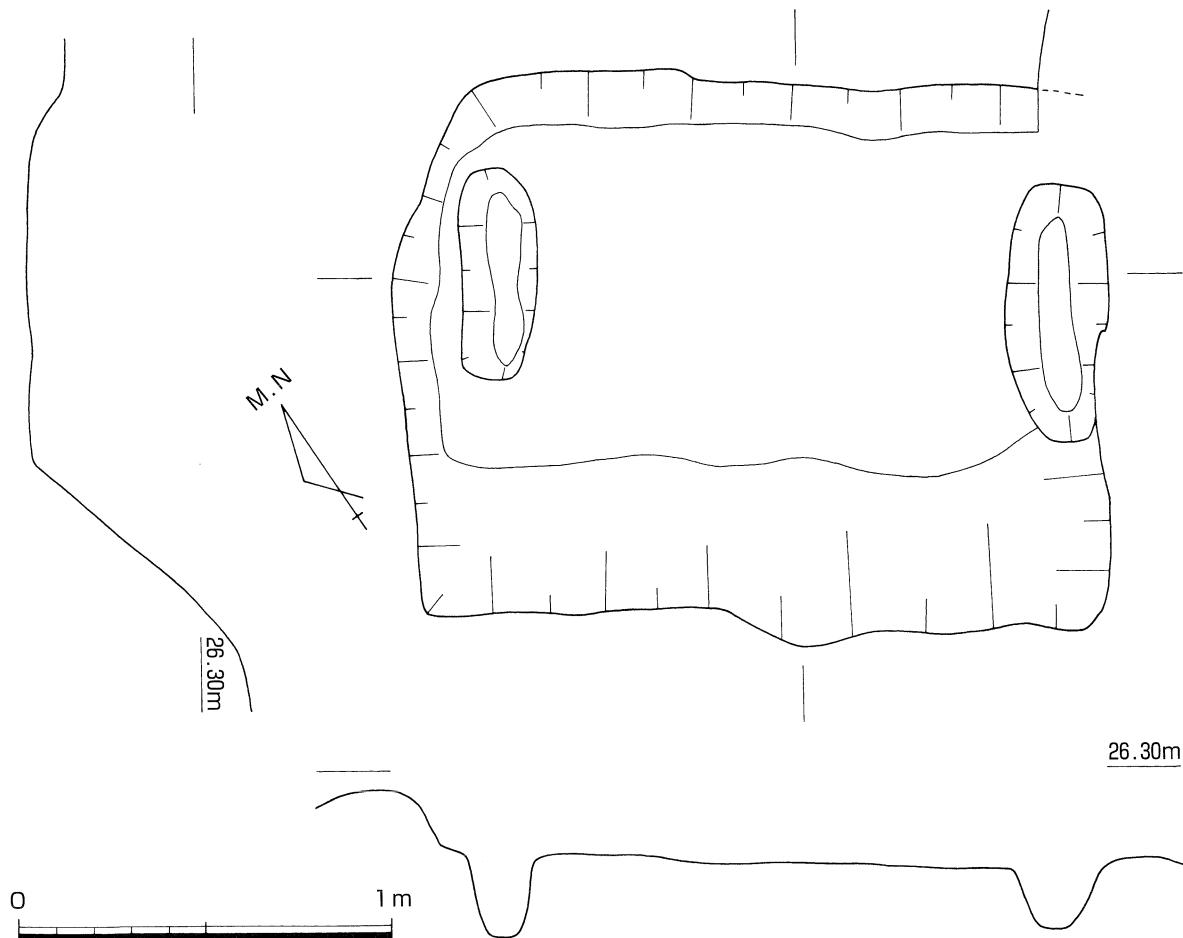
第22図 木棺墓1出土遺物実測図（縮尺1/4）

キ、体部最大径付近は横方向のヘラミガキを施す。体部内面下半は最大径付近までヘラケズリが、上半部はナデが施されている。54は高杯の杯部である。直立する口縁部をもち口縁端部は肥厚する。口縁部外面には凹線文が3条巡る。調整は内外面とも口縁部ナデ、杯部縦ヘラミガキである。

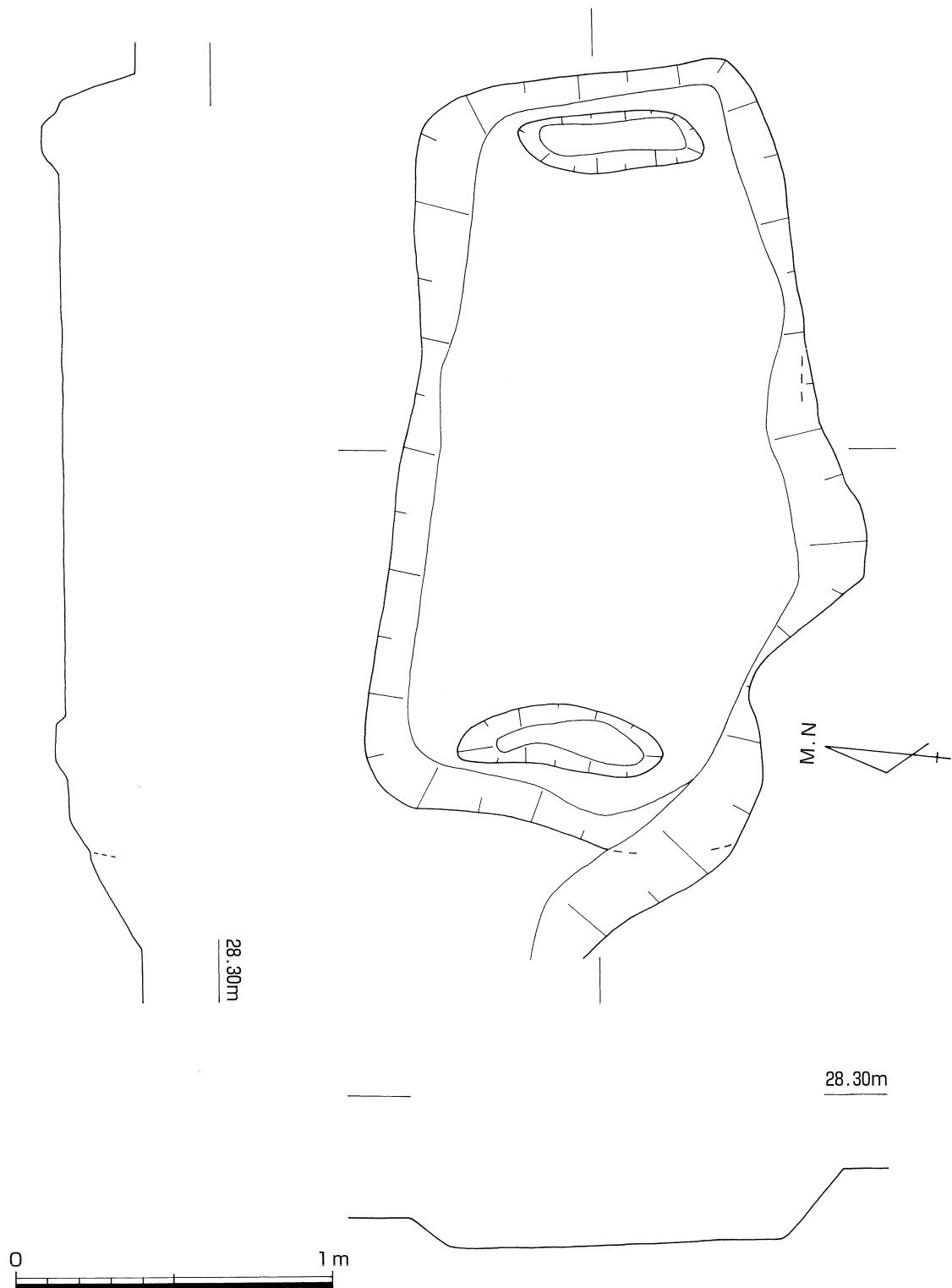
木棺墓1の所属時期は53の水差し型土器の垂直に上方へ立ち上がる口縁部から頸部外面に多条擬凹線を巡らせることや体部内面のヘラケズリ調整の状況と54の高杯口縁部が上方へ立ち上がる形態をもち、外面に凹線が巡る状況などから弥生時代中期後半でも末頃の時期が考えられるが、53の水差し型土器口縁部外面の擬凹線については後期初頭まで下る要素がある。

### 木棺墓2（第23図）

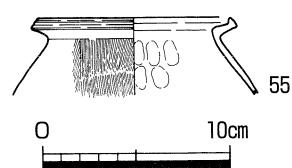
調査区北端中央において確認した木棺墓である。遺構中央を通る標高26.1mの等高線にほぼ平行する形で確認した遺構である。弥生時代前期と考えられる溝SD03を切るが、尾根の稜線上に立地することから土砂の流出等により残存状況は極めて悪い。前述の木棺墓1と同様に遺構の底面両側において小口板を埋設するための掘り込みが認められたことから木棺墓とした。平面形は長方形状を呈する。墓壙の主軸方位はN-52°30' -Wである。墓壙の規模は東側の墓壙掘方の上端を明確にできていないが長さ1.9m以上、幅1.48m、深さは北側が10cm、南側は丘陵斜面にかかっており正確ではないが約30cmである。両側の小口部はさらに深くなり、それぞれ底面から東側19cm、西側21cmである。小口板から想定できる木棺の内法規模は長さ約1.4m、幅約50cmである。木棺墓の埋土層は削平が著しく、残りは良くないが暗黄褐色花崗岩バイラン土の单層である。木棺墓2として取り上げた遺物はないが、当遺構と重複するSD03・4区出土遺物の中（第17図41～43）に弥生時代中期後半の土器が3点出土している。SD03の他の部分からは弥生時代中期後半の遺物は出土しておらず、



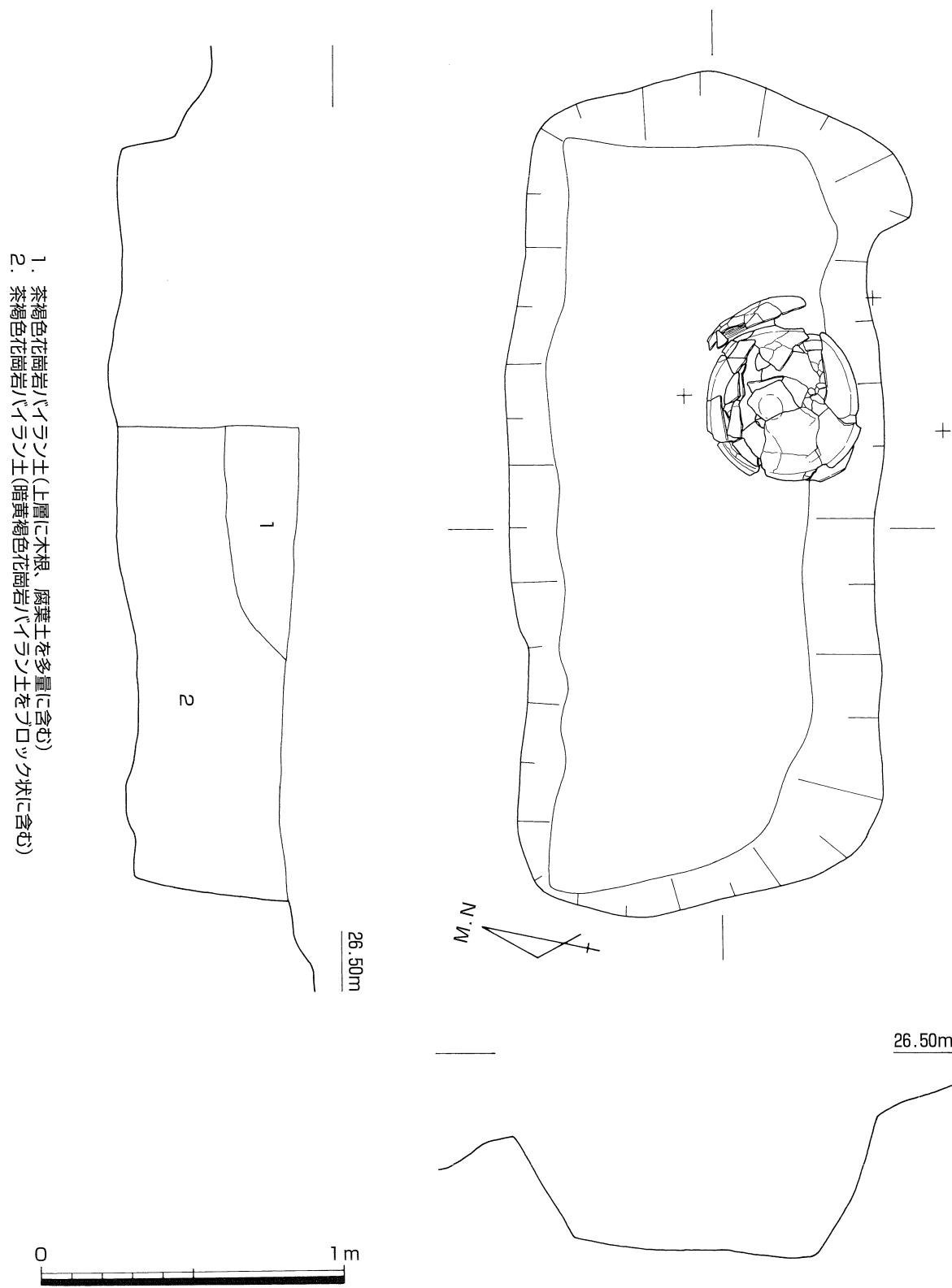
第23図 木棺墓2平面・断面図（縮尺1/20）



第24図 木棺墓3平面・断面図（縮尺1/20）



第25図 木棺墓3出土遺物実測図（縮尺1/4）



第26図 土器棺墓 1・土壤墓平面・断面図（縮尺 1/20）

調査時における遺構検出状況から当遺構の遺物を調査時にSDO3出土遺物として取り上げた可能性が高いと考えられる。

### 木棺墓3（第24・25図）

調査区北端、丘陵最高所で確認した木棺墓である。遺構の西半部が後述の第1堅穴式石槨に切られる。前述の木棺墓1・2と同様に遺構の底面両側において小口板を埋設するための掘り込みが認められたことから木棺墓とした。平面形は第1堅穴式石槨墓壙掘方の影響を受けて南側が歪であるが、概ね長方形状を呈する。墓壙の主軸方位はN - 91° 15' - Wである。墓壙の規模は長さ2.35m、幅1.35m、深さは残りの良い東側で25cm、残りの悪い西側で7cmであり、諏訪神社遺跡で確認されている木棺墓の中では最大規模である。底面両側で確認した小口部の規模は東側60cm、深さ5cmであり、西側55cm、深さ4cmである。これから復元できる木棺の内法規格は長さ約1.8m、幅約50cmである。遺物は埋土中より弥生時代中期後半の甕が1点出土している。

第25図に示したのが木棺墓3の出土遺物である。頸部から鋭く屈曲した口縁部は上方に肥厚し、口縁端部外面に凹線文3条を巡らせる。調整は体部外面に細かなハケメ、内面はナデによる指頭圧痕が認められる。

木棺墓3の所属時期は弥生土器甕の口縁部外面に巡らした凹線の状況から弥生時代中期後半の時期が考えられる。

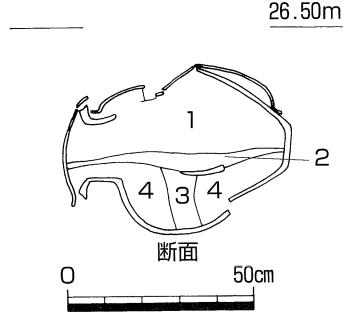
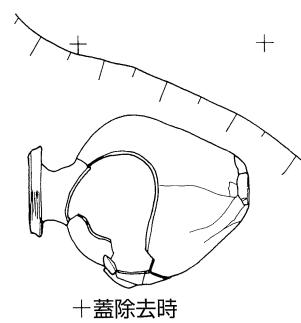
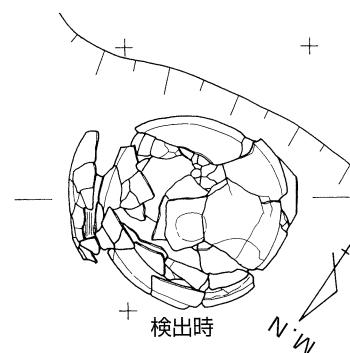
### （2）弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

#### 土壙墓1（第26図）

調査区の北端近くで確認した遺構である。遺構検出状況から遺構の南東寄りにおいて、あまり時間を経過せずに土器棺墓1が構築されたものと想定される。墓壙は長方形状を呈し、主軸方位はN - 102° - Wである。遺構の規模は長さ2.7m、幅1.2m、深さ60cmである。遺構の底は平坦である。土層は2層に分かれ、第1層、茶褐色花崗岩バイラン土、第2層、茶褐色花崗岩バイラン土（暗黄褐色花崗岩バイラン土をブロック状に含む）である。検出当初は、後述する土器棺墓1の墓壙掘方の可能性も考えたが、土器棺墓1の掘方とするには規模が大きく、土器棺墓1の確認した位置が、南側へ片寄っていることから、その可能性は低いものと考えられる。出土遺物はみられないが、東西方向を向き、遺構の掘り込みが急であること、遺構の底が平坦に造られていることなどから、一般的な遺構とは考えられず土壙墓とした。

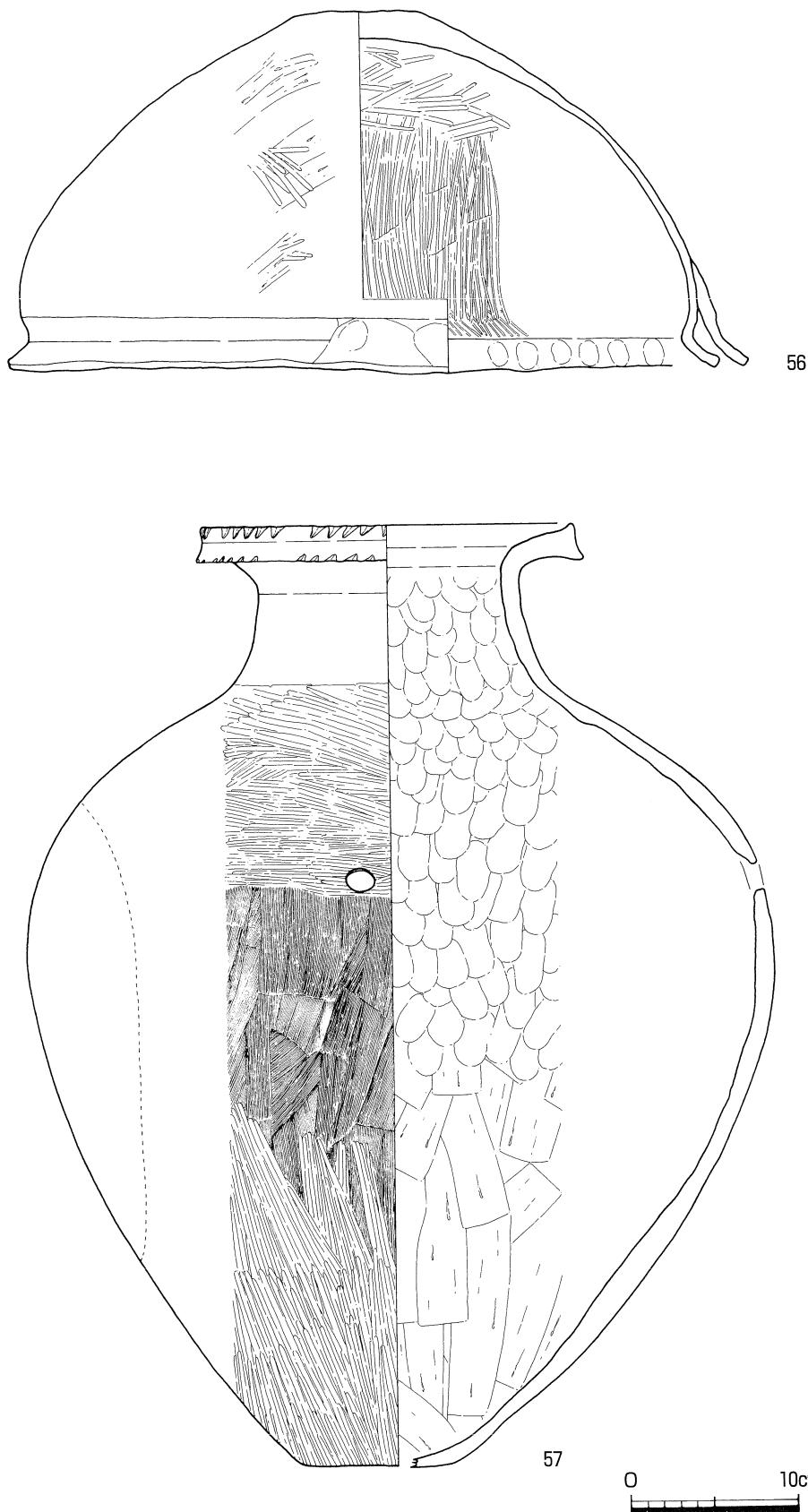
#### 土器棺墓1（第27～29図）

前述の土壙墓1の南東寄りで確認した遺構である。土器棺墓1の主軸方位はN - 56° - Eである。香川県内はもとより周辺部で確認されている土器棺墓は大型の壺の口縁部上に大型の鉢を伏せて被せるのが一般的である。今回、報告する土器棺はその構築方法・形状が特異である。土器棺墓1の状況を検出上部から説明を行う。検出時は底部が上を向き、鉢が伏せられた状態で確認した（上段）。上部の埋土を除去した

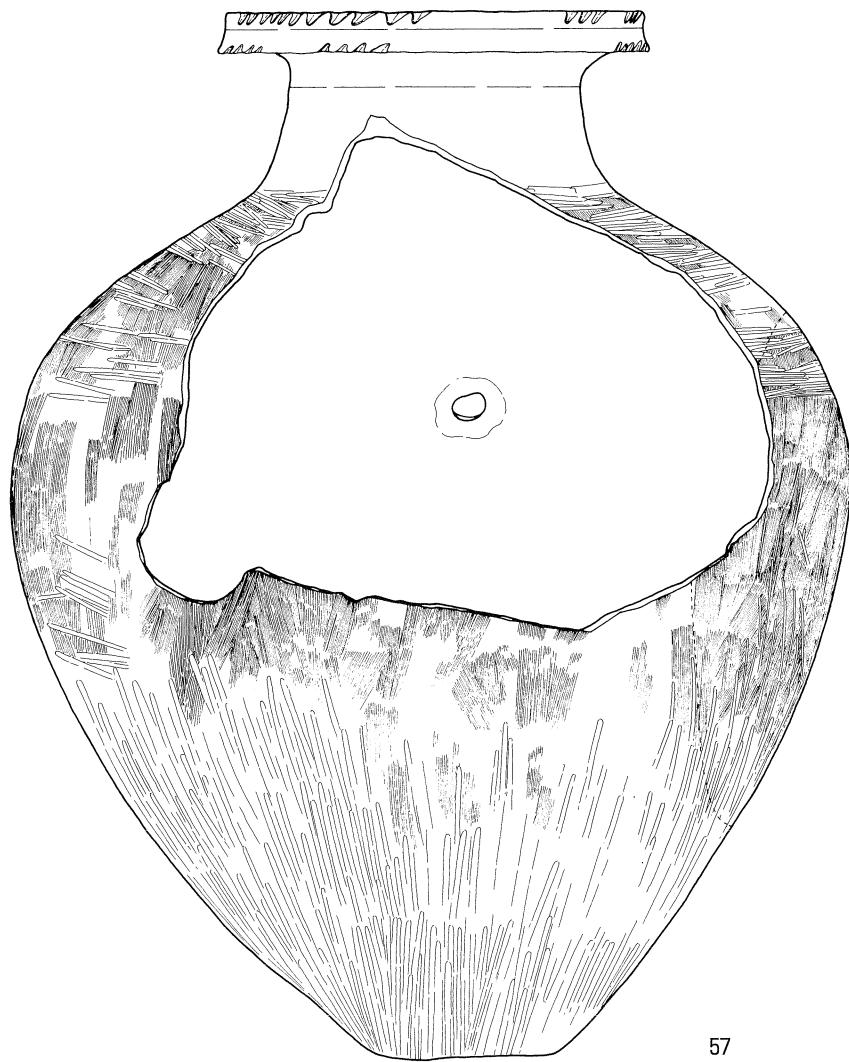


- 1. 暗黄褐色花崗岩バイラン土
- 2. 淡黒褐色花崗岩バイラン土
- 3. 褐色花崗岩バイラン土
- 4. 暗褐色花崗岩バイラン土

第27図 土器棺墓1平面・断面図(縮尺1/20)

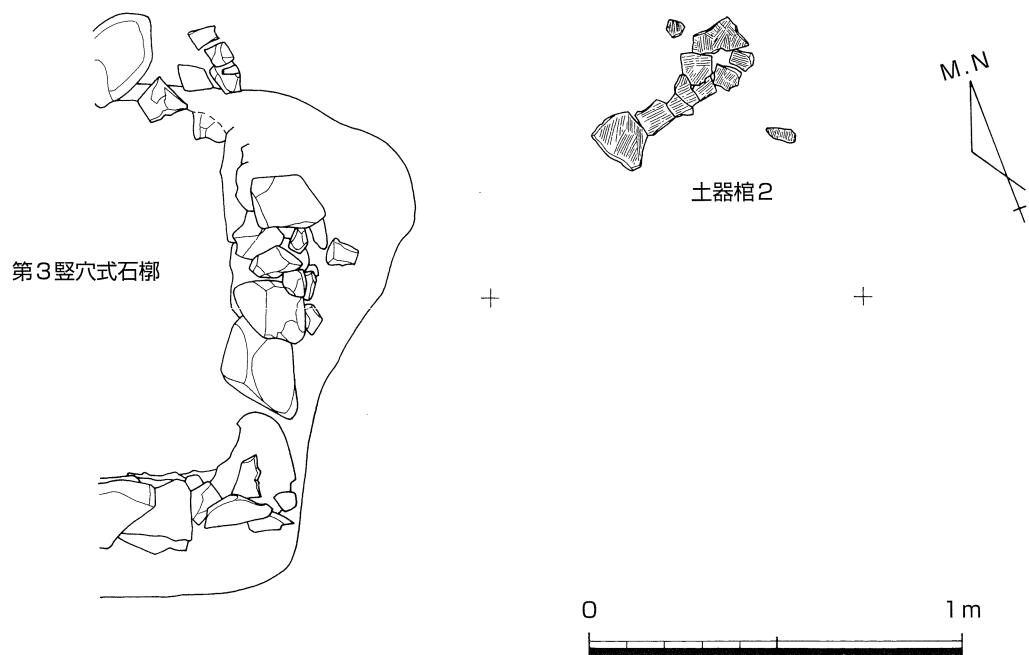


第28図 土器棺墓1出土遺物実測図①（縮尺1/4）

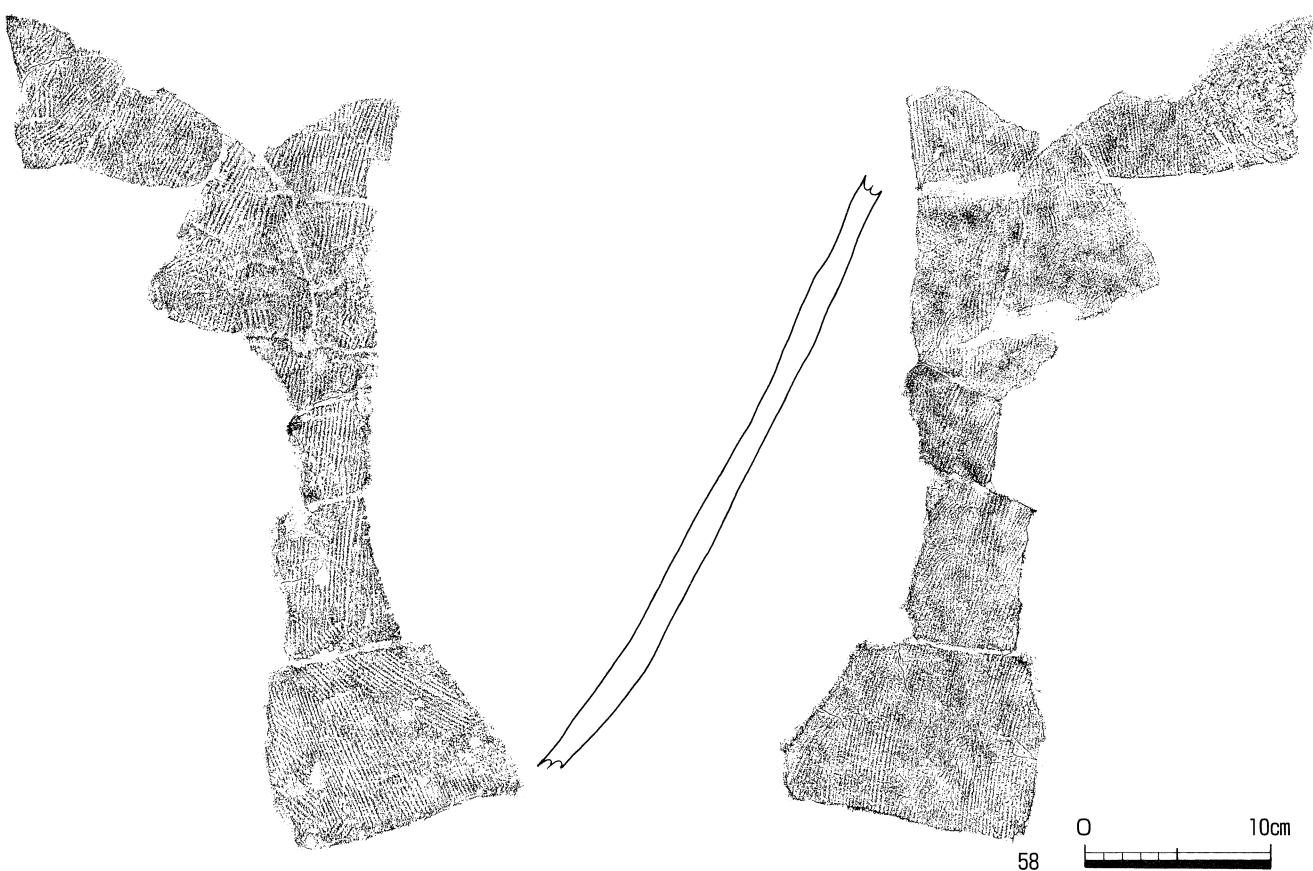


57

第29図 土器棺墓 1 出土遺物実測図② (縮尺 1 / 4)



第30図 土器棺墓2平面図（縮尺 1/20）



第31図 土器棺墓2出土遺物実測図（縮尺 1/4）



第32図 諏訪神社古墳平面図（縮尺 1/100）

段階で、鉢の全容が判明すると共に、鉢の東側に土器の体部片らしきものが認められた。鉢の平面図・断面図を作成した後、鉢を除去したところ、次に出てくるはずの壺の口縁部ではなく、体部上半を大きく穿孔した横向きの大型壺を確認した（中段）。調査後、穿孔された体部上半の破片は口縁部を塞いでいた破片であることが判明した。土器棺内部の堆積土は上半部に第1層は暗黄褐色花崗岩バイラン土、第2層は淡黒褐色花崗岩バイラン土、第3層は褐色花崗岩バイラン土、第4層は暗褐色花崗岩バイラン土である。土器棺内部の堆積土を詳細に洗浄したが、歯や骨などは確認できなかった。体部上半を大きく穿孔しなければならなかつた理由として、土器棺に納める子供の体形が大きく、土器棺に一般的にみられる口縁部から頸部までの除去では遺骸が大きすぎて入らなかつたため、体部上半部に大きな穿孔を行うという変則的な土器棺の形態になつたものと考えられる。

第28・29図に示すのが土器棺墓1の身と蓋に使用されていた広口壺と鉢である。56の蓋は片口鉢を転用したものでわずかに平らな部分が残る丸底気味の底部をもち、体部は丸みをもちら立ち上がり口縁部は「く」の字に屈曲する。体部外面の調整はわずかに残る部分からヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施されている。内面の調整は底部近くを粗いヘラミガキ、上半部は粗い原体によるハケメが施されている。57の壺は角の取れた丸底気味の底部をもち、体部最大径は体部上半にあるが、体部と頸部の接合部の屈曲は緩く全体になで肩を呈し、体部の球形化が進んでいる個体である。外側に開く口縁部は端部を上下に拡張し肥厚する。肥厚した端部には刻み目を施す。体部上半の最大径付近に横1.5cm、縦1.2cmの土器焼成後の穿孔が認められる。穿孔の反対側には第29図に示すとおり大きな穿孔が認められ、両穿孔は土器を横にした時に上下に対応することから、小さな穿孔は上部の大きな穿孔から入った雨水が土器棺内に溜まらない様に、水抜きの穴として穿孔された可能性が考えられる。土器の調整は外面の中央部に残るハケメを下部の縦方向のヘラミガキと上部の横方向のヘラミガキで消したように残ることから、体部外面全域に下地調整としてハケメを施した後、下部と上部のみヘラミガキで下地の調整を消したと考えられる。内面は下半にヘラケズリ、体部上半から頸部にかけてナデ調整による指頭圧痕が顕著に残る。以上のように土器棺墓1に使用された大型土器の形態及び調整技法の特徴などから弥生時代後期末の時期のものであると考えられる。

### 土器棺墓2（第30・31図）

諏訪神社古墳第3竪穴式石槨の北東部で確認した遺構である。現状では後世の削平等により掘方および棺となるべき土器の大半を失っており、本来の全体形状をうかがい知ることはできない。土器片の形態・調整技法などから、今回確認した部分は体部下半の破片であると考えられる。土器の時期を示す口縁部等の部位が出土していないことから、細かな所属時期等は不明である。

第31図58は土器棺2の体部片を図示したものである。断面は平均1.5cmと厚い器壁をもち、内外面ともに粗いハケ調整を施す。

今回は図化していないが、2区出土遺物の中に弥生時代後期～古墳時代初頭の時期が考えられる大型土器の破片が出土している。2区において墓壙掘方等、その痕跡を確認することはできないが、土器棺2と遺物取り上げ設定区である2区は比較的近い位置関係にあり、2区を含めた周辺部に他の土器棺が存在していた可能性が考えられる。

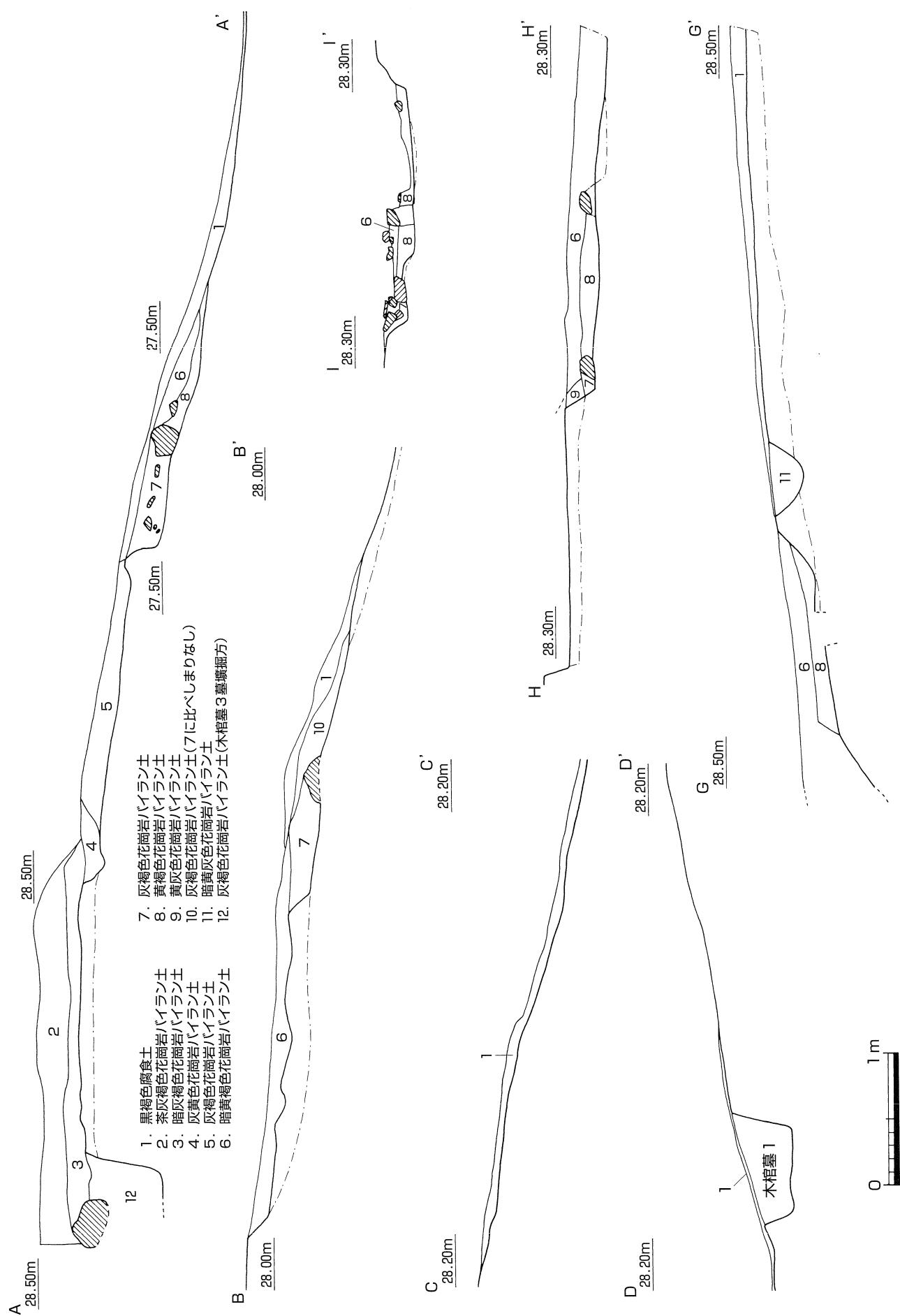
### 諏訪神社古墳（第32～48図）

#### [立地]

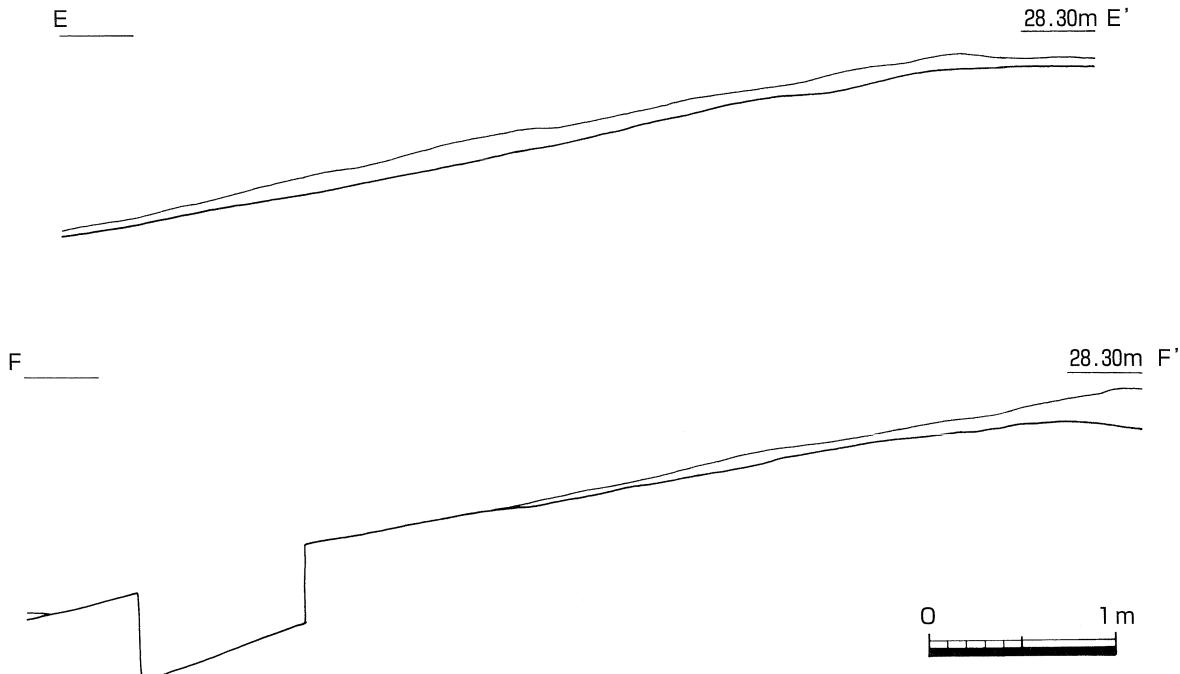
調査区北半部の最高所において確認した古墳である。古墳は丘陵北端の頂部を最大限に使用して構築されている。墳丘土の自然流出や、その後の諏訪神社本殿等の建設による改変によって築造当初の状況からは大きく形を変えているものと想定されるが、古墳各所に残された痕跡をもとに古墳の規模等を復元することは可能である。以下の項目順に判明した成果を報告する。

#### [墳丘]

古墳の墳丘は南北10.5m、東西12.5m、高さ1.1mの規模をもち、墳形は東西方向がやや長い橢円形を呈

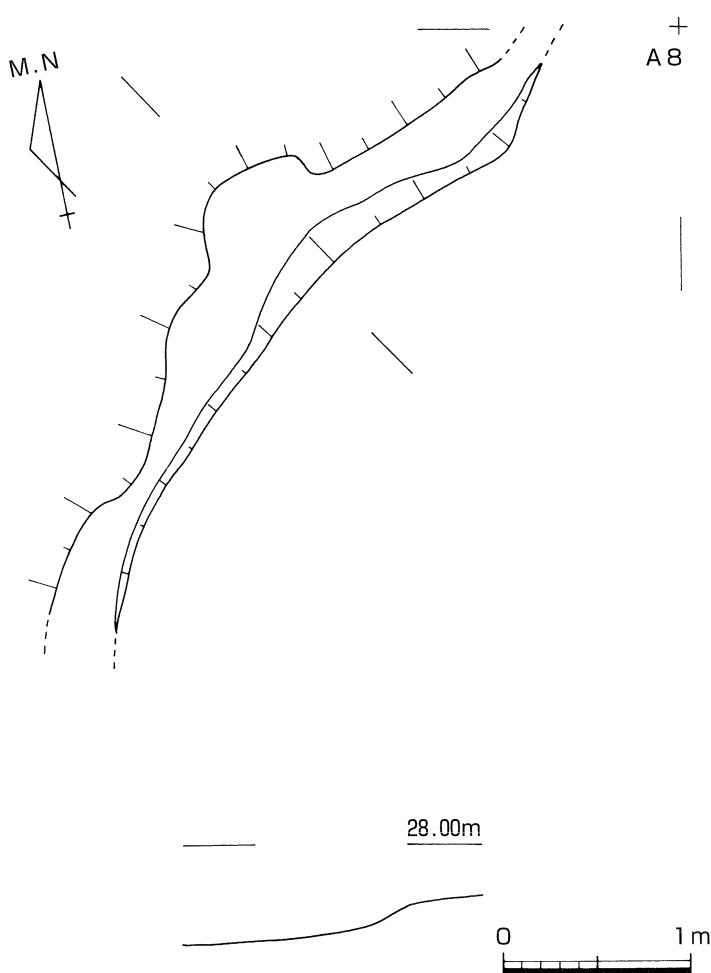


第33図 諏訪神社古墳土層図① (縮尺 1/40)



第34図 諏訪神社古墳土層図②（縮尺1/20）

する。墳丘主軸をどこに設定するかで数値が大きく異なるが、残存する墳裾の状況から復元した古墳範囲をもとに主軸を設定した場合、丘陵頂部の主軸方位に対して約43° 東へ振り、磁北からは50° 東へ振った主軸方位をとる。何らかの意図をもっての選地であると考えられるが、前述した古墳の規模からは丘陵の主軸方向に対して主軸を斜向させた古墳の選地状況の根拠は見出しづらいが、調査によって得られた資料からは丘陵頂部に確保できる平坦地を最大限古墳の範囲に取り込んだ結果がこのような選地状況になったものと理解したい。第33図に示した諏訪神社古墳に関する土層図から墳丘盛土と考えられる造成土が残っているのはA-A'で作成した土層図のみである。土層図からは第2層の茶灰褐色花崗岩バイラン土、第3層の暗灰褐色花崗岩バイラン土、第4層の灰褐色花崗岩バイラン土、第5層の灰褐色花崗岩バイラン土の第4層が墳丘造成土であると考えられる。このうち第3層と第5層に挟まれた第4層については、局所的な状況を示している。この他、列石の背部の裏込め土と考えられる第7層の灰



第35図 諏訪神社古墳 西部平面・断面図（縮尺1/40）

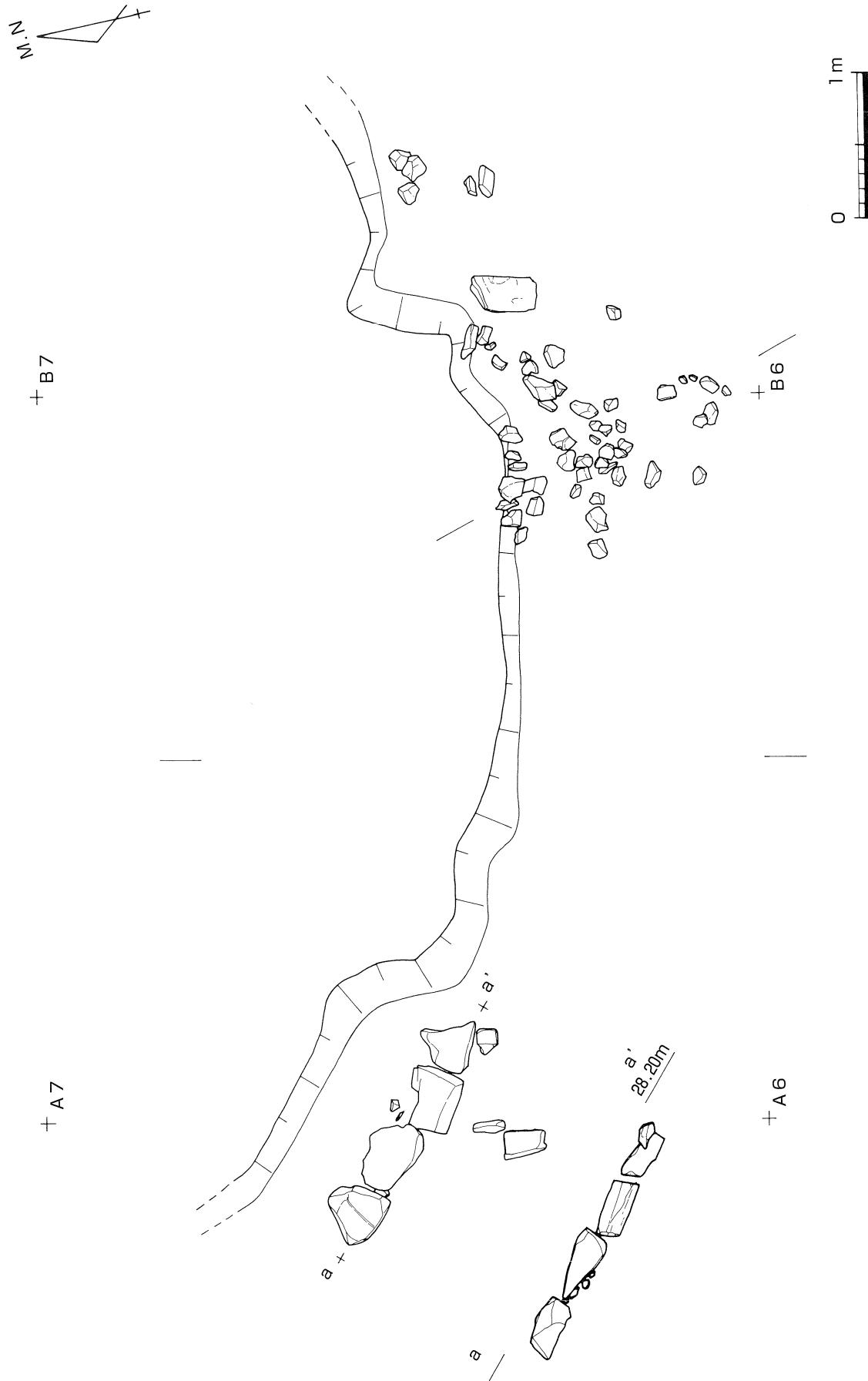


第36図 諏訪神社古墳 東部平面図（縮尺1/40）

褐色花崗岩バイラン土、第9層の黄灰色花崗岩バイラン土がある。特に第7層については、先述のA-A'の断面の他、B-B'、H-H'、I-I'の断面図でも土層が認められることから、裏込め土と考えて問題ないと考えられる。以上が諏訪神社古墳の墳丘造成土である。

#### [列石・葺石および墳裾の構造]

列石については断続的ながら古墳の南西部から北東部にかけて認められる。確認した場所によって、使用している石材の規模に差が見られる。その差が顕著であるのは、南西部に4石認められる列石である。



第37図 諏訪神社古墳 南部平面・立面図 (縮尺 1/40)

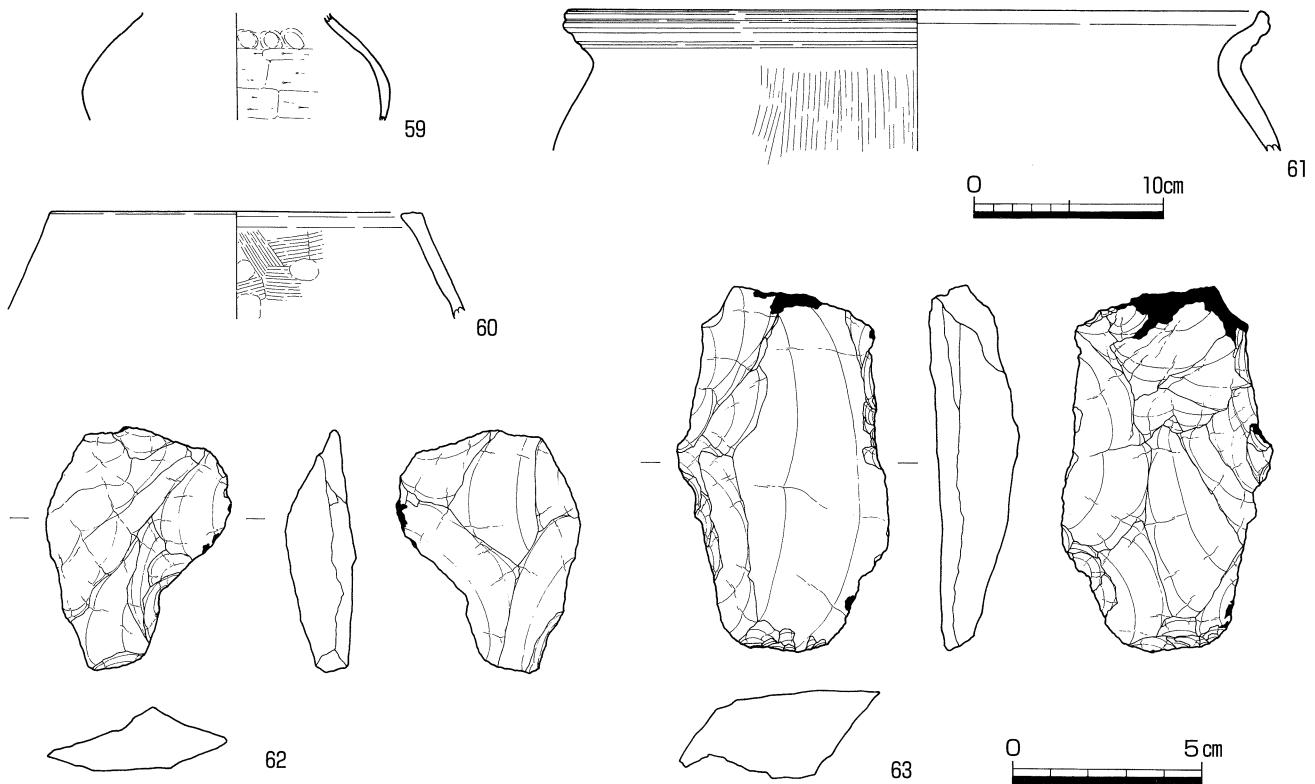
南西部の列石については、第1次試掘調査において確認されていたもので、試掘調査時に裏込め部分も掘削されているが、列石背部の裏込めの状況が写真・図面等に残されておらず、この部分における列石据え付け等の構築状況を確認することはできない。しかし、列石を含めた墳裾の構造等が判明している。北東部・南東部の状況から、南西側の構築状況もある程度の想定復元が可能である。各箇所で確認できた墳裾の構造を提示する。第35図に示す西側部分では、厚さ10cm程度の表土を除去した段階で長さ4mにわたって断面L字形に造成された箇所を確認した。両側の延長部分の状況は痕跡が認められず不明である。加工部分は高さ20cmの緩い斜面と幅30~50cmの平坦部分で構成される。この部分では他の箇所で確認されている列石等は認められない。第36図に示す東側部分では、長さ9mにわたって造成箇所を確認した。

造成箇所は場所によって、残存状況が異なり、造成によってできた平坦面は北側で20~50cmと残りが悪く、塊石が認められない。南側は50cm~1mと残りも良く塊石も多いが、かなりの量が斜面部に崩落している。葺石の規模は10~30cmであり、各箇所とも混在している。A-A'の断面図では墳裾を高さ20cmのL字形に削平しており、削平によってできた幅1mの平坦地の端に幅30cmの石を据え付けている。この部分が墳裾であると考えられる。その裏側には、裏込めと呼べるほど石は多くないが、幅10cm程度の塊石が散在している。これらの塊石はいずれも削平面より10cm程遊離している。列石と考えられる石より東側は傾斜が変化し、幅約1mが緩く傾斜する状況が確認できる。東側造成箇所には、B-B'として別に土層断面図を作成しているが、土層断面図はA-A'と大きな違いは認められず、高さ15cmのL字形に削平しており、削平によってできた幅1mの平坦地の端に石が据え付けられている。それより東側は石を境にA-A'と同様に傾斜が変化するのも同様である。第37図に示す南側部分では、南西側に列石、南東側は葺石状の塊石となり、大きな違いが認められる。南西側については、幅40~50cm、奥行30~40cm、高さ20cm程度の石を斜面側に面を揃えている。西側から2つ目の石は立面が三角形状を呈し、他の石に比べ形状が異なり、西側の高さが殆どないため、下側に塊石を詰め高さを調整している。列石から背面にあるL字形の削平部分までは80cmであり、平坦である。一方、南東側で幅10cm程度の塊石が集石している状況を確認した。I-I'の土層断面図がこの部分にあたり、L字形の削平部分までの平坦地は50cmと狭いが、背面の削平部分の高さは20cmと変わらない。この部分は尾根につながる部分であり、他の箇所と同様もしくはそれ以上に平坦地を確保できる箇所であるが、古墳南側にある弧状を呈する溝の延長がこの部分にも及んでいることに関係するため、平坦面が少なくなったものと想定される。

古墳南側の墳形が幅5m、長さ1mの範囲において張り出すことから突出部の可能性を想定したが、後述する古墳裾で認められる葺石のうち、西側部分のものは張り出し手前で止まっており、列石が南側へ屈曲するような状況は認められない。残存状況が悪いものの、同様に東側部分についても張り出し部付近で屈曲させる突出部を意識したような葺石の状況は認められない。これらのことから古墳南部にみられる張り出しは突出部ではなく、陸橋状の開放部と考えるに至った。後述する張り出しの南側の状況でも、この判断を補強する結果を得ている。開放部と考えられる張り出しの南側には、標高は30cm程度下がるもの、張り出しの前面を掘り切るような状況は認められず、連続して幅約3mの範囲が南へ向かって陸橋状に繋がり、その両側には弧状を呈する溝が存在する。溝の規模は場所によって異なるが概ね幅2~3m、深さ約30cmである。斜面部における十分な調査を行えていないが、弧状を呈する窪みの西側部分は等高線の変化から北西方向へ向かって下っている状況が認められる。一方、東側部分は標高27.25mの等高線付近で不明瞭となる。このことから古墳南側で確認した弧状を呈する溝は、古墳全体に及ぶものではなく、古墳と南側の丘陵を画する目的で古墳構築時に造られたものと考えられ、その窪みは高松平野に面した西側部分の範囲を長く明瞭に構築する一方、東から南東方向に丘陵が連続し、北東方向から窪みが目立たない東側部分については、最低限の範囲について溝を開削し、古墳の範囲を明確にしているものと想定できる。

#### [墳丘内出土遺物]

第38図に示したのが諏訪神社古墳墳丘内出土遺物である。いずれの遺物も葺石裏込め土からの出土遺物である。59は長頸壺の体部であると考えられる。外面の調整は磨耗して不明であるが、内面は体部上半部まで横方向のヘラケズリがその上部には指頭圧痕が認められる。内面のヘラケズリの状況から底部は丸底



第38図 諏訪神社古墳墳丘内（列石裏込中）出土遺物実測図（縮尺1/4, 62・63は1/2）

に近いと考えられる。60は無頸壺の口縁部である。体部は「く」の字に屈曲するものと考えられる。口縁端部上面には2条の凹線文が認められる。外面の調整はヨコナデ、内面はハケメの後、粗いヨコナデが認められる。61は甕である。上下に肥厚した口縁端部には2条の凹線文を巡らす。体部外面の調整はハケメを施し、内面はナデである。62は風化の進んだサヌカイトの剥片である。63は一部、調整がみられるサヌカイトである。墳丘内出土遺物のうち、古墳に直接伴う可能性のあるものは59の長頸壺の体部のみで、体部内面のヘラケズリが上方へも及んでいることから弥生時代後期末頃の時期が考えられる。60・61は口縁部に凹線が巡っていることから弥生時代中期後半の時期であると考えられ、丘陵上には同時期の遺構が存在していることから、これらの遺構からの混入と考えられる。62・63は細かな時期を特定することは困難であるが、素材であるサヌカイトの風化の進行状況から旧石器時代の所産の可能性が考えられる。

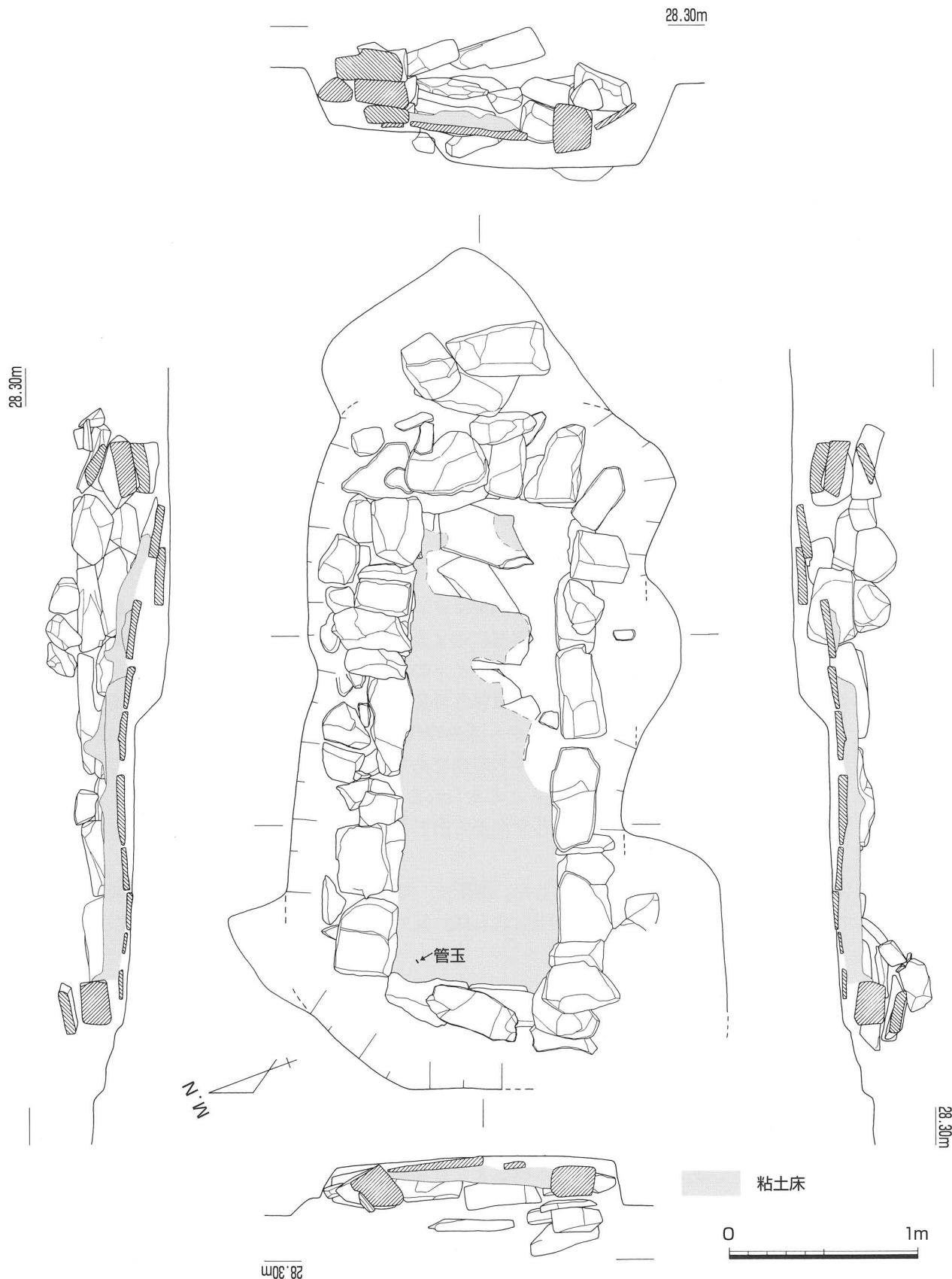
#### [埋葬施設]

当古墳には後述する3基の埋葬主体を確認した。説明上、墳丘の中心部で確認した埋葬主体を第1竪穴式石槨、その北側で確認した埋葬主体を第2竪穴式石槨、反対の南側で確認した埋葬主体を第3竪穴式石槨と呼称し、以下に詳述する。

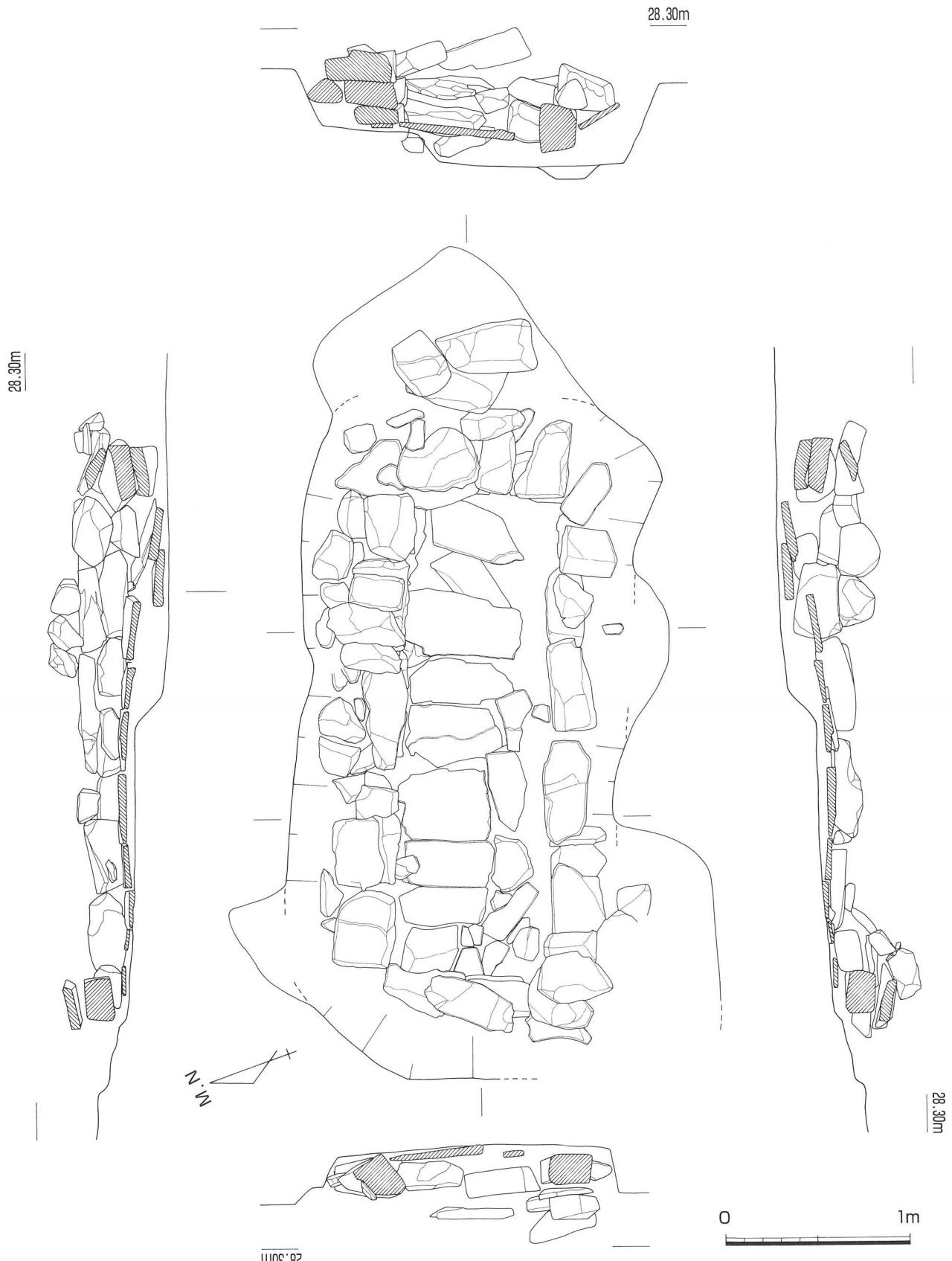
#### 第1竪穴式石槨（第39～43図）

後世の改変によって、構築時の構造を保っていない。また、主体部東側は、先行する木棺墓3を切るように構築されており、墓壙構築時に下部の補強を行わずに造られたため、床面が不安定でおらず、竪穴式石槨構築後のある段階で木棺墓3と重複する部分の床面を含めた石槨東側の下部が緩み、石槨が変形し、正確な構築方法が迫れない部分も多く存在する。

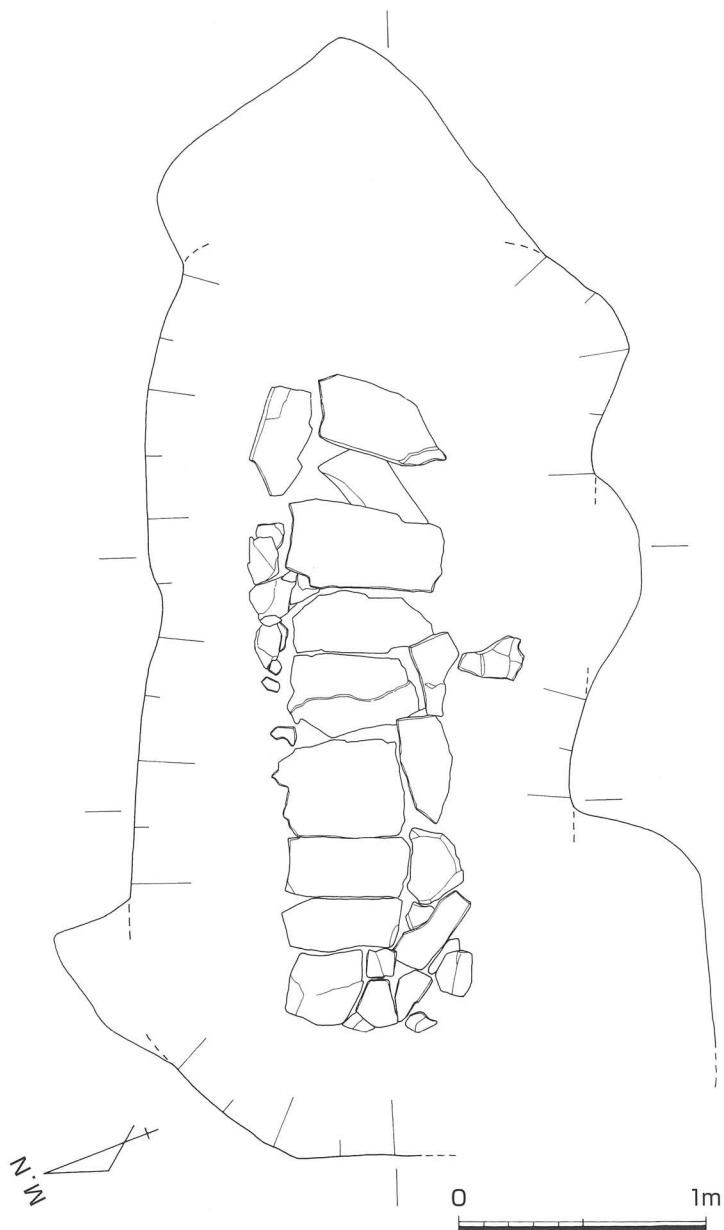
墓壙掘方の規模については、東側において木棺墓3と重複関係にあり、遺構確認時の平面的な前後関係を明確にすることができず、長軸方向については不確定要素も存在するが、概ね長さ3.7m、幅1.7m、深さ25cmである。墓壙の埋土は灰褐色花崗岩バイラン土の単層である。石槨の構築状況は、墓壙床面の長軸方向に長方形状の板石を直交する形で一列に9石並べている。板石の規格に差があるためか、西から5石目を境にそれより東側については北側に小規模な板石を並べ、反対の西側は南側に板石を並べて床面の幅



第39図 第1豎穴式石槨平面・立面図① (縮尺 1/30)

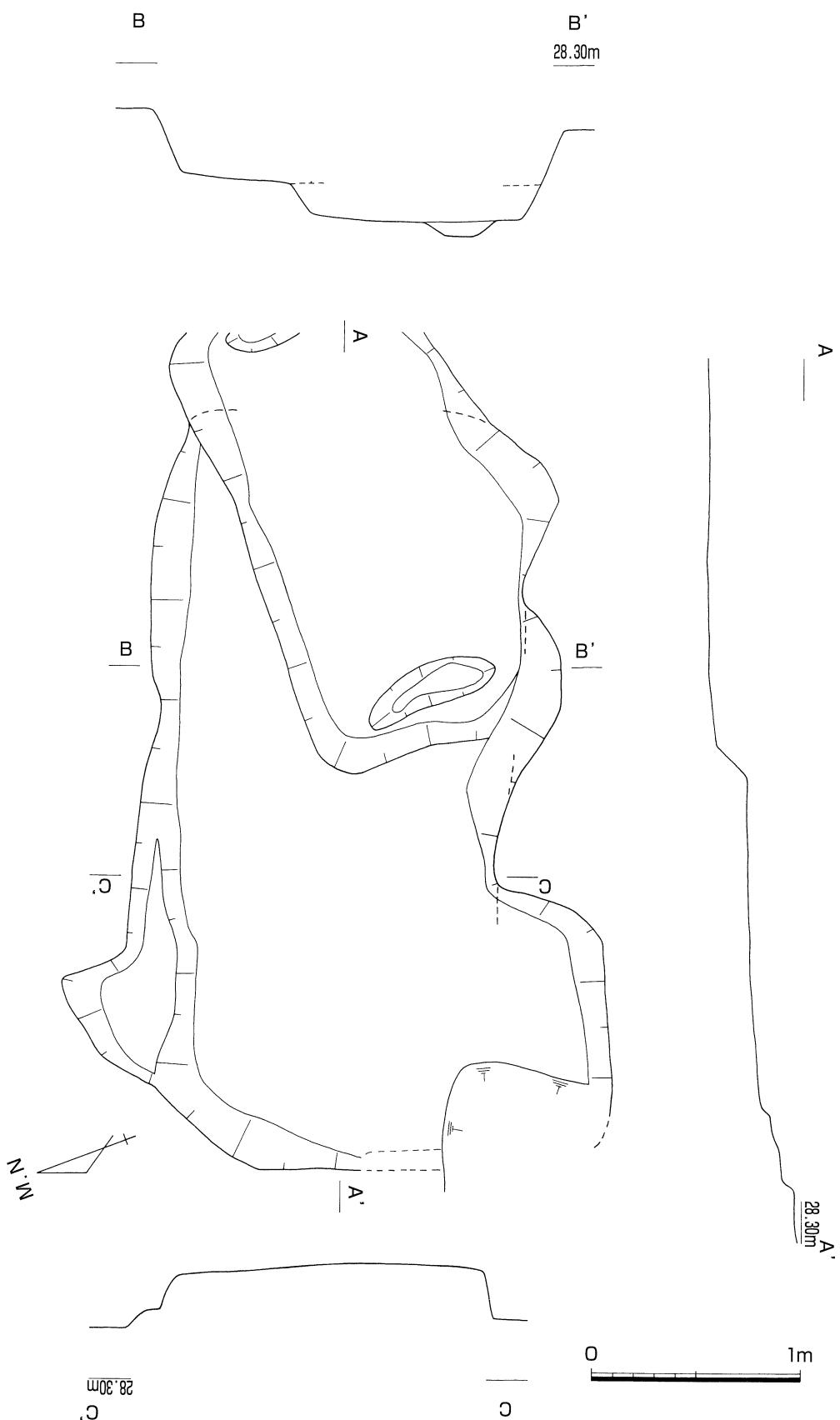


第40図 第1竪穴式石櫛平面・立面図②（縮尺 1/30）

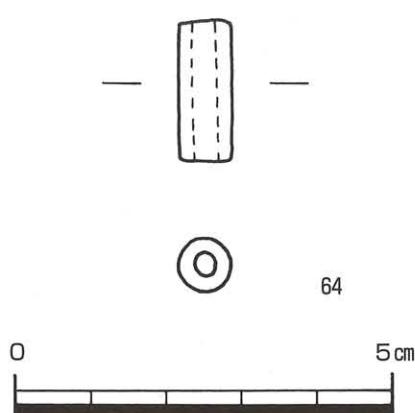


第41図 第1竪穴式石槨平面図③（縮尺1/30）

を広くしている。石槨の石積みは、床面の板石にはからないように積上げられているが、北東側については、石槨の石積みが床面板石の上部に及んでいる。基底部は直方体の石材を長手積みとする。2段目についても、残存する部分については長手積を多用する。3段目については、残存部が少ないが、北東側・南東側・南西側などの残存部では小口積を多用する。石槨北側壁の北東側では側壁の裏側にも石材が充填されている。床面上部には、厚さ10cmの白色系の粘土が全面に認められる。石槨内で確認した粘土は石槨石積みの基底石の上面にまで及んでいるが、後述する第2竪穴式石槨は石槨側壁に隣接して帯状の粘土帯が存在し、断面が凹字形になるのに対して、断面が平坦な状況を確認していることから、粘土の使用方法に違いが認められる。調査の関係で石槨内粘土については、細かな断面図を作成していないが、石槨内粘土を除去する段階で、粘土中に赤色顔料が帶状に含まれていることを確認している。粘土上面では確認していないことから、石槨を構築する順序として床面板石の上面に粘土を敷き、木棺を安置した後、粘土を被覆するまでの間に赤色顔料を散布したものと考えられる。



第42図 第1竪穴式石櫛平面・立面図④（縮尺1/30）



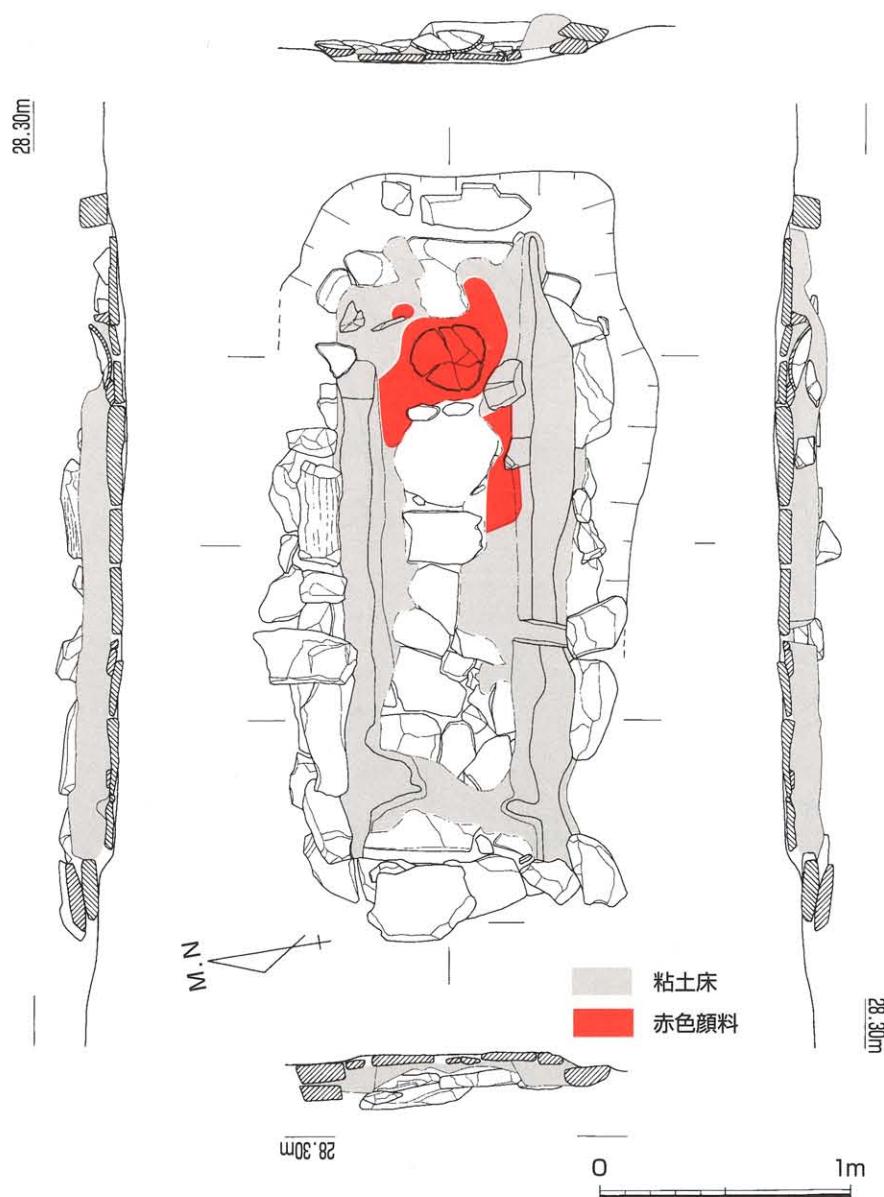
第43図 第1竪穴式石槨出土  
遺物実測図（縮尺1/1）

石槨の主軸方位はN・62°30'・Wであり、石槨内の規模は、長さ2.5m、幅75cm、最も残りの良い北東部分で床面からの高さは40cmである。石槨内の土層は東西で堆積状況が異なる。西側は濁黄灰色花崗岩バイラン土、中央部は黄褐色花崗岩バイラン土を含む暗茶褐色花崗岩バイラン土、東側は中央部でみられた暗茶褐色花崗岩バイラン土の上部に灰褐色花崗岩バイラン土が認められる。東側の上層に堆積した土は、板石の床面の底が抜けた以降に堆積したものと想定される。

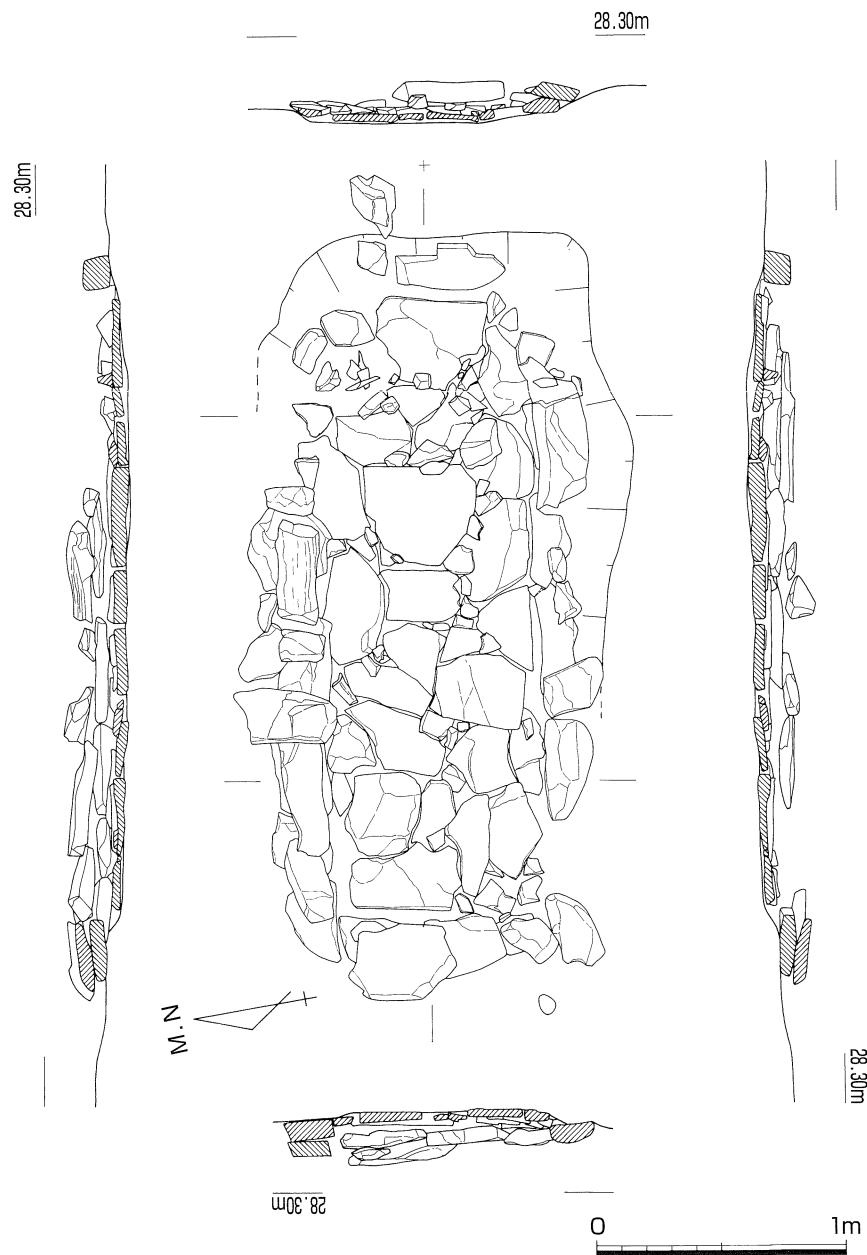
出土遺物については、石槨内の南東隅で碧玉製の管玉が1点出土している。管玉の法量は長さ1.8cm、幅7mmであり、直径3mmの孔が直線的に穿たれ、丁寧なつくりをしている。

#### 第2竪穴式石槨（第44～47図）

第1竪穴式石槨の北側で確認した主体部である。丘陵先端  
28.30m



第44図 第2竪穴式石槨平面・立面図①（縮尺1/30）



第45図 第2豎穴式石燈籠平面・立面図② (縮尺 1/30)

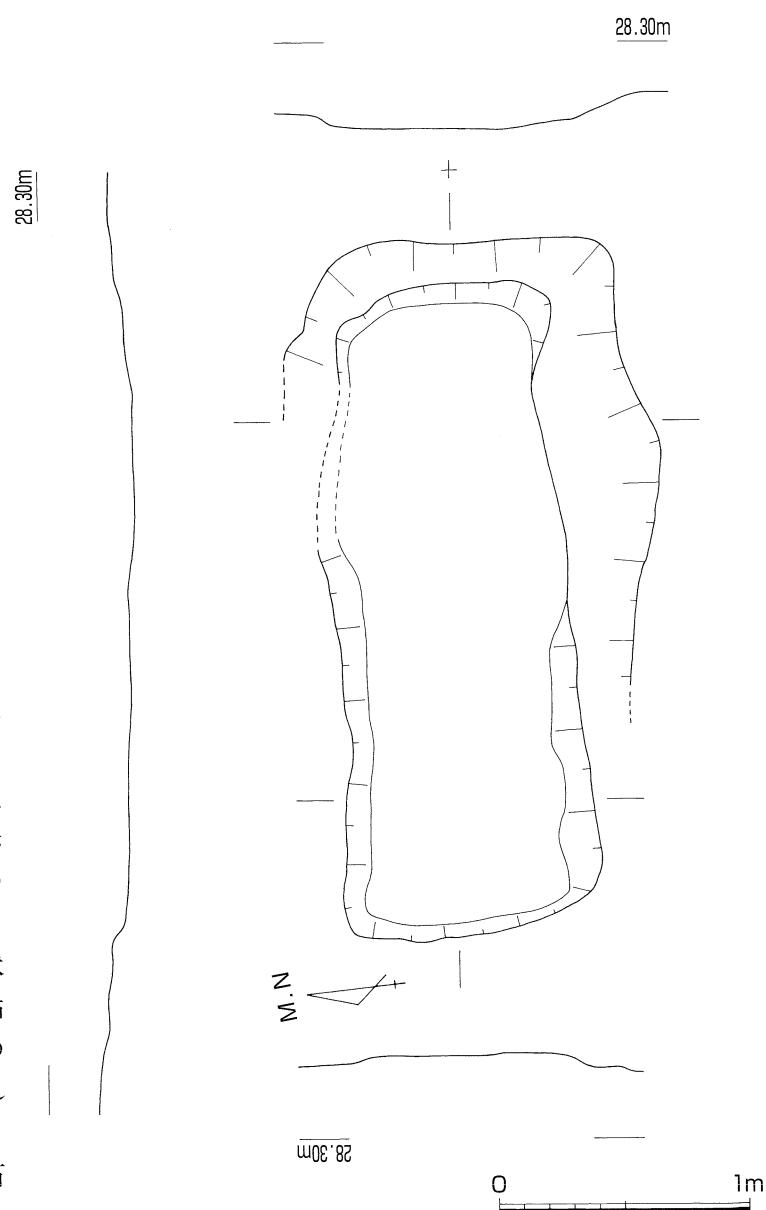
部の斜面近くに位置していることもあり、残存状況は悪い。墓壙の規模については、試掘調査の遺構検出時に石燈周辺部の掘り下げを行っていることに加え、長年の自然流出などにより、北側を中心に不明確な部分も存在するが、長さ3.3m、幅1.5m以上、深さ15cmである。墓壙掘方は床面の板石を敷き詰めるためか、他の部分より更に5cm掘り下げている。床面の板石には、長軸40cm×短軸30cm程度の規模をもつ石材を中心に長さ2.4m、幅1mの範囲に隙間無く平らに敷き並べようとの意図が認められ、石材の隙間は、一辺が10cm規模の小振りの石材で埋め尽くされている。大きな床面石材は長軸方向を主体部主軸に対して直交するように配置するものも多く見られるが、全ての石材において統一は認められない。これは規模の揃った良質な石材を確保できなかったことにより、このような床面板石の配置になったものと考えられる。床面の板石を囲むように基底部の石材を長手積とし、一部、北東側の石材に欠落がみられるものの、本来は四周を取り囲んでいたものと考えられる。取り囲んだ石燈内の規模は長さ2.5m、幅83cmであり、主軸方位はN -80° 45' - Wである。

石槨両側壁石材内側に接して、幅20cm、高さ10~15cmの粘土帯が認められる。この粘土帯は両側壁基底石の上部にも粘土が充填されている。粘土帯の内側の立ち上がりは垂直ではなく、下部が広く、上部が狭く、斜面になっている。両側壁の内側で確認した粘土帯は石槨石積みの2石目の中位あたりまで及んでいる。側壁内側の粘土帯とは別に、西側では小口部から20cmの距離を置き、粘土帯が存在する。この粘土帯は中央部が低く、北側の幅が広いのに対して、南側は細く、側壁にみられる粘土帯の幅に比べて歪である。床面の粘土については、側壁から中央へ向かうほど粘土の厚みを減じ、主軸方向の中央部付近には全く存在しない。

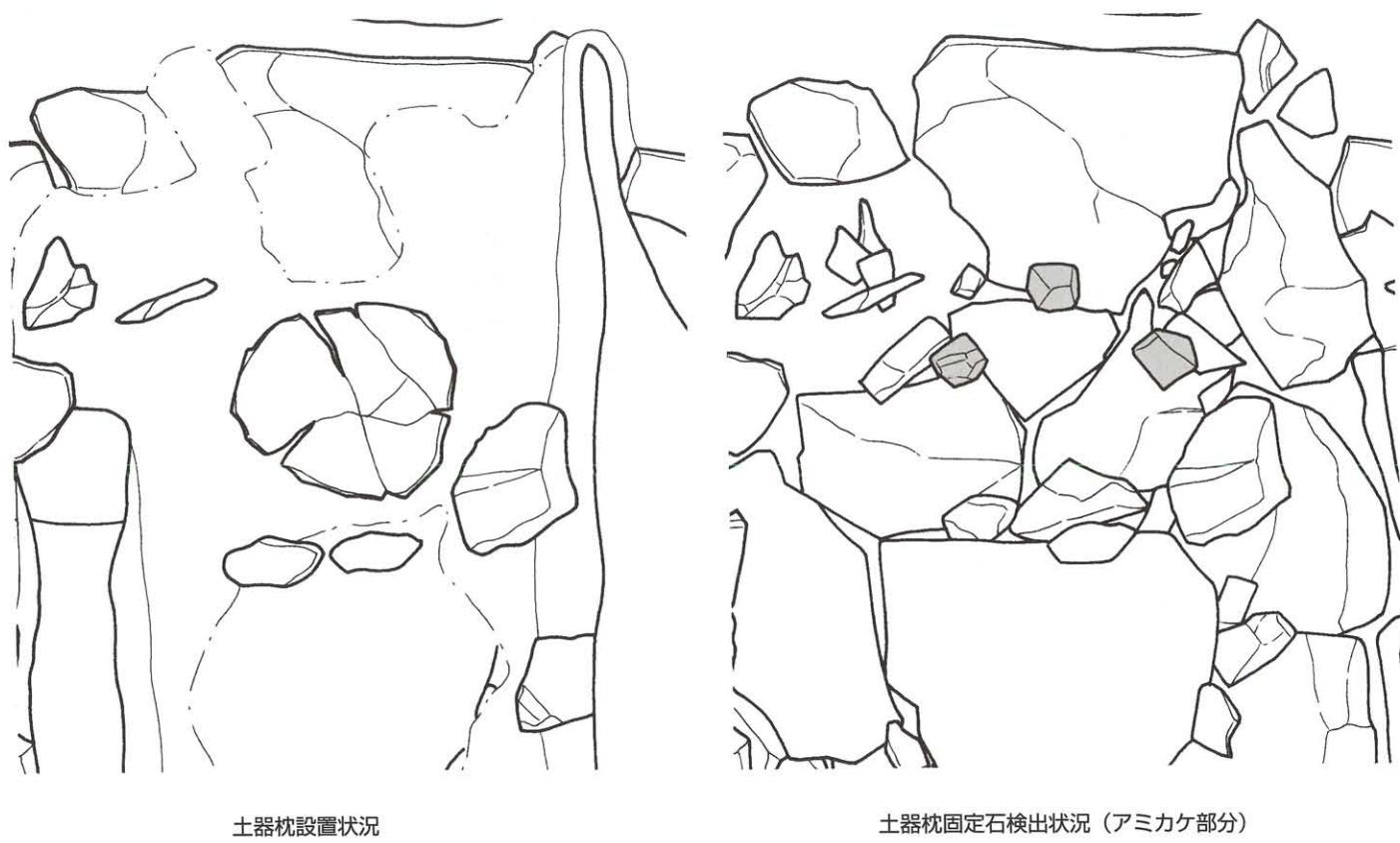
2石目以上については、石材が残る部分では長手積が多くを占めるが、一部には小口積になるものも存在するように石材の積み方に統一はみられない。

東側小口部近くでは、壺形土器の頸部~体部にかけて破片を使用した土器枕を確認した(第47図左)。この土器枕の下部には粘土と床面板石上に約8cm四方の石材を3箇所置いている状況を確認した(第47図右)。確認状況からは土器枕を安定させるために3箇所に石を配置したが、不安定であったことから石と土器枕の間に粘土を充填し安定を図ったものと想定される。この土器枕の内外面には赤色顔料が塗布されており、その顔料は科学的な分析の結果、水銀朱であることが判明している(註1)。

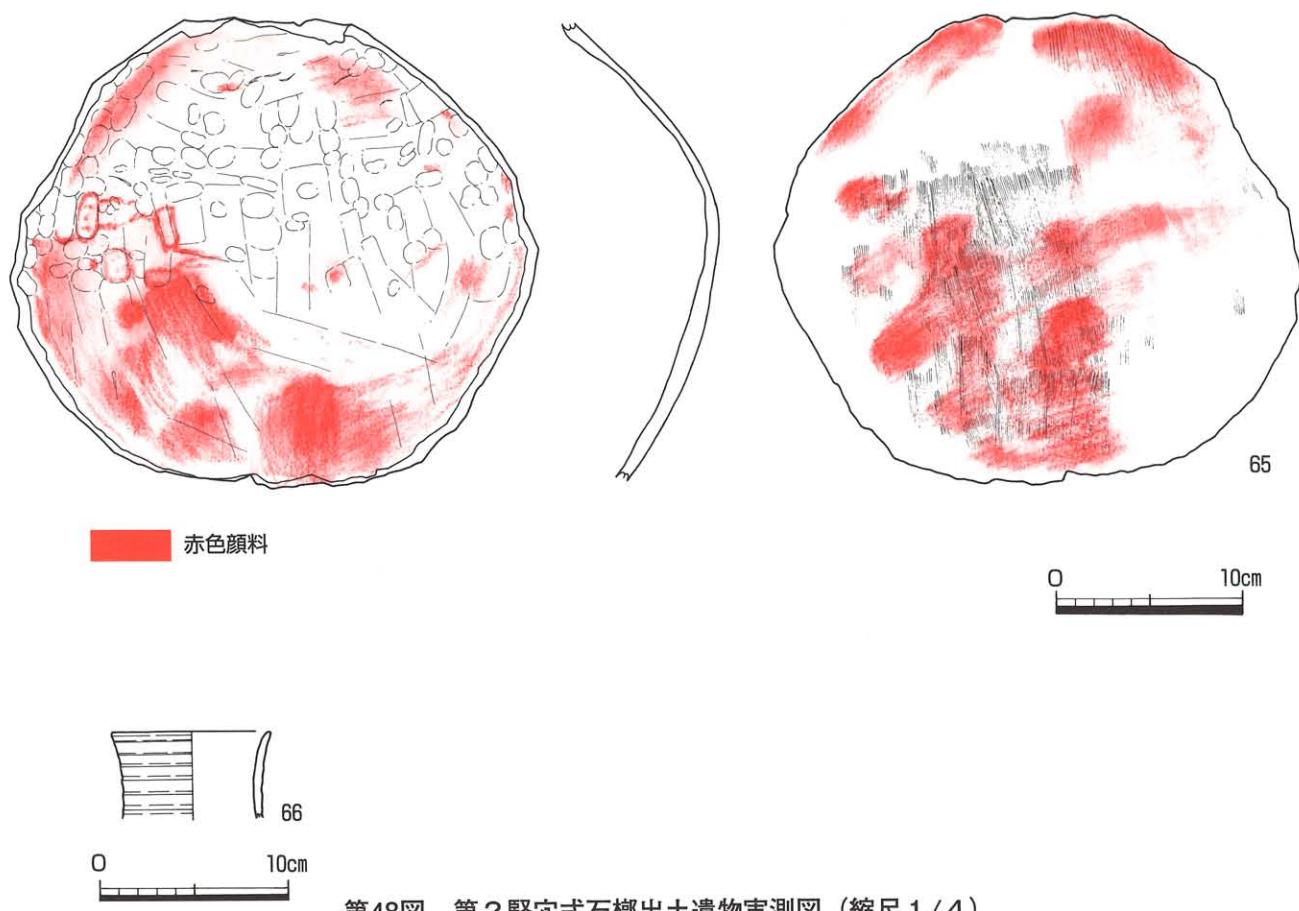
第2堅穴式石槨内に納められた木棺構造の復元については、前述のとおり、石槨内の石積みに接して確認した粘土帯の断面形状について上部が狭く、下部が広くなり、その一部である薄い粘土が床面にまで及び、浅いながらもU字形に近い状況が認められることから、側材が直立するような箱形木棺は想定できず、割竹型木棺もしくは一部削り抜き材を用いた木棺構造を想定した方が粘土帯の断面形状に合致してくるものと考えられる。しかし、ここで問題になるのが、前述の土器枕の設置状況とその周辺で確認した赤色顔料の広がりについてである。土器の周囲でも赤色顔料の広がりを検出したことから石槨内における粘土帯の断面形状と合わせて考えるならば、石槨および粘土帯設置以降の状況については、以下のような想定が最も妥当であると考えられる。①割竹型木棺もしくは一部削り抜き材を設置、②土器枕を固定するための石材および粘土で作成した基礎部を構築、③木棺内部の東側に頭部を安置するための基礎部の上に赤色顔料を塗付した土器枕を設置、④次に遺骸を安置し、⑤その後、頭部付近に赤色顔料を散布した。床面板石と土器枕を安定させるための石の間には本来、木棺材が存在したと考えられるが、木棺材が腐朽して残らなかつたことか



第46図 第2堅穴式石槨平面・断面図③(縮尺1/30)



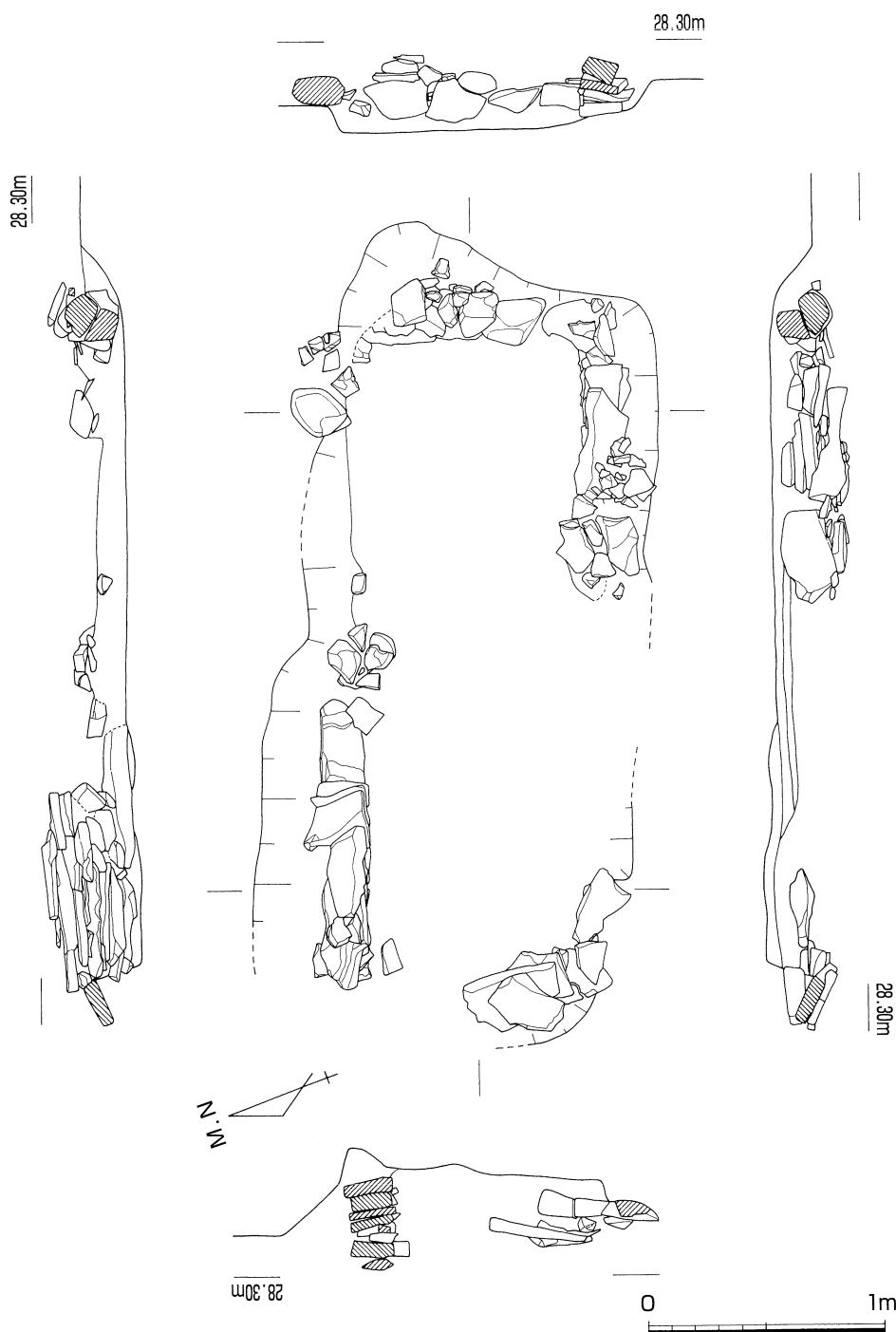
第47図 第2豎穴式石槨東部付近詳細図（縮尺1/10）



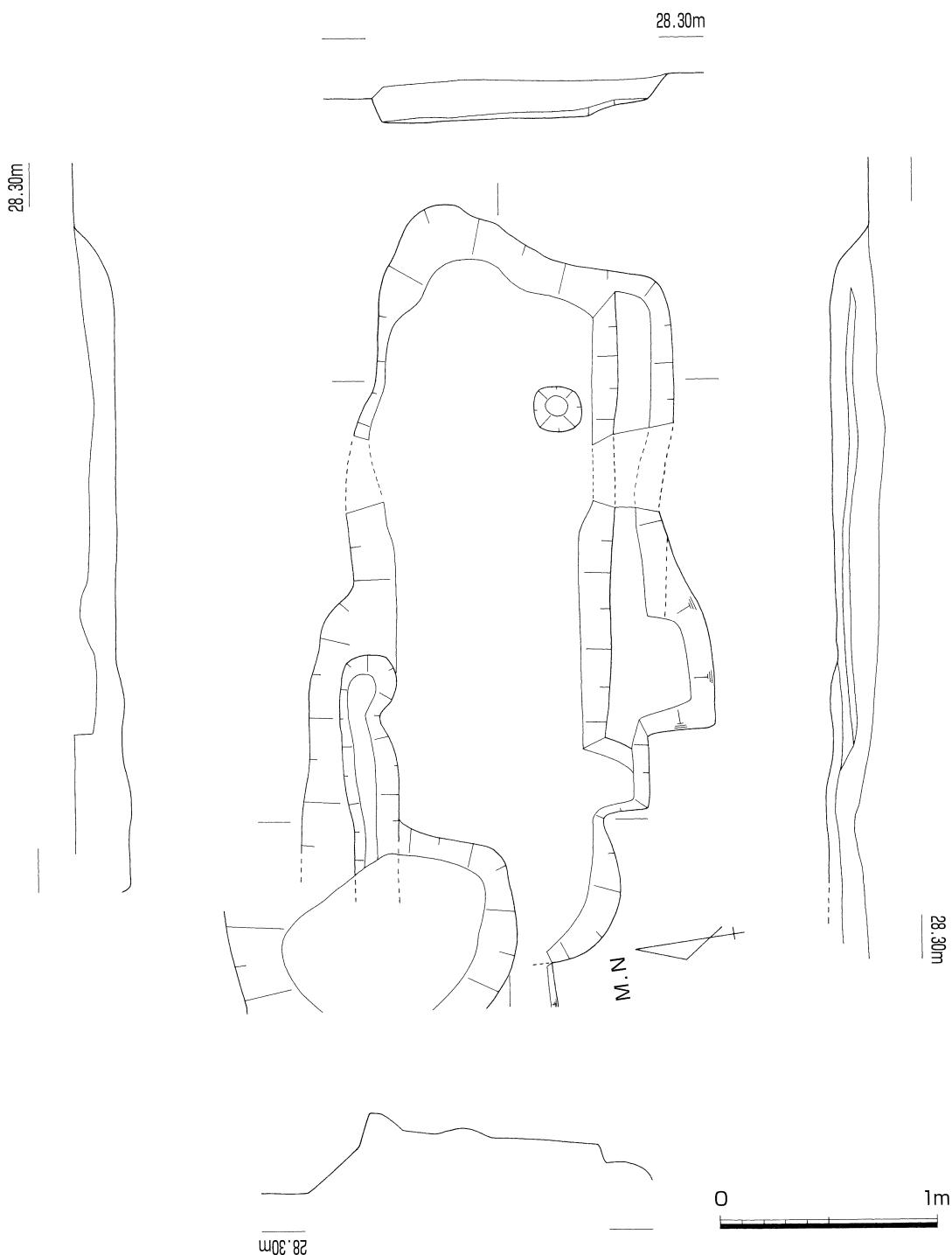
第48図 第2豎穴式石槨出土遺物実測図（縮尺1/4）

ら、調査時には土器枕を安定させる石材が床面板石上に直接置かれたような状況になったものと理解したい。このことは本来、赤色顔料を塗布し、設置した段階では一つの破片であった土器片が検出時は複数の破片となった状況で確認しており、ある時期に上部から相当な力がかったものと考えられる。木棺材が腐朽したために存在した可能性のある隙間もこの時点で無くなつたものと考えると調査時における検出状況の全てが説明できる。

第2堅穴式石槨からの出土遺物は、第46図に示した65の土器枕と66の弥生土器の壺である。65の土器枕は壺の頸部～体部にかけての破片を利用したもので、体部上半も下半もやや丸身をおびる。形態から体部最大径は体部上半にあり、時代的には大きく下るものではない個体であると考えられる。調整は外面ハケ



第49図 第3堅穴式石槨平面・立面図①（縮尺1/30）



第50図 第3竪穴式石燈平面・立面図② (縮尺 1/30)

メ、内面上半ナデ、下半ヘラケズリを施す。66は直口壺の口縁部である。若干、外反する口縁部をもち、端部は丸く終る。口縁部～頸部に凹線文7条を巡らせる。調整は内外面ともヨコナデである。第2竪穴式石槨から出土した遺物の内、枕として使用されていた壺の体部については、所属時期を特定するために有効な口縁部が取り除かれており細かな時期を特定することは困難であるが、体部最大径付近の肩の張りが弱く、球形化を指向していること、内部の調整技法であるヘラケズリが上部まで及んでいることなどを考え合わせると古墳時代前期初頭頃の所産の可能性が高いと考えられる。66については弥生時代中期末頃の時期のものと考えられ、第2竪穴式石槨構築時もしくは、第2竪穴式石槨上部に堆積した墳丘造成土に混入していた可能性が考えられる。

### 第3竪穴式石槨（第49・50図）

第1竪穴式石槨の南において近接して確認した主体部である。墓壙西側はSK01と重複関係にあり不明瞭となる部分が多いものの、墓壙の規模は長軸3.20m、短軸1.45m、深さ20cmである。石槨石積みについては、後世の石材抜き取りによるものか、半分近くの石積みが持ち去られたものか存在しない。このような状況から向かい合う石積みについての比較検討ができない状況にある。これも上記に関連しているのか、他の主体部に見られる床面の板石や壁面に粘土が存在しない。数少ない状況から復元できる石槨の内法は長軸2.5m、短軸90cm、高さ40cmである。石槨内の堆積層は暗灰褐色花崗岩バイラン土の単層である。以下、各壁面の石積みを個別に説明する。北側壁は西側部分の80cm程が残存するのみであるが、第3竪穴式石槨内では最も残りが良い部分である。石積みの高さは40cmあり、板石を長手積で7段積んでいるが、石材の規模は大小さまざまであり、規格の統一はみられない。南側壁は東小口に接する東側部分の1m程が高さ約30cmで残存している。全般的に厚みの無い板石状の石材を使用しており、石材規模に統一はみられない。北側壁では基底石に規模の大きな安定した石材を使用しているのに対して、南側壁は規模の小さな石材を使用するなど積み方は粗い。東側小口部は奥行の無い石材を基底部に4石並べているが、底部が安定している北側の2石に比べて、南側の2石は不安定である。2石目より上については、北側壁東端と同様な小振りな板石を使用している。石積みの高さは30cmである。西側小口部は最も残りが悪い。基底石にやや厚みのある石材を使用し、長方形状の板石を3段積上げている。石積みの高さは20cmである。第3主体部では、石槨石積みの背面には明らかに裏込めと考えられるような石材は認められない。

出土遺物については、前述のごとく後世の搅乱が著しく、出土していない。

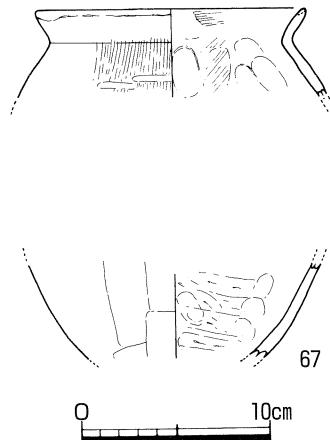
### 巨石抜き取り跡出土土器（第51図）

第51図に図示した土器は2区に所在した巨石の抜き取り跡から出土した弥生土器である。正確な出土状況は不明である。巨石に隣接して遺構が存在していた可能性も考えられる。土器は体部付近が欠落しているものの、図上では、口縁部と底部の形態から全体の形状が復元できる。67は甕である。「く」の字に屈曲する口縁部をもち、体部は大きく張らない。底部は底が存在しないが丸底になるものと考えられる。調整は体部外面タタキのちハケ、内面ユビオサエ、底部外面板ナデ、内面ヘラケズリを施す。弥生後期末の時期のものである。

### （3）古墳時代後期の遺構と遺物

#### 横穴式石室（第52・53図）

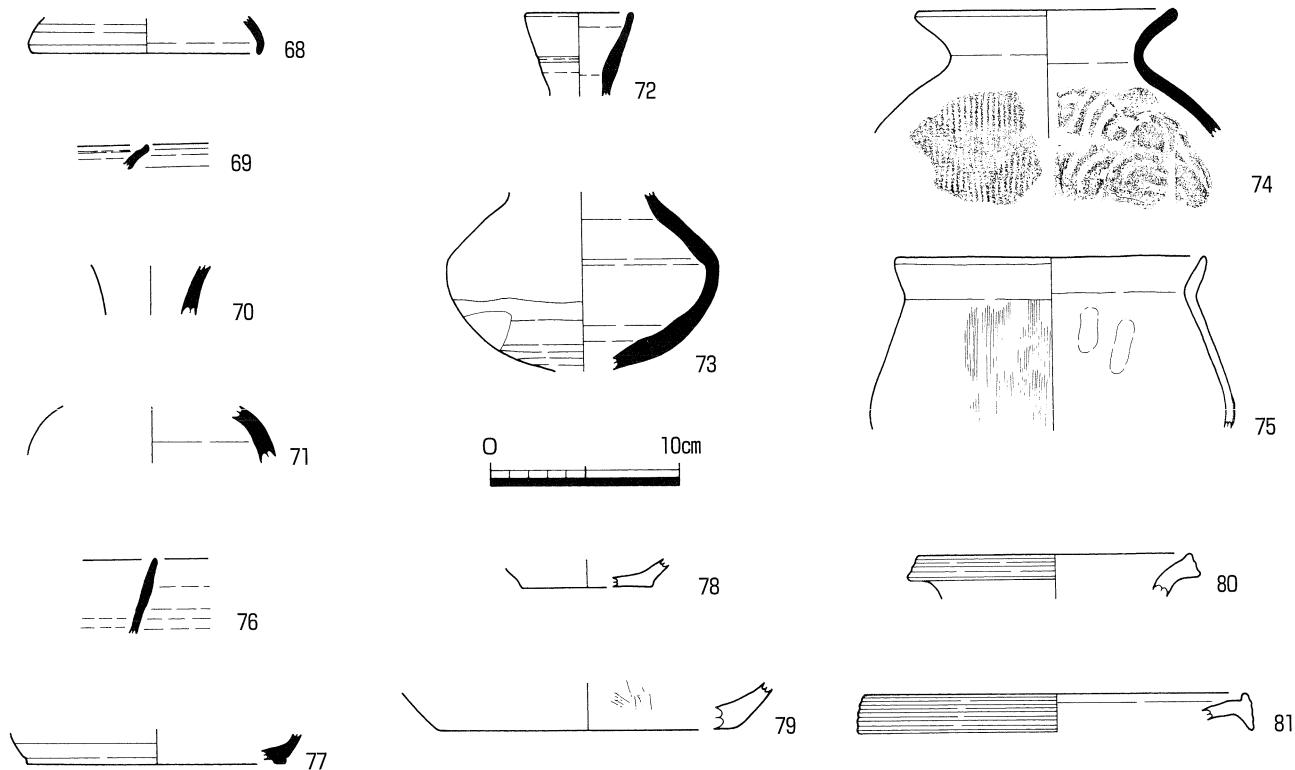
調査区南東部で確認した遺構である。平面は不定形で南北に長く、南側はコンクリートで舗装された参道下に潜っている。南側延長部の状況は未調査のため、不明であるが、南東方向の斜面へ向け延びるよう



第51図 巨石抜き取り跡出土遺物  
実測図（縮尺1/4）



第52図 横穴式石室平面・立面図（縮尺1/40）



第53図 横穴式石室出土遺物実測図（縮尺 1/4）

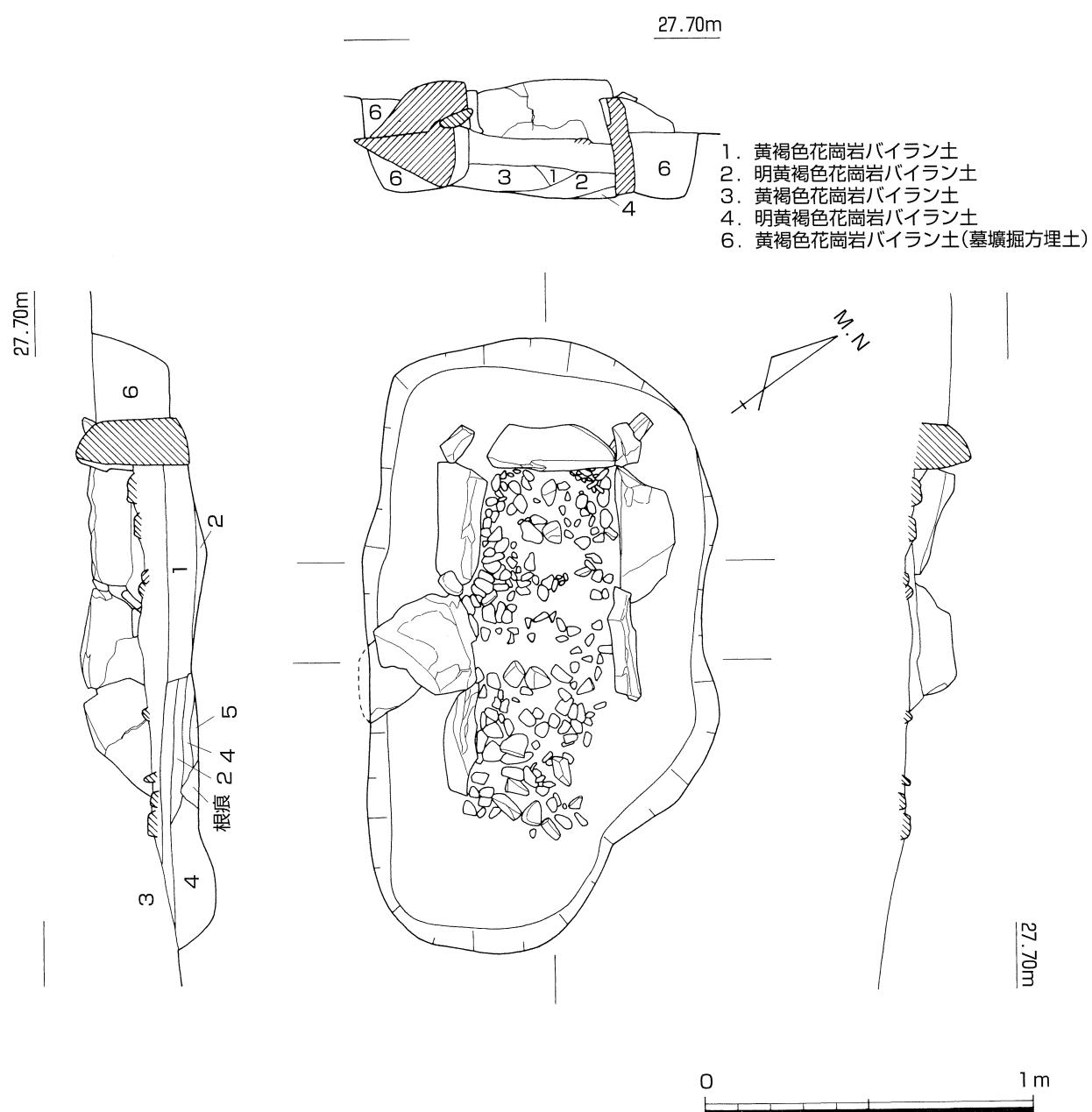
である。遺構は南北5.4m、東西は最も広い部分で4m、深さは60cmに掘り窪められている。遺構の床面は北から南へ緩やかに下るが、中央付近が他の箇所に比べてやや深くなる。東西方向は西側の立ち上がりがきつく、東側の立ち上がりは緩やかである。遺構中央部に20石程の塊石がまとまった状況で認められるが、それらの塊石の検出状況からは、石材を利用して企画的に構築物を造っていた様な状況は認められなかつた。南北方向で作成した土層断面図では、北側から南側への除々に埋没していったことを示す細かな堆積が認められ、その後、西側からも堆積した状況が観察できる。これらの堆積土の上面で塊石が入った（置かれた）状況が認められる。遺物の出土状況については、これらの塊石を挟んで、北側には同じ高さから須恵器甕の破片が、その南側には、土師器甕が破片となって出土している。遺構内の遺物出土状況からは横穴式石室をもつ古墳と考えられるが、石室などの区画された状況を認めることはできない。遺物が認められた南北3m、東西1mの範囲を取り込みながら、「コ」の字形に南向きに開口するような無袖式の簡単な石室構造であれば、調査時に認められた石材数で基礎部ぐらいの構築が可能かもしれない。しかし、小規模であれ横穴式石室であったと考えるならば、調査時に確認した石材では、到底、石室全ての構築は困難である。このような状況から石室構築に必要な大きな石材については他の箇所へ持ち去られた可能性が高いと考えられる。石材と遺物が集中する部分に小規模な横穴式石室を想定するならば、主軸方位はN-27°-W程度で、南の斜面側に開口するものと考えられる。遺構中央部に散乱する塊石については、集石した意図は不明であるが、出土遺物から確認できるこの遺構の最終利用時期である10世紀頃において遺構の中央部に集められた可能性が高い。第53図に図示した出土遺物のうち、78の土師器の杯は最上層である暗褐色土から出土したことが、土層観察用畦畔を除去する段階で層位を確認し、集石の層位とはほぼ対応することからも裏付けができるものと思われる。

遺構内の遺物出土状況は集石を挟んで北側に須恵器壺74が、南側に土師器甕75が破片となって出土した。出土状況からは少なくとも74・75の2点については、副葬当初の元位置を保っているものと考えられる。他の遺物については、堆積土中から出土し、いずれの土器も破片となっており接合するものも少なかったことから、元位置を保っていないと考えられる。

第53図は横穴式石室出土遺物である。68は須恵器杯身の蓋である。天井部はそれほど高くならないもの

と考えられる。69・70は須恵器壺の口縁および頸部である。72は口径が小さく、頸部が狭まる形態から平瓶の口縁部であると考えられる。口縁部外面には沈線が1条巡る。73は体部のみであるが、小形の短頸壺であると考えられる。体部下半には明瞭なヘラケズリが認められる。74は須恵器甕であると考えられるが、口縁部に対して体部の膨らみが弱いことから横瓶の可能性も考えられる。調整は外面タタキ痕、内面は同心円の当て具痕が明瞭に残る。75は土師器の甕である。体部下半に最大径があり、下膨れの形状をもつ。調整は外面ハケメ、内面ナデである。76・77は須恵器の杯である。76は口縁部、77は高台をもつ底部の破片である。78は土師器杯の底部である。底部から体部へはそのまま斜め上方に立ち上がらず、底部から上方に立ち上がり緩く屈曲し斜め上方に立ち上がる体部をもつ。79～81は弥生土器である。79は壺の底部である。80・81は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張し、拡張した口縁部外面に凹線文を80は3条、81は4条巡らせる。

以上の出土遺物からは、大きく3つの時期のものが認められることは明らかである。古い時代から見ていくと1つ目は78～81の弥生時代中期後半のもの、2つ目は68～71の古墳時代後期のもの、3つ目は76～



第54図 小石室平面・立面図（縮尺1/20）

78の古代のものにわかれれるが10世紀頃と考えられる78に比べて76・77は8世紀頃とやや古いものも認められる。1つ目の弥生時代中期の時期の遺物は、丘陵全体に広がる弥生時代の遺構からの混入と考えるのが妥当である。本来の遺構の時期は、出土遺物の多くを占め、各個体の残存状況が比較的良好な古墳時代後期（TK43～209）の時期の古墳と考えられ、その後、古代において再利用されたと想定される。

### 小石室（第54図）

調査区の南東部、横穴式石室の北側で確認した遺構である。調査時は東部から北東部にかけて削平を受けているとの観察状況から、箱式石棺墓と考え調査を実施したが、報告書を作成するために図面・写真等の整理に取り掛かったところ、使用している石材の規模が箱式石棺に使用されている石材に比べ、長さが短く、厚い石材を使用していること、使用している石材の規模に統一がみられないことが判明した。また構築場所についても当埋葬主体部は等高線に直交する形で構築され、斜面側は礫床と考えられる床面が残っているにも拘らず、箱式石棺を証明する対となる小口状の石材は東側には認められなかった。小口部の石材が抜き取られたとするならば、抜き取り穴が検出できるはずであるが、平面的および土層断面による観察でもその状況は認められない。

石室に使用している石材の基底部は墓壙の掘方と同じ深さであり、箱式石棺の構築時に多くみられる側板の高さを揃えるため、基礎部を掘り窪めて高さを調整する作業ではなく、平坦にした地山面から石を構築する方法を探っており、構築時における作業方法に違いが認められる。斜面側へ開く石室の開口方向とも併せて、全てが横穴式石室の構築方法に合致する。このようなことから規模の縮小化が進み、大きな形態変化を経ているが、小規模な横穴式石室と考えるのが妥当であると考えられる。

後述する横穴式石室と規模・出土遺物の差があるものの、立地状況には多くの共通点を見出すことができる。等高線に直交する小規模埋葬主体部の類例については当遺跡の南に存在した久米池南遺跡においても確認されており、このことから当遺構は横穴式石室を系譜にもつ埋葬主体と考え、それに基づいて記述を行うこととする。

墓壙掘方は北東部が削平されているが、長さ1.85m、幅1.05m、深さ35cmの長方形形状を呈する。主軸方位はN-52° 15' - Wである。墓壙掘方の中央部に石室を配置し、石室は5個の石で構成され、奥壁は1石、奥壁に向かって左側（南）は3石を並べ、向かって右側（北）は2石認められる。北東部の削平の状況から北側も南側と同様に3石であった可能性が高い。石室の規模は南側で長さ1m、床面からの高さ20cm、北側は長さ70cm、高さ15cmである。使用している石材の設置状況を詳しく観察すると、左側の石材の内、2石は天端を揃えているが、手前の1石は上部が斜面側へ斜めになっている。右側については、手前の1石は上部が平坦なものを使っているが、奥側の石材は、上部が斜面側に対して斜めになっているものを使用するなど、使用する石材には統一がみられない。このように小石室の基底部は歪な石材を使用し雑なつくりである。この歪な石材の状況を埋めるべき上部2段目の石材については全て残存していないことから、あくまでも想定になるが、遺骸を入れた木棺をこの石室に納めようとする場合、少なくとも30cm程度の高さは必要であると考えられる。このような想定が成り立つのであれば、2石目の存在は確実となる。更にその上の天井石の存在については、試掘調査で確認した時点では存在しておらず不明であるが、2石目以上の石材とともに持ち去られた可能性が高いと考えられる。

遺物については、詳細な確認作業を実施し検出に努めたが、確認できなかった。築造当初から副葬されなかった可能性も考えられる。

### 久米山3号墳（第55・56図）

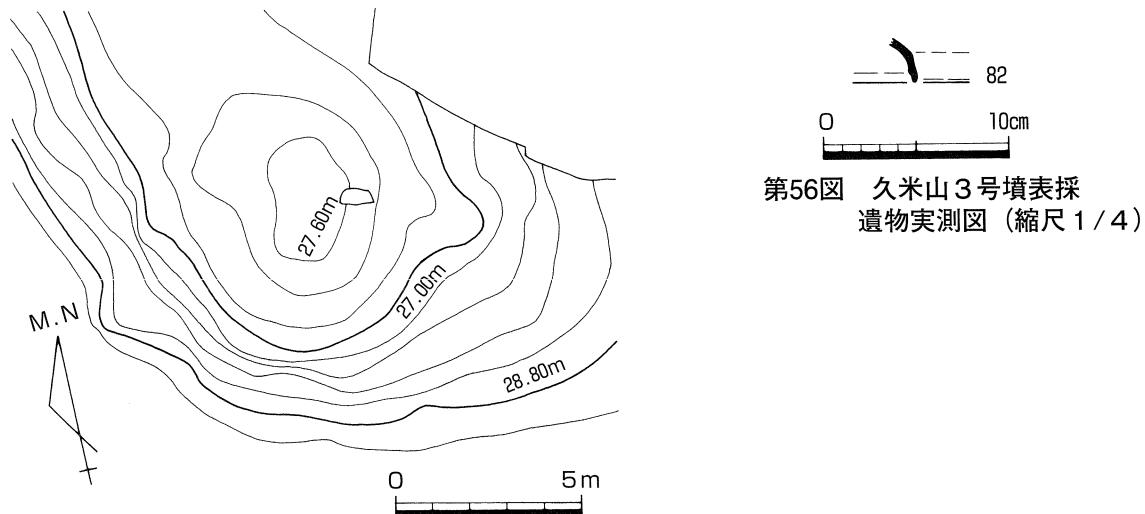
諏訪神社本殿の南側において、従来から確認されていた古墳である。今回の諏訪神社移築工事の範囲からは除外され、現状保存となったことから、発掘調査は実施しなかった。当遺跡を取り巻く周辺部の状況を理解する上で必要であると考えられたため、当遺跡の調査に併せて墳丘測量図を作成した。

墳丘測量図からみた久米山3号墳の規模は、東西9m、南北9mの円形を呈し、北側は諏訪神社古墳が立地する尾根に続いたため低い。これ以外の三方向が斜面となり、墳丘裾を明確にし得ない。正確さに欠け

るが、最も高く想定した場合でも1mは超えないものと考えられる。

墳丘測量中には須恵器杯蓋の細片を採集した。採集品ながら当古墳を考える上で重要と考えられることから、今回の報告に併せて図示した。

第56図の82は久米山3号墳墳丘斜面において採集した杯蓋の破片である。小片のため、口径の復元は困



第55図 久米山3号墳平面図（縮尺1/200）

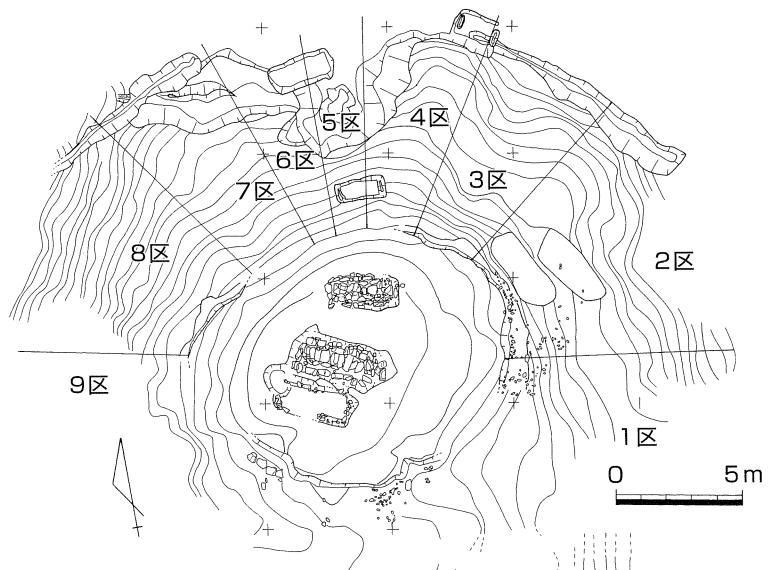
難である。口縁部内面に明確な段を有し、垂直気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁部から天井部への屈曲部分には明確な稜をもつ。出土した土器は細片となっており細かな時期の特定はできないが古墳時代後期（TK43～209）が考えられる。

#### (4) 遺構に伴わない出土遺物

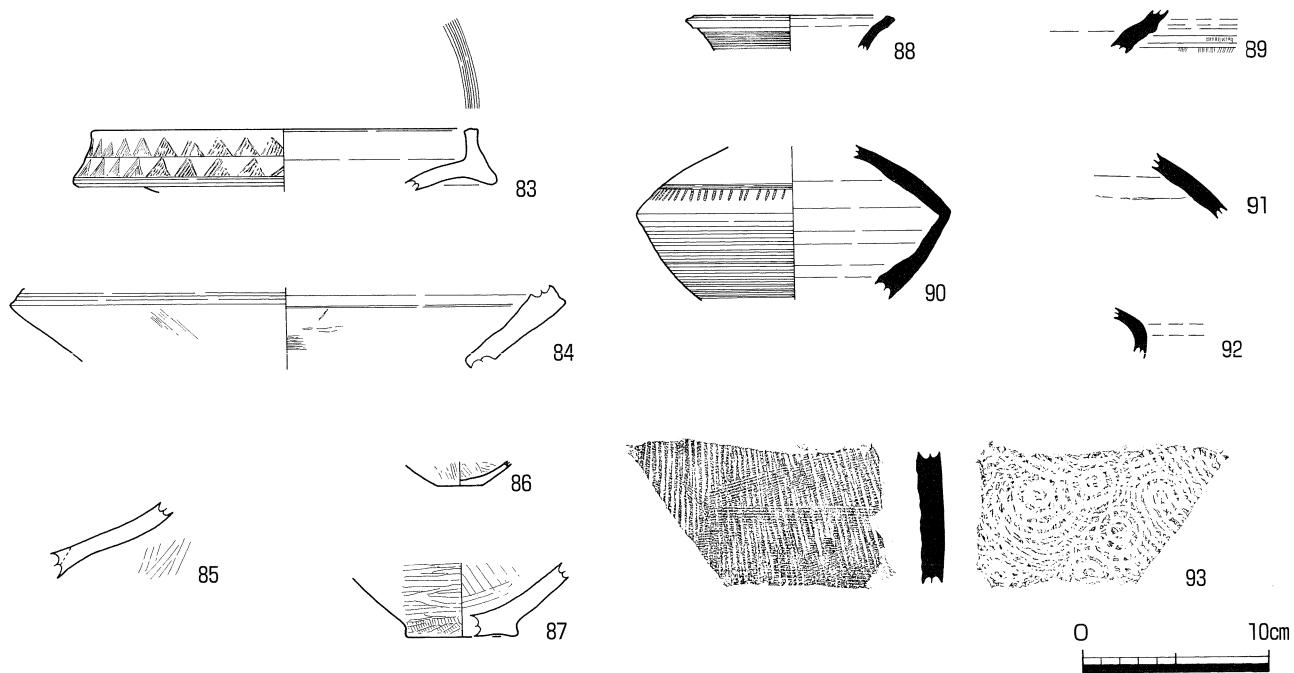
##### a. 調査区北半出土遺物(第57・58図)

第58図に示した遺物は、調査区北半部の遺構検出時に出土したものである。出土した場所をある程度限定するため、第57図に示す地区を設定し、地区ごとに遺物の取り上げを行った。83は5区出土の弥生土器の壺である。複合口縁をもつもので、口縁端部上面には凹線2条を巡らす。口縁部外面には2段にわたり線鋸歯文を描くが、口縁部外面の調整段階でナデにより上下2段に分けられており、それに規制される形で文様されている。84は1・2区出土の

二重口縁壺である。二重口縁の屈曲する接合部で破損している。85は5区出土の高杯の杯部である。外面にヘラミガキが認められる。86は2区出土の甕底部である。底径は小さく丸底に近い様相を示す。調整は外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。87は6区出土の壺底部である。調整は底部近くの外面には、ハケメ、上部は横ヘラミガキ、内面も横ヘラミガキを施す。88は5区出土の須恵器壺の口縁部である。外面にはカキ目が認められる。89は2区出土の小片となっているが須恵器甕の口縁部であると考えられる。外面には凹線文と刻み目が認められる。90は5区出土で、須恵器長頸壺の体部であると考えられる。中央部は算盤玉状に張り、体部外面上半には沈線2条とその下に櫛状工具による列点文を巡らせる。下半部は



第57図 諏訪神社遺跡調査北半部地区割図

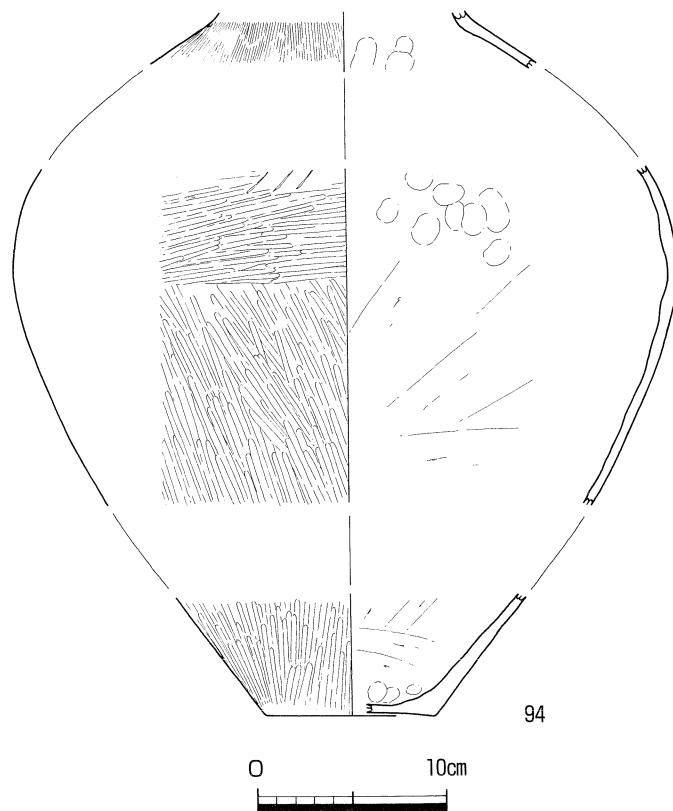


第58図 調査区北半部出土遺物実測図（縮尺1/4）

カキ目が認められる。91は2区出土の須恵器壺の上半部の破片であると考えられる。内面には、粘土紐の接合痕が認められる。92は5区出土の須恵器壺の体部片と考えられ、肩が張る形状が想定される。93は3区出土の須恵器甕体部片である。外面は明瞭なタタキのち、粗いカキ目、内面は同心円の当て具痕が明瞭に残る。

#### b. 調査区南半部出土遺物（第59図）

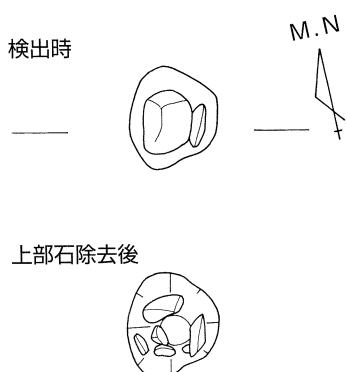
94は調査区南半部の拝殿南側の表土を掘削中に出土した弥生土器の壺である。頸部・体部・底部の大きく3つの部位の破片となって出土したが、頸部以下の状況は図上で復元できた。底部は平底で体部最大径は上半部にあるがやや丸みを帯びる。大きく張った体部から狭い頸部にいたる。体部上半にヘラ状工具による列点文が認められる。調整は外面上半部に細かなハケメ、底部から体部最大径近くまでは縦ヘラミガキ、体部最大径付近のみ上半部のハケメと下半部の縦ヘラミガキを一部消すように横ヘラミガキを施す。内面は



第59図 調査区南半部出土遺物実測図（縮尺1/4）

上半部にナデによる圧痕が残り、下半部は底部底近くにユビオサエと横ヘラケズリ、それより上部は縦ヘラケズリを施す。上記の土器の所属時期は、口縁部を欠損しており、細かな特定はできないが、安定した平底を持つことなどから弥生時代中期後半末から後期初頭と考えられる。

#### (5) 所属時期不明の遺構



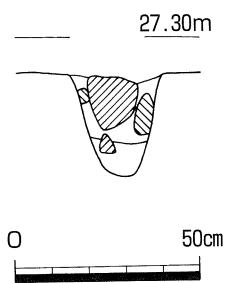
第60図 SPO 1平面・断面図  
(縮尺1/20)

し、久米山丘陵では、この時期の古墳は未確認である。出土状況は不明であるが、当地域を考える上で重要な遺物であると考えられることから、ここに報告するものである。95・96は以上のような経緯で出土した須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりは長く内傾する。95に比べて96の方が口縁部の立ち上がりが長い以外はほぼ同様な形態をすることから同時期の遺物と考えて問題ないであろう。カエリ内側の接合は95が粗く、接合痕が明瞭であり、体部下半1/2程度にケズリが明瞭に残る。いずれの個体も内面見込みに同心円のスタンプ文が認められる。これらのスタンプ文は内面のナデ調整によりナデ消しが行われているが、一部が残存している。これら2点の所属時期であるが古墳時代後期6世紀中頃(TK10併行)と考えられる。

#### SPO 1 (第60図)

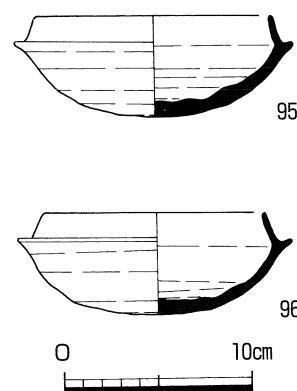
第2次試掘調査第8トレンチで確認したピットである。ピットの規模は南北27cm、東西23cm、深さ27cmである。ピットは下部ほど狭くなる。ピットの上部に長軸17cm、短軸13cmの川原石で蓋をしており、川原石を除去すると壁面に小規模な川原石が認められるが、中央部は中空であり、遺物等は認められなかった。確認したピットの内部構造については、どのような意図のもとに構築され、どのような性格を有するものなのか、また所属する時期についても、以上のような状況から不明である。

#### (6) 出土地不明遺物



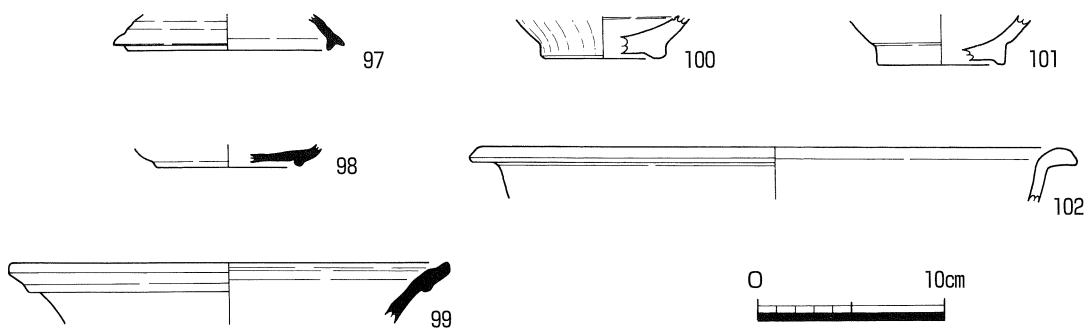
#### a. 諏訪神社遺跡内出土地不明遺物 (第61図)

石清水八幡宮の御好意により諏訪神社参道西側の一角に諏訪神社古墳で確認した第1・2主体部と久米山遺跡群の箱式石棺を移築・復元することとなった。境内を拡張するための土取りを伴う造成工事が終了した後、移築・復元の作業を行うために現地へ赴いたところ、東側斜面の新たに築かれた斜面石垣の上部に須恵器杯身が2点置かれていた。どのような状態で埋蔵されていたものか不明であり、出土位置等は特定できないものの、今回の諏訪神社新築に伴う一連の造成工事によって出土した可能性が極めて高いと考えられる。これらの遺物は周辺部の古墳から出土する遺物に比べ古相を呈



第61図 諏訪神社遺跡出土地不明遺物実測図 (縮尺1/4)

## b. 諏訪神社本殿石積み裏込め内出土遺物（第62図）



第62図 諏訪神社本殿石垣裏込め出土遺物実測図（縮尺1/4）

諏訪神社本殿石積みの裏込め中から出土した遺物である。これらの遺物の出自については特定できないが、いずれの土器も表面が著しく磨耗しており、裏込め用石材として諏訪神社西側を流れる新川から採取された砂利に含まれていた可能性が高いと考えられる。当遺跡を取り巻く環境を考える上で重要であると考え、ここに報告する。97はカエリをもつ須恵器の杯蓋である。カエリは短くにぶい。天井部を欠損するが、器高は高くなるものと想定される。98は須恵器の杯である。高台は低く、体部の立ち上がりは緩く、器高は低いものと考えられる。99は須恵器壺の口縁部である。口縁部外面のやや下がったところに1条の突帯を巡らせる。100は白磁の碗である。カンナケズリ痕が明瞭に残る。101は磨耗が著しいが、器形などから青磁の碗であると考えられる。102は瓦質の鍋である。

（注1） 徳島県立博物館 魚島純一氏の分析による。

## 第2章 まとめ

### 第1節 SD03の機能について

#### (1) はじめに

調査区の北側丘陵頂部からやや下った標高26m付近を中心に確認したSD03については、出土した土器から弥生時代前期後半前葉の時期に機能した遺構であることが判明している。近年の発掘調査例の増加から香川県内における同時期の環濠（壕）をもつ遺跡が増加しているが、それら同時期の環濠（壕）とSD03とは、溝のもつ機能が異なると考えられるので、それらの遺跡と比較検討を行い、その違いを明確にするとともに、弥生時代前期後半前葉の時期における諏訪神社遺跡についての性格を考えることとした。

#### (2) SD03の特徴

SD03については前章で遺構の詳細を報告した。多少、重複する部分もあるが遺構の整理をすると以下のような特徴を見出すことができる。

- ① 丘陵頂部より北へやや下った部分に、平面形が弧状を呈し、背部である南側の頂部を意識した配置の溝である。ただし、後世の土砂流出により尾根稜線付近が約10m断絶する。
- ② 溝の断面形状については、東西でやや異なるが、西側は概ねV字形を呈し、東側は西側ほど急ではないがV字形に近い形状をもつ。
- ③ 溝の位置関係から密接な関係が想定される南側の丘陵頂部には、同時期の遺構・遺物は認められない。また、頂部に存在する後世の遺構の中にも遺物の混入は全く認められない。
- ④ 溝から出土する土器は、廃絶前後の時期に廃棄されたと考えられ、溝底付近から出土するが、第17図に示したとおり極めて僅少である。

#### (3) 香川県内における環濠をもつ遺跡例

(1) (2)において諏訪神社遺跡で確認したSD03について簡単にまとめた。次に香川県内で確認された弥生時代前期を中心とする環濠（壕）をもつ遺跡と比較検討を行うこととする。諏訪神社遺跡と比較検討を行う上で重要な丘陵上における同時期の遺跡は未確認であるが、沖積地では弥生時代前期を中心とする時期に溝で囲まれた環濠（壕）遺跡が7例確認されている（第2表）。これらの環濠をもつ遺跡では、

遺跡名	長軸（m）	短軸（m）	時期	備考
五条遺跡	(70)	(70)	前期Ⅱb～中期Ⅰ期	詳細不明
龍川五条遺跡	85	65	前期Ⅰc～Ⅱb期	前期Ⅱb以降居住域衰退
中の池遺跡	85	70	前期Ⅰc～中期Ⅰ期	前期Ⅱb期に長軸・短軸とともに規模を10m程拡大
鬼無藤井遺跡	80	60	前期Ⅱa期	
汲仏遺跡	95	75	前期Ⅰc～Ⅱa期	
天満・宮西遺跡	80	65	前期Ⅰc～Ⅱa期	
鴨部・川田遺跡	85	65	前期Ⅰc～中期Ⅰ期	前期Ⅱb期に環濠再掘削

第2表 香川県内における環濠遺跡一覧表（信里2003から一部改変）

環濠内から住居・廃棄土坑などが確認されることから、環濠内が居住空間であったことが判明している。一方、遺跡の消長を比較すると、中の池遺跡、鴨部・川田遺跡では一定期間継続するものの、高松平野に所在する鬼無藤井遺跡、天満・宮西遺跡、汲仏遺跡などでは短期間で遺跡は消滅するなど、高松平野とそれ以外の地域では環濠をもつ遺跡の消長に違いが認められる（信里2003、川部2006）。これらの遺跡の環濠については、その断面形状・土層堆積などから水を湛えた環濠であることを指摘している（藏本1999）。

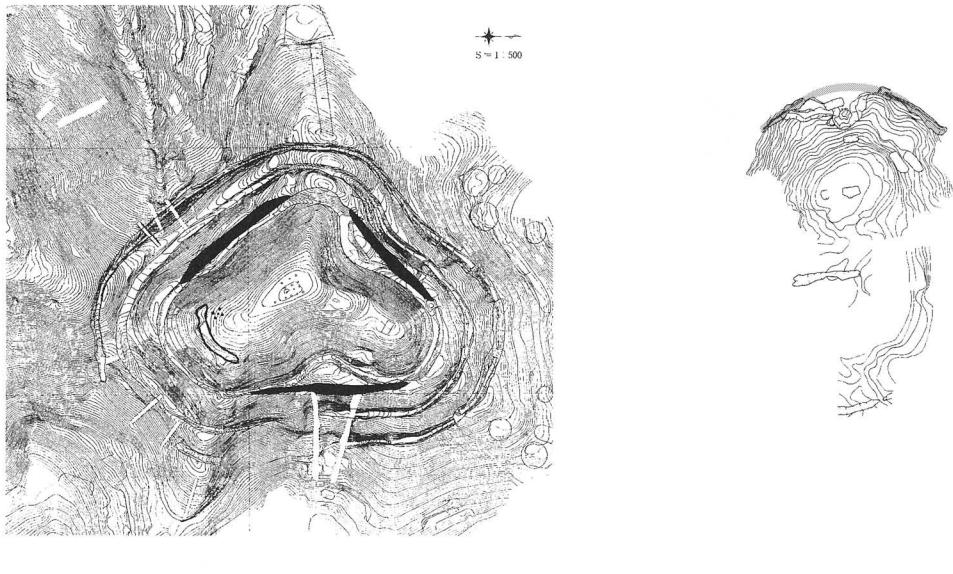
## (4) 香川県内における環濠をもつ遺跡と諏訪神社遺跡との相違

(3) で示した香川県内において確認された環濠をもつ遺跡の特徴として、環濠の規模が概ね長軸80m、短軸70m前後と似通った点があげられ、環濠内には同時期の遺構の確認から居住空間が広がり、沖積地に立地していることから、近くの旧河道などから水を引き入れ水を湛えていたと考えられている。一方、諏訪神社遺跡は、丘陵の北側以外は調査対象とならなかったことから、検討を加える上で多くの制約があるが、今回調査対象とならなかった部分に環濠が存在するとするならば、丘陵の規模から長軸が50m程度、短軸は35m程度であると考えられる。立地する丘陵の規模に制約される面が大きいと考えられるが、他の環濠をもつ遺跡に比べて3割程度規模が小さい。

諏訪神社遺跡において、弥生時代前期の遺構は環濠と考えられるSD03のみである。丘陵上にはSD03以降の時期の遺構が穿たれ、新しい遺構に古い時期の遺物が混在して出土しているが、SD03と同時期の弥生時代前期後半の土器は混在していない。このことからSD03が機能している時期の丘陵頂部には、居住域など生活の場は造られなかつたものと考えてよさそうである。では、弥生時代前期後半段階の諏訪神社遺跡にどのような状況を考えたらよいのであろうか。

## (5) 環濠をもつ特異な遺跡の類例

他地域の環濠をもつ遺跡は、遺跡の消長・規模等に違いが認められるものの、香川県内で確認された環濠をもつ遺跡と同様に環濠内には居住域が存在していたものと考えられる。瀬戸内周辺部に諏訪神社遺跡と同様な丘陵部に環濠をもつ遺跡は認められないが、島根県松江市の田和山遺跡を類例としてあげることができる（松江市2001）。



田和山遺跡（弥生時代前期末） 諏訪神社遺跡（弥生時代前期後半）

第63図 SD03と同様な性格を有する環濠をもつ遺跡例

田和山遺跡は、松江市の最南部にある忌部地区から北西方向に広がる宍道湖へ流下する忌部川の中流域に展開する乃木平野にある。その平野東部に独立する田和山と呼ばれる丘陵部の北半部に所在し、宍道湖を北西方向に望む標高46mの小高い丘を中心に山麓斜面まで展開する遺跡である。田和山遺跡では弥生時代前期末から中期後半にかけて3重の環濠が造られているが、諏訪神社遺跡との類似点を見出せるのは、最も内側に掘られた第1環濠とその内側に存在する丘陵である。

田和山遺跡第1環濠は、造られた当時、環濠が一周するのではなく、東・北・西の谷部しか造られなかつた（第63図左黒塗部分）。報告書によると「下り尾根部には無く、そこから山頂部へは上がれないことはない。当初は聖地と俗界を区別する意味はあったのかもしれない」と記されている。環濠で囲まれた山頂

部の性格について、集落を守るためのものではなく、どうやら山頂部そのものを守るためのもので、小さな倉と物見やぐら、性格不明の無数の柱穴・塀・柵があり、農耕にまつわるお祭を執り行っていたのか、あるいは当時の弥生人が最も大事にしていたものが倉に保管してあったのか等の意見が述べられ、非日常的な空間が存在し、希少性の高い遺跡であるとの評価を与えていた。

#### (6) 諏訪神社遺跡 S D 0 3 の評価

諏訪神社遺跡も田和山遺跡も環濠の内側に居住空間が認められず、非日常空間が広がるという点では似通った性格を有する遺跡として考えてよさそうである。環濠で囲まれた丘陵内部の形状は、諏訪神社遺跡が南北に長い楕円形を呈するが、これは立地する丘陵の地形に左右されたものと考えられ、両遺跡は比較的良く似た状況を示す。

また、諏訪神社遺跡では、田和山遺跡のようにその次の時期まで継続して使用された形跡が認められなかった理由については、周辺部における弥生時代前期遺跡の存在が報告されておらず推測ではあるが、環濠で囲まれた内側の空間を管理する集落が短期間で廃絶したためではないかと考えられる。

現状では、田和山遺跡を類例として挙げるのみであることから、S D 0 3については、その内側の丘陵頂部に特異な空間が存在しており、その空間を区切る溝としての性格を有していた可能性を指摘するにとどめ、今後の類例の増加を待ちたい。

### 第2節 諏訪神社遺跡における弥生時代の集団墓（木棺墓）群について

#### (1) はじめに

諏訪神社遺跡では、少数ながら出土遺物から弥生時代中期後半と考えられる木棺墓を3基確認した。個々の木棺墓の詳細については、前章で述べたとおりである。ここでは、確認した木棺墓について整理を行い、当遺跡で確認した木棺墓の特徴を提示するとともに、周辺部で確認されている集団墓と比較を行うことで、当遺跡の木棺墓の特徴を究明することとした。

#### (2) 諏訪神社遺跡における木棺墓について

##### 規模

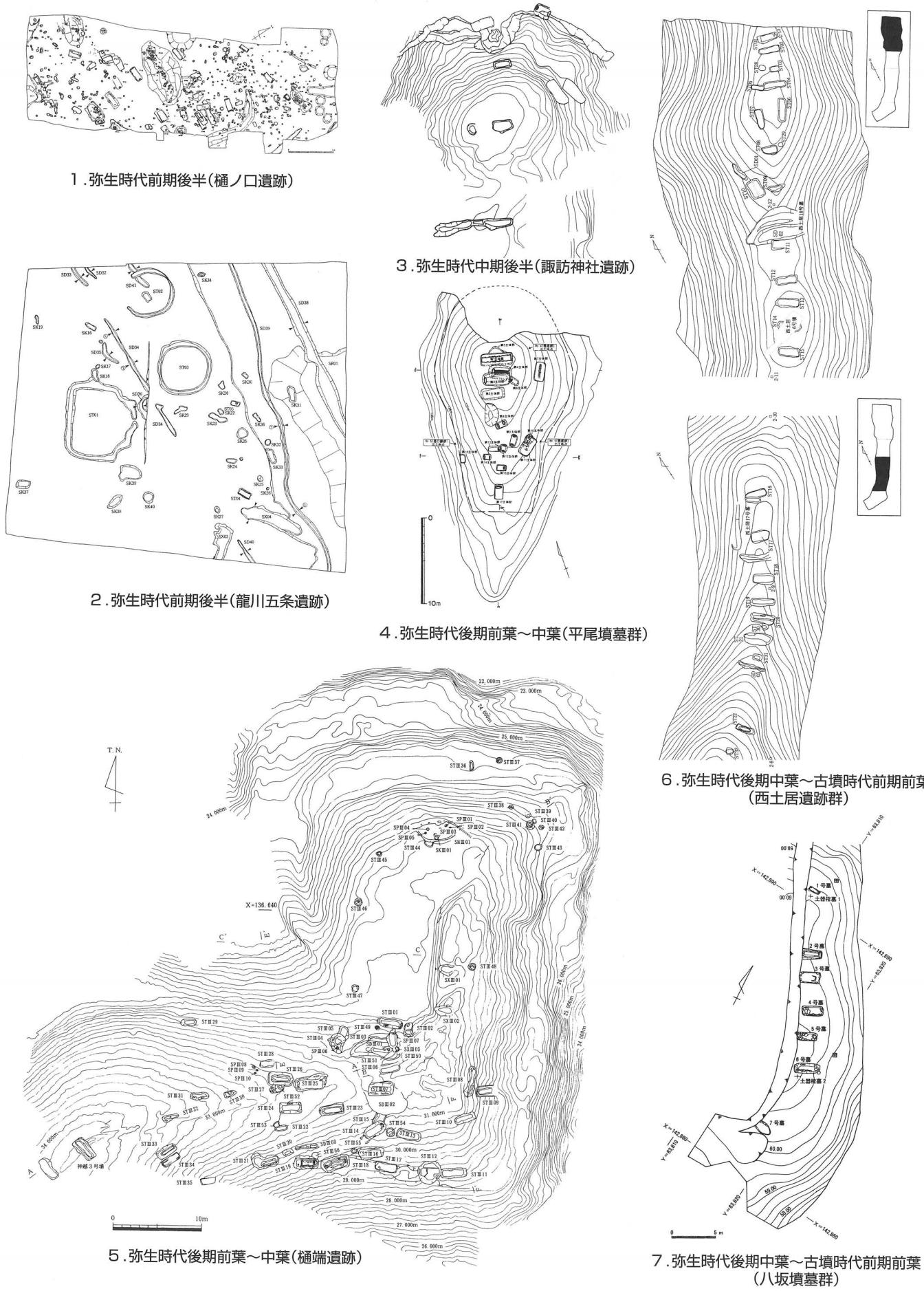
遺構名	木棺墓の墓壙規模			推定される木棺の規模（内法）	
	長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	長さ（m）	幅（cm）
木棺墓1	2.05	90	43	1.60	50
木棺墓2	1.90（2.10）	1.48（1.10）	30	1.30	55
木棺墓3	2.35	1.35	25	1.60	60

第3表 諏訪神社遺跡木棺墓規模一覧表（）内は復元値

上記に示したのが諏訪神社遺跡で確認した木棺墓の規模および復元値である。木棺墓の墓壙の規模については、斜面側に立地する木棺墓1・木棺墓2がほぼ同じであり、丘陵頂部に立地する木棺墓3が長さ、幅ともに一回り大きい。小口板の確認から推定される木棺の規模については、木棺墓2が小さく、木棺墓1・3には差がない。出土遺物からは、各木棺墓に差は認められない。

##### 立地および選地

立地については標高の高い方から木棺墓3→木棺墓1→木棺墓2と下っており、各木棺墓の位置関係については、一見まとまりをもたないようにみられるが、直線距離で木棺墓3と木棺墓1が7m、木棺墓1と木棺墓2が8mと一定の間隔をもって造られている。丘陵頂部の木棺墓3については等高線の影響を受けていないが、他の木棺墓については、等高線に主軸方向を合わせる形で造られている点が久米山南遺跡で確認されている土壙墓等と同じ特徴であることは、本書第Ⅲ部第2章第2節において指摘のとおりである。なお、当遺跡例以外は、細かな時期を特定することができないが、久米山丘陵全域で同様の傾向が認められることは、遺構の時期を考える上で重要である。



第64図 香川県内群集墓確認遺跡

### (3) 香川県内における集団墓について

諏訪神社遺跡で確認した木棺墓は出土遺物から弥生時代中期後半の時期が考えられる。諏訪神社遺跡で確認された木棺墓が、香川県内における同様な墓制の中でどのような位置に属するのか考えてみたい。

香川県内における集団墓についての考察は、大久保徹也氏によって、その変化が提示されている（大久保2006a・2006b）。それによれば、讃岐地域における弥生墓（後期）の展開は、立地・墓域構成により①丘陵型墳丘墓、②丘陵型群集墓、③平地型周溝墓の3類型が存在するという。

このうち、諏訪神社遺跡木棺墓と関係してくるのは②の丘陵型群集墓であろう。②については比較的相互の較差が乏しい埋葬群であり、基本的には2～数基程度の単位が墓域構成の基礎で、それらが連鎖して一つの墓域を構成する。中期中・後葉の様相は詳らかではないがそれ以前では居住域に隣接して墓域を設定していたものが、後期段階では丘陵上面に移動して、居住および主要生産域とは垂直に分離し、群集タイプ（樋端遺跡・平尾墳墓群など）、整列タイプ（西土居遺跡・八坂墳墓群・極楽寺墳墓群など）、分離タイプ（平尾墳墓群）の3タイプが存在するようであり、群集タイプが古く後期前葉～中葉に認められ、次に整列タイプが後期中葉後半に出現し、少なくとも古墳時代前期初頭まで継続する。最後に分離タイプが古墳時代前期初頭以降に出現するという傾向が見出せるという。観音寺市樋ノ口遺跡ほど密集した状況を示さないが、善通寺市龍川五条遺跡でも弥生時代前期の周溝墓に近接して木棺墓が数基確認されている。図示していないが弥生時代中期段階では綾川町北内遺跡で木棺墓・土壙墓各1基が離れた箇所から確認されている。これまで実態が不明であった中期後半段階の状況を埋める資料として確認した遺構は、数は少ないものの諏訪神社遺跡の木棺墓をあげることができる。

### (4) 香川県内で確認された弥生墓の中での諏訪神社遺跡木棺墓群の位置づけ

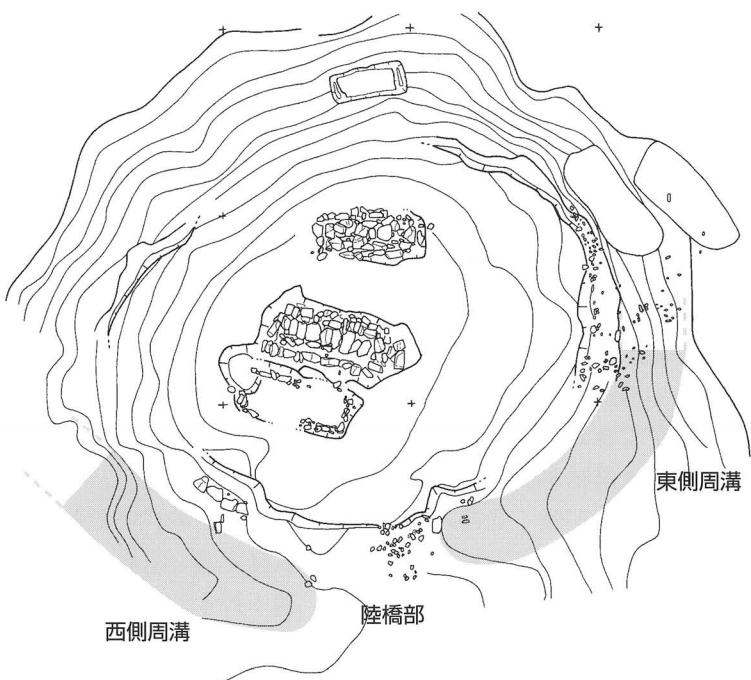
諏訪神社遺跡で確認した木棺墓群は、これまで類例が無く変遷の空白期であった弥生時代中期後半の時期を埋める資料として評価できる。確認した木棺墓は3基であるが、高さはそれほど無いものの、丘陵部に立地すること、墓域との大きな境と考えられるSD02は存在するものの、個々の木棺墓周辺に周囲と区切るものが見られず、弥生時代前期から存在する群集墓と同様に伝統的な墓域構成をとるようである。立地については、平野の遺跡の墓域が分離されて諏訪神社遺跡の所在する丘陵部に上がったものなのか（丘陵型群集墓の中の後期前葉から出現する群集タイプの先行的なものなのか）、近接した丘陵に同時期の集落があり、その集落に近接して造られたのが諏訪神社遺跡の木棺墓群であるのか、久米山丘陵の遺跡の分析が十分できていない現段階では十分な見解は出せない。更なる検討を行うためには、久米山丘陵の遺跡の詳細な分析を行うとともに類例の増加を待ちたい。

### 第3節 諏訪神社古墳について

#### (1) はじめに

諏訪神社古墳の調査成果によって、古墳出現期における小規模古墳の状況を明らかにすることができた。ここでは諏訪神社古墳の調査成果を整理するとともに、県内で確認されている同時期の古墳との相違点を考えてみることとした。

#### (2) 諏訪神社古墳の特徴



第65図 諏訪神社古墳周溝想定図（縮尺1／200）

部については崩れていたものの葺石に使用されていた石材が散乱していた。また北側斜面でも崩落した葺石と考えられる石材を確認した。

#### [埋葬主体について]

堅穴式石槨を3基の埋葬主体部を確認した。構築時期は古い方から第2堅穴式石槨→第1堅穴式石槨→第3堅穴式石槨の順で構築されたと考えられ、各主体部は等間隔で造られているのではなく第1堅穴式石槨と第3堅穴式石槧は隣接して造られており、第3堅穴式石槧を構築する際、第1堅穴式石槧の墓壙の一部を壊して造られている。埋葬主体部のうち、第1堅穴式石槧と第2堅穴式石槧は主体部構造がある程度判明した。

#### [共献遺物]

埋葬主体部では第1堅穴式石槧から管玉1点、第2堅穴式石槧から土器枕1点が出土している。

墳丘における共献遺物については不明であるが、第2次試掘調査で出土した1・2の高杯や調査区北半部で出土した83の鋸歯文を施した複合口縁の壺などが古墳に伴っていた可能性が考えられる。

#### (3) 各主体部の構造

主体部のうち、残りの悪い第3堅穴式石槧を除く2つの主体部について、ある程度、構築状況が復元できそうであるので、模式図をもとに説明を加える。

##### ①第1堅穴式石槧

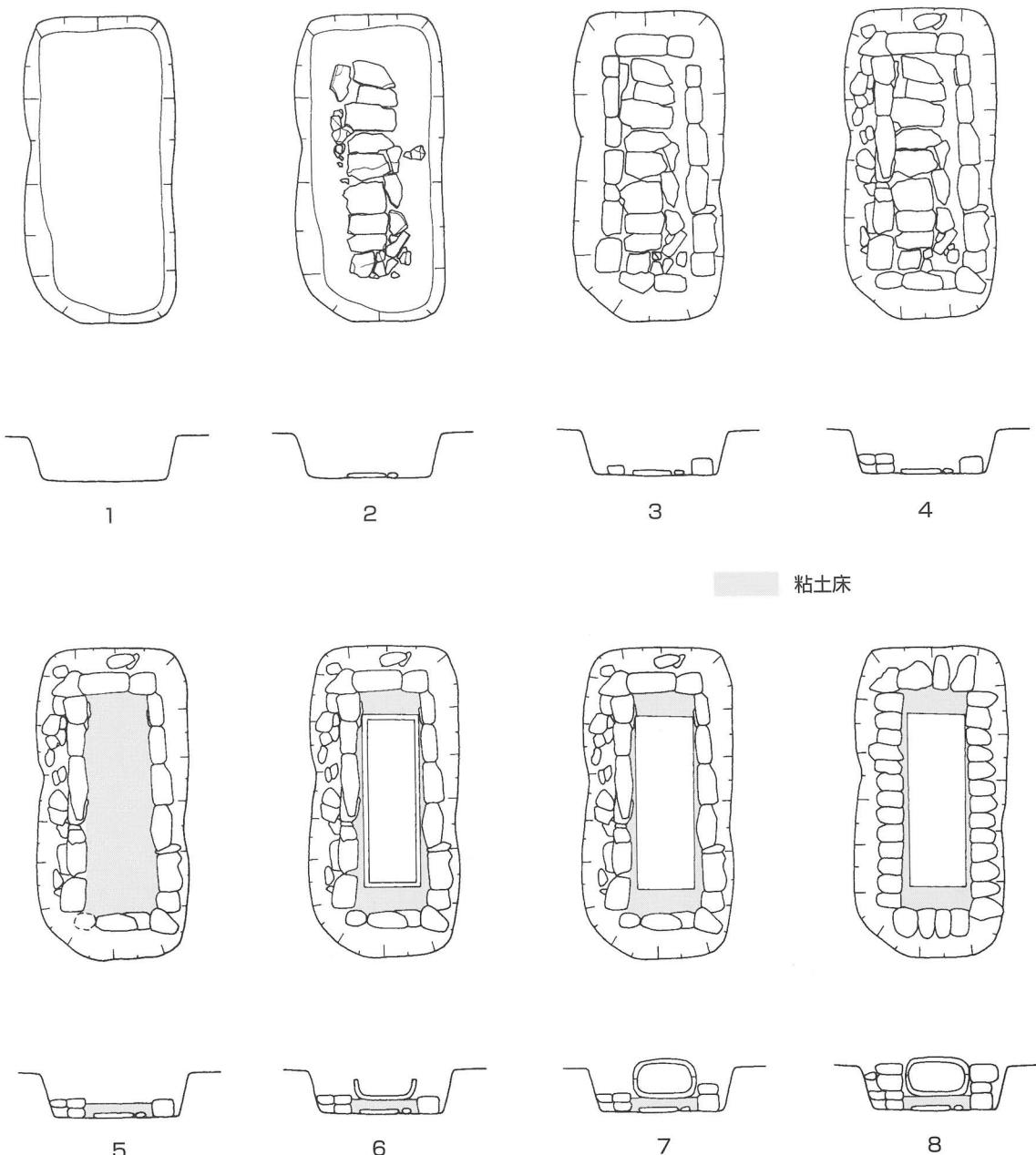
- 1 墓壙を掘削する。
- 2 墓壙中央部長軸方向に床面の板石を配置する。床面板石列の中央部を境に板石列に接して東半は

#### [墳丘規模]

南北10.5m、東西12.5mの規模をもつ楕円形墳である。古墳が立地する丘陵最高所の平坦部分を最大限利用して構築されている。墳丘の高さは1.1mと低丘である。墳丘南部には陸橋状に繋がる部分が存在し、その両側には周溝が掘削されている。この周溝は、丘陵と尾根続きである上に、低丘である古墳が明確となるよう工夫された結果であると考えられる。

#### [外部施設]

墳丘の東部・北西部・南部に墳丘を構築するためのL字加工された段が存在する。現状ではこの3箇所のみであるが、築造当初はこの加工段が全周していたものと考えられる。この加工段は葺石を安定的に設置するためのもので、北西部の段には全く存在していなかったが、東部・南部



第66図 第1竪穴式石櫛築造工程模式図

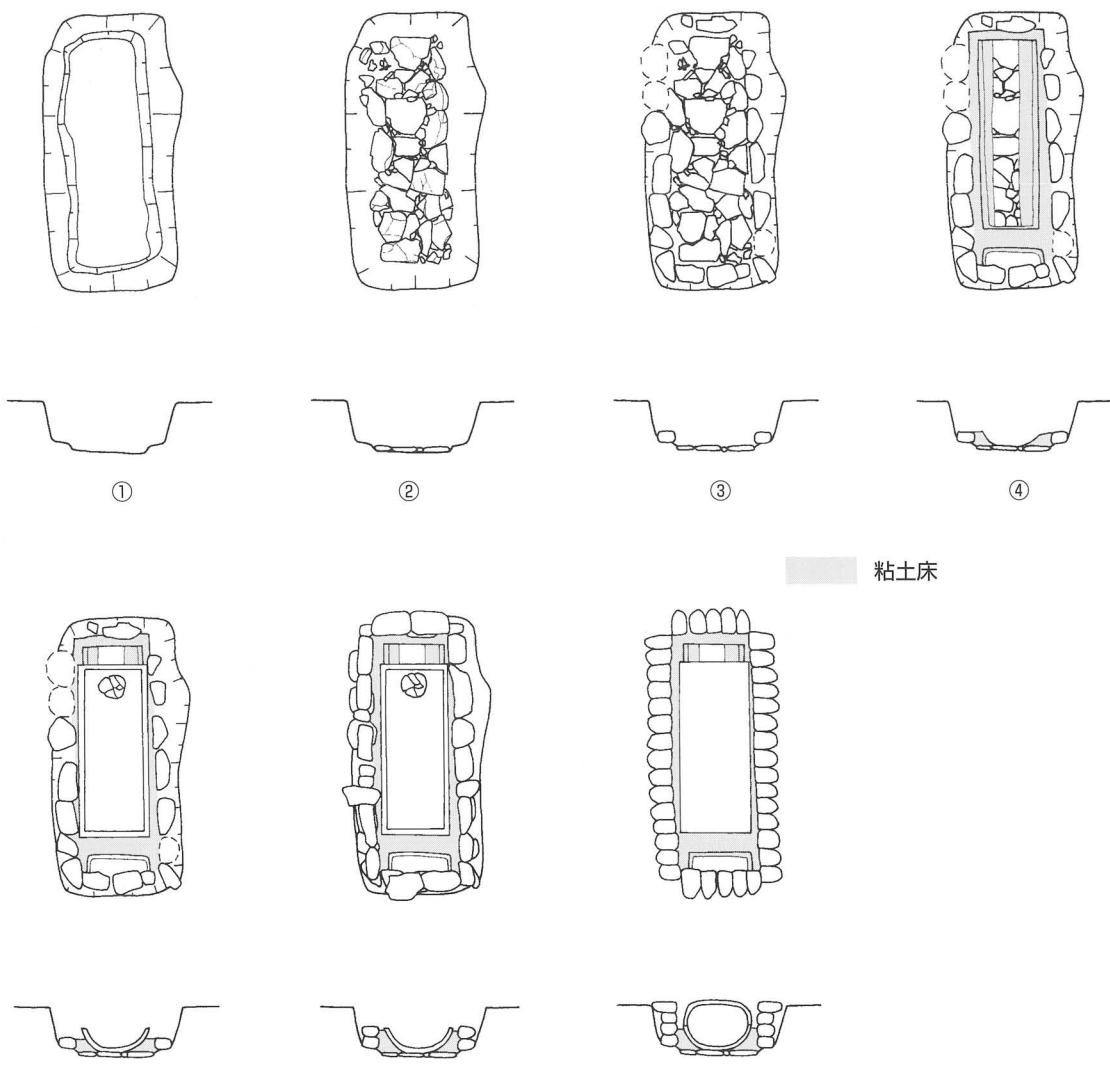
北側、西半は南側に小規模な板石を配置する。これは床面を構築するのに必要なサイズを確保できなかったことによるものと考えられる。

- 3 床面の板石を囲むように石櫛の基底石を長手に配置する。
- 4 石櫛基底石のうち、高さの無いものを配置した部分には、それ以外の部分と高さが合うよう、不足する高さの石材を長手に積む。
- 5 木棺を安定させるため、床面板石上面に粘土を敷設する。図化は行っていないが、第1竪穴式石櫛の床面粘土の間には赤色顔料の薄い層を確認しており、粘土の敷設は1回ではなく、少なくとも、間に赤色顔料を散布しその上面に粘土をもう一度敷いたものと考えられる。
- 6 粘土床が平坦であることから、断面がU字形の割り抜き材は想定できず、底部が平らな割り抜き材を安置したものと考えられる。
- 7 割り抜き材で蓋を閉じる。
- 8 割り抜き材が納まる程度に石櫛石積みを構築する。第1竪穴式石櫛の規模から場所によって異なる

るが、3～4段程度は積まれたものと考えられ、最上段は長手積みではなく、小口積みを行ったものと考えられる。

これより上部については、想定できる材料に乏しいが、竪穴式石槨内部に蓋石のような大きな石材は認められなかったことから、石槨の上部は木蓋もしくは直接土を載せたものと考えられる。

## ②第2竪穴式石槨



第67図 第2竪穴式石槨築造工程模式図

- 1 墓壙を掘削する。床面中央長軸方向に床面板石を設置するため、一段深く掘り窪める。
- 2 掘り窪めた床面に板石を配置する。板石の規模・形状に統一はみられず、板石間の隙間は小規模な板石で埋める。
- 3 床面板石を囲むように石槨基底石を長手に配置する。
- 4 石槨基底石に接して粘土を配置する。粘土は石槨基底石に接する部分が多く、中央に向かうに従い薄くなり、長軸中央部付近は殆ど認められない。
- 5 粘土床に併せて割り抜き材を使用した木棺を安置する。木棺内に赤色顔料を塗った土器枕を設置し、遺体を安置する。
- 6 石槨の石材を積上げる。このとき基底部の石材の上部にも粘土を使用し2石目を積上げる。これより上部については、残りが悪く推定となるが、2石目については、長手方向に置くものと小口

方向に置く石材が存在し、統一がみられないようである。

- 7 蓋を設置し、木棺が埋まる程度の石材を小口積みに積上げる。

石槨上部の蓋の存在については、第1堅穴式石槨と同様に木蓋か直接土を載せたものと考えられる。

#### (3) 諏訪神社古墳の所属時期

諏訪神社古墳の所属時期を決定する材料は第2堅穴式石槨で土器枕として使用されていた壺体部片のみである。土器の所属時期を決定するのに有効な口縁部が存在しないことから、細かな時期の特定は困難であるが、体部が球形化を指向していること、内面調整のヘラケズリが体部最大径付近まで上がってきていることから下川津IV～Vの時期であると考えられ、古墳時代前期初頭の時期が想定できる。最も古く構築された第2堅穴式石槨から、最後に構築されたと考えられる第3堅穴式石槨までには、時間の経過が存在すると考えられるが、これを特定する遺物が認められることからその期間は不明である。時期を特定する根拠に乏しいが、古墳時代前期の早い段階において第3堅穴式石槨も構築されたものと考えられる。

#### (4) 香川県内における小規模古墳の類例と諏訪神社古墳の位置づけ

諏訪神社古墳と同様な小規模古墳の調査例として、埋葬主体部がそれほど長大ではなく床面に板石を使用するものに、丘陵型墳丘墓である奥10号墓1号石槨がある。平面形で見ると平地型周溝墓で、周溝が閉じない森広遺跡S T401や尾崎西遺跡S T24なども類例としてあげられる。それらの墳丘墓や周溝墓はいずれも弥生時代後期後半から終末の時期が与えられている。しかし、諏訪神社古墳は、小規模な埋葬主体を3基有しているが、各主体部の構築には粘土を多用し丁寧な造りの石槨構造をもっており、弥生時代の墳丘墓の系譜の延長の中で位置づけることができ、弥生時代の墓制を色濃く残した古墳であるといえる。

### 第4節 諏訪神社遺跡における遺構の変遷について

諏訪神社遺跡の発掘調査では、久米山から北西方向に伸びる尾根末端の頂部全域を調査したことになる。調査によって時期の異なる多くの遺構を確認し、各時代における丘陵頂部の利用方法の一端を確認することができた。今回の調査によって確認した個々の遺構については前章で述べたとおりであり、確認した遺構のうち、当遺跡を考える上で重要なものについては、本章第1～3節で検討を行った。ここでは、諏訪神社遺跡で確認した各時期に所属すると考えられる遺構の変遷を辿り、まとめたい。

#### 第1期（弥生時代前期後半前葉）

諏訪神社で確認できた最も古い時期の遺構である。調査区北側の緩い尾根の中央部分が10m断絶し、東西に分かれる。ともに平面形が弧状を呈する溝SD03がこの時期の遺構に該当する。確認した箇所によって溝の断面形状がやや異なるが、概ねV字形を呈する。尾根中央付近が現存しないのは、中央部付近の標高が高く、雨水等による土砂の流出が顕著であったものと考えられる。この考えを補強するものとして、SD03の東半部の西端においてSD03と重複して確認した木棺墓2は、その残存状況が悪く、墓壙の深さが10cm程度と他の木棺墓の深さに比べて1/2～1/3程度しか残っていなかったことからも裏付けられよう。弧状を呈する東西両側延長部の可能性については、西側は急傾斜のため土砂の流出が激しく、今回の発掘調査においても西端部分の確認状況は規模を減じて消滅している。このことから本来存在したもののが、土砂の流出によって失われた可能性も考えられるが、東側延長部については、丘陵の傾斜からして延伸に十分なスペースがあるにもかかわらず、底が上がり平面形が丸く終ることから、元来、北側の尾根を意識して掘削された可能性が高い。東側の調査状況を重視するならば、西側についても、今回の調査で確認した範囲からそれほど南西へは伸びていなかったと考えられる。本章第1節において検討を加えたが、北側斜面を意識して掘削されたSD03の背面にある丘陵頂部には、同時期の遺構も遺物も一切認められなかった。遺構・遺物が認められない空間の判断については、遺跡から出土した遺構や遺物を通して判断する考古学の手法では限界がある。このため、丘陵頂部の性格については不明であるが、あえて丘陵頂部の性格を考えるならば、形として残らないものを利用した祭祀的な空間であった可能性が考えられる。それも長期間利用されるのではなく、短期間であった可能性が高い。

1期(弥生時代前期後半)



2期(弥生時代中期前半)



3期(弥生時代中期後半)



4期前半(弥生時代後期後半)



第68図 諏訪神社遺跡遺構変遷図①

### 第2期（弥生時代中期前半）

この時期の遺構は、出土遺物からSD01が該当する。久米山から緩やかに下る尾根が北西方向に向かって伸びるが、諏訪神社への参道に近い標高22.9m付近の尾根が最も狭く、痩せ尾根を呈し鞍部となる。この鞍部から再び諏訪神社が存在する尾根頂部へ向かって標高をあげるが、この溝は丘陵頂部の手前において確認した。平面では直線状を呈していることから、何らかの区画溝と考えられるが、溝の両延長部分とも調査対象とならなかったことから、どのような平面形であったものか不明である。SD01で区切られた北側の空間には同時期の何らかの遺構が存在していた可能性が考えられるが、SD03と同様に丘陵頂部からは、SD01に平行する弥生時代中期前半の時期の遺物は認められない。SD01からの出土遺物も時期を推定できる最小限の遺物しか出土していないことから、この時期の丘陵頂部の使用についても短期間の使用が考えられ、SD03と同様にSD01で区切られた北側に何らかの祭祀を行うような空間が存在していた可能性が考えられる。

### 第3期（弥生時代中期後半）

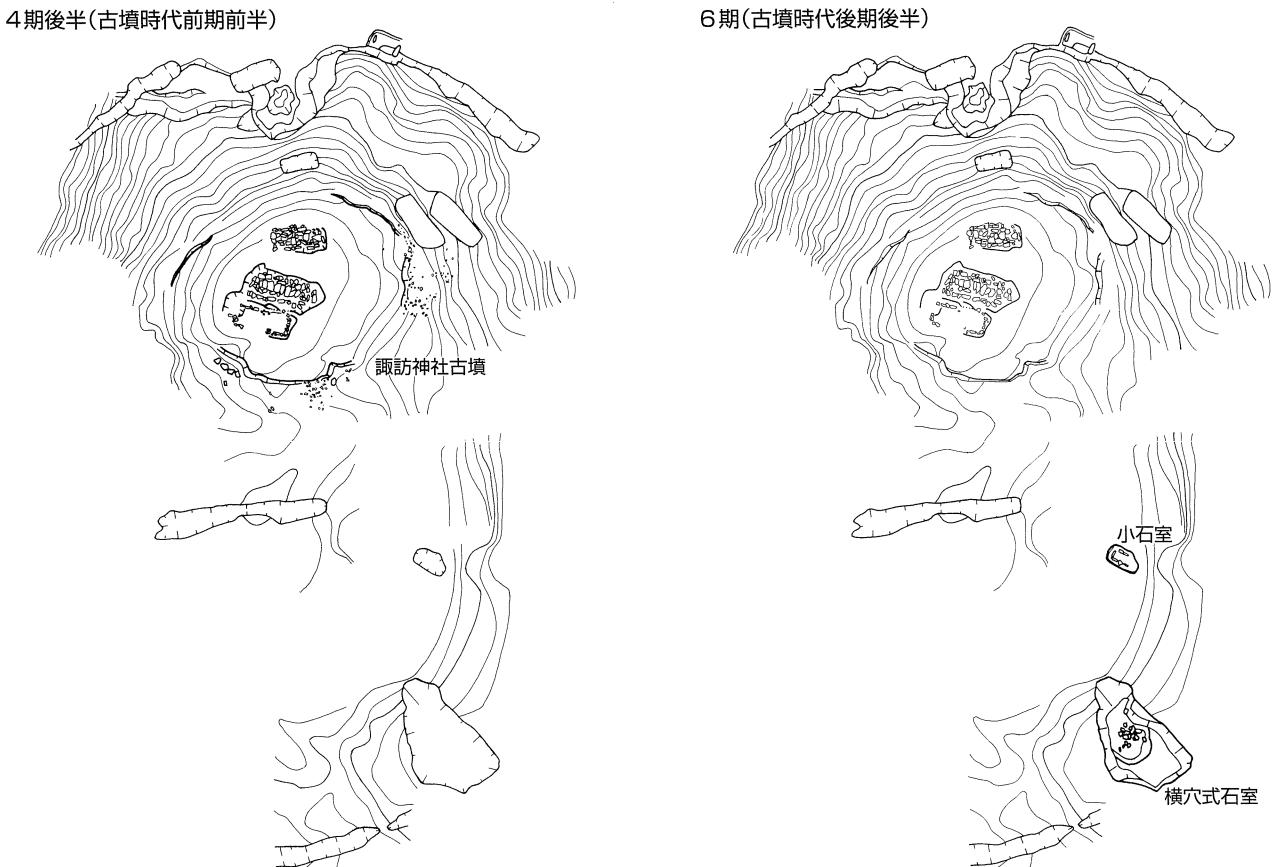
この時期の遺構は出土遺物から木棺墓01・02・03、SK01、SD02が該当する。この時期から祭祀用？の空間から墓域へと変化するようである。同時期と考えられるこれらの遺構について位置関係を確認しておきたい。丘陵頂部中央を東西に区切るようにSD02が直線的に掘削され、それよりも北側に3基の木棺墓と1基の土坑が存在する。SD02より南側では同時期の遺構は確認されていない。確認した木棺墓3基についての立地は丘陵頂部に木棺墓3、標高がやや下がった部分に木棺墓1、さらに標高を下げた部分にSD03に重複する形で木棺墓2を確認している。確認した木棺墓には標高の高低により規模・出土遺物の差は認められず、主軸を等高線に合わせ、一見、無秩序に造られているように見えるが、平面上では約7mの間隔をおいて立地しており、一定の空間を意識して埋葬された可能性が考えられる。SK01については、十分な調査を行えていないことから遺構の性格は不明である。丘陵頂部中央を東西に掘削されたSD02については、その北側に木棺墓3基が存在し、南側には同時期の遺構は認められないことから、墓域との境を区切る溝であると考えられる。

### 第4期（弥生時代後期末から古墳時代前期前半）

第3期に続いて墓域として利用されている。この時期の遺構として諏訪神社古墳・土壙墓1・土器棺墓1・土器棺墓2・SD04が該当する。出土遺物の時期から遺構を並べ替えるとSD04・土壙墓1・土器棺墓1・諏訪神社古墳の順となる。SD04については、西端延長部の状況が明確ではないが、東側では、丘陵裾に溝は認められることから土壙墓1付近で終るものと考えられる。確認した平面から、直線状に掘削された溝であると考えられる。位置関係から諏訪神社古墳北西側の南北に伸びる尾根を直線的に東西に区切っているように認められる。SD04より南側は斜面が立ち上がるが、この斜面には遺構は認められず、区切る目的の遺構は今回の調査対象とならなかった北側尾根部分に存在している可能性が考えられる。讃岐では弥生時代後期後半以降、墓の範囲を明確にするため尾根稜線に直交する形で溝を掘削するものが出現し始める状況と合致する。SD04から出土した土器には穿孔したものはみられないものの、完形に近いものが多く存在することから、今回の調査対象とはならなかった丘陵北側に墳墓の主体部が存在し、その南を画する溝がSD04であり、SD04出土土器が北側墳墓の共獻土器である可能性も考えられる。

土壙墓1については出土遺物が無いことから時期の決定が困難であるが、土壙墓1の上部を切る形で造られている土器棺墓1が弥生時代後期後半の時期が考えられ、切り合い関係からそれよりも以前の遺構であると考えられる。土壙墓1については平面が長方形を呈し、長さ2.7m、幅1.2m、深さ60cmと遺構の残りは良好であるものの、出土遺物がなく、細かな時期の特定は不明である。土壙墓とした根拠については、平面形が長方形を呈すること、遺構の立ち上がりが垂直に近いことなどの推定であるが、土壙墓とするにはやや規模が大きい感も否めない。

土器棺墓1については、切り合い関係から土壙墓1に後出するものである。用意した大型壺が遺体の大



第69図 諏訪神社遺跡遺構変遷図②

まさに合わなかったことから、本来の使用方法とは異なる使われ方をした特異な土器棺である。香川県内で確認された土器棺は、頸部を打ち欠いているのが一般的であるが、この土器棺は想定した頸部からは遺体を納めることができず、体部上半を大きく打ち欠いていたことから、この部分から遺体を納めたものと想定され、本来は口縁部に蓋として被せる鉢も体部上半に被せていた。口縁部を塞ぐため、体部上半の破片を口縁部に被せるという全てにおいて特異な土器棺である。土器棺に葬られるのは幼児が一般的であるが、土器の使用方法からやや大きくなった子供を葬った可能性が考えられる。

この時期の中で最も後に造られた諏訪神社古墳については、丘陵北端の最も高い部分に造られている。古墳南側部分のみ周溝を掘削し古墳とその南側を明確にするが、完全に遮断するのではなく、南側には陸橋状に繋がる部分が残されており、この部分が古墳への出入り口として機能していたようである。同時期かやや先行する遺構が丘陵頂部に造られず、斜面をやや下がった部分に造られていることなどから、古墳の築造位置が予定されていたような造られ方である。諏訪神社古墳については、前節で詳述したことから繰り返さないが、確認された3基の主体部のうち築造行程が辿れる2基については丁寧なつくりである。

### 第5期（古墳時代後期中頃）

諏訪神社遺跡の調査終了後に採集されたTK10型式併行と考えられる須恵器杯身を伴う遺構（古墳？）が該当する。前章で触れたとおり、調査終了後の遺物であるため、遺構の詳細については不明であるが、仮に古墳であるとするならば、須恵器を副葬する古墳としては当丘陵周辺部では最も古い時期に属するものと考えられる。

### 第6期（古墳時代後期後半）

横穴式石室、小石室が該当する。前章で触れたとおり当遺構を横穴式石室とする根拠は、石室に利用さ

れていた可能性のある石材がまとまって確認されたこと、副葬品と考えられる遺物が床面と考えられる面から破片となって出土したことからである。出土遺物の多くが細片であるため、時期を特定できる部位が少なく、やや時期幅をもたせたT K43～209型式の時期が想定されるが、小石室については、出土遺物が無いため、時期が特定できない。盗掘の可能性は考えられるが出土遺物が全く出土していないこと、規模が縮小していることを考えると、横穴式石室よりは後出する時期のものであると考えられる。

### 第7期（古代）

横穴式石室の出土遺物や調査区北半から出土した遺物の中に当該期の遺物が含まれており、横穴式石室の再利用等、何らかの活動は認められるが、前時期までに比べると遺構・遺物ともに貧弱になる。近接する久米山南遺跡で確認された横穴式石室においても、出土遺物から当該期の再利用が認められる。

#### 参考文献

- 松江市教育委員会2001『田和山遺跡』  
川部浩司2006「弥生時代前期環壕集落の特質」『みづほ』第40号 大和弥生文化の会  
信里芳紀2003「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『続文化財論集』続文化財論集刊行会  
蕨本晋司1999『汲仏遺跡Ⅱ』香川県教育委員会（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
大久保徹也2006a「讃岐の集落と初期古墳」『シンポジウム邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和 資料集』香芝市教育委員会  
香芝市二上山博物館  
大久保徹也2006b「讃岐地域における前方後円墳出現期の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集 総合テーマ  
地域社会と考古学 - 四国・瀬戸内 - 分科会Ⅱ 瀬戸内の出現期古墳』日本考古学協会2006年度愛媛県大会実行委員会

第4表 諏訪神社遺跡出土遺物観察表①

※法量の( )は、残存値を表す。

第2次試掘調査

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
1	弥生土器 高杯		脚部 20.0			内外面:明赤褐色 2.5Y R5/6	1~3mm大の砂粒を多量に含む	良好		
2	弥生土器 高杯脚部		脚部 18.0	(1.9)		外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:橙色 2.5Y R6/4	1mm大の微砂粒を多量に含む	良好		
3	弥生土器鉢				外面:ミガキ 内面:粗いハケメ	外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:明赤褐色 2.5Y R5/6	1~2mm大の石英・長石を多量に含む	良好		
4	須恵器壺			(5.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:灰色 N5/ 内面:灰色 N5/	1mm以下の微砂粒を含む	良好	体部:凹線2条, 波状文	堅緻
5	須恵器 台付長頸壺		9.0	(9.5)		内外面:灰色 N6/0	1mm以下の微砂粒を含む	良好		堅緻

※法量の( )は、残存値を表す。

S D01

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
6	弥生土器 壺	15.2		(5.0)	外面:ヘラミガキ 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/3 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/3	2mm以下の石英・長石・角閃石を少量含む	良		
7	弥生土器 壺	17.2		4.9	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:粗いハケメ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/3 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	頸部外面:押圧突 帶文1条	
8	弥生土器 壺	21.0		(1.2)		外面:にぶい黄橙色 10Y R7/3 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/3	1mm大の石英・長石粒を含む	良好	口縁: S字刺突文	

※法量の( )は、残存値を表す。

S D02

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
9	弥生土器 壺			(2.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/4 内面:明赤褐色 2.5Y R5/6	2mm以下の石英・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線2条	
10	弥生土器 壺	9.6		(2.6)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナ	外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	Immm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線1条	
11	弥生土器 壺	14.6		(1.4)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナ	外面:にぶい橙色 7.5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線2条	
12	弥生土器 壺	12.2		(1.1)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	微砂粒(長石・角閃石)を含む	良	口縁端部:凹線3条	
13	弥生土器 壺	12.8		(1.9)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙色 7.5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の長石・角閃石を少量含む	良	口縁端部:刻目文、 凹線2条 口縁内部:円形浮文	
14	弥生土器 壺			(1.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐色 7.5Y R5/4 内面:にぶい褐色 7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線2条	
15	弥生土器 甕			(1.2)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい褐色 7.5Y R5/4 内面:にぶい褐色 7.5Y R5/4	1mm以下の長石・角閃石を少量含む	良	口縁端部:凹線2条	
16	弥生土器 壺	11.4	3.6	20.2	外面口縁部:ヨコナデ 体部上半:タタキ後ハケメ 体部下半:指ナデ, 指頭 圧痕 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい橙色 7.5Y R7/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R7/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良	口縁部内面:円形 浮文 口縁端部:刻目文 頸部外面:ハケ原 体による押圧文 体部中央:ハケ原 体による押圧文	体部外面:黒斑有
17	弥生土器 壺			(5.3)	外面頸部:ヨコナデ 体部上面:粗いハケメ 体部下面:ヘラミガキ 内面頸部:ヨコナデ 体部:指頭圧痕	外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	微砂粒(石英・長石・角 閃石)を含む	良	体部:ハケ原体によ る押圧文	
18	弥生土器 壺	17.4		(36.4)	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:ヘラミガキ 体部:ヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 頸部:ナデ 体部:ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい赤褐色 5Y R5/4 内面:明褐色 7.5Y R5/6	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	良	体部外面:押圧列 点文 口縁端部:凹線3条 頸部:凹線3条	
19	弥生土器 水差し型土器	6.6	5.0	16.1	外面:ハケメ, 板ナデ 内面:ハケメ, 板ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/3 内面:浅黃橙色 10Y R7/3	微砂粒を少量含む	良		
20	弥生土器 甕			(3.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:粗いハケメ	外面:にぶい橙色 7.5Y R7/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R7/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	良		
21	弥生土器 甕	(12.5)		(1.3)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/4	1mm以下の長石・角 閃石を含む	良	口縁端部:凹線1条	
22	弥生土器 甕口縁部	14.6		(2.4)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	微砂粒(長石・角閃石) を少量含む	良	口縁端部:凹線1条	
23	弥生土器 甕	17.6		(2.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	1mm以下の砂粒(石英・ 長石・角閃石)を少量含 む	良	口縁端部:凹線2条	
24	弥生土器 甕	24.8		(2.1)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい橙色 7.5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	良	口縁端部:凹線3条	
25	弥生土器 高杯			(1.9)	外面:摩滅 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/3 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の長石・角 閃石を含む	良	口縁端部:凹線1条	
26	弥生土器 高杯	(12.6)		(4.2)	外面:タテミガキ 内面上半:ヨコミガキ, 下半: タテミガキ	外:橙色 2.5Y R 6/6 内:明赤褐色 2.5Y R 5/6	1mm大の砂粒を含む	良好	円形浮文	
27	弥生土器 高杯	24.8		(1.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/4	微砂(石英・長石・金雲 母)を含む	良		
28	弥生土器 甕底部		6.4	(1.9)	外面:ナデ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/3 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/4	1mm以下の砂粒(石英・ 長石・角閃石)を少量含 む	良		
29	弥生土器 甕底部		8.8	(1.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	微砂粒(石英・長石・角 閃石)を含む	良		
30	弥生土器 甕底部		8.3	(1.4)	外面体部:ヘラミガキ 底部:ヨコナデ 内面体部:ヘラケズリ 底部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/3 内面:にぶい橙色 7.5Y R7/4	1mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	良		
31	弥生土器 甕底部		9.4	(3.4)	外面:ヘラミガキ, 下端:ヨコ ナデ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/3 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/3	5mm以下の石英・長石・角 閃石を含む	良		体部外面:黒斑有

第5表 諏訪神社遺跡出土遺物観察表②

S D03

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考	
		口径	底径	器高							
32	弥生土器壺	20.6		7.0	外面:ヨコナデ 内面:ヘラミガキ	外面:にぶい黄褐色 10Y R5/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/4	2~3mm大の砂粒を多量に含む	良好	頸部:ヘラ描沈線3条、円孔		
33	弥生土器壺		7.8	(24.4)	外面頸部:ナデ 体部:ヘラミガキ 底部:ヘラミガキ 内面頸部:ナデ 体部:ナデ、指頭圧痕	外面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	体部:直線文4条、木ノ葉文		
34	弥生土器甕			(3.7)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:刻目文 頸部:沈線2条		
35	弥生土器甕	22.0		(2.9)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい赤褐色 5Y R4/4 内面:にぶい赤褐色 5Y R4/4	2mm大の石英・長石を多量に含む	良好			
36	弥生土器甕	25.4		(9.6)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:板ナデ	外面:赤色 10Y R5/6 内面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4	2~3mm大の砂粒を多量に含む	良好	口縁端部:刻目文 頸部:ヘラ描沈線2条		
37	弥生土器甕	27.0		(7.8)		外面:にぶい橙色 2.5Y R6/4 内面:にぶい橙色 5Y R6/4	2~3mm大の砂粒を多量に含む	良好	口縁端部:刻目文 頸部:沈線2条		
38	弥生土器底部		10.0	(2.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰黄褐色 10Y R5/2 内面:灰黄褐色 10Y R5/2	2~3mm大の砂粒を多量に含む	良好			
39	弥生土器壺底部		10.0	(2.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:浅黄橙色 10Y R8/4	2mm以下の長石・石英を含む	良			
40	弥生土器底部		8.0	(3.5)	外面:粗いハケ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	2~3mm大の石英・長石を多量に含む	良好			
41	弥生土器壺	11.8		(2.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙色 7.5Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/3	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	良	口縁端部:凹線2条		
42	弥生土器壺	16.0		(3.0)	外面:ハケ後ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐色 7.5Y R5/4 内面:にぶい褐色 7.5Y R5/4	1mm大の石英・長石・黒雲母を多量に含む	良好	口縁端部:凹線2条		
43	弥生土器壺頸部				外面:ナデ 内面:ナデ	外面:橙色 7.5Y R6/6 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の長石・石英を含む	良	頸部:列点文		
報告番号	器種	法量(cm)			重さ(g)	材質	特徴				
		口径	底径	器高							
44	打製石鎌 (凹基式)	(1.5)	(1.5)	(0.3)	(0.6)	サヌカイト	両側縁部に抉り				

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
45	弥生土器壺	11.8		(15.1)	外面口縁:ナデ、頸部:ハケ、 体部:ハケ 内面口縁:ナデ、頸部:ナデ、 体部:ヘラケズリ	外面:にぶい橙色 7.5Y R7/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1~2mm大の砂流を含む	良好		
46	弥生土器壺	14.2		(15.4)	外面口縁:ナデ 頸部~体部:ハケ 内面頸部:板ナデ、ハケ、絞り目 体部:指ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/3	微砂粒を含む	良		頸部~体部:黒斑有
47	弥生土器壺	14.8	7.2	32.4	外面口縁部:ヨコナデ 体部上半:ハケ 体部下半:ヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上半:指ナデ、指頭圧痕 体部下半:はけ厚体による削り	外面:にぶい褐色 7.5Y R6/3 内面:にぶい橙色 7.54Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線状の沈線1条	
48	弥生土器鉢			(2.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:褐色 10Y R4/1 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	微砂粒(長石・角閃石)を含む	良		
49	弥生土器鉢			(2.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐色 7.5Y R5/3 内面:にぶい橙色 7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		
50	弥生土器甕底部		3.8	(2.5)	外面:ハケ 内面:板ナデ	外面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
51	弥生土器甕底部		4.7	(6.1)	外面:板ナデ 内面:板ナデ	外面:橙色 5Y R6/6 内面:にぶい赤褐色 5Y R5/4	1~2mm大の石英・長石を含む	良好		

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
52	弥生土器高杯	20.0	9.0	(16.0)	外面:タテミガキ(一部、口縁部のみヨコミガキ) 内面:タテミガキ(杯部)、ヘラケズリ(脚部)	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	2mm大の長石・石英を多量に含む	良好	脚部:ヘラ描沈線1条 脚端部:凹線2条	円盤充填

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
53	弥生土器水差し型土器	8.4	5.0	16.0	外面:ナデ(口縁)、ハケ(体部上半)、ヨコミガキ(体部中央)、タテミガキ(底部) 内面:ナデ(口縁~体部上半)、ヘラケズリ(体部下半~底部)	内外面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4	1mm以下の長石・石英を含む	良	口縁:擬凹線6条 体部上半:綾杉文	
54	弥生土器高杯	22.4		(6.3)	外面:ナデ(口縁)、タテミガキ(杯部下半) 内面:ナデ(口縁)、タテミガキ(杯部下半)	外面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 内面:にぶい赤褐色 2.5Y R5/4	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	良好	口縁:凹線3条	

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
55	弥生土器甕	11.0		(4.3)	外面:ナデ(口縁)、ハケ(体部)	外面:にぶい橙色 7.5Y R6/4 内面:橙色 7.5Y R6/6	1~2mm大の砂粒を含む		口縁:凹線2条	

第6表 諏訪神社遺跡出土遺物観察表(3)

土器棺墓1										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
56	弥生土器 片口鉢 (棺蓋)	42.3	7.4	21.4	外面:ナデ(口縁), ヘラケズ リ後粗いミガキ 内面:ナデ(口縁), 粗いハケ (体部), ヨコミガキ(底部)	外面:暗褐色 7.5Y R 6/6 内面:橙色 7.5Y R 7/6	1mm以下の砂粒を含む	不良		土器棺蓋に転用
57	弥生土器 壺 (棺身)	22.3	9.2	55.7	外面:ナデ(口縁~頸部), ヨ コミガキ(体部上半), ハケ (体部中央), タテミガキ(底 部) 内面:ナデ(口縁~体部上半), ヘラケズリ(体部下半~底 部)	外面:橙色 5Y R 6/6 内面:浅黄橙色 10Y R 8/4	1mm以下の砂粒を含む	良好	口縁:刻目	体部最大径付近に 外側からの打撃に よる円孔を1箇所 穿つ。反対側には 縦約2.5cm, 横約 3.2cmの範囲に不 正な孔を穿つ

土器棺墓2										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
58	弥生土器 壺				外面:ハケ 内面:ハケ	外面:橙色 7.5Y R 6/6 内面:橙色 7.5Y R 6/6	2mm以下の長石・石英・ 雲母を多量に含む	良		

諏訪神社古墳墳丘内(列石裏込め中)										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
59	弥生土器 長頸壺			(5.8)	外面:摩滅 内面:ナデ(上半), ヘラケズ リ(下半)	外面:明赤褐色 5Y R 5/6 内面:にぶい橙色 5Y R 6/4	1~2mmの大長石・石英・ 雲母を含む	良		
60	弥生土器 無頸壺	21.0		(6.0)	外面:ナデ 内面:ハケ後ナデ	外面:にぶい褐色 7.5Y R 5/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R 6/4	2mm以下の長石・石英・ 雲母を含む	良好	口縁端部:凹線2条	
61	弥生土器 甕	37.4		(5.0)	外面:ハケ後ナデ 内面:摩滅	外面:にぶい橙色 7.5Y R 6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R 6/4	1mmの大石英・長石を 含む	良好	口縁端部:凹線4 条	
62	剥片									
63	剥片									

第1堅穴式石櫛										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		長さ	幅	孔径						
64	管玉	1.8	0.7	0.3						碧玉製

第2堅穴式石櫛										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
65	弥生土器 壺(土器枕)				外面:ハケ 内面:上半ナデ, 下半ヘラケ ズリ	外面:橙色 7.5Y R 7/4 内面:にぶい褐色 7.5Y R 6/3	1mm以下の長石・石英を 含む	良好		内外面赤色顔料 (水銀朱)塗布
66	弥生土器 壺	8.6		(4.7)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい赤褐色 2.5Y R 5/4 内面:にぶい赤褐色 2.5Y R 5/4	1mm以下の長石・石英を 含む	良	口縁:擬凹線6条	

巨石抜き取り跡										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
67	弥生土器 甕	14.4			外面:ナデ(口縁), ハケ(体 部), ナデ(底部) 内面:ナデ(口縁), ヘラケズ リ(底部)	外面:にぶい赤褐色 5Y R 5/4 内面:明赤褐色 2.5Y R 5/6	1~2mm以下の長石・石英を 含む	良		

横穴式石室										
報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
68	須恵器 杯蓋	13.0		(2.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N6/ 内面:灰色 N6/	密	良好		
69	須恵器 壺口縁部			(1.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N4/ 内面:灰色 N5/	密	良好		
70	須恵器 壺				外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N5/0 内面:灰色 N5/0	1mm以下の長石・石英を 含む	良		
71	須恵器 壺			(3.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N6/ 内面:灰色 7.5Y R 6/1	微砂粒(長石・角閃石) を含む	良		外面に少量釉が残 る
72	須恵器 平壺	5.4		(5.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白色 N7/ 内面:灰白色 N7/	1mm以下の石英・長石・ 角閃石を含む	良		
73	須恵器 壺			(9.0)	外面:上半ナデ, 下半ケズリ 内面:ナデ	外面:灰白色 2.5Y R 8/1 内面:灰白色 2.5Y R 7/1	蜜	良		
74	須恵器 甕	14.4		(7.2)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰白色 2.5Y R 8/1 内面:灰白色 2.5Y R 8/1	密	不良		
75	土師器 甕	17.6		(9.7)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ, 指頭压痕	外面:にぶい橙色 7.5Y R 7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R 7/3	1mm以下の石英・長石・ 角閃石を含む	良		
76	須恵器 杯			(7.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N6/ 内面:灰色 N6/	1mm以下の微砂粒を含む	良好	堅緻	
77	須恵器 碗	15.0		(2.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N5/ 内面:灰色 N5/	1mm以下の長石・角閃 石を含む	良		
78	土師質土器 杯		7.4	(1.6)	外面:ナデ 底部:回転ヘラ切り 内面:ナデ	外面:灰白色 2.5Y R 8/2 内面:淡黄色 2.5Y R 8/3	微砂粒(長石・角閃石) を含む	良		
79	底部		16.6	(2.7)	外面:摩滅 内面:ヘラ削り	外面:明赤褐色 5Y R 5/6 内面:にぶい橙色 7.5Y R 5/6	3mm以下の石英・長石 を含む	良		
80	弥生土器 甕	15.6		(2.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:淡黄色 2.5Y R 8/3 内面:にぶい橙色 7.5Y R 6/4	1mm以下の長石・石英・ 雲母を含む	良好	口縁端部:凹線3条	
81	弥生土器 壺口縁部	21.8		(2.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい赤褐色 5Y R 5/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R 7/4	1mm以下の石英・長石・ 角閃石を含む	良	口縁端部:凹線4条	

## 第7表 諏訪神社遺跡出土遺物観察表④

久米山3号古墳

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
82	須恵器 杯蓋			(2.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白色 7/0 内面:灰白色 7/0	1mm以下の長石・石英を含む	良好		

調査区北半部

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
83	弥生土器 壺	22.1		(3.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙色 10Y R7/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R6/4	1mm以下の長石・石英・角閃石を含む	良	口頸部:鋸歯文	
84	弥生土器 壺				外面:ナデ 内面:ハケ	外面:にぶい橙色 7.5Y R6/4 内面:にぶい橙色 7.5Y R6/4	1mm以下の長石・石英・角閃石を含む	良	複合口縁	
85	弥生土器 高杯				外面:ミガキ 内面:ナデ	外面:にぶい橙色 5Y R7/4 内面:橙色 .5Y R6/6	2mm以下の長石・石英を含む	良		
86	弥生土器 甕		2.4	(1.3)	外面:ミガキ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい橙色 5Y R6/4 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	1mm以下の長石・石英を含む	良		
87	弥生土器 鉢		6.0	(4.2)	外面:ミガキ, ハケ 内面:ミガキ	外面:橙色 5Y R6/6 内面:橙色 5Y R6/6	2mm以下の長石・石英を含む	良		
88	須恵器 壺	11.0		(4.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 N4/0 内面:灰色 N4/0	1mm以下の砂粒を含む	良好	カキメ	
89	須恵器 甕				外面:キザミ 内面:ナデ	外面:灰白色 N7/0 内面:灰白色 N7/0	1mm以下の長石・石英を含む	良好		
90	須恵器 壺			(4.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白色 N7/0 内面:灰白色 N7/0	1mm以下の長石・石英を含む	良好	列点文, カキメ	自然釉
91	須恵器 壺				外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白色 N7/0 内面:灰白色 N7/0	1mm以下の長石・石英を含む	良好		接合痕
92	須恵器 壺				外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰色 5Y6/1 内面:灰色 N6/0	1mm以下の長石・石英を含む	良好		
93	須恵器 甕				外面:タタキ 内面:同心円の当て具痕	外面:灰白色 N7/0 内面:灰白色 N7/0	1mm以下の長石・石英を含む	良		

調査区南半部

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
94	弥生土器 甕		8.8	(37.0)	外面:ハケ, ミガキ 内面:ナデ, ケズリ	外面:明褐灰色 2.5Y R5/6 内面:にぶい黄橙色 10Y R7/4	1mm以下の長石・石英・角閃石を含む	良	列点文	

出土土地不明遺物

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
95	須恵器 杯身	17.6		5.7	外面:ナデ, ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:褐灰色 10Y R4/1 内面:青灰色 5B G6/1	2~3mm以下の砂粒を含む	良		内面見込みに同心円のスタンプ文
96	須恵器 杯身	12.6		5.8	外面:ナデ, ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:灰色 10Y R5/1 内面:灰色 10Y 5/1	1mm以下の砂粒を含む	良好		内面見込みに同心円のスタンプ文

諏訪神社本殿石垣裏込内

※法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径	器高						
97	須恵器 杯蓋	12.2		(2.0)	外面:ナデ	外面:灰白色 N7/0 内面:灰白色 N7/0	密(1mm以下の長石を含む)	良		
98	須恵器 杯		8.0	(1.3)	外面:ナデ	外面:黄灰色 2.5Y 6/1 内面:灰色 5Y 6/1	密	良		
99	須恵器 壺口縁部	24.8		(3.4)	外面:ナデ	外面:灰白色 2.5Y 7/1 内面:灰黄色 2.5Y 6/2	密	良	口縁部:突帯1条	外面:自然釉付着
100	白磁 碗		6.8	(2.2)	外面:カンナケズリ	断面:灰白色 N8/0 釉:灰白色 7.5Y 8/2	密	良		
101	土師質土器 椀		7.2	(2.9)	外面:ナデ	外面:にぶい黄色 2.5Y 6/3 内面:にぶい黄色 2.5Y 6/4	1mm以下の石英・長石を含む	良		
102	瓦質土器 鍋	31.0		(2.8)	外面:ナデ	外面:灰色 N4/ 内面:灰白色 N7/	密	良		

## 第5節 諏訪神社古墳出土の土器枕に付着した赤色顔料の蛍光X線分析

徳島県立博物館 魚島純一

香川県高松市所在の諏訪神社古墳2号主体部から出土した土器枕に付着した赤色顔料の同定を目的とした蛍光X線分析を行ったのでその結果を報告する。

### 1. 試料

諏訪神社古墳第2竪穴式石槨内出土 土器枕破片 1点

分析した土器枕破片は縦約10cm、横約20cmの比較的大型の破片で、内外面に赤色顔料の付着が確認できる。

測定した部位は第70図に示したとおり、内面2箇所、外面3箇所の赤色顔料が付着した部分5箇所と、表面が欠失した断面部分2箇所の合計7箇所である。

### 2. 方法

蛍光X線分析装置を使って定性分析を行い、試料に含まれる元素の種類を調べ、用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス製エネルギー分散型蛍光X線分析装置TREX630Lを用いた。

測定の条件はつぎのとおり。

X 線 管	:	Mo	X 線管電圧	:	50kV
X 線管電流	:	0.2mA	検 出 器	:	Si (Li)
測 定 時 間	:	100秒	測定雰囲気	:	大気

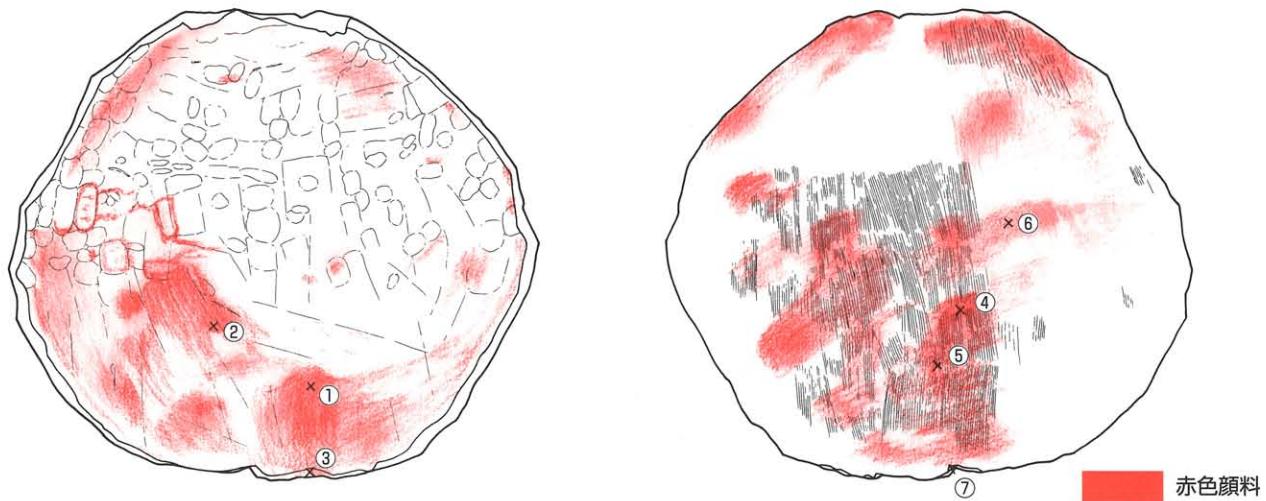
### 3. 結果と考察

分析結果の一部を第71～73図に示す。

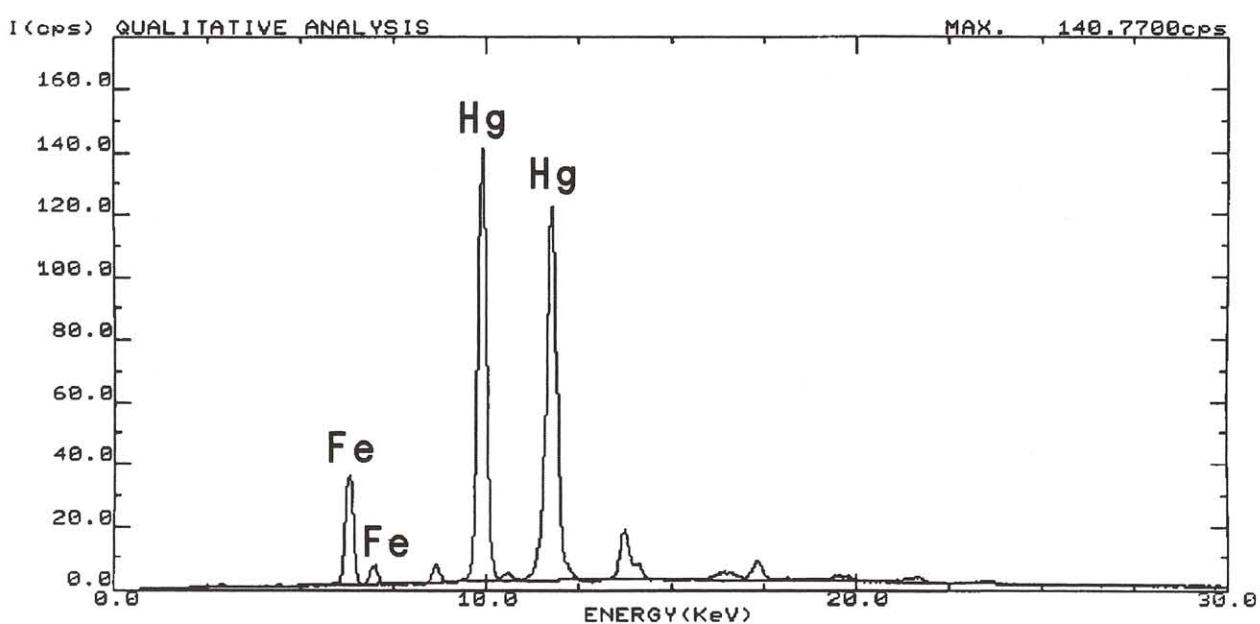
赤色顔料が付着した部位を測定した5点のすべてからHg（水銀）が検出された（第71・72図）。

一方、比較のために測定した断面部分からはHgを検出できなかった（第73図）。

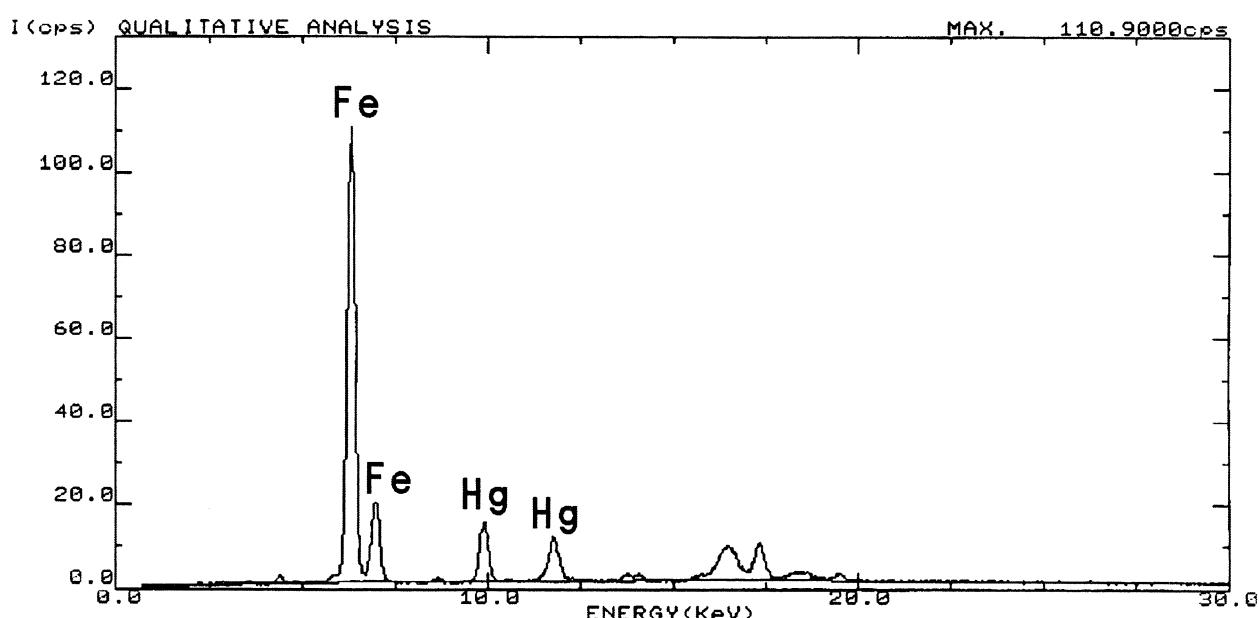
以上のことから、土器枕の内外面に付着した赤色顔料はHgを含む赤色顔料である辰砂（水銀朱、HgS）であると考えられる。



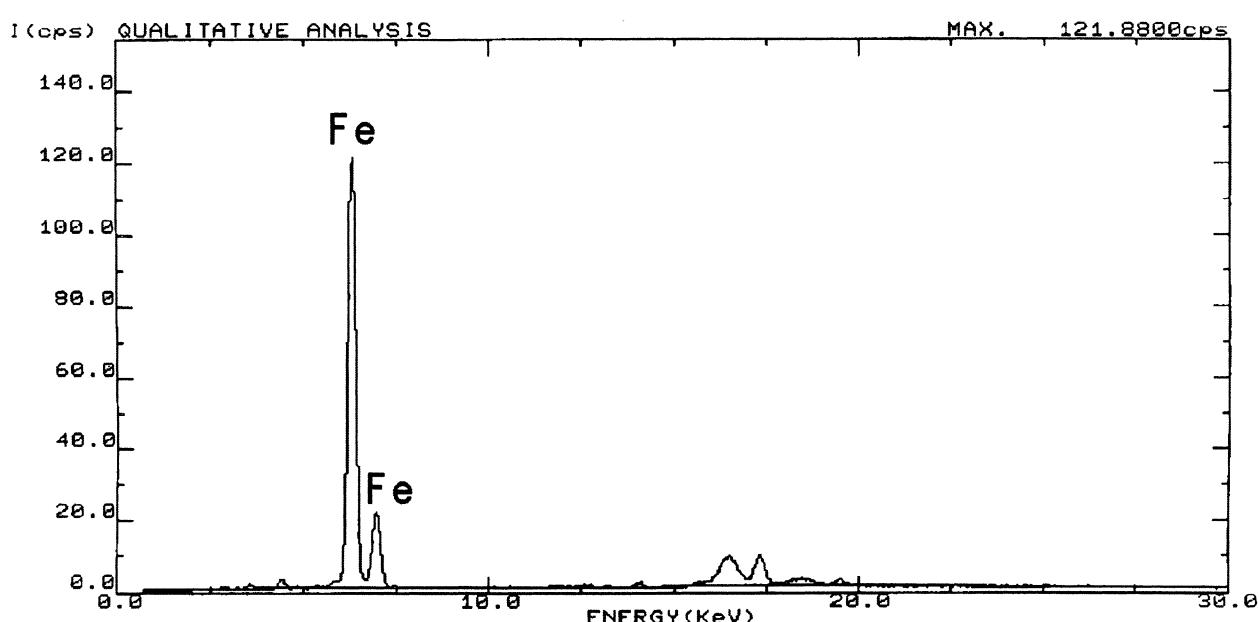
第70図 蛍光X線分析測定部位



第71図 土器枕付着赤色顔料の蛍光X線分析結果（測定点②）



第72図 土器枕付着赤色顔料の蛍光X線分析結果（測定点⑤）



第73図 赤色顔料が付着していない部分の蛍光X線分析結果（測定点③）

## 第Ⅲ部 久米山遺跡群 —諏訪神社御旅所地区—



## 第1章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

調査地は、丘陵頂部の北東側約1/4を占めるため、南西隅がもっとも標高が高く、北および東に向って傾斜しており、調査地内での最大標高差は約1.4mである。調査区平面は、逆台形を呈し、南北方向が約16.5mで、北辺が約21mと広く、南辺が約12mと狭く、調査面積は約272m<sup>2</sup>である。なお、調査地東側の斜面は、急傾斜であること等の理由により、調査対象から除外した。

調査は、まず調査地を5m単位のメッシュ状に、北から南へA～D区、西から東へ1～4区の小区に分けることから始めた。次いで、掘削は地山面まで重機により掘り下げ、遺構検出にあたった。この時点で、小区間の土層観察用畦畔は、土層の残存状況に応じて一部を除去した。その後、順次遺構の掘削を行い、小区間の土層観察用畦畔もすべて除去した。調査区全体の測量は平板測量による1/50図化を基本としたが、遺構平面図、遺物出土状況図、土層図等は適宜手書きによる1/10図化または1/20図化を行った。なお、A区および1区については、搅乱により遺構面が存在しなかったことから、調査時においては省略した。

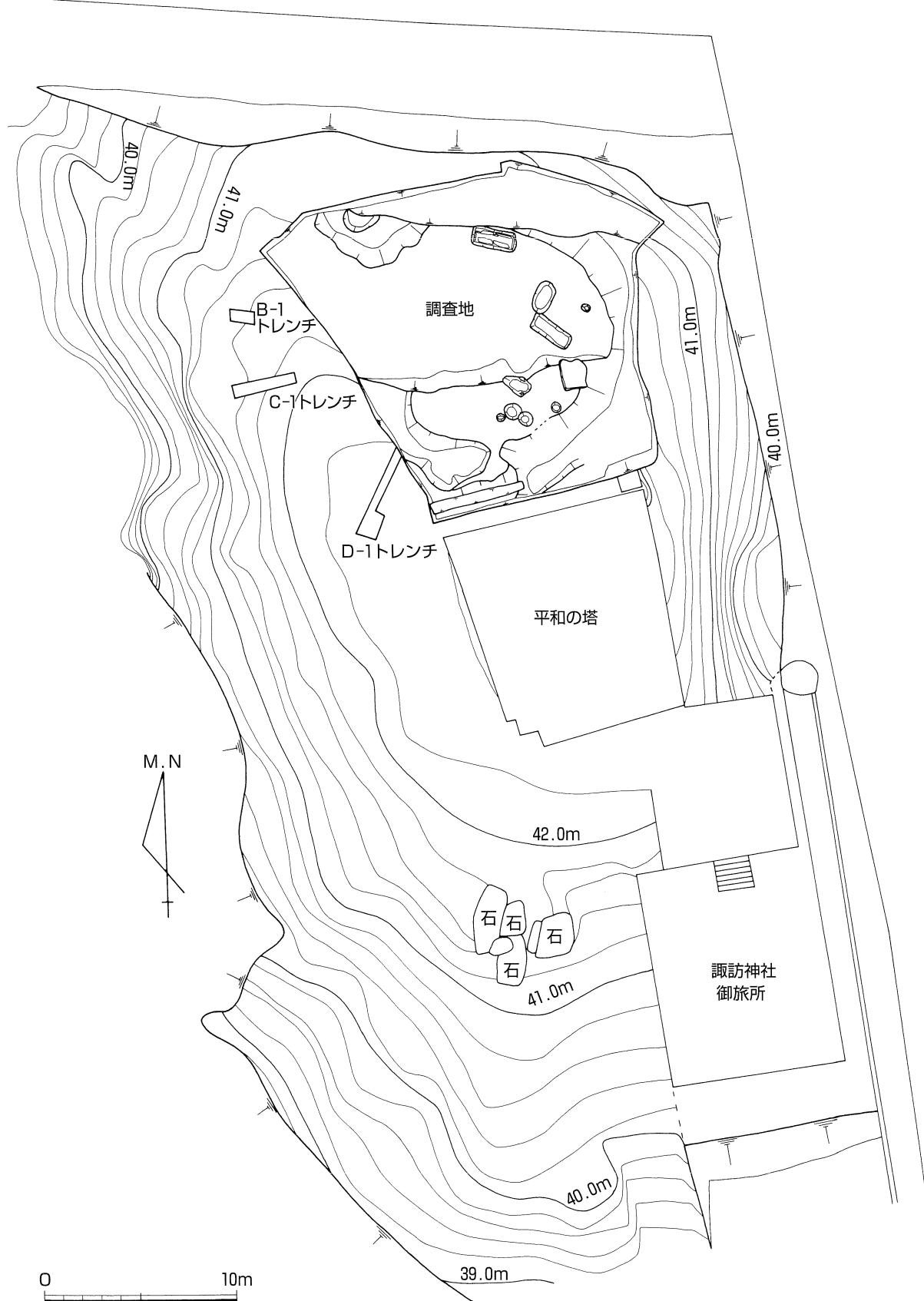
### 第2節 調査地の概要と基本層序

調査地は、久米山（標高52.3m）から北西に派生する丘陵頂部（標高42m）に位置し、本書第Ⅱ部で報告した諏訪神社遺跡は同じ丘陵の先端に位置する。調査地は丘陵頂部の北東部分にあたり、調査地直下の丘陵東側斜面は墓地として現在利用されている。今回この墓地の拡張工事に伴い、調査することとなった。調査以前は、当該地には一辺約13×10m、高さ約1.2mを測る隅丸の方形土壇があり、諏訪神社の御旅所基壇として利用されていた。この御旅所は、墓地拡張工事に先立って調査地南側に移され、調査地と新御旅所の間には更に平和の塔が建てられている。掘削で明らかになった遺構面の標高は、南西部で約42.2mともっとも高く、南東隅で約41.4m、北東隅で約40.8m、北西隅で約41.4mを測り、南西隅から北および東に向かって緩やかに下がる地形である。しかしながら、調査以前に行われた造成工事により旧地形は改変を受けており、御旅所基壇が失われるとともに、南から北に向かって下がる3段の雑壇に地面が切土されていた。

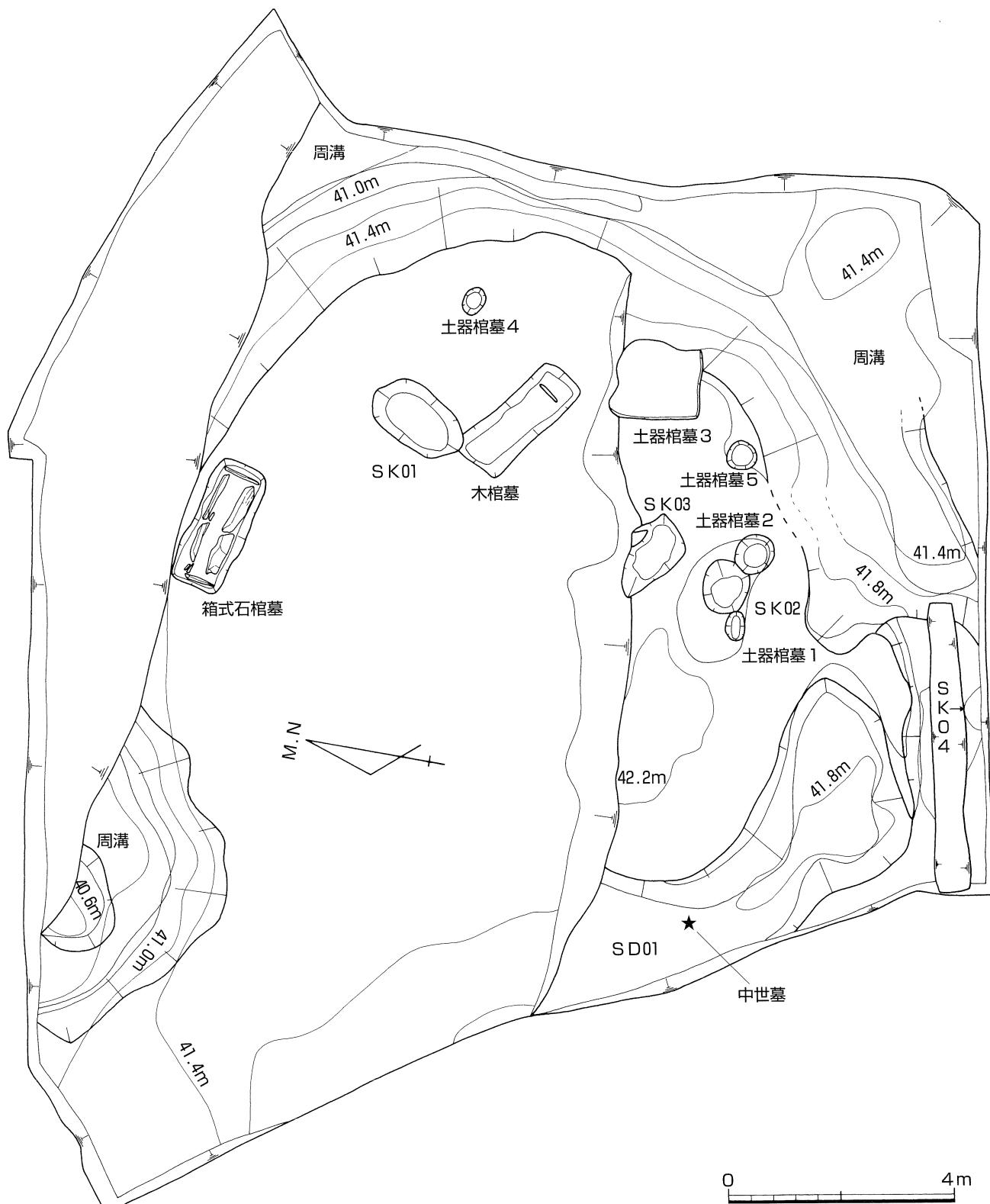
土層図は、調査区東壁および南壁において作成した。調査区北壁および西壁は搅乱土層が1層のみなので省略した。堆積土層の最上層は、墓地造成工事で生じた厚さ約10～70cmの搅乱土層であり、搅乱土層の下には旧地表である腐葉土層が存在する。ただし、調査地の大半は、搅乱土層を除去すると削平を受けた地山層が表れる。地山はにぶい橙色を呈する風化した花崗岩である。調査地南端から北東端にかけてと北西端の一部においては古墳周溝が存在することから、第I～IV層とした古墳周溝の埋土を認めることができ、調査区東壁および南壁の土層図に反映されている。さらに、調査区を東西に横切るC・D区間、D区を南北に横切るD-2・3およびD-3・4区間の土層観察用畦畔においても土層図を作成した。

検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期のものとしては、箱式石棺墓1基、木棺墓1基、土器棺墓5基、古墳時代後期のものとしては周溝1条、奈良時代のものとしては溝1条、室町時代のものとしては墓1基である。その他、時期が特定できないものとして土坑4基を検出しているが、調査地が大きく削平されていることや表採遺物の状況から、少なくとも土器棺墓1基を含め他にも遺構が存在していた可能性を指摘できる。

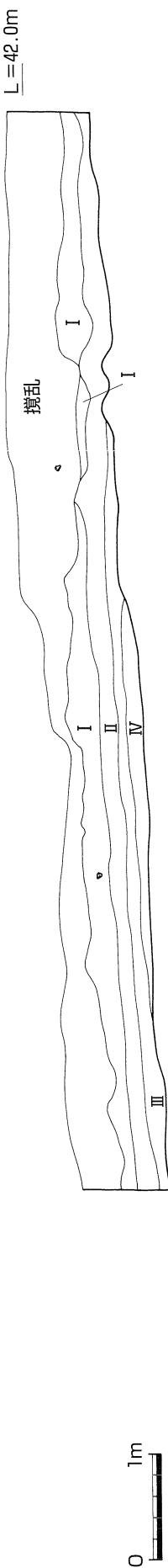
出土遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、青磁など、大型ダンボール箱9箱（土器棺等の大形土器）およびコンテナ5箱分が出土した。



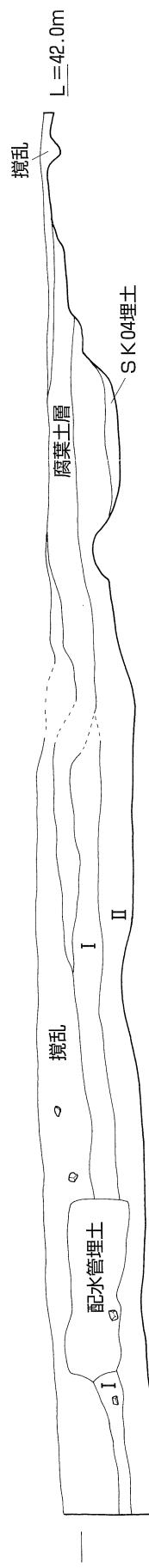
第74図 調査区周辺地形測量図（縮尺 1/300）



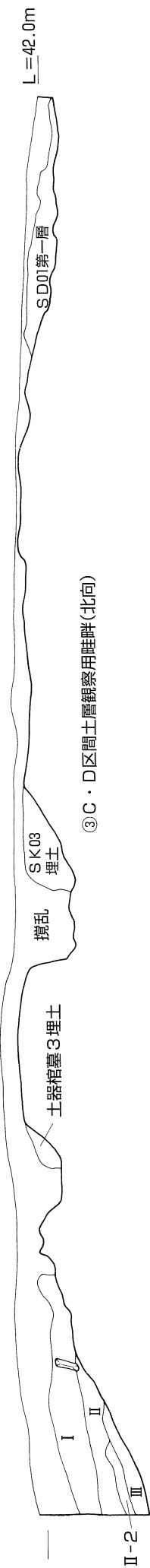
第75図 調査区平面図（縮尺 1/100）



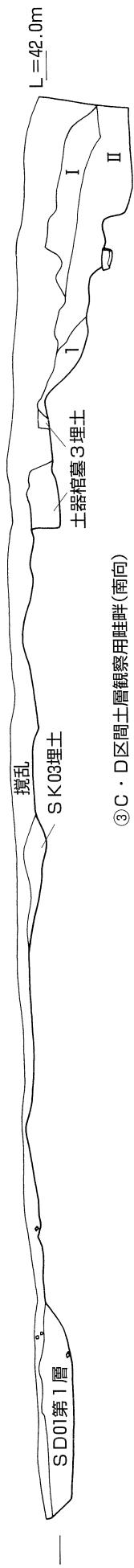
① C・D-4区東壁



② D-2～4区南壁



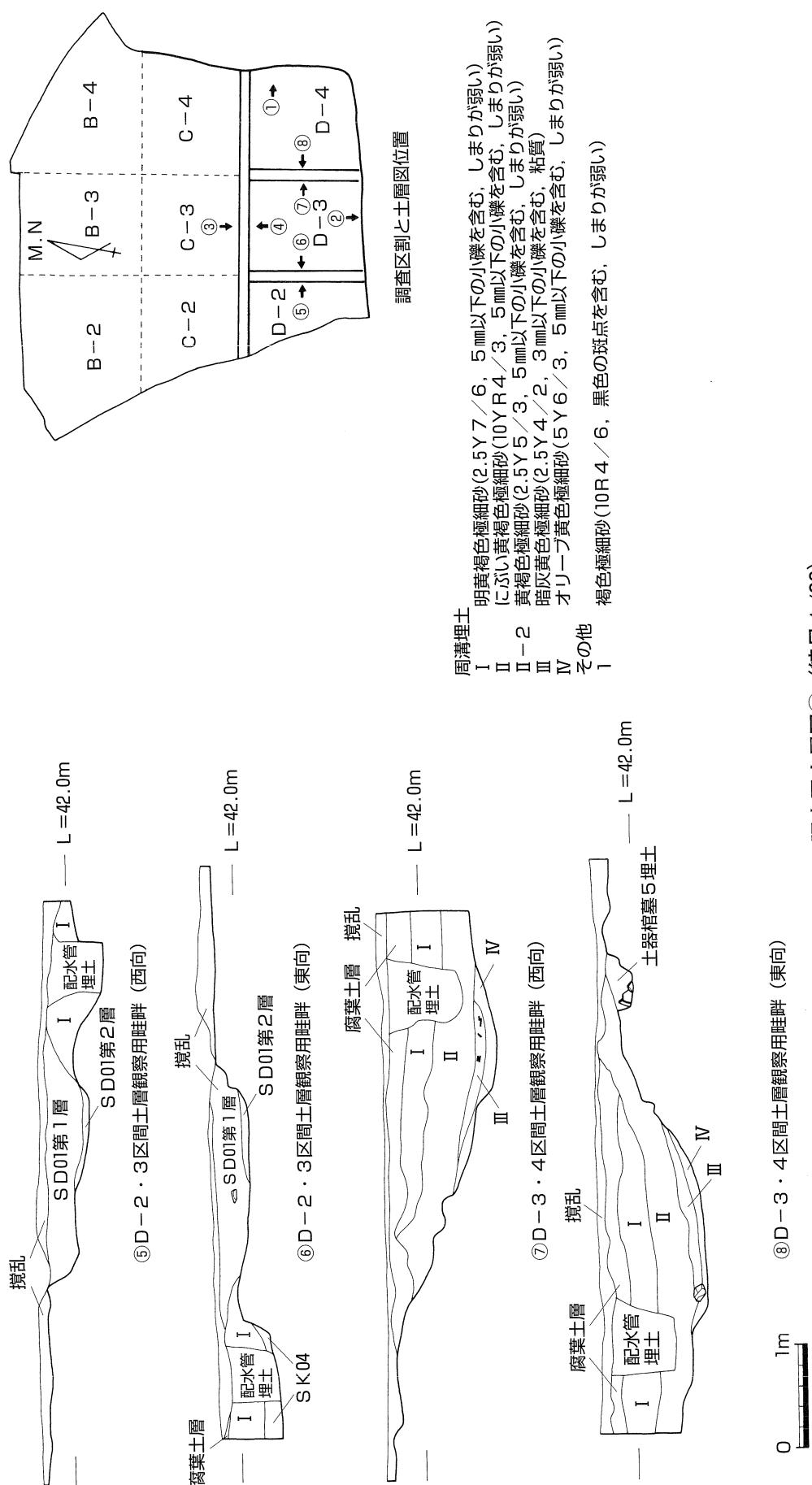
③ C・D区間土層観察用畦畔(北向)



③ C・D区間土層図① (縮尺 1 / 60)

第76図

調査区土層図① (縮尺 1 / 60)



### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

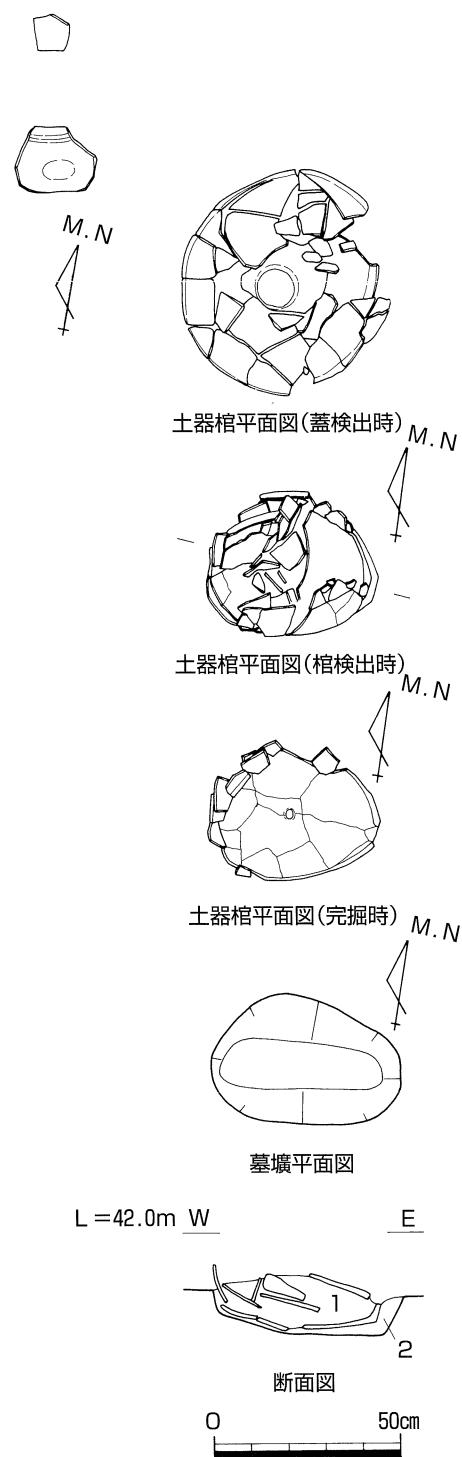
##### 土器棺墓 1 (第78・79図)

D-3区で検出した遺構で、円形の墓壙に大形の弥生土器を安置したものである。試掘調査時に確認した遺構で、造成工事によって土器棺が露出していた状態であった。土器棺の主軸方位はN-84°-Wで、西に土器の頸部を向けている。土器棺を検出した標高は41.9mである。

墓壙は、土器棺取り上げ後に、長軸50cm、短軸34cmの不整な橢円形として底近辺を確認できたのみで、深さは約10cmしか残っていなかった。墓壙底の標高は約41.75mだが、西側が東側より約5cm高い。埋土は2層に分層でき、断面は逆台形を呈している。第1層は黒褐色極細砂で、土器棺内に溜まっていた土層である。第2層は、墓壙と土器棺の間に認められた黄褐色極細砂で、墓壙の埋め戻し土と考えられる。

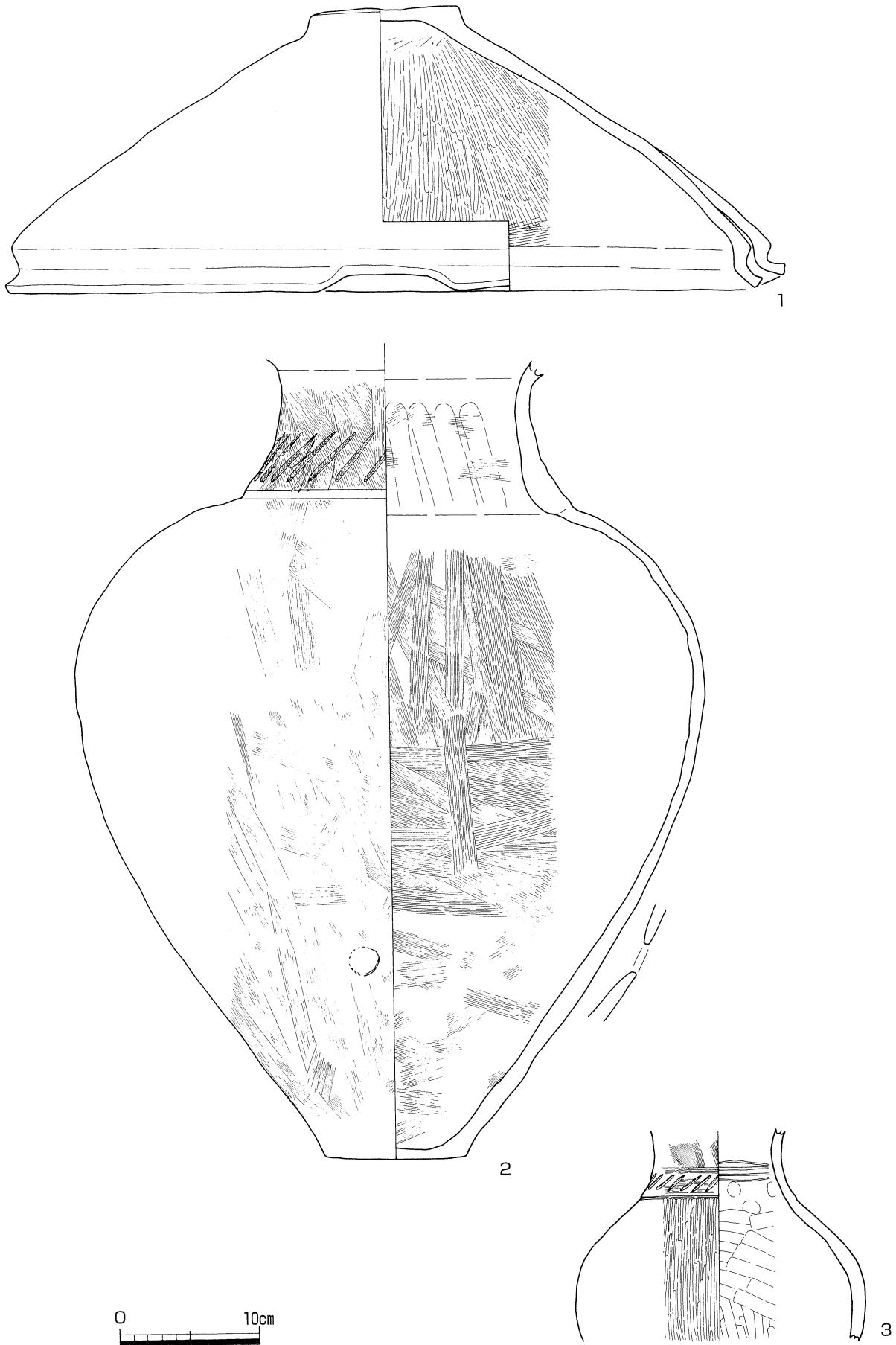
土器棺は、大形の広口壺と大形片口鉢（第79図1・2）によって構成されている。本体である大形広口壺は、口縁部が打ち欠かれ、体部下位に直径約2cmの穿孔が認められる。この穿孔部分を下に向けた状態で出土している。大形広口壺の特徴は、やや内傾した頸部に、肩が強く張った体部をもち、体部下半はやや丸みを帯びながらも直線的で、底部は平底である。内外面に刷毛調整が認められ、頸部には板状工具による押圧文が巡っている。蓋である大形片口鉢は、上下逆さまにして、大形広口壺を覆う形で検出された。その特徴は、強く「く」の字形に屈曲した口縁部に、わずかに丸みをおびた体部で、底部は平底である。口縁部は横方向のナデ、体部内面には縦方向のヘラミガキが認められる。以上の特徴から、土器棺は弥生時代後期のものと考えられる。

なお、土器棺に伴うものかどうかは不明だが、土器棺より北西に約60cm離れた地山直上から弥生土器壺（第79図3）が出土している。頸部から体部の破片で、弓なりにのびる頸部に、丸みをおびた体部をもつ。頸部外面には縦方向の刷毛調整、体部外面には縦方向のヘラミガキが認められる。体部内面の調整は、ヘラケズリである。頸部外面は、沈線間に板状工具による押圧文が巡り、内面には4条の沈線が巡っている。土器棺とほぼ同じ弥生時代後期のものと考えられる。



1. 黒褐色極細砂(花崗質、粘りがややある)
2. 黄褐色極細砂(花崗質、しまりがある)

第78図 土器棺墓 1 平面・  
断面図 (縮尺 1/20)



第79図 土器棺墓1出土遺物実測図（縮尺1/4）

### 土器棺墓2（第80・81図）

D-3区で検出した遺構で、円形の墓壙に大形の弥生土器を安置したものである。試掘調査時に確認した遺構で、造成工事によって土器棺が露出していた状態であった。土器棺の主軸方位はN-53°-Wで、西に土器の頸部を向けている。土器棺を検出した標高は42.0~42.1mである。

墓壙は、直径約62~70cmの不整な円形で、削平により深さは約20cmしか残っていなかった。墓壙底の標高は約41.8mで、埋土は5層に分層でき、断面は逆台形を呈している。第1層は暗灰色極細砂、第2層は暗黄褐色極細砂、第3層は黄褐色極細砂、第4層は暗灰色シルト質極細砂で、これら4層は土器棺内に溜まっていた土層である。特に第4層がシルト質であることから、棺内に一時水が溜まっていたと考えられる。第5層は、墓壙と土器棺の間に認められた暗黄褐色極細砂で、墓壙の埋め戻し土と考えられる。

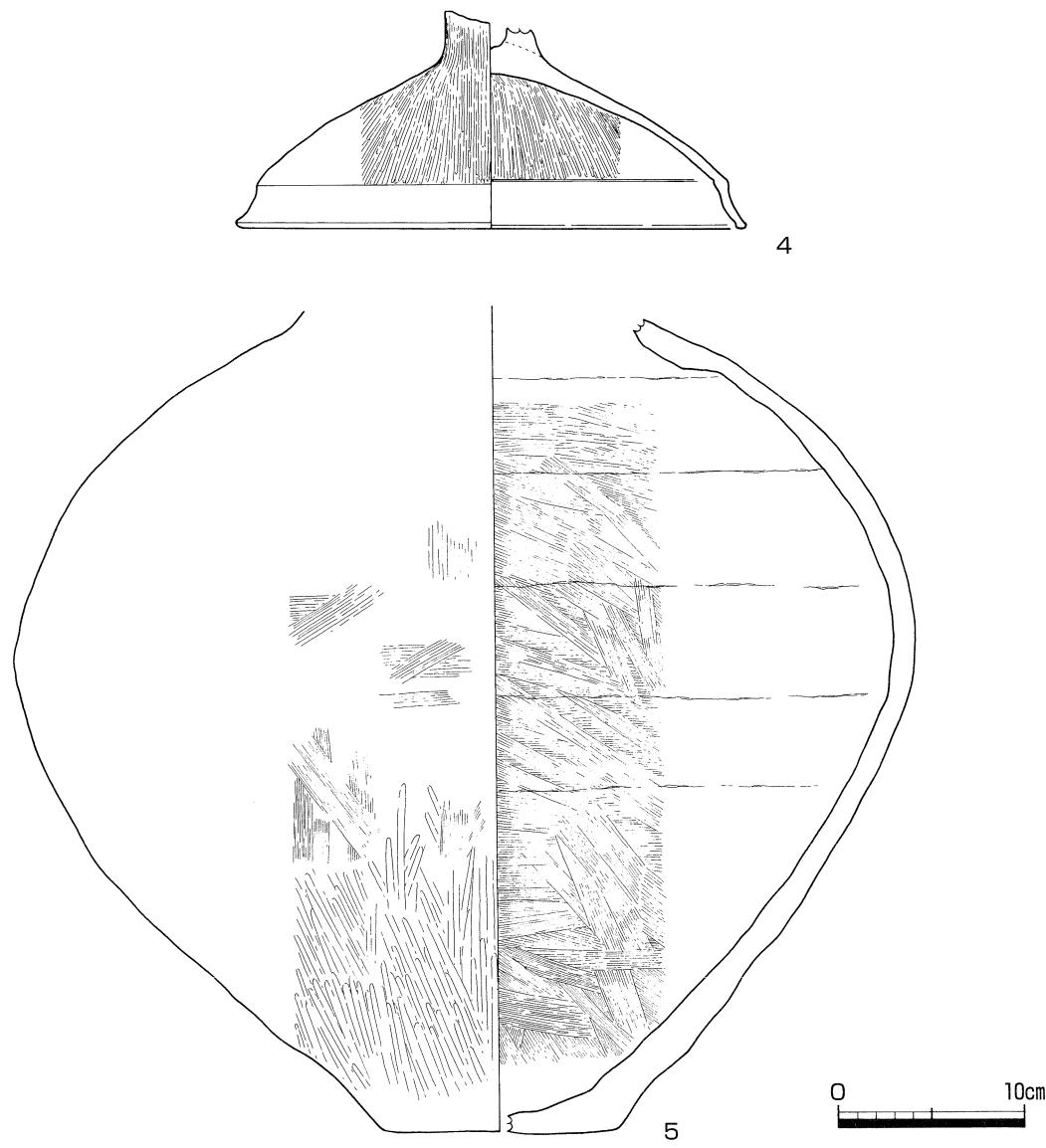
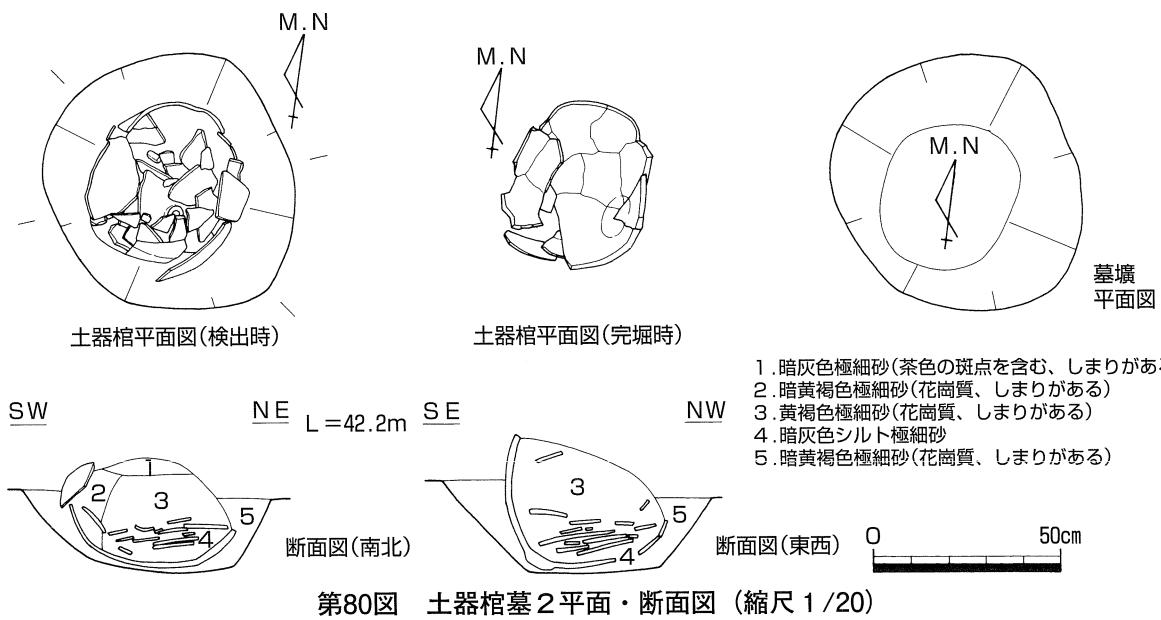
土器棺は、大形壺と高杯（第81図4・5）によって構成されている。本体である大形壺は、頸部以上が打ち欠かれていた。その特徴は、体部の最大径が中位にある球形だが、体部下半はまだ直線的な傾向を残し、底部は平底である。内外面は刷毛調整だが、体部外面の下1/3には縦方向のヘラミガキが認められる。さらに体部内面には、約6cm間隔で粘土の接合痕も見られる。蓋である高杯は、脚部が打ちかかれた杯部である。上下逆さまにして、大形壺の口を覆う形で検出された。その特徴は、ゆるやかに外反する口縁部に、わずかに丸みをおびた体部である。口縁部は横方向のナデ、体部内外面には縦方向のヘラミガキが認められる。以上の特徴から、土器棺は弥生時代後期のものと考えられる。

### 土器棺墓3（第82・83図）

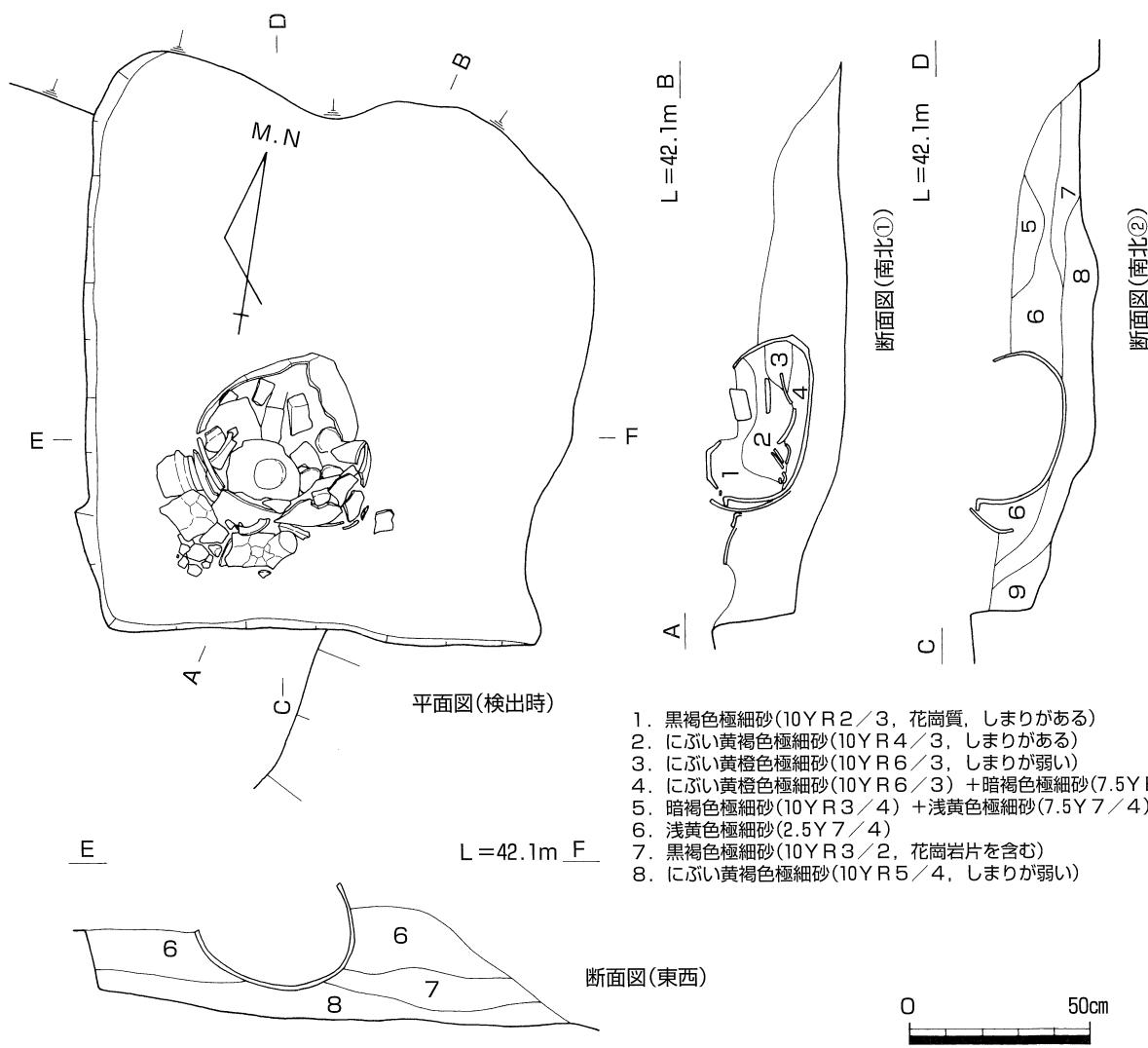
D-4区で検出した遺構で、方形と推定される墓壙の南西隅に大形の弥生土器を安置していた。土器棺の主軸方位はS-15°-Wで、南に土器の口縁部を向けている。土器棺の口縁部側には、破碎した甕破片が並べられた状態で出土しており、副葬品と考えられる。土器棺を検出した標高は42.0mである。

墓壙は、北側が造成工事によって、東側が古墳周溝によって破壊を受けていることから推定になるが、南北約1.6m以上、東西約1.4m以上の方形になると考えられる。また、上部も削平を受けており、深さは約30cm残っていた。墓壙底の標高は約41.6mで、埋土は8層に分層でき、断面は逆台形を呈していた可能性があるが、底面は水平でなく断面を見ると凹凸が見られる。第1~4層は、土器棺内に溜まっていた土層である。第1層は黒褐色極細砂、第2層はにぶい黄褐色極細砂、第3層はにぶい黄橙色極細砂、第4層はにぶい黄橙色極細砂と暗褐色極細砂の混じったものである。第5~9層は、墓壙と土器棺の間に認められたもので、墓壙の埋め戻し土と考えられる。第5層は暗褐色極細砂と浅黄色極細砂の混じったもの、第6層は浅黄色極細砂、第7層は黒褐色極細砂、第8層はにぶい黄褐色極細砂である。ただし、土器棺は第8層の上に置かれており、他の土器棺墓のように土器棺が底面に接していない。別の方形の土坑に、土器棺墓が切り合っている可能性も考えられるが、土層観察では認められなかった。

土器棺は、大形甕と大形片口鉢（第83図6・7）によって構成されている。本体である大形甕は、通常見られる打ち欠きは認められずほぼ完形である。ただし、体部下半には直径約1cmの円孔が穿たれており、この円孔は土器棺によく見られるものである。大形甕の特徴は、体部の最大径が上位にあり、体部下半は直線的にのび、底部は平底である。頸部を強く屈曲させて、短い口縁部がつく。口縁部は横方向のナデで、端部を上下につまみ出し、端面に2条の擬凹線が施されている。体部外面は丁寧な縦方向のヘラミガキが施され、体部内面の下半は縦方向のヘラケズリである。体部内面上半には、約6cm間隔で粘土の接合痕も見られる。蓋である大形片口鉢は、上下逆さまにして、大形甕の口を覆う形で検出された。その特徴は、ゆるやかに外反する口縁部に、直線的な体部で、底部は平底である。口縁部は横方向のナデで、外面に2条の擬凹線が施されている。体部内面には縦方向のヘラミガキが、体部外面には縦または横方向の刷毛調整が認められる。以上の特徴から、土器棺は弥生時代後期前半のものと考えられる。

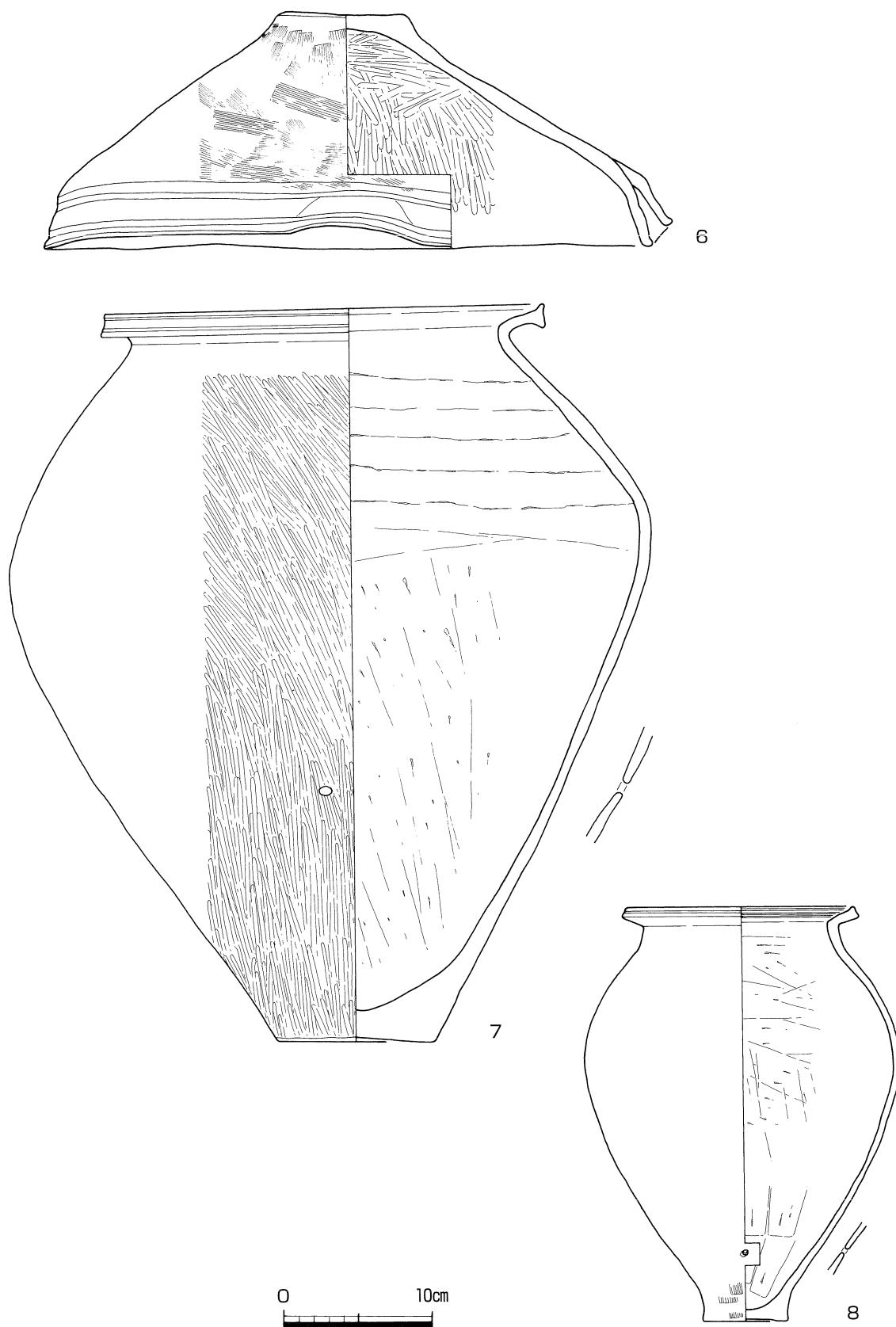


第81図 土器棺墓2出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)



第82図 土器棺墓3平面・断面図 (縮尺 1/20)

土器棺に副葬されていた甕（第83図8）は、破碎された状態で出土したが、ほぼ器形全体がわかる状態まで復元できた。甕の特徴は、体部の最大径が上位にあり丸みを帯びるが、底部近くではすぼまって、底部は平底である。体部外面の調整は摩滅著しく不明だが、底部近くには刷毛調整がわずかに残る。体部内面は、上半は横方向、下方向は縦方向のヘラケズリである。口縁部は横方向のナデで、端部に1条の擬凹線が施されている。なお、体部下半には、土器棺同様に直径約0.5cmの円孔が穿たれている。土器棺と同じ弥生時代後期前半のものと考えられる。



第83図 土器棺墓3出土遺物実測図（縮尺1/4）

#### 土器棺墓4（第84図）

C-4区で検出した遺構で、円形の墓壙に中形の弥生土器を安置したものである。上半部が造成工事によって削平されており、土器棺の中に高杯片が落ち込んでいた。このため、高杯が蓋であるかどうかは不明であり、造成工事の搅乱により混入した可能性がある。土器棺の主軸方位はN-34°-Wで、西に土器の口縁部を向けている。土器棺を検出した標高は41.6mである。

墓壙は、直径約40~45cmの不整な円形で、削平により深さは約10cmしか残っていなかった。墓壙底の標高は約41.5mで、埋土は3層に分層でき、断面は浅いU字形を呈している。第1・2層とも暗灰黄色極細砂で、土器棺内に溜まっていた土層である。ただし、第2層はやや粘質であることから、棺内に一時水が溜まっていたと考えられる。第3層は、墓壙と土器棺の間に認められた暗褐色極細砂で、墓壙の埋め戻し土と考えられる。

土器棺は、本体である中形甕（第84図10）のみが確実である。中形甕は、通常見られる打ち欠きはないと想定され、ほぼ全容が復元できた。その特徴は、体部の最大径が上位にあり、体部下半は直線的で、底部は平底である。頸部を「く」の字形に屈曲させて、短い口縁部がつく。口縁部は横方向のナデである。体部外面は、上半に叩き痕が、下半には縦方向の刷毛調整が認められる。体部内面には斜め方向のヘラケズリが認められるが、中位には縦方向の指頭ナデがある。一方、甕の中に落ち込んでいた高杯（第84図9）は、口縁部から体部の破片のみ確認できた。その特徴は、外反する口縁部に、直線的な体部である。口縁端部を外へ拡張させて、擬凹線を端面に2条施している。口縁部は横方向のナデ、体部内外面には横または縦方向のヘラミガキが認められる。以上の特徴から、土器棺は弥生時代後期のものと考えられる。ただし、中形甕と高杯を比較した場合、高杯の口縁部の特徴は後期でも古い様相を示すのに対し、中形甕の体部内面に見られるヘラケズリが頸部にまで施されている特徴は後期でも中頃のものであり、両者の間に時期差が認められる。このため、高杯が中形甕に伴うものかは判然としない。

#### 土器棺墓5（第85図）

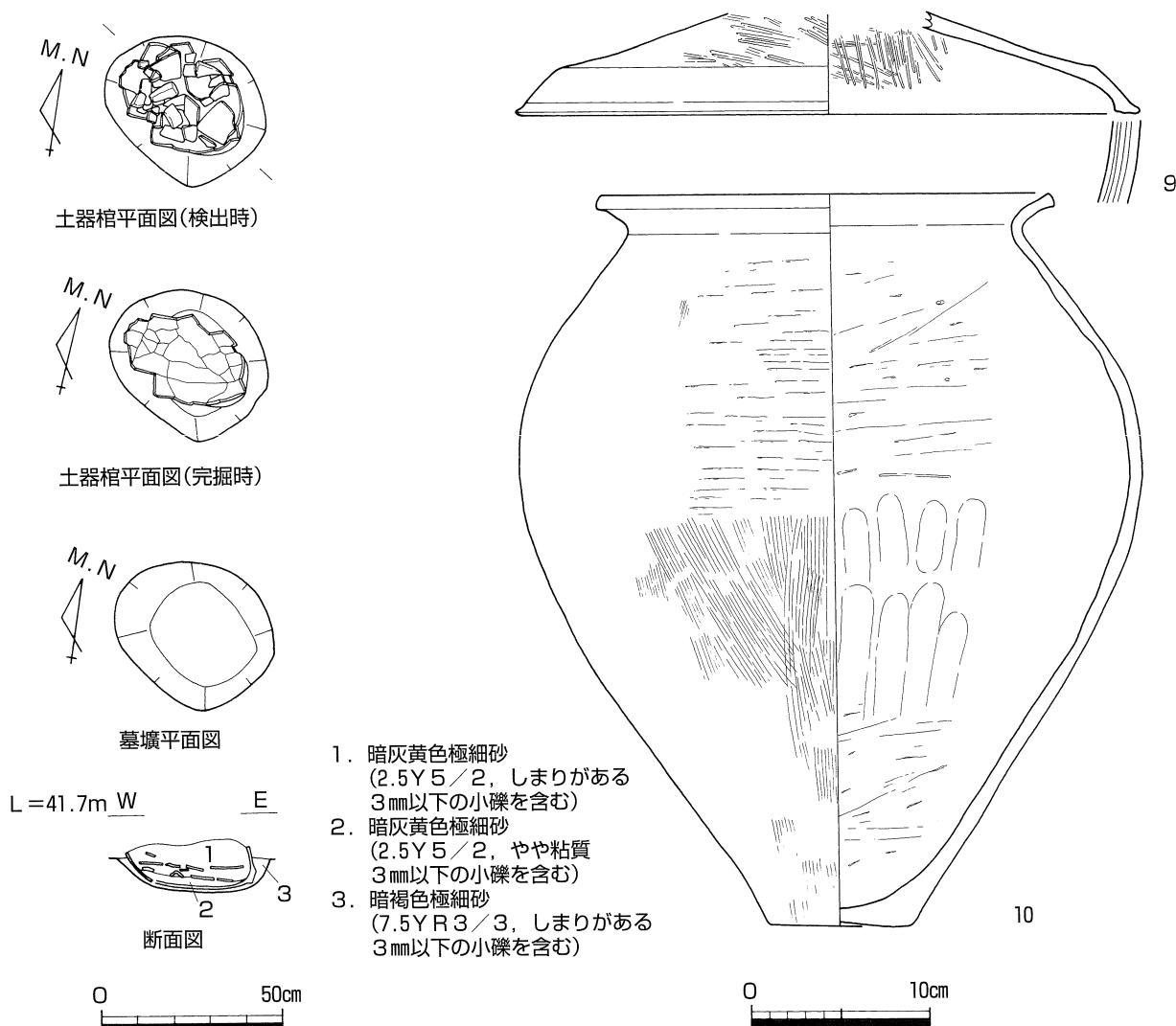
D-4区で検出した遺構で、円形の墓壙に大形の弥生土器を安置したものである。造成工事によって、土器棺の一部が露出していた状態であった。土器棺の主軸方位はS-81°-Wで、西に土器の口縁部を向けている。土器棺を検出した標高は42.0~42.2mである。

墓壙は、直径約45~50cmの不整な円形で、削平により深さは約30cmしか残っていなかった。墓壙底の標高は約41.75mで、埋土は3層に分層でき、断面は逆台形を呈している。第1層は暗灰黄色極細砂、第2層は黄褐色極細砂で、これら2層は土器棺内に溜まっていた土層である。第3層は、墓壙と土器棺の間に認められた黄褐色極細砂で、墓壙の埋め戻し土と考えられる。

土器棺は、大形広口壺と高杯（第85図11・12）によって構成されている。本体である大形広口壺は、通常見られる打ち欠きは認められずほぼ完形である。その特徴は、体部の最大径が中位にある球形で、底近くではすぼまり、底部は平底である。体部内外面は刷毛調整だが、外面の下1/3には縦方向のヘラミガキが認められる。体部内面は、上1/3に指頭圧痕、下2/3に縦方向のヘラケズリが見られる。頸部は、ゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁端部を上下に拡張させている。頸部外面には斜め方向の刷毛調整、内面には横方向のヘラミガキが認められる。最大の特徴は加飾が著しいことにあり、口縁端面には6条の擬凹線文と円形浮文がめぐり、頸部と体部の境には1条の貼付突帯と「く」の字形の押圧文がめぐっている。一方、蓋である高杯は、脚部下半が打ち欠かれ、上下逆さまにして、大形広口壺の口を覆う形で検出された。その特徴は、強く外反する口縁部に、直線的な体部で、脚部はラッパ状に開く。口縁部は横方向のナデ、体部内面には横方向の刷毛調整と縦方向のヘラミガキが認められる。脚部には、円形の穿孔が認められるが、穿孔の個数は不明である。以上の特徴から、土器棺は弥生時代後期のものと考えられる。

#### 木棺墓（第86図）

C-4区で検出した遺構で、長方形の土壙に木棺の痕跡を確認したことから木棺墓と認定した。造成工事によって大部分は削平を受け、底しか残っていなかった。



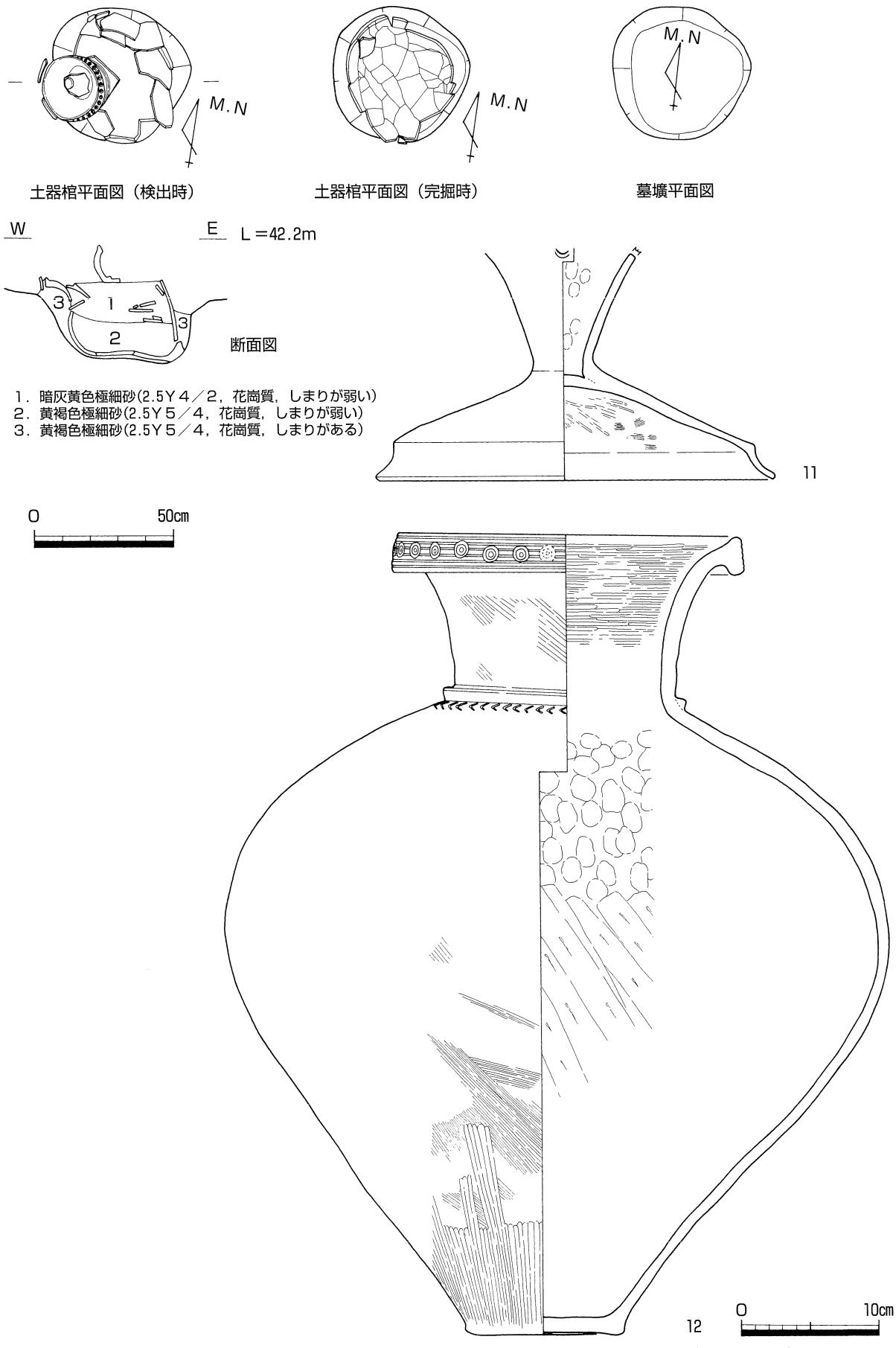
第84図 土器棺墓4平面・断面図（縮尺1/20）出土遺物実測図（縮尺1/4）

木棺の主軸方位はN-49°-Wで、北北西にのびる丘陵に対して斜行しているように見えるが、実際は等高線に沿って築かれている。検出した標高は41.5mである。

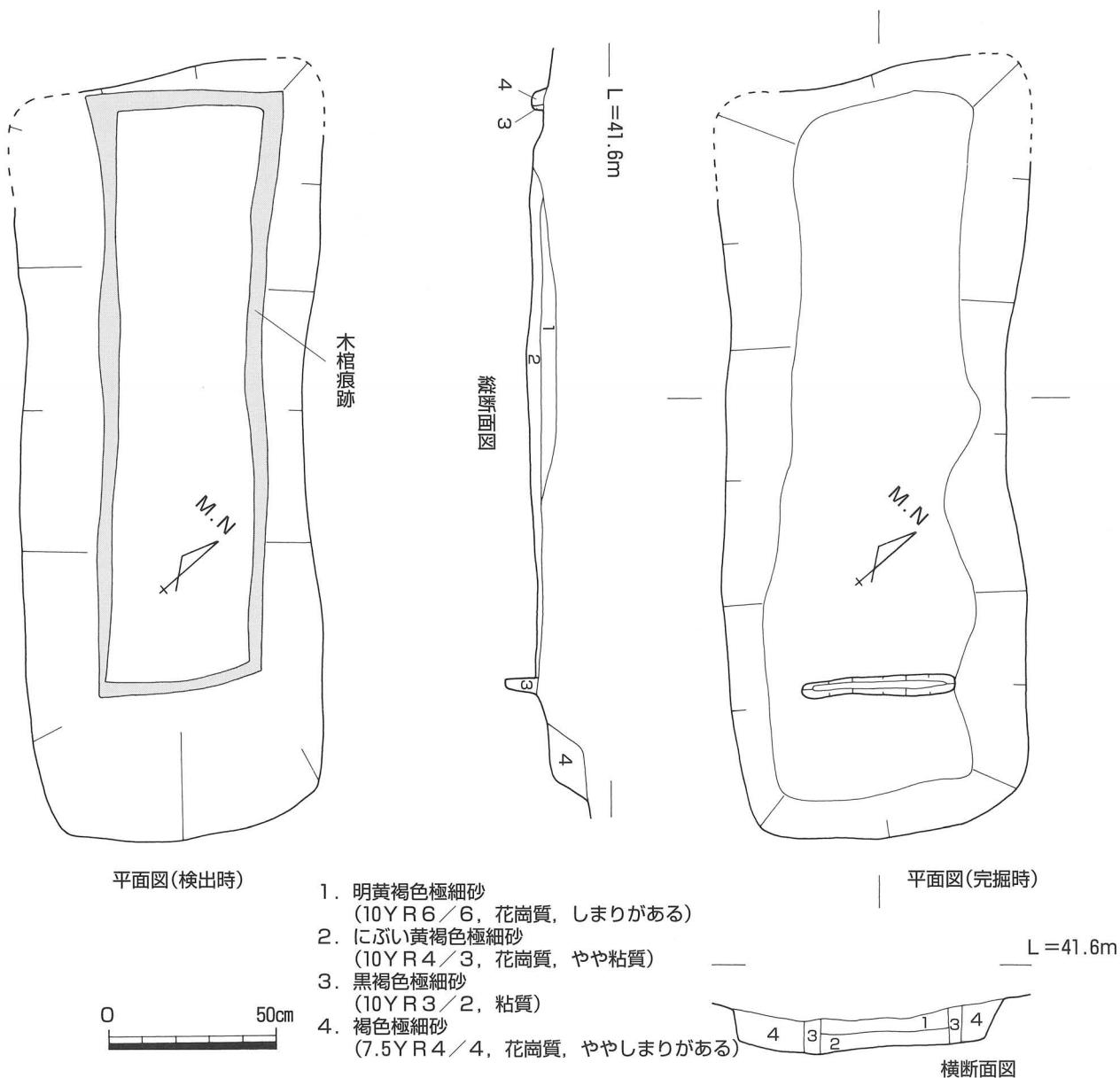
墓壙は、幅約85~90cm、長さ約2.25mの長方形だが、北西と南西の隅を削平によって欠いている。深さは5~10cmを測る。墓壙底の標高は約41.35mでほぼ平坦な水平だが、西側がやや高い。埋土は4層に分層でき、横断面と縦断面とも逆台形を呈している。第1層は明黄褐色極細砂、第2層はにぶい黄褐色極細砂で、木棺内に溜まっていた土層である。第3層は黒褐色極細砂で、木棺が腐って土壤化したものである。第4層は褐色極細砂で、墓壙と木棺の間に詰められていた土層である。

木棺の内法は、小口側で幅約42cm、中央付近で幅約37cm、長さ約1.7mを測る。棺材の厚さは、約5cmである。小口の幅が東西ほぼ同じのため、遺体を安置した向きは不明である。また、小口の底には溝状の窪みが見られることから、小口板の底が出っ張る形式の木棺であることが分かり、福永伸哉氏の分類によればI形式にあたる（福永1987）。この溝状遺構の底の標高を比較すると、西側が東側より8cmほど高いが、何に起因するかは不明である。

出土遺物はなく、時期の特定は難しい。木棺の構造が弥生から古墳時代に見られること、弥生時代後期の土器棺墓群と同じ場所にあること、隣接する箱式石棺と同じく等高線に沿って築かれていることから、土器棺墓群や箱式石棺と同じ弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと推測される。



第85図 土器棺墓5平面・断面図（縮尺1/20）出土遺物実測図（縮尺1/4）



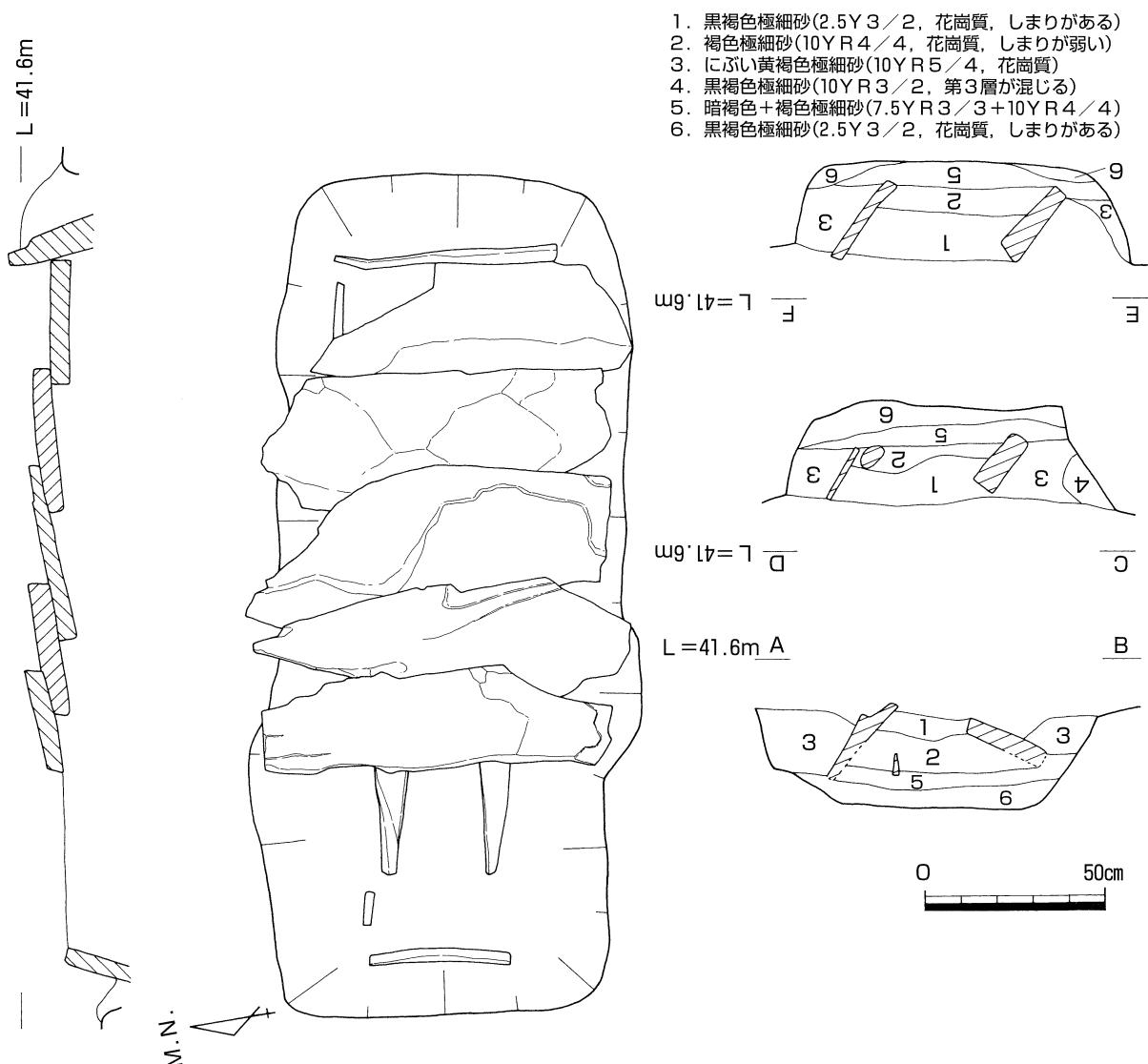
第86図 木棺墓平面・断面図（縮尺1/20）

## 箱式石棺墓（第87～90図）

B-3区で検出した遺構で、長方形の墓壙に安山岩の板石を箱状に組み合わせて石棺としている。試掘調査時には造成工事によって蓋石の一部が露出しており、被覆土としては腐葉土層しか確認できなかった。蓋石の一部が失われ、石材は傾いていたが、これらは造成工事に起因するものと考えられ、中の埋土を観察する限りでは盗掘は一切受けておらず良好な状態であった。

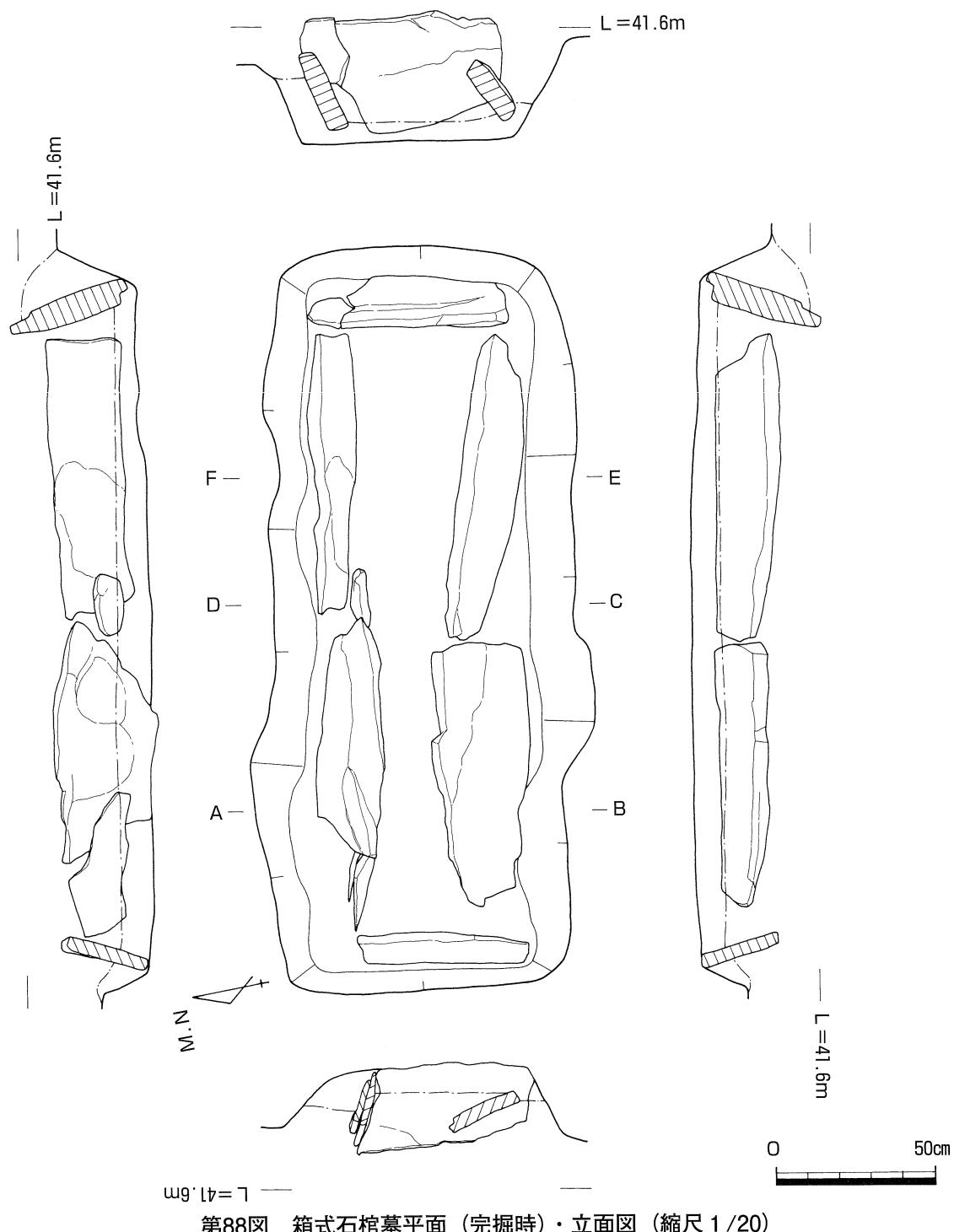
石棺の主軸方位はS-79°-Wで、北北西にのびる丘陵に対して斜行しているように見えるが、実際は等高線に沿って築かれている。石棺を検出した標高は41.6mである。

墓壙は、幅約1.0m、長さ約2.3mの長方形で、蓋石を除いた深さは30cmを測る。墓壙底の標高は約41.2mで、ほぼ平坦な水平である。埋土は6層に分層でき、横断面と縦断面とも逆台形を呈している。第1層は黒褐色極細砂、第2層は褐色極細砂で、これら2層は石棺内に溜まっていた土層である。第3層はにぶい黄褐色極細砂、第4層は黒褐色極細砂で、これら2層は墓壙と石棺石材の間に詰められていた土層である。第5層は暗褐色+褐色極細砂、第6層は黒褐色極細砂で、これら2層は墓壙に石棺石材を固定するため墓壙底に敷かれた土層である。

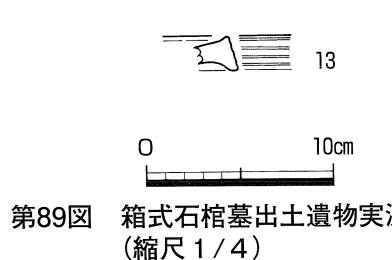


第87図 箱式石棺墓平面（検出時）・断面図（縮尺1/20）

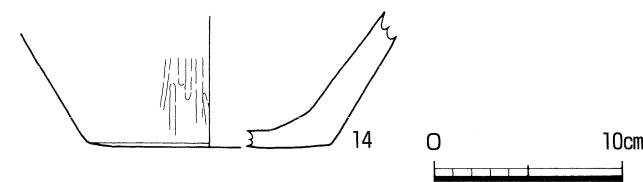
石棺は、墓壙内に安山岩の板石を、長辺（側壁）側に2枚ずつ、短辺（小口）側に1枚ずつ立てて組み立てており、北側壁の隙間が開く部分には小さな石を充てている。側壁の石材は、幅約80～90cm、高さ約30cm、厚さ5cm前後の大さである。小口の石材は、幅約50～60cm、高さ約30～40cm、厚さ約5～9cmの大きさである。両石材とも工事の際に重機が上に乗ったことにより直立しておらず、側壁は北に、小口は内側に傾いていた。このため石棺の寸法は誤差を生じている可能性があるが、内法は、東側で幅約45cm、西側で幅約40cm、長さ約2mを測ることから、遺体は東枕であったと推測される。側壁・小口石を覆う形で、安山岩の板石が蓋石として使用されていた。蓋石は、調査時には5枚残っており、東端から西に向かって石材の一部を重ねながら並べられていた。西端の蓋石が失われていたが、石棺の大きさから類推して、あと2枚の蓋石があったと考えられる。蓋石の石材は、幅1m前後、長さ約30～50cm、厚さ5cm前後の大きさである。なお、東端の石材は、北東隅が欠損している。



第88図 箱式石棺墓平面（完掘時）・立面図（縮尺 1/20）



第89図 箱式石棺墓出土遺物実測図  
(縮尺 1/4)



第90図 箱式石棺墓周辺出土遺物実測図（縮尺 1/4）

遺物は、石棺内の埋土である第2層上面から1点出土したのみである。第89図13は弥生土器広口壺の口縁部片で、上下に拡張した端部に4条の擬凹線をめぐらしており、後期のものである。また、石棺周辺から第90図14の弥生土器底部片が1点出土している。これらの弥生土器は細片であるため、石棺に供献されたものとは考えがたく、石棺に混入したものと考えられる。石棺周辺に後期の土器棺墓が点在していることを考慮すると、これら弥生土器は土器棺墓に伴うものである可能性がある。

以上のことから、出土した土器より石棺の年代を決定することはできない。しかしながら、弥生時代後期の土器棺墓群と同じ場所にあること、県内の古墳時代前期の箱式石棺が丘陵頂部に立地していることを考慮すると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと推測される。

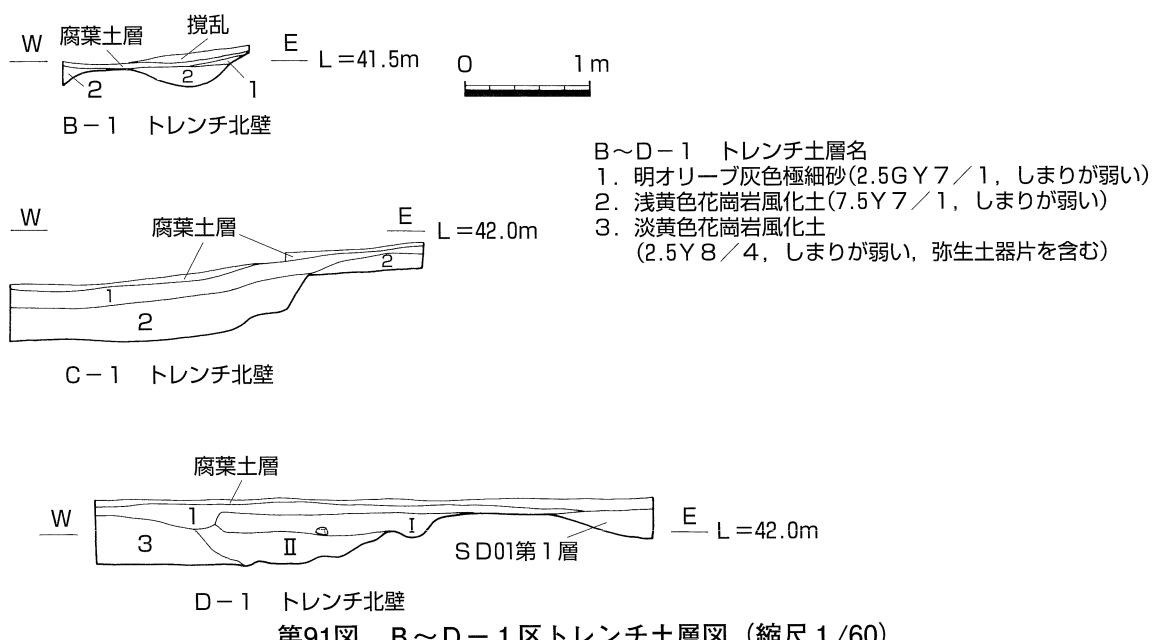
## (2) 古墳時代後期の遺構と遺物

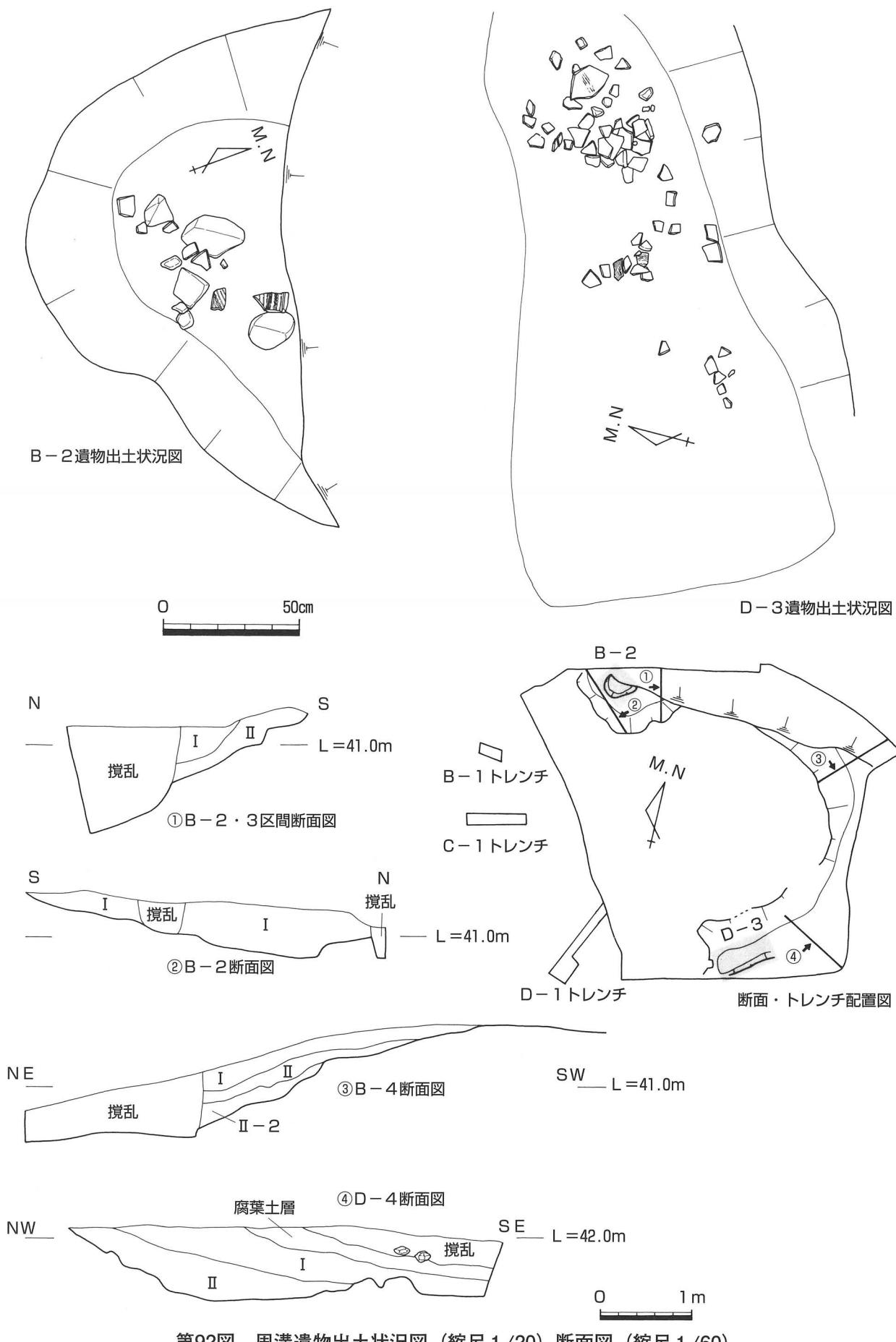
### 周溝（第74～77・91～93図）

B-2区およびB-4区からC-4区、D-4～2区にかけて検出した遺構で、地山を深く削り込むことにより、平面では直径約16mの半円形状に、断面では台形状に地山を成形している。B-2区とD-3区では、溝状となって遺構が終わっていることから周溝と称した。なお、B-3・4区では、造成工事により遺構が失われている。また、調査区西隣に周溝の対となる遺構の有無を確認するため試掘トレンチを3本設定した（第74・91図）。その結果、B・C-1トレンチでは周溝は確認できなかったが、D-1トレンチで周溝を確認できたことから、調査区の西側にも周溝が続いていることが明らかになった。トレンチ調査の成果も合わせると、周溝の平面規模は南北約16m、東西約18mの橢円形となる。

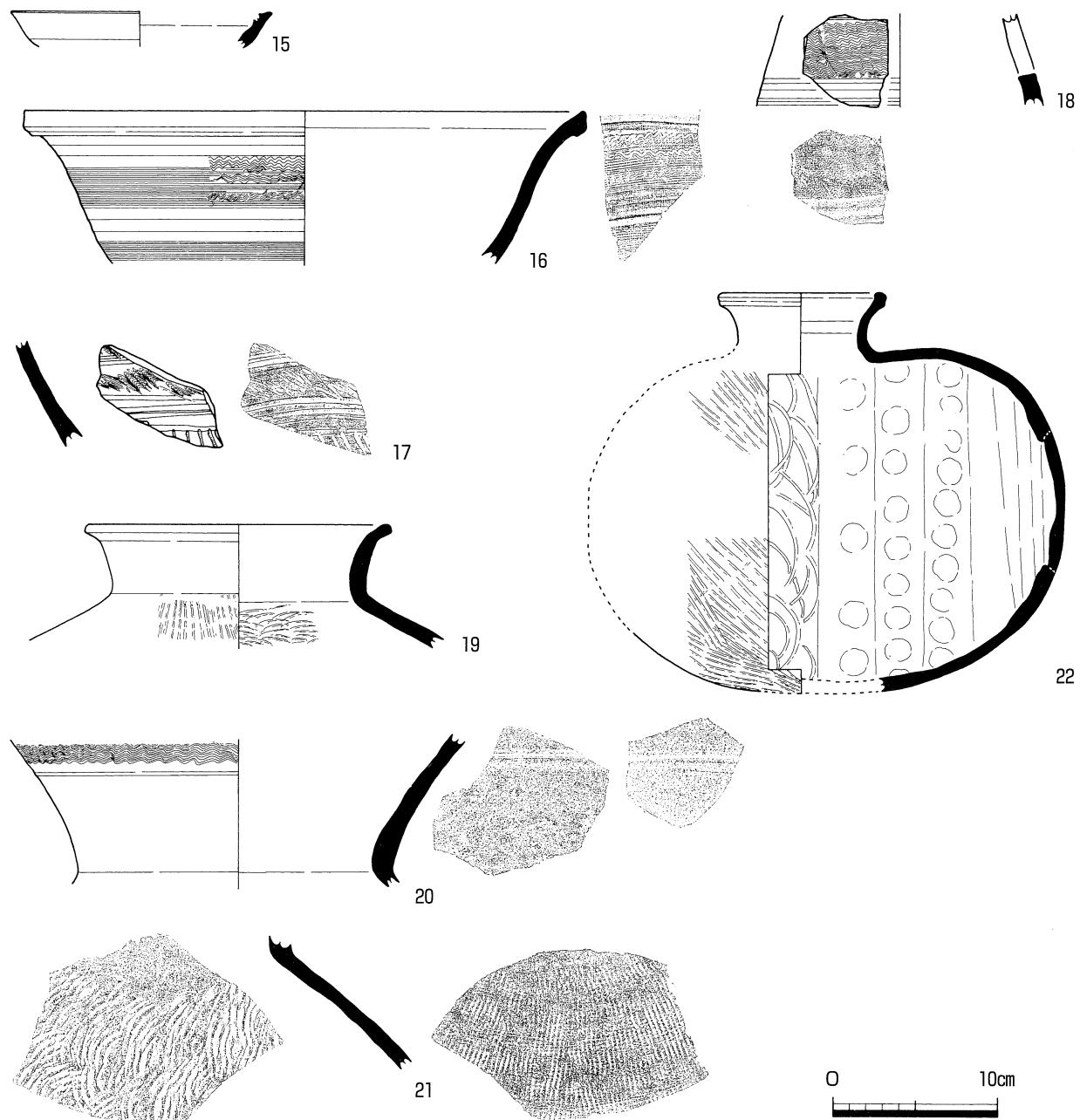
周溝は、調査区では幅3～4m、深さは約60～80cmを測り、D-1トレンチでは幅約2m、深さ約40cmを測る。溝底の標高は、北側で約40.6m、東側で約40.8m、南側で約41.4m、西側で約41.8mを測り、地形に左右されて不均等である。そのため、もっとも高い地点からの比高差は、北側で約1.6m、東側で約1.4m、南側で約80cm、西側で約40cmを測る。

埋土は5層に分層できる。I層は明黄褐色極細砂、II層はにぶい黄褐色極細砂で、これら2層が周溝全体を上層として覆っている。II-2層は黄褐色極細砂で、C-4区にのみ見られる部分的なものである。III層は暗灰黄色極細砂、IV層はオリーブ黄色極細砂で、D-3・4区のみに下層として堆積していた。



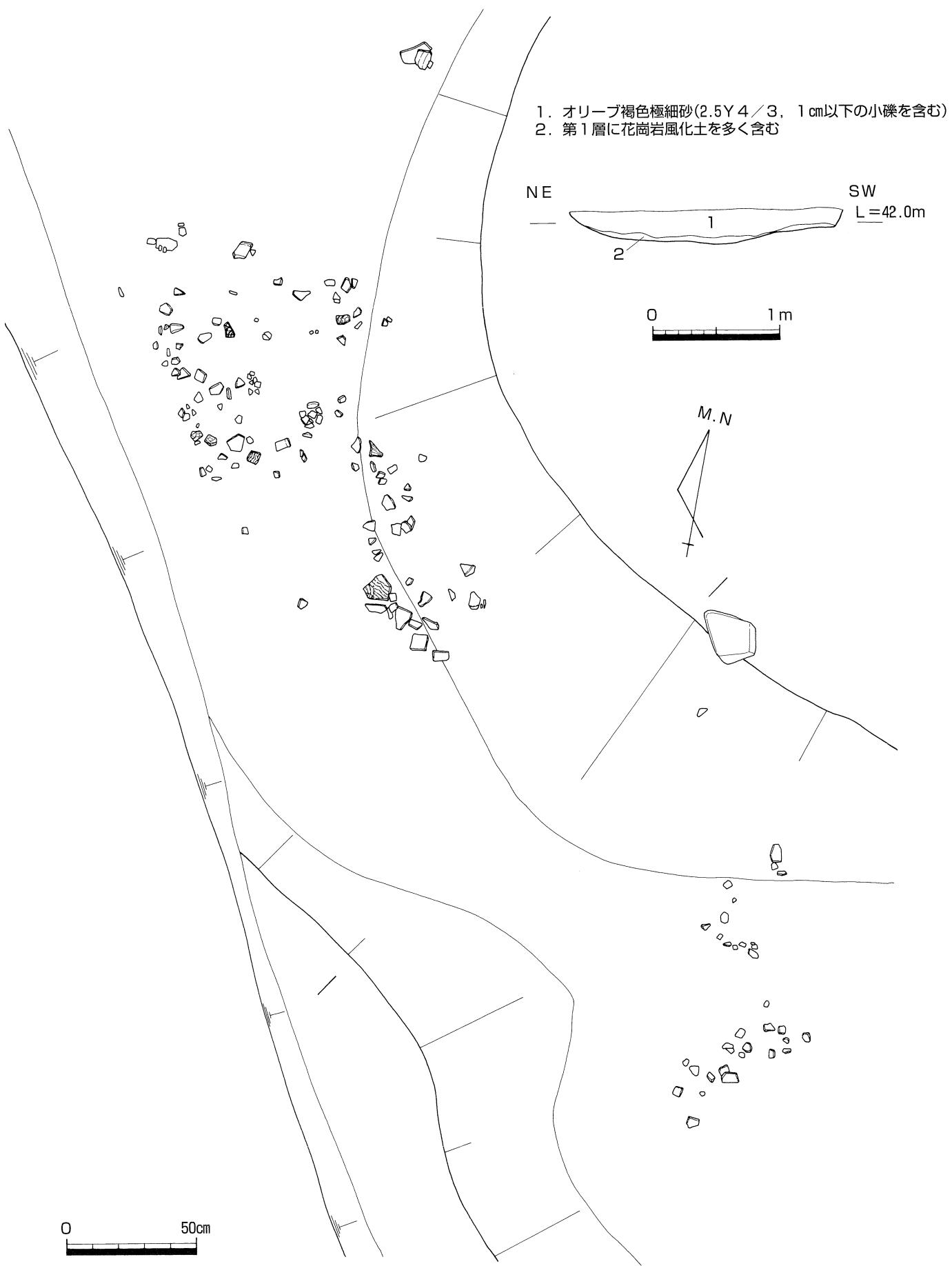


第92図 周溝遺物出土状況図（縮尺1/20）断面図（縮尺1/60）

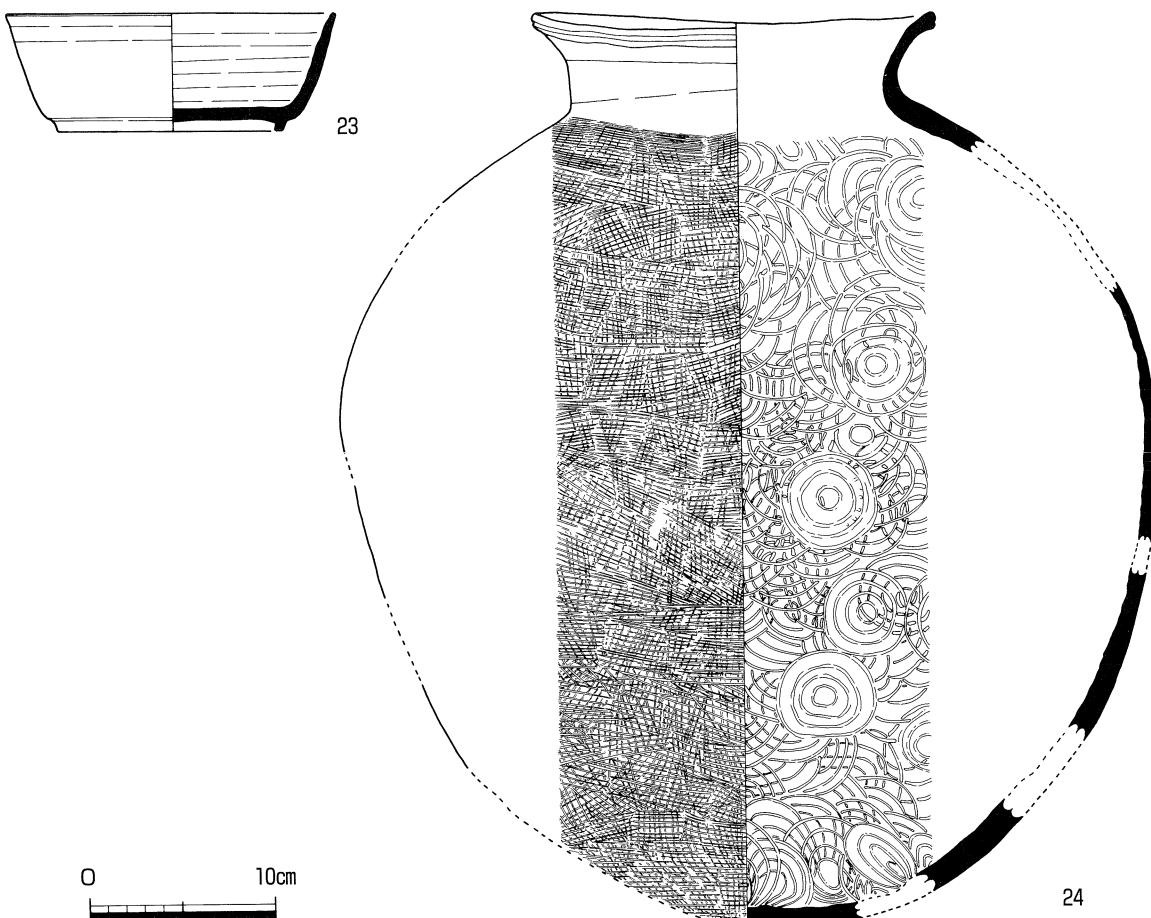


第93図 周溝出土遺物実測図（縮尺 1/4）

遺物は、周溝の終端であるB-2区・D-3区において、第92図に示すとおりまとまって出土している。出土遺物は、すべて須恵器であり第93図に示したとおりで、16・17がB-2区第II層から、18がB-4区から、15・19～22はD-3区第III層から出土している。15は杯の体部破片で、口縁のかえりを欠損している。受部での復元最大径が約16cmとなることから、口径が13cm前後に復元できる小形のものである。16は器台の杯部破片で、外面に波状文が施されている。17は器台脚部の破片で、外面には波状文や直線文などが見られる。16・17は胎土等が似ており、同じ地点から出土していることから同一個体の可能性がある。18は器台の脚部破片で、外面に波状文と直線文が施され、方形の透かし穴が認められる。19は甕の口縁部～体部にかけての破片で、短い口頸部がゆるく外反しながらのびる。20は甕の頸部破片で、外面に波状文が施されている。21は甕の体部片である。22は横瓶で、破片で出土したが、ほぼ全容がわかるまで復元できた。丸みを帯びた体部に、短い口頸部が付く。外面には平行目の叩き痕が、内面には同心円文の当て具痕が、消されないで残っている。これら須恵器を概観した場合、杯の形態や口径、横瓶の形態などから、大阪府陶邑編年（田辺1981）のTK-217型式に相当するものであり、7世紀第2四半期頃のものと考えられる。



第94図 S D O 1 遺物出土状況図（縮尺 1/20）断面図（縮尺 1/40）



第95図 S D O 1出土遺物実測図（縮尺 1/4）

### (3) 奈良時代の遺構と遺物

#### S D O 1 (第94・95図)

D-2区で検出した溝で、平面は円弧を描いており、円の南西側1/4にあたる。北側は造成工事により失われ、西側の一部は調査区外にかかり、南側で終わっている。

幅は狭いところで1.8m、広いところで2.1mを測り、一定しない。検出長は約8m、深さは25cmを測る。溝底の標高は約41.8m前後を測り、ほぼ水平である。埋土は2層に分層でき、断面形状は浅いU字形を呈している。第1層はオリーブ褐色極細砂で上層としたもので、第2層は第1層に花崗岩風化土が多く混じるもので下層とした。

遺物は、第2層直上から須恵器・土師器・弥生土器が出土し、そのうち須恵器2点が図化できた。第95図23は高台を付した深手の杯で、体部が斜めに直線的に立ち上がる。高台は、底部の縁近くに付く。口径は17.6cmである。24は大形の甕で、球形の体部に、短く外反する口頸部が付く。体部外面には格子目の叩き痕が、内面には同心円文の当て具痕が残っている。第94図に示すとおり、碎片で散らばった状態で出土し、破碎されて遺棄された可能性がある。杯の形態から、十瓶山窯跡群編年（佐藤1993）のII-2型式に相当するものであり、8世紀中頃のものと考えられる。

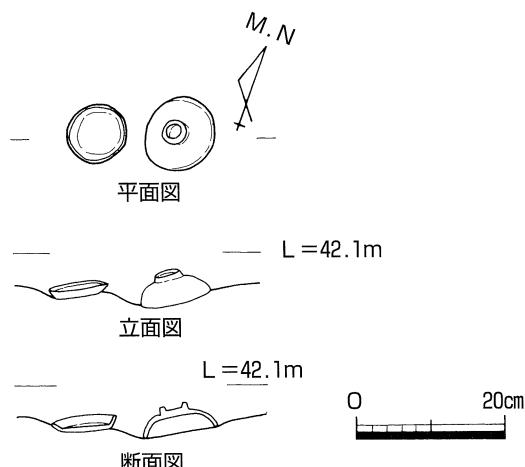
### (4) 室町時代の遺構と遺物

#### 中世墓（第96・97図）

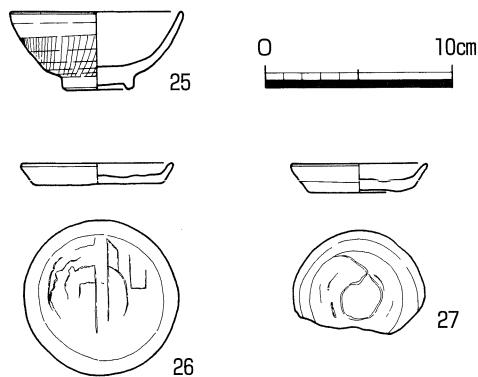
D-2区で検出した遺構で、重機による表土掘削を行っていたところ、磁器碗がうつ伏せで、土師質土器がその隣から出土したものである。削平が著しく遺構の形態は不明で、検出した標高は約42.1mであ

る。土器の出土状態から、墓の可能性を指摘できるが断定はできない。

第97図25は中国産青磁碗で、口径9.2cmの小形のものである。高台は削り出して、やや丸みを帯びた体部外面には櫛描文が施されている。26は土師質土器皿で、口径は8.1cmと小さく、器高は1.2cmと低い。底部外面は、回転ヘラケズリ後に板状工具によるナデが施されている。27も、25・26と同じ位置から出土した土師質土器皿で、口径は7.2cmと小さく、器高は1.5cmと低い。これら磁器・土器を概観した場合、室町時代のものと考えられる。



第96図 中世墓遺物出土状況図（縮尺1/10）

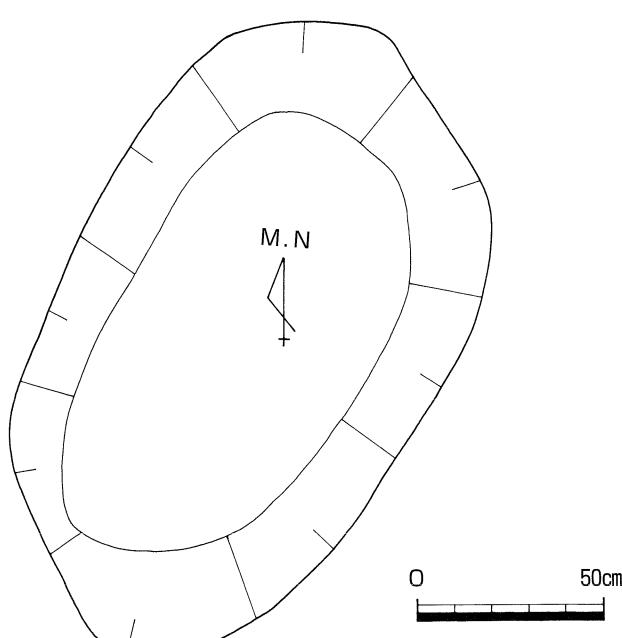


第97図 中世墓出土遺物実測図（縮尺1/4）

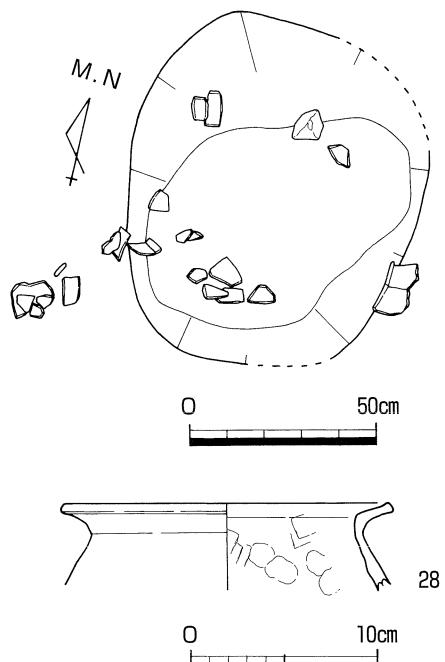
### （5）所属時期不明の遺構

#### S K O 1（第98図）

C-4区で検出した遺構で、不整な楕円形を呈する。木棺墓の北西端を壊している。南北で1.8m、東西で1.1mを測り、深さは約10cmを測る。検出した標高は41.4mである。断面形状は浅いU字形を呈する。出土遺物はなく、時期は不明である。



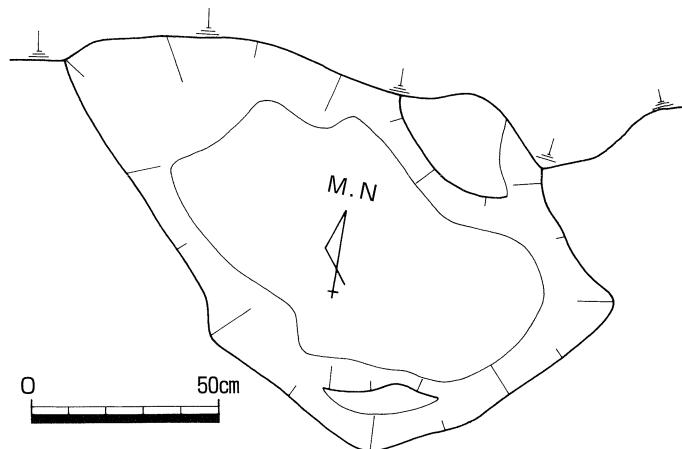
第98図 SKO 1平面図（縮尺1/20）

第99図 SKO 2平面図（縮尺1/20）  
出土遺物実測図（縮尺1/4）

**S K O 2 (第99図)**

D-3区で検出した遺構で、不整な円形を呈する。土器棺墓1・2と東西端の一部が重なっているが、前後関係は不明である。南北で80cm、東西で90cmを測り、深さは約10cmを測る。検出した標高は約42mである。断面形状はU字形を呈している。

弥生土器甕（第99図28）が周辺から出土している。口頸部の破片で、直線的な口縁が斜め方向にのびる。弥生時代後期のものと考えられる。



第100図 SKO 3 平面図（縮尺 1/20）

**S K O 3 (旧S T O 3) (第76図③・100図)**

D-3区で検出した遺構で、不整な四角形を呈するが、造成工事により北側が失われている。南北で1.1m以上、東西で1.4mを測り、深さは約40cmを測る。検出した標高は42.1mである。埋土は暗褐色極細砂(10YR3/3、やや粘質)の1層のみで、断面形状はU字形を呈している。出土遺物はなく、時期は不明である。

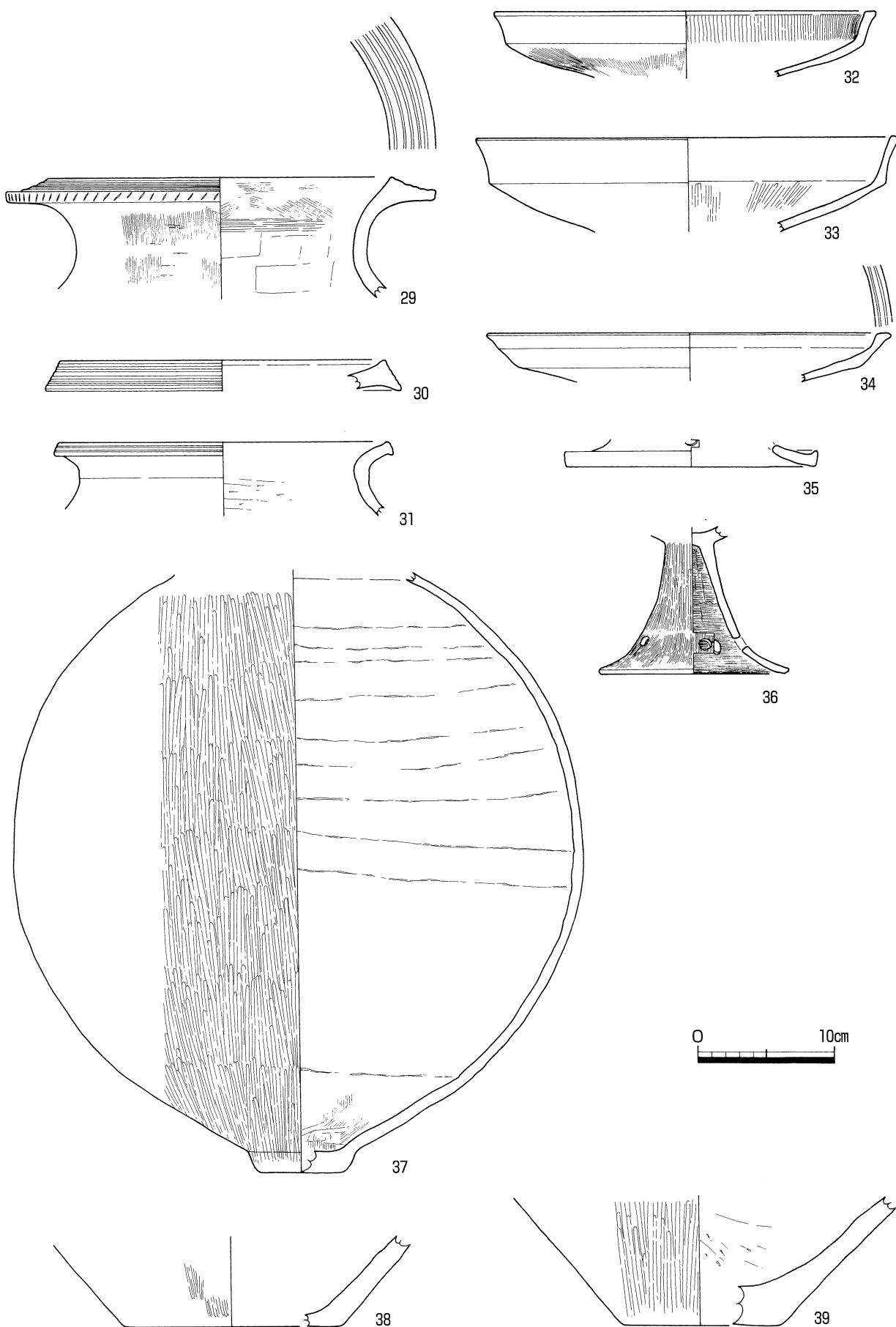
**S K O 4 (第76図②・77図⑥)**

調査区南壁およびD-2・3区間土層観察用畦畔で検出した遺構である。そのため平面形は不明だが、南北で1.1m以上、東西で1.4mを測り、深さは約20cmを測る。遺構上面の標高は41.8mである。遺構全体を周溝埋土第I層によって覆われており、周溝に隣接することから、周溝に伴う遺構の可能性もある。埋土は黒褐色シルト質極細砂(5YR3/1、炭を含む)の1層のみで、断面形状は浅いU字形を呈している。出土遺物はなく時期は不明であるが、周溝埋土第I層に覆われ、第I層が奈良時代のSD01より先行することから、古墳時代後期に近い時期のものと考えられる。

## (6) 搅乱土層出土の遺物 (第101・102図)

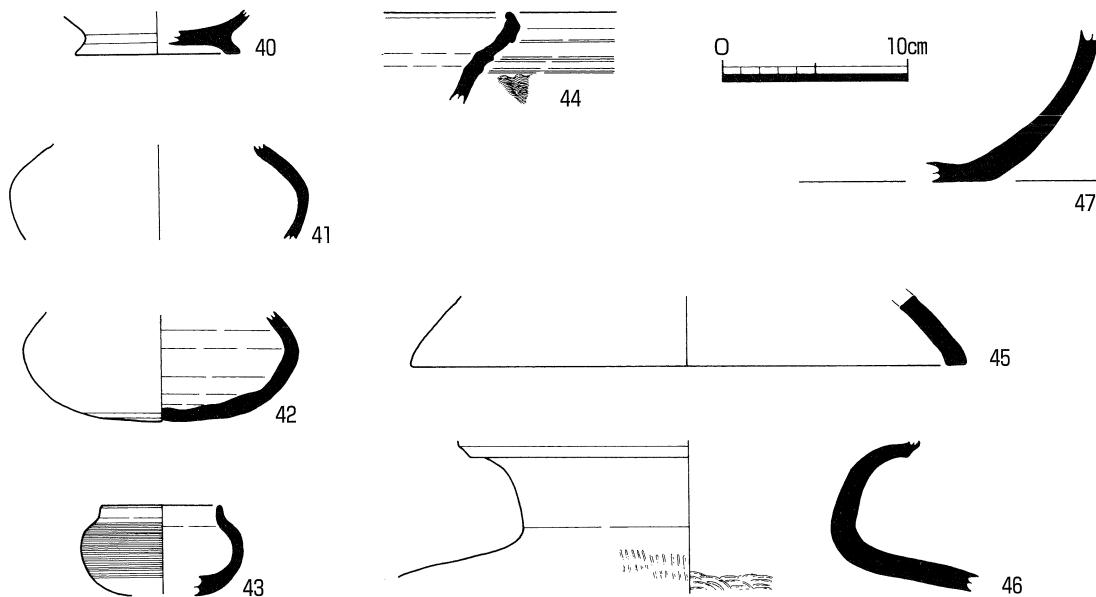
調査地全域において、造成工事によって生じた搅乱土層の中から遺物が出土している。これら遺物は、本来遺構または包含層に伴っていたが、造成工事により原位置を失ったものと考えられる。

第101図29～39は、弥生土器である。29は広口壺の口頸部破片で、弓なりの頸部に、端部を外へ大きく拡張した口縁部が付く。拡張された口縁端面には5条の擬凹線が施され、さらに外側にも刻み目が施されている。30も広口壺の口縁部破片で、上下に拡張された口縁端面には5条の擬凹線が施されている。31は甕の口縁部破片で、弓なりの頸部に、わずかに拡張した口縁端面には2条の擬凹線が施されている。32は高杯の口縁～体部の破片で、直立気味に短い口縁が立ち上がり、わずかに端部を拡張している。体部外面には縦方向の刷毛調整が、口縁部内面には条線文が施されている。33も高杯の口縁から体部の破片で、直立気味に口縁が立ち上がるが、32に比べ口径が大きく、口縁部が長く、端部の拡張はない。体部内面に縦方向のヘラミガキが施されている。34も高杯の口縁から体部の破片で、口縁は斜めに立ち上がり、端部を拡張している。拡張された端面には擬凹線が2条施されている。35は高杯の脚部破片で、端部を上方向に拡張している。円孔が穿たれている。36も高杯の脚部破片で、ラッパ状に開く形態を呈する。外面には縦方向のヘラミガキと刷毛調整が施され、内面には横方向の刷毛状の擦痕が見られ、丁寧な仕上げがなされている。37は壺の体部から底部で、本来は土器棺として使用されたものと考えられる。球形の体部に、平らな底部がつく。体部外面には縦方向のヘラミガキが施され、内面には粘土接合痕が明瞭に残っている。生駒西麓産の可能性がある（注1）。38・39は底部の破片で、平底である。以上の弥生土器を概観すると、細かい時期差は存在するが、おおむね土器棺群と同じ弥生時代後期のものである。



第101図 搅乱土層出土遺物実測図① (縮尺 1 / 4)

第102図40～46は、須恵器である。40は壺の高台付き底部破片で、長頸壺の可能性がある。41・42は壺の体部および底部破片で、やや肩が張った扁平な球形を呈する。短頸壺の可能性がある。43は小形の短頸壺の破片で、やや肩が張った扁平な球形の体部に、直立した短い口縁が付く。体部外面にはカキ目が施されている。44は器台の口縁部破片で、断面は緩くS字状に湾曲している。外面には波状文が施されている。45は器台の脚部と考えられる破片である。46は甕の頸部から体部破片である。47は須恵質土器または陶器の底部破片である。以上の須恵器を概観すると、47は中世以降のものだが、他はおおむね周溝と同じ古墳時代後期後半のものである。



第102図 搅乱土層出土遺物実測図②（縮尺1/4）

#### 参考文献

佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

福永伸哉1987「木棺墓」『弥生文化の研究』第8巻 金闇恕・佐原眞編 雄山閣出版

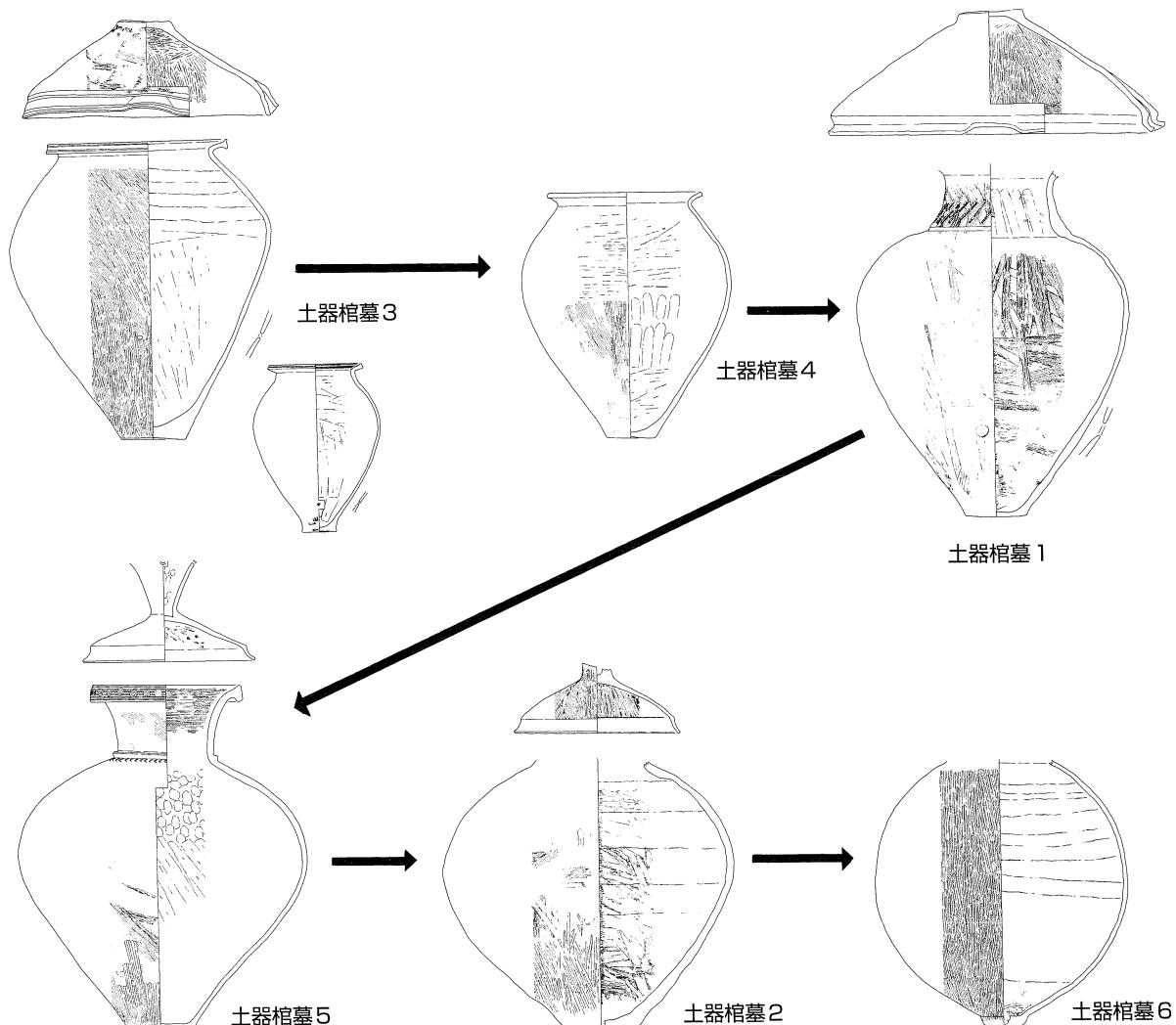
(注1) 濱田延充氏の教示による

## 第2章 まとめ

### 第1節 土器棺墓について

#### (1) 土器棺墓の変遷と時期 (第103図)

久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—から出土した土器棺について、その形態および調整から変遷を検討したい。土器棺墓1～5と搅乱土層中から出土した土器棺（土器棺墓6と呼称）を比較すると、体部の最大径が上位にあり古相を呈する1・3・4・5と、体部が球形化し新相を呈する2・6に分けることができる。古相を呈するものの中でも、3は体部最大径での屈曲が「く」の字形だが、1・4・5は丸みを帯びており、3がより古い様相を示している。同じ甕である3と4を比較した場合でも、3の口縁端面に擬凹線が残り、3の内面のヘラケズリが上半にまで達していないことなど、4より3の方が古いことが指摘できる。これらの特徴から、3は後期前葉末～中葉初頭と考えられ、土器棺4はそれより新しい後期中葉と考えられる。なお、土器棺墓3に副葬されていた甕は、内面のヘラケズリが上半にまで達しているが、口縁端面の擬凹線やすぼまる底部は古い様相であり、土器棺3と4の前後関係に矛盾を生じないものと考えられる。古相を呈する壺である1と5を比較した場合、体部の最大径が5より1の方が高く、最大径と高さから割り出される球形化でも5の方が進んでいることから、1の方が5より古いと考えられる。1の頸部の文様は後期中頃以降に見られる文様であり、5の体部内面上半に指頭圧痕が見られる特徴は後期後半に見られるものである。新しい様相を示す2と6の壺を比較すると、6の底部が小さくなり、体部全体も球



第103図 土器棺墓変遷図 (縮尺 1/12)

形化が進んでいることから、2より6の方が新しいと考えられる。2はおそらく後期後半でも新しく、6は弥生後期末から古墳前期初頭のものと考えられる。以上のことを示したのが第103図であり、土器棺墓3→4→1→5→2→6の変遷が考えられ、時期は弥生時代後期前葉末から古墳時代前期初頭のものである。

## (2) 久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—の土器棺墓の意義について

前項では、久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—における土器棺墓の変遷と時期について述べたが、県内の土器棺墓と比較して、久米山遺跡群の土器棺墓に評価を加えたい。

土器棺墓については、角南聰一郎氏が四国の土器棺を集成し論考を加えられ（角南2001）、さらに瀬戸内海沿岸を対象として土器棺葬の展開を論じられている（角南2005）。角南氏の指摘によれば、香川県を含めた四国地方においては、弥生時代前期にわずかながら見られた土器棺葬は、中期には断絶し、後期になると再び見られるようになる。特に、香川・愛媛県では弥生後期後葉から古墳前期初頭において盛行し、その後消滅する。土器棺の器種は、壺が圧倒的に多い。一方、対岸の岡山県では、弥生中期にも土器棺葬は見られ、弥生後期から古墳前期初頭に盛行する。土器棺の器種は、弥生中期には甕が多いが、後期後葉には壺が主体となる。畿内においては、弥生中期に土器棺葬が盛行し、器種は甕を多く使用しているが、後期後葉に吉備系・四国系土器が畿内で増加するのに伴い、器種も壺が主体を占めるようになるという。

以上の土器棺葬の展開から判断すれば、久米山遺跡群の土器棺墓は、弥生後期のほぼ全期間を通して土器棺墓を網羅しているだけでなく、弥生前期を除いた香川県における土器棺葬の出現期の様相を示す貴重な資料である。それは、県内の土器棺墓のほとんどが、弥生後期後葉から古墳前期初頭に属し、ほぼ壺棺のみに統一されるのに対し、久米山遺跡群の土器棺墓3・4が、弥生後期前葉末から中葉に属し、甕を主体部としている点にある。弥生中期に岡山県や畿内で甕を土器棺墓の主体部とすることが盛行していることを考慮すれば、これら地域の影響下に土器棺墓が成立した可能性を示している（注1）。そして、久米山遺跡群でも後期中葉以降になると壺を土器棺墓の主体部としており、古墳前期初頭には土器棺葬の終焉を迎えており、県内の動きと連動している。ただし、高松市蛙股遺跡の土器棺墓2は、蓋に大形鉢、棺に大形壺を使用しており、弥生後期前葉末に遡る可能性がある資料である（山元・中西1995）。このことは、香川県における土器棺墓出現期の様相が、岡山県や畿内と同様に、甕だけでなく壺も使用していることを示していると考えられる。

## 第2節 箱式石棺墓について

今回の調査で確認した箱式石棺墓について、石棺に伴う遺物がないことから時期決定が困難であり、そのため遺跡内における評価をも難しくしている。そこで、県内における箱式石棺、特に時期がある程度分かることを概観することにより、当該石棺墓の時期を類推するとともに、評価を行いたい。なお、墓壙を含めて箱式石棺を指す場合は箱式石棺墓と表記し、石棺のみを指す場合を箱式石棺と表記している。

### (1) 県内における箱式石棺の事例（第104・105図）

箱式石棺は、弥生時代前期においては北部九州と周防にのみ見られるが、後期になると備後・安芸にまで分布範囲を広げているという（藤田1987）。讃岐においては、弥生時代後期前半に築造され、後期後半まで埋葬が続いたと考えられている丸亀市平尾墳墓群2号墓において、箱式石棺が確認されている。内陸部の丘陵上にある前方後円形の墳丘墓上に、箱式石棺墓2基、木棺墓15基が見つかっている。第一主体部と呼称された箱式石棺は、後円部中央にあり、内寸の長さ3.3m、幅45~50cmを測る長大なもので、特異なものである。そのため、石棺床面には2つの粘土床が直列に並んでいた。盗掘を受けており、副葬品は不明である。ただし、第一主体部が最初に造られたのではなく、第四・五主体部と呼称された木棺墓が先行して築造されている。墳丘くびれ部から出土した土器片より、弥生後期前半の築造年代が推測されている。なお、2号墓より先行する可能性がある3号墓の墳丘外においても箱式石棺墓が確認されているが、明確な時期決定は難しい。

弥生時代後期末になると、善通寺市仙遊遺跡や九頭神遺跡といった内陸部の平地において、小児用土器棺墓とともに、箱式石棺墓が単独で確認されている。仙遊遺跡の石棺は、刺青を入れた人面が線刻されていたことで有名であり、床面には板石が敷かれていた。九頭神遺跡の石棺は、粘土床に枕状の窪みが認められている。両遺跡は、大規模な弥生集落である旧連兵場遺跡の一角および周辺に位置することから、集落に付随して築造されている。石棺から副葬品は出土していないが、土器棺墓との関係から弥生後期末と推測されている。

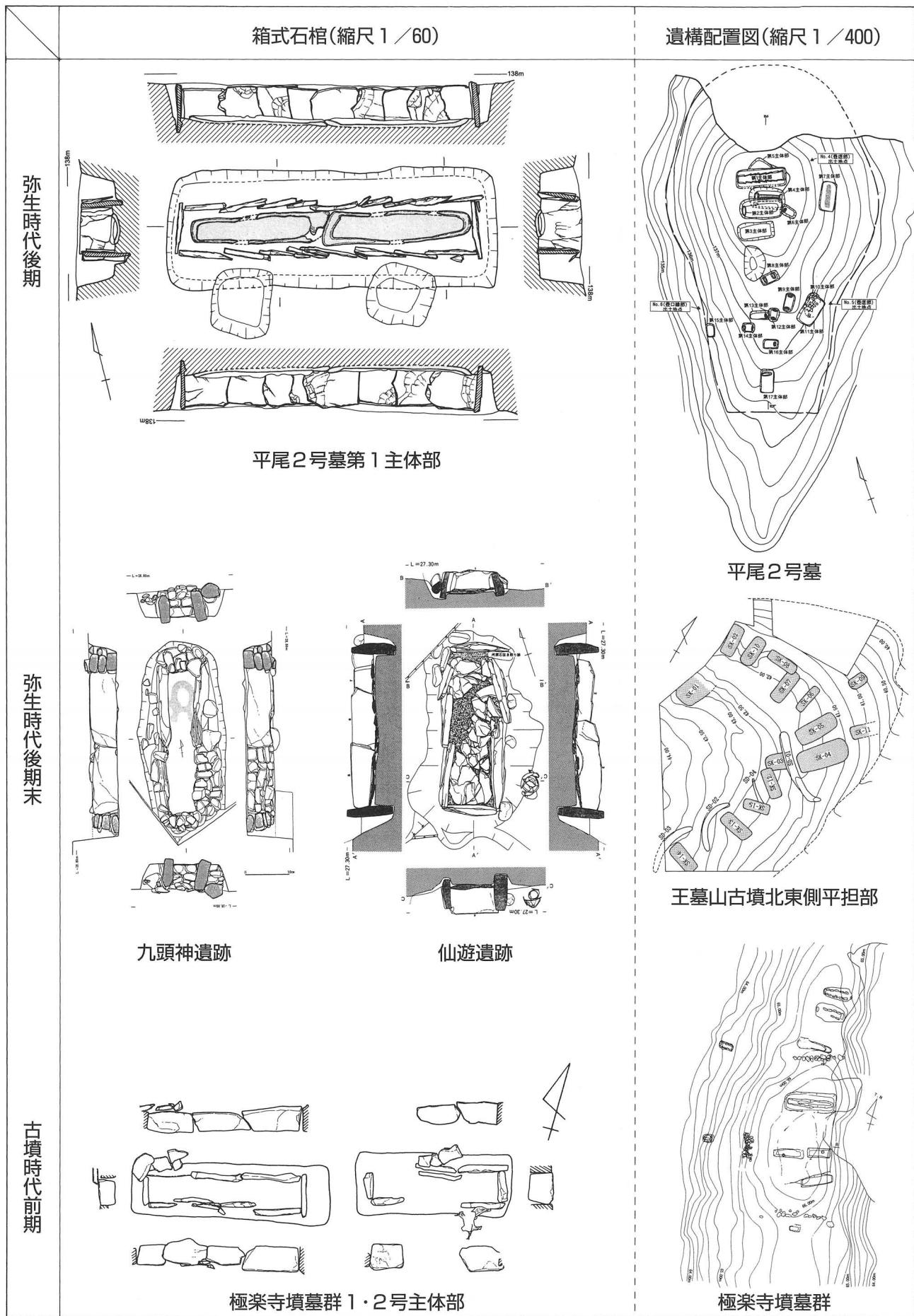
一方、内陸部の丘陵上にある善通寺市王墓山古墳の北東側平坦部において、2基の竪穴式石槨と13基の箱式石棺もしくは箱式石棺の可能性が高い土壙墓が密集して見つかっている。これら埋葬主体部は、尾根先端から放射状に配置されており、箱式石棺墓の中には周溝をもつものもある。また、箱式石棺の床面には板石が敷かれており、赤色顔料が塗布されているものもあった。竪穴式石槨は、墓壙の大きさが箱式石棺のものより大きいものもあるが、明確な優位性は認められていない。石棺を覆っている土層から出土した土器片より、弥生後期末と推測されている。

古墳時代前期では、丘陵上に群集または単独で箱式石棺が見られる。さぬき市極楽寺墳墓群は、内陸部の丘陵上にあり、列石によって区画された南北11.5m、東西約5m、高さ30cmの墳丘および墳丘外に16基の埋葬施設をもつ。墳丘中央から南よりに2基の箱式石棺（1・2号棺）が東西方向に直列に並んで見つかっており、墳丘中央から北よりに1基の割竹形木棺墓（3号棺）が石棺と併行して見つかっている。木棺墓の方が、箱式石棺より倍近くの規模をもつことからわずかな優位性が指摘されているが、前後関係は不明である。石棺は粘土により被覆されており、石棺内面には赤色顔料が塗布されていた。墳丘外でも、箱式石棺墓、木棺墓、土壙墓が見つかっており、中には蛇紋岩または滑石製の勾玉やガラス玉等の副葬品をもつものがある。墳丘外の埋葬施設から出土した副葬品は前期でも新しい様相を見せるが、多数の埋葬施設をもつ様相は弥生時代の墳墓群の伝統を受け継いでいること、墳丘内の埋葬施設の方が一般的に墳丘外より古いことを考えると、古墳前期を通じて長期間にわたって埋葬が営まれたと推測されている。

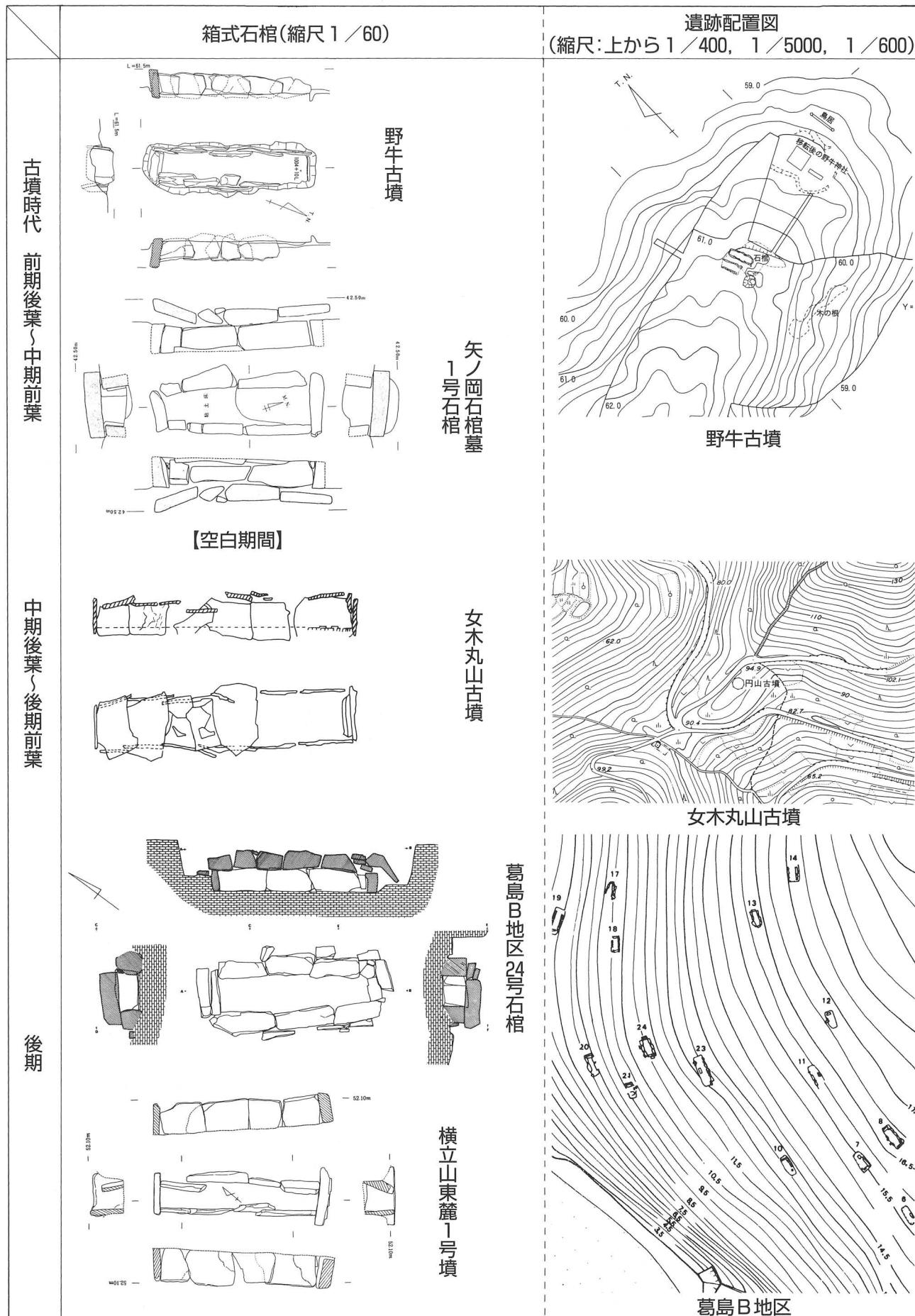
さぬき市野牛古墳は、津田湾を望む丘陵上にあり、箱式石棺が単独であり、明確な墳丘はもたない。石棺下には粘土床があり、また石棺を被覆していたと考えられる粘土には赤色顔料が付着していた。石棺内より、銅鏡、瑪瑙および翡翠製の勾玉、管玉、ガラス小玉、滑石製白玉が出土しており、古墳前期後葉と考えられている。津田湾沿岸の前・中期古墳については、2つのグループに分かれ、第1は前方後円墳等に竪穴式石槨を構築し舶載鏡もしくは中型仿製鏡を副葬する古墳、第2は円墳に箱式石棺を構築し小型仿製鏡を副葬する古墳で、被葬者の階層差を表現していると指摘されている（古野2000）。さらに、第2の箱式石棺を構築したグループは首長層の下の階層に属する被葬者の古墳であると位置づけられている。

坂出市弘法寺古墳は、内陸部の丘陵上に築かれ、南北に並列している3基の箱式石棺を主体部としている。墳丘は、直径約10m、高さ約60cmの円墳と考えられているが判然としない。石棺は粘土により被覆されており、石棺内には赤色顔料が全面に塗布されていた。石棺の作りも丁寧で、石材の隙間がないように加工されており、蓋石にも小口に合わせた溝が加工されていたという。石棺内より、二神二獸鏡（舶載鏡）、神獸鏡（仿製鏡）、硬玉製勾玉、滑石製勾玉、滑石製棗玉、碧玉製管玉、滑石製算盤玉、滑石製白玉、鉄剣が出土し、棺外粘土槨から鉄鏃、鉄斧、ヤリガンナ、刀子が出土している。出土遺物より、前期後葉から中期前葉と考えられる。近くには、前方後円墳であるタイバイ山古墳が存在し、その関係が注目されている。

坂出市歩渡島古墳群がある小島は、瀬戸内海に浮かぶ櫃石島と元は陸続きであったが、現在は小島となっている。島の尾根上に3基の箱式石棺と1基の横穴式石室が確認されており、2号墳と呼ばれる横穴式石室は古墳後期のものだが、1号墳と呼ばれる箱式石棺からは櫛歯文帶を配した珠文鏡が出土しており、古墳前期の時期が考えられる。墳丘は不明である。他の箱式石棺は、出土遺物がないため時期は不明だが、1号墳と同じ頃のものであろう。



第104図 香川県における箱式石棺変遷図①



第105図 香川県における箱式石棺変遷図②

三豊市矢ノ岡石棺墓は、内陸部の丘陵上に築かれ、2基の箱式石棺を主体部にもつが、墳丘はもたない。1・2号石棺ともに粘土で覆われ、さらに粘土床をもっており、2号棺には赤色顔料が塗布されていた。1号石棺より粗成の碧玉製の石鉤が出土しており、その年代から前期末から中期前葉と考えられる。

高松市女木丸山古墳は、女木島にある2つの山の鞍部に位置する。直径約15m、高さ約2mの円墳で、墳丘には葺石が認められ、箱式石棺1基を主体部としている。石棺床面には板石が敷かれ、板石の間には海砂が充填されて、さらに粘土を薄く敷いていた。また石棺内側には赤色顔料の塗布が一部に認められている。石棺内から無鎖式垂飾付耳飾および鉄刀や鉄鎌が出土しており、古墳中期後葉から後期前葉と考えられる。

古墳時代後期になると、島嶼部や瀬戸内海を臨む緩斜面に石棺墓群が築造される。香川郡直島町葛島では、A～C地区の3ヵ所において、箱式石棺墓群が確認されている。どれも海を臨む緩斜面に群在し、等高線に沿って主軸を向けて築造されており、墳丘はもたない。墓壙に石棺の石材を並べただけで、床面に板石を敷くものも見られる。A地区では、16基の箱式石棺墓が調査されており、須恵器、鉄鎌、勾玉、管玉、滑石製小玉、ガラス製小玉、滑石製紡錘車が出土している。須恵器は、一組の杯蓋と杯しかないが、その型式から古墳後期中葉と考えられる。B地区では、23基の箱式石棺墓が調査されており、刀子、鉄鎌が出土している。かつて表採されたという須恵器有蓋高杯3点は、その型式から後期前葉のものである。C地区では、3基の箱式石棺墓が調査されただけで、刀子が出土している。

小豆島に付随して浮かぶ小島である弁天島（小豆郡小豆島町苗羽）でも、箱式石棺墓群が確認されている。海を臨む緩斜面において、等高線に沿って主軸を向けて築造されており、墳丘はもたない。6基の石棺墓が調査されており、墓壙に石棺の石材を並べただけである。石棺内より、須恵器小片、刀子、土玉が出土している。出土した須恵器からは時代の特定は難しいが、かつて表採された須恵器8点が残されており、その型式から後期後葉のものと考えられている。

横立山東麓1号墳は、生島湾を臨む丘陵斜面に築かれた積石塚で、直径約6mの円墳の可能性がある。主体部である箱式石棺蓋石直上から製塩土器が副葬品として出土している。製塩土器は、備讃VI式（大久保1992）に相当することから、後期後半のものである。なお、この古墳は現在1基しか確認されていないが、付近にも積石が見られることから、他にも古墳が所在する可能性が高い。

## （2）県内における箱式石棺の概要と久米山遺跡群における箱式石棺墓の時期（第104・105図）

以上、個別に箱式石棺を概観してきた。箱式石棺の特徴だけでは時期差は明確でないが、立地や他の墓との構成などから、ある程度の時期差は類推できそうである。

弥生時代後期前半頃には平尾墳墓群2号墓において箱式石棺が出現している。内陸部の丘陵上にある墳丘墓において、多数の木棺墓に混じって築かれている。盗掘を受けており副葬品は不明だが、当初よりもたなかつた可能性がある。長大な箱式石棺で、これ以後例をみない。丘陵主軸に対して直交して築かれている。

弥生時代後期末になると、内陸部の丘陵上に引き続き箱式石棺墓が築造されるのとは別に、平地の集落に接する墓域においても箱式石棺墓が築造されている。小児用土器棺墓と一緒に築造されており、仙遊遺跡では副葬品をもたない。平地における箱式石棺墓の例は、この時期に善通寺市旧練兵場遺跡周辺においてのみ見られる。丘陵上に築造された例は、王墓山古墳北東側平坦部の石棺群で、竪穴式石槨も混じるが明確な優位性はなく、副葬品はもたない。等高線に直交して築かれ、その配置は放射状を呈している。

古墳時代前期でも、内陸部の丘陵上において、箱式石棺墓が築造されている。極楽寺墳墓群では、弥生時代の伝統を引く墳丘墓上に築かれるとともに、墳丘外の箱式石棺墓には副葬品をもつものが出現する。丘陵主軸に対して直交して築かれている。

前期でも後半以降になると、古墳の主体部として箱式石棺が採用されており、多彩な副葬品も見られるようになる。どれも丘陵上に立地している。野牛古墳のように明確な墳丘をもたず単独である場合と、弘法寺古墳や矢ノ岡石棺墓のように、複数の石棺墓から構成される場合がある。野牛古墳で指摘されているように、箱式石棺を構築したグループは、竪穴式石槨等を構築した首長層の下の階層に属する被葬者の古

墳といわれている。なお、古墳前期になると、内陸部以外にも島嶼部や瀬戸内海を臨む丘陵上に築かれるようになる。

中期前葉を最後に、箱式石棺はしばらく見られなくなり、次に出現するのは中期後葉または後期前葉である。女木丸山古墳を唯一の例とし、島嶼部に築かれた円墳の主体部として箱式石棺が採用されており、被葬者は海上交通に関わった人物と推定されている。

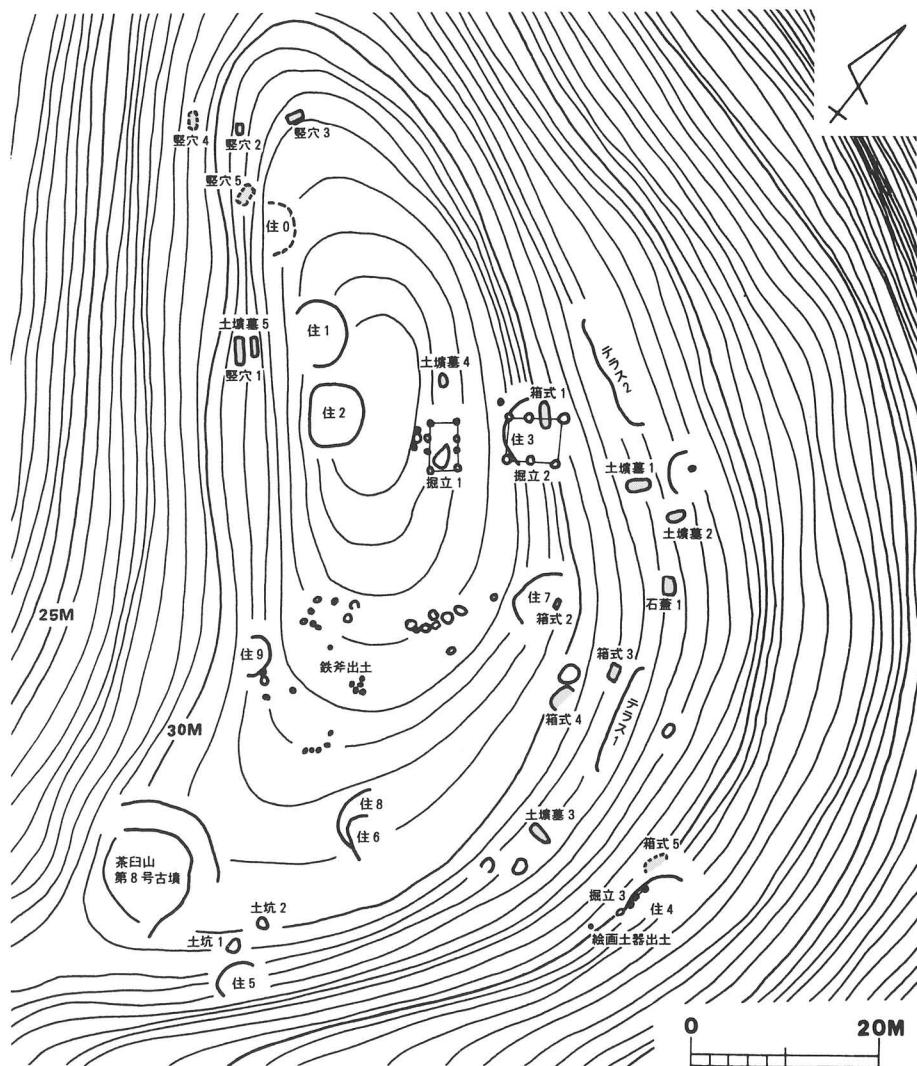
後期になると、島嶼部や瀬戸内海を臨む緩斜面において、群集する形で石棺墓群が築造されている。一般的な横穴式石室墳と比べると、副葬品は豊富とはいえないが、製塩土器といった被葬者が海に関わった生業を営んでいたことを示す遺物も見られる。横立山東麓1号墳のように墳丘をもつ例もあるが、島嶼部のものは明確な墳丘をもたない。等高線に平行して築かれている。

以上、県内における箱式石棺の時期別変遷を見てきたが、久米山遺跡群はどの時期に該当するのか考えてみたい。久米山遺跡群の箱式石棺墓は、内陸部の丘陵上に位置するが、わずかに瀬戸内海を望める場所にあり、古墳時代前期に見られる立地条件である。さらに、副葬品をもたないこと、木棺墓とともにグループを形成しており弥生的伝統を引き継いでいることから、古墳時代前期でも前半頃と想定される。ただし、石棺の主軸が等高線と平行であり、同時期の石棺とは多少違う様相も見せる。こういった相違点については、地域差や被葬者の階層差といったものなのかどうかを今後検討する必要がある。

### (3) 久米山および茶臼山の丘陵上に見られる集団墓について（第106図）

さて、久米山遺跡群は丘陵の一部を調査したのみであり、箱式石棺墓1基と木棺墓1基しか確認していない。そのため、まだ多くの墓が未調査で存在または消滅したと考えられ、集団墓を形成していた可能性がある。一方、久米山に隣接する茶臼山の丘陵上にあり、久米山遺跡群から約400m東に位置する久米池南遺跡においては、丘陵全体が調査され多くの墓が検出されている。そこで、久米池南遺跡も含めて検討することにより、久米山および茶臼山の丘陵群に所在する集団墓について考えてみたい。

久米池南遺跡は、茶臼山から北西にのびる丘陵上に立地し、弥生中期末の高地性集落が所在することで著名である。この高地性集落と重複して、竪穴式石槨6基、箱式石棺5基、石蓋土壙墓2基、土壙墓5基の墳丘をもたない集団墓が検出



第106図 久米池南遺跡遺構配置図（縮尺1/800）

されている。これら集団墓の多くは、主軸が等高線と平行し、適度に分散して配置されているが、弥生中期末の遺構と重複・隣接することから、弥生時代のものではなく、古墳時代のものと考えられている。箱式石棺は、花崗岩または安山岩の板石を石材として使用しており、粘土で被覆されているものも見られる。副葬品はほとんどなく、不明鉄器および土器片が出土しているのみである。ただし、1～4号土壙墓については、主軸が等高線と直交し、弥生中期末のテラス状遺構と同一レベルで等間隔に並ぶことから、同じ弥生中期末の遺構と考えられている。

さて、主軸が等高線と平行する点や分散して墓が配置されている点、副葬品がほとんどない特徴は、久米山遺跡群と共通しており、未調査分を含めた久米山遺跡群の全体像を復元する上で一つのモデルとなる。さらに、久米池南遺跡の集団墓も久米山遺跡群と同じ古墳時代前期に築造された可能性があり、古墳時代前期において、久米山および茶臼山の丘陵上において盛んに造墓活動が行われていた可能性も指摘できる。この時期、久米山においては、前期初頭に直径約10～12.5mの円墳で、3基の竪穴式石槨をもつ諏訪神社古墳が築造されている。さらに茶臼山においては、前期前半に全長約75mの前方後円墳で、2基の長大な竪穴式石槨をもち、画文帶神獸鏡や鍬形石が出土した高松市茶臼山古墳が築造されている。高松市茶臼山古墳や諏訪神社古墳はいわゆる首長墓またはそれに次ぐクラスの墓であることから、丘陵上の集団墓は首長層より下位の集団によって築造されたものと考えられよう。

なお、弥生中期末に属する1～4号土壙墓の主軸が等高線と直交する特徴は、善通寺市王墓山古墳北東側平坦部に展開する弥生後期末の集団墓と一致しており注目される。また、久米山遺跡群と同じ丘陵の延長にある諏訪神社遺跡において検出された木棺墓は、弥生中期後葉に属し、丘陵主軸と直交している。これらのことから、古墳時代前期において、墓の主軸が等高線に対して直交から平行に変わった可能性を指摘できる。

### 第3節 遺構の変遷について

#### 【弥生時代後期～古墳時代前期】

土器棺墓1～5と箱式石棺墓、木棺墓が当該時期のものである。これに、搅乱土層の土器棺が加わる。これらの変遷と詳細な時期は先に述べたとおりだが、弥生時代後期前葉末から古墳時代前期初頭にかけて土器棺墓が隨時造られ、当該地は小児用の墓域であった。しかしながら、古墳時代前期になると、小児用墓域から成人用墓域へと変化し、箱式石棺墓や木棺墓が造られたと考えられる。

#### 【古墳時代後期】

周溝が当該時期のものである。丘陵の稜線上で周溝が途切れるが、南北約16m、東西約18mの円形にめぐっている。周溝は、幅2～4m、深さ約40～80cmを測る。主体部は確認されなかったが、遺構および出土遺物より判断すると古墳の可能性を指摘できる。ただし、須恵器から得られるTK217の時期は横穴式石室を主体部とすることが一般的であるが、石室の痕跡を示すものは一切ないことから、古墳と断定することは難しい。

なお、周溝底の標高は約40.6～41.8mと地形に左右されて不均等であり、現況の最高地点からの比高差も約40cm～1.6mとなるが、かつて調査地にあった基壇の高さ約1.2mを足すと、約1.6～2.8m以上の墳丘高となる。

#### 【奈良時代】

溝SD01が当該時期のものである。古墳の周溝から約3～4m墳丘側に入っていることから、墳丘を削って溝が掘削されていると考えられる。掘削目的は不明である。

#### 【室町時代】

中世墓が当該時期のものである。遺構の輪郭を検出したわけではないが、中国産青磁碗がうつ伏せに置かれ、隣接して土師質土器杯も置かれていることから、中世墓と判断したものである。

以上、時代ごとの遺構の変遷について述べてきたが、一部の時期を除いて墓地として利用されていることが当該地の特徴である。狭い丘陵上という地形の制約があるため、住空間または生産の場所には利用にくかったことに起因すると考えられ、その特徴は、現代に至っても靈園として続いているのである。

(注1) 角南氏は、土器棺の鉢と壺のセット関係、弥生後期後葉～古墳初頭に土器棺葬が盛行する特徴が似ていることから、香川県の土器棺葬は岡山県の影響が強いと指摘されている。

## 参考文献

大久保徹也1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究(下)』近藤義郎編 山陽新聞社

角南聰一郎2001「四国地方の土器棺葬」『香川考古』第8号

角南聰一郎2005「瀬戸内海沿岸弥生時代土器棺葬の展開」『季刊考古学』第92号

山元敏裕・中西克也1995『蛙股遺跡』高松市教育委員会

藤田等1987「石棺墓」『弥生文化の研究』第8巻 祭と墓と装い 金闇恕・佐原真編 雄三閣

## 箱式石棺出典文献

大久保徹也・古田昇1999『弁天島古墳群調査概要報告』学校法人村崎学園・徳島文理大学文学部文化財学科

香川県教育委員会1983「櫃石島古墳群」「弘法寺古墳」「新偏香川叢書 考古篇」

片桐節子1998『極楽寺墳墓群』寒川町教育委員会

亀田修一・白石純・國木健司1998『平尾墳墓群』綾歌町教育委員会

川畑聰・山元敏裕1991『横立山東麓1号墳・史跡高松城跡』高松市教育委員会

笹川龍一1986『仙遊遺跡発掘調査報告書』善通寺市教育委員会

笹川龍一1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』善通寺市教育委員会

笹川龍一1992『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会

高瀬町教育委員会1986『矢ノ岡2号石棺発掘調査報告書』

西岡達哉・松野一博1984『矢ノ岡石棺墓発掘調査報告書』高瀬町教育委員会

藤井雄三1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会

古野徳久2000『野牛古墳・末3号窯跡』香川県教育委員会

松本豊胤・秋山忠・松本敏三1974『葛島』香川県教育委員会

森井正1966『高松市女木島丸山古墳』『香川県文化財調査報告8』香川県教育委員会

第8表 久米山遺跡群—諏訪神社御旅所地区—出土遺物観察表①

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
1	弥生土器 大形片口鉢	53.9		20.2	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラミガキ 内面:墨誠	外面:橙5YR6/8 内面:橙7.5YR6/6	2mm以下の石英・長石を含む	体部外面に黒斑
2	弥生土器 広口壺		10.0	(57.2)	外面頸部:縦方向のハケ 体部:縦方向のハケ 内面頸部:横方向のハケ、ナデ 体部:縦または横方向のハケ	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:にぶい橙5YR7/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	体部下位:穿孔1個 体部片面全体に黒斑
3	弥生土器 壺			(15.0)	外面頸部:ヨコナデ後、縦方向のハケ 体部:タテ方向のヘラミガキ 内面頸部:ナデ 上体部:指ナデ 中体部:横または斜め方向のヘラケズリ 下体部:縦方向のヘラケズリ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	4mm以下の石英・長石を含む	外面頸部:板状工具による押圧文 沈線1条 内面頸部:沈線4条
4	弥生土器 高杯	27.4		(11.5)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 杯部:縦方向のヘラミガキ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	2mm以下の石英・長石を含む	口縁部の一部に黒斑
5	弥生土器 壺		13.1	(44.0)	外面体部上位:縦方向のハケ 体部下位:縦方向のヘラミガキ 内面体部:横または斜め方向のハケ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR6/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	体部片面に黒斑
6	弥生土器 大形片口鉢	41.0	16.0	9.0	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラミガキ	外面:橙5YR6/6 内面:明褐色2.5YR5/6	3mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁部外面:擬凹線2条
7	弥生土器 甕	29.8	10.6	49.9	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラミガキ 底部:板ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上位:ナデ、接合痕 体部下位:縦方向のヘラケズリ	外面:橙2.5YR6/6 内面:橙2.5YR6/6	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁端部:擬凹線2条 体部下位:穿孔1個
8	弥生土器 甕	15.4	5.6	27.7	外面口縁部:ヨコナデ 底部:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上位:横方向のヘラケズリ 体部下位:縦方向のヘラケズリ	外面:明赤褐色5YR5/8 内面:明赤褐色5YR5/8	1~2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁端部:擬凹線1条 口縁部内面:擬凹線3条 体部下位:穿孔1個
9	弥生土器 高杯	35.0		(5.5)	外面口縁部:ヨコナデ 杯部:横方向のヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 杯部:縦方向のヘラミガキ	外面:橙7.5YR6/6 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	口縁端部:擬凹線2条
10	弥生土器 甕	25.0	7.8	40.4	外面口縁部:ヨコナデ 体部上位:タタキ後ナデ 体部下位:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上位:横方向のヘラケズリ 体部中位:縦方向のナデ 体部下位:横方向のヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR2/3 内面:灰褐色7.5YR5/2	1mm以下の長石・角閃石を含む	

第9表 久米山遺跡群一諏訪神社御旅所地区一出土遺物観察表(2)

報告 番号	器種	法量(cm)		調整	色調	胎土	備考	
		口径	底径					
11	弥生土器 高杯	27.0		(16.6)	外面:摩滅 内面口縁部:ヨコナデ 杯部:横方向のハケ後 縦方向のヘラミガキ 脚部:指頭圧痕	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1~3mm以下の石英・ 長石を含む	脚部:円孔1個(現状) 口縁部:黒斑
12	弥生土器 広口壺	24.0	10.3	56.8	外面口縁部:ヨコナデ 頭部:斜め方向のハケ 体部:斜め方向のハケ後 縦方向のヘラミガキ 内面口縁~頸部:ヘラミガキ 体部下位1/3:指頭圧痕 上位1/3:縦方向のヘラケズリ	外面:褐7.5Y R4/4 内面:褐7.5Y R4/4	1mm以下の長石・角 閃石を含む	口縁端部:擬凹線6条 二重圓形浮文 頸・体部の境:突帯1条 くの字形刻み目文
13	弥生土器 広口壺			(1.8)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長 石・雲母を含む	口縁端部:擬凹線4条
14	弥生土器 底部		13.0	(7.3)	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	外面:褐7.5YR6/6 内面:褐7.5YR4/1	5mm以下の・石英・ 長石・雲母を含む	
15	須恵器 杯	15.9		(2.2)	外面口縁部:回転ナデ 内面口縁部:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
16	須恵器 器台	34.0		(9.4)	外面杯部:回転ナデ 内面杯部:回転ナデ	外面:黒褐2.5Y3/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	杯部外面:波状文3段 直線文2段 口縁部:自然釉
17	須恵器 器台			(6.3)	外面脚部:回転ナデ 内面脚部:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	脚部外面:凹線6条 波状文2段
18	須恵器 器台			(5.6)	外面脚部:回転ナデ 内面脚部:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	脚部外面:凹線4条 波状文2段 脚部:方形透かし穴
19	須恵器 甕	18.4		(6.4)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:平行目叩き痕 内面口縁部:ヨコナデ 体部:同心円文の当て具痕	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	
20	須恵器 甕			(9.3)	外面頸部:回転ナデ 内面頸部:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	粗	頸部外面:波状文1段 凹線1条
21	須恵器 甕			(5.1)	外面体部:格子目タタキ 内面体部:同心円文の当て具痕	外面:褐7.5YR5/1 内面:灰N4/	密	
22	須恵器 横瓶	9.4		24.5	外面口縁部:回転ナデ 体部:平行目の叩き痕 内面口縁部:回転ナデ 体部:同心円文の当て具痕後, 回転ナデで消す	外面:灰N4/ 内面:灰N5/	密	
23	須恵器 环	17.6	12.0	6.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:青灰10BG6/1 内面:暗青灰5PG4/1	密	
24	須恵器 甕	22.4		48.4	外面口縁部:回転ナデ 体部:格子目タタキ 内面口縁部:回転ナデ 体部:同心円文の当て具痕	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	
25	青磁 碗	9.2	3.9	4.1	外面体部:回転ナデ, 施釉 底部:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ, 施釉	釉薬:オリーブ灰10Y4/2 胎土:灰白5Y8/2	密	外面:樹描文
26	土師質土器 皿	8.1	7.0	1.2	外面体部:回転ナデ 底部:回転ヘラケズリ後 板状工具によるナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい褐7.5YR6/3	1mm以下の砂粒を含 む	
27	土師質土器 皿	7.2	5.2	1.5	外面体部:回転ナデ 底部:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/4 内面:にぶい褐7.5YR6/4	5mm以下の石英・長 石を含む	
28	弥生土器 甕	17.8		(4.6)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:板ナデ, 指頭圧痕	外面:明赤褐2.5YR5/6 内面:明赤褐2.5YR5/6	4mm以下の石英・長 石・雲母を含む	
29	弥生土器 広口壺	25.0		(8.7)	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:タタキ後, 縦方向のハケ 内面口縁部:横方向のハケ 頸部:横方向の板ナデ	外面:にぶい褐7.5Y R5/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/3	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	口縁端部:刻目文 擬凹線5条
30	弥生土器 広口壺	23.8		(2.1)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:浅黄橙10YR8/4	2mm以下の石英・長 石を含む	口縁端部:擬凹線5条
31	弥生土器 甕	23.8		(2.1)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向のヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR7/4 内面:にぶい褐7.5YR7/4	1mm以下の石英・長 石・角閃石・雲母を含む	口縁端部:擬凹線2条
32	弥生土器 高坏	28.2		(4.8)	外面口縁部:ヨコナデ 杯部:縦方向のハケ 内面口縁部:縦方向の条線	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の角閃石・ 雲母・砂粒を含む	口縁部内面:条線文
33	弥生土器 高坏	31.2		(6.9)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 坏部:縦方向のヘラミガキ	外面:にぶい褐7.5YR7/3 内面:にぶい褐7.5YR7/3	2mm以下の角閃石・ 雲母・砂粒を含む	
34	弥生土器 高坏	29.2		(3.6)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい赤褐5YR5/4 内面:にぶい赤褐5YR5/4	1~2mm以下の石英・ 長石・角閃石・雲母を含む	口縁端部:擬凹線2条
35	弥生土器 高杯	18.2		(2.0)	外面脚部:ヨコナデ 内面脚部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	1~2mm以下の石英・ 長石・角閃石・雲母を含む	脚部下位:円孔1個(現状)
36	弥生土器 高杯			13.8 (10.8)	外面脚部上2/3:縦方向のヘラミガキ 下1/3:縦方向のハケ 内面脚部:横方向のハケ 絞り痕, 接合痕	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の角閃石・ 雲母・砂粒を含む	脚部下位:円孔5個
37	弥生土器 壺		6.0	(43.5)	外面体部:縦方向のヘラミガキ 内面体部:ナデ, 接合痕 底部:縦方向のハケ	外面:褐7.5YR4/4 内面:褐7.5YR4/4	2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	
38	弥生土器 底部		14.0	(6.5)	外面体部:ヘラミガキ 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	
39	弥生土器 底部		11.2	(9.3)	外面体部:タタキ後ヘラミガキ 内面:横方向のヘラケズリ後ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/4 内面:にぶい褐7.5YR5/3	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	体部外面に黒斑
40	須恵器 壺		8.7	(2.3)	外面底部:回転ナデ 内面底部:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	やや粗	
41	須恵器 壺			(5.1)	外面体部:回転ナデ 内面体部:回転ナデ	外面:灰白N5/ 内面:灰白N5/	密	
42	須恵器 壺		6.3	(5.7)	外面体部:回転ナデ 底部:回転ヘラケズリ 内面体~底部:回転ナデ, ナデ	外面:オリーブ灰5GY/5~ 10YR/7 内面:にぶい黄橙10YR6/3	やや粗	
43	須恵器 短頸壺		6.2	(4.8)	外面口縁~体部:回転ナデ, カキ目 内面口縁~体部:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
44	須恵器 器台			(4.8)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:暗灰N3/ 内面:褐灰5YR6/1	粗	口縁部外面:波状文1段
45	須恵器 器台		29.4	(3.8)	外面脚部:回転ナデ 内面脚部:回転ナデ	外面:灰10Y6/1 内面:灰10Y6/1	密	脚部:円孔1個
46	須恵器 甕			(8.0)	外面口縁部:回転ナデ 体部:平行目の叩き痕 内面脚部:回転ナデ 体部:同心円文の当て具痕	外面:灰5Y5/ 内面:灰5Y5/	密	
47	須恵質土器 or 陶器底部			(8.0)	外面体部:回転ナデ 内面体部:回転ナデ	外面:灰黄2.5Y6/2 内面:灰黄2.5Y6/2	密	

## 第Ⅳ部 久米山遺跡群周辺の調査



# 第1章 久米山遺跡群－丘陵西側斜面地区－

## 第1節 調査の経緯と概要

平成2年8月に久米山西斜面において、工事により崖面を削っていたところ遺物が出土したとの連絡を受け、現地で遺物を採集したものである。工事はすでに終了しており、遺構は確認できなかった。ただし、崖面周辺には古墳状隆起が認められ、遺物の大半が古墳時代後期後半に属するところから、古墳が存在した可能性がある。

## 第2節 遺物

出土した遺物のうち図化できたものは、第108図に掲載した。1～5は須恵器杯蓋の口縁部で、復元できた口径は9.9～13.9cmを測る。6～9は須恵器杯の口縁部で、かえりをもつタイプで、復元できた口径は10.0～13.5cmを測る。6・9のようにかえりがしっかりしているものと、7・8のようにかえりが退化したものがある。10は須恵器杯で、高台がつく底部である。11～13は須恵器高杯である。11は、小形の半球状を呈する杯部である。12は短脚の脚部である。13は長脚高杯の脚部で、2方向から長方形の透かしが穿たれている。14は長頸壺の頸部で、2条の凹線が中位でめぐっている。15は須恵器短頸壺の口縁部～体部で、肩には1条の凹線がめぐる。16は須恵器壺の口縁部である。17は須恵器壺の体部である。18は土師器甌の口縁部～体部で、把手が付いている。19・20は土師質の平瓦で、凹面に布目、凸面に縄目の叩き痕が残されている。

遺物のうち、10は奈良時代のものと考えられ、19・20の平瓦は平安時代のものであろう。他の遺物については、おおむね大阪府の陶邑編年でTK209～217型式に属するものと考えられ、古墳時代後期後半のものである。

## 第3節 まとめ

遺物の大半がTK209～217型式に属し、周辺に古墳状隆起が認められることから類推して、横穴式石室等を主体部にもつ古墳が存在した可能性がある。しかしながら、資料が断片的で、憶測の域を出ない。また、平安時代の平瓦については、久米寺がかつて久米山にあったという伝承が下記のとおりあることから、関係が注目される。

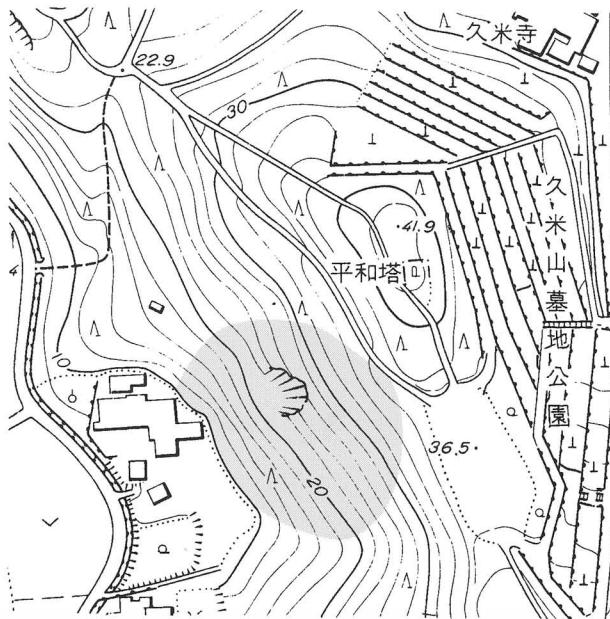
### 【久米寺関係記事】

#### 『讃岐國名勝図会』

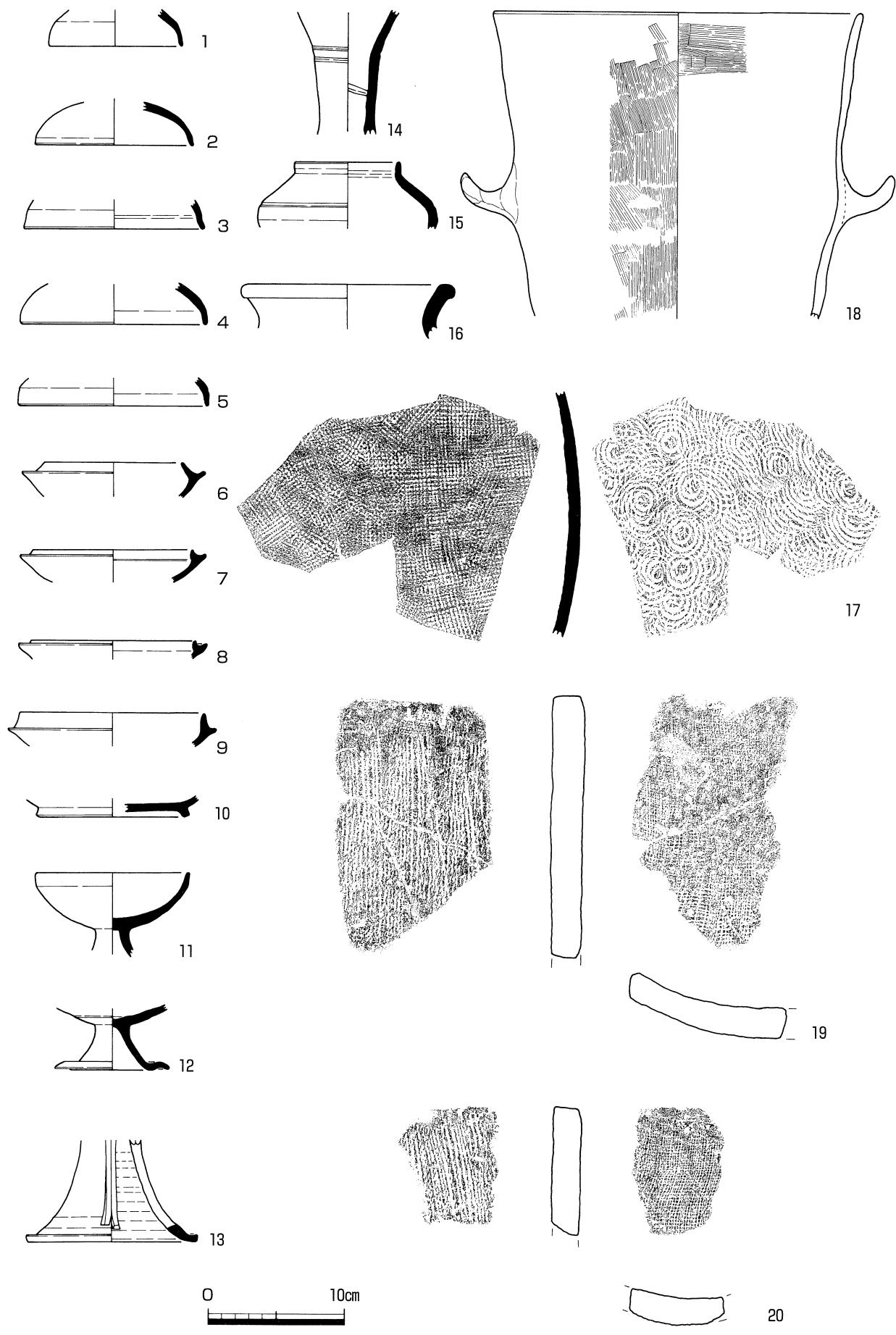
**久米寺** 当寺は天平十一年、行基菩薩草創なり。往古は久米山といふ。十五丁の内に十余宇の堂塔・神祠、三十余の僧院儼然たりしが、永正年中兵乱に亡失せり。貞享元年、国祖君源英公御再興ありて、京都聖護院宮末寺となしたまふ。

#### 『木田郡誌』 山田弥三吉編纂代表 木田郡教育部会発行 昭和15年

**久米寺址** 久米寺は久米八幡宮の社坊にして、…(略)…久米山より北、古高松村新田にかけ、久米池を中心として建立せられるものの如し。久米池の北方に寺門と云ふが今も残れるもこの寺に關係あるか。



第107図 調査地位置図（縮尺 1 / 2,500）



第108図 久米山遺跡群－丘陵西側斜面地区－出土遺物実測図（縮尺 1/4）

第10表 久米山遺跡群一丘陵西側斜面地区一出土遺物観察表

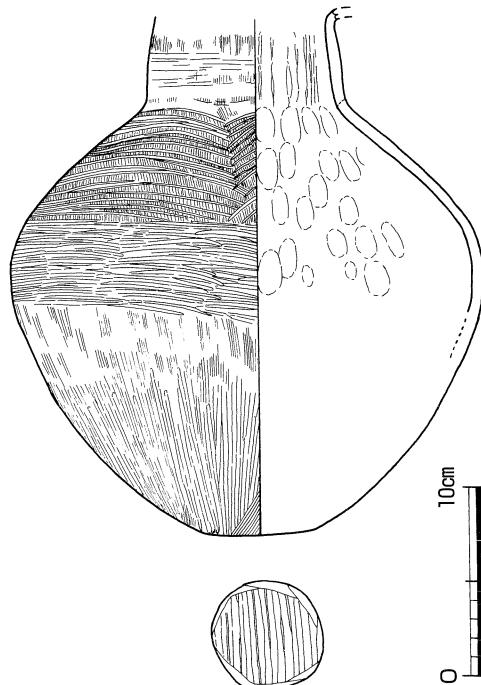
※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
1	須恵器 杯蓋	9.9		(2.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	やや粗	
2	須恵器 杯蓋	11.6		(2.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
3	須恵器 杯蓋	13.0		(2.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
4	須恵器 杯蓋	13.6		(3.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N7/	やや密	
5	須恵器 杯蓋	13.9		(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
6	須恵器 杯	10.0		(2.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
7	須恵器 杯	11.7		(2.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
8	須恵器 杯	11.9		(1.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N7/ 内面:灰N7/	密	
9	須恵器 杯	13.5		(2.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N7/ 内面:灰N8/	密	
10	須恵器 杯		11.2	1.3	外面:高台付近は回転ナデ 摩滅のため調整不明	外面:灰黄25Y7/2 内面:灰黄25Y7/2	粗	
11	須恵器 高杯	11.3		(6.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	やや密	
12	須恵器 高杯		8.3	(4.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
13	須恵器 高杯		12.4	(7.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
14	須恵器 長頸壺			(9.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/・灰N4/ 内面:灰N6/	やや密	頸部外面:凹線2条
15	須恵器 短頸壺	7.8		(4.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:オリーブ灰2.5GY6/1 内面:灰N6/	やや粗	
16	須恵器 壺	14.3		(3.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
17	須恵器 甕			(18.0)	外面:格子目タタキ痕 内面:同心円文の當て痕	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
18	土師器 甕	27.2		(22.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:タテハケメ、黒斑 内面口縁部:タテハケメ 体部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	4mm以下の石英・ 長石・砂粒を含む	
19	平瓦	残存長 18.7	幅 11.5	厚み 2.1	外面:粗い布目 内面:縄のタタキ痕	外面:淡黄2.5Y8/3 内面:淡黄2.5Y8/3	粗	
20	平瓦	残存長 9.2	幅 6.8	厚み 1.9	外面:粗い布目 内面:縄のタタキ痕	外面:灰黄褐10YR6/2 内面:灰黄褐10YR6/2	粗	

## 第2章 川添浄水場遺跡

昭和48年10月15日に、久米山の南麓にある川添浄水場中央の濾過池建設工事中において、弥生土器広口壺が地下数mから出土した。黒色粘質土の泥炭層から出土したと伝えており、当該地が新川に近いことを考慮すると、新川の旧河道が浄水場の地下に埋没している可能性がある。実際、平成16年12月15日に実施した浄水場内の汚泥脱水施設建設工事に伴う立会調査でも黒色粘質土を確認しており、その可能性は高いと考えられる。

さて、出土した弥生土器広口壺は、やや最大径が張った球形の体部に、やや内傾する頸部をもつ。口縁部は欠損しているが、水平に開くタイプと考えられる。外面の調整は、全体に縦方向のハケを施した後に、体部上半は横方向、下半は縦方向のヘラミガキを施している。ただし、体部上半のヘラミガキも上と下で粗密の差がある。内面の調整は、体部上半は指ナデ、下半は図化できなかったが、ヘラケズリ後にヘラナデを施している。胎土に石英・長石・角閃石を含み、暗黄褐色を呈する。外面下半には煤が付着している。弥生時代後期末のものと考えられる。

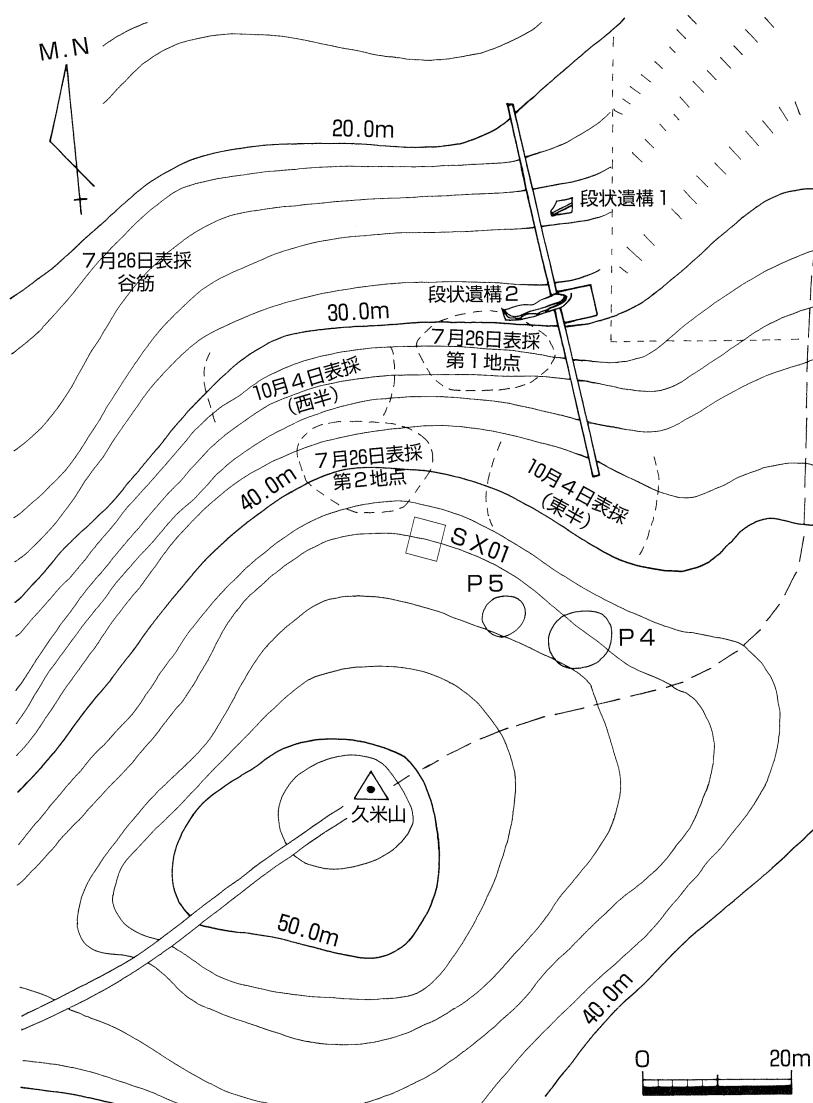
第109図 川添浄水遺跡出土遺物  
実測図（縮尺1/4）

### 第3章 久米山遺跡群－久米山東墓地地区－

#### 第1節 調査の経緯と経過

久米山東斜面において、既存の墓地の南に隣接して事業者である石清水神社によって久米山東墓地の造成工事が計画された。久米山東墓地建設予定地については、周知の埋蔵文化財包蔵地として高松市の遺跡台帳には登録されていなかったが、これまでに周辺部で行った発掘調査の状況などから、予定地においても遺跡の存在している可能性が想定されたことから、久米山東墓地建設工事に合わせて立会調査を実施することとした。工事のうち、表土の除去が終了した平成5年7月26日の踏査によって工事範囲全域に弥生土器片等の遺物の散布が見られ、散布している遺物を採集した（第110図）。その後、墓地造成工事前の平成5年10月4日に再度、対象地の分布調査を実施し、墓地造成工事予定地の東側境界線と谷状の地形に挟まれた東寄りの一帯に（幅10m）では、中腹から山腹にかけて遺物の濃密な散布がみられた。このため、工事実施前の平成5年10月6日から19日までの期間において対象地の確認調査を実施した。

#### 第2節 調査地の概要



第110図 久米山東墓地地区遺構等位置図（縮尺 1/500）

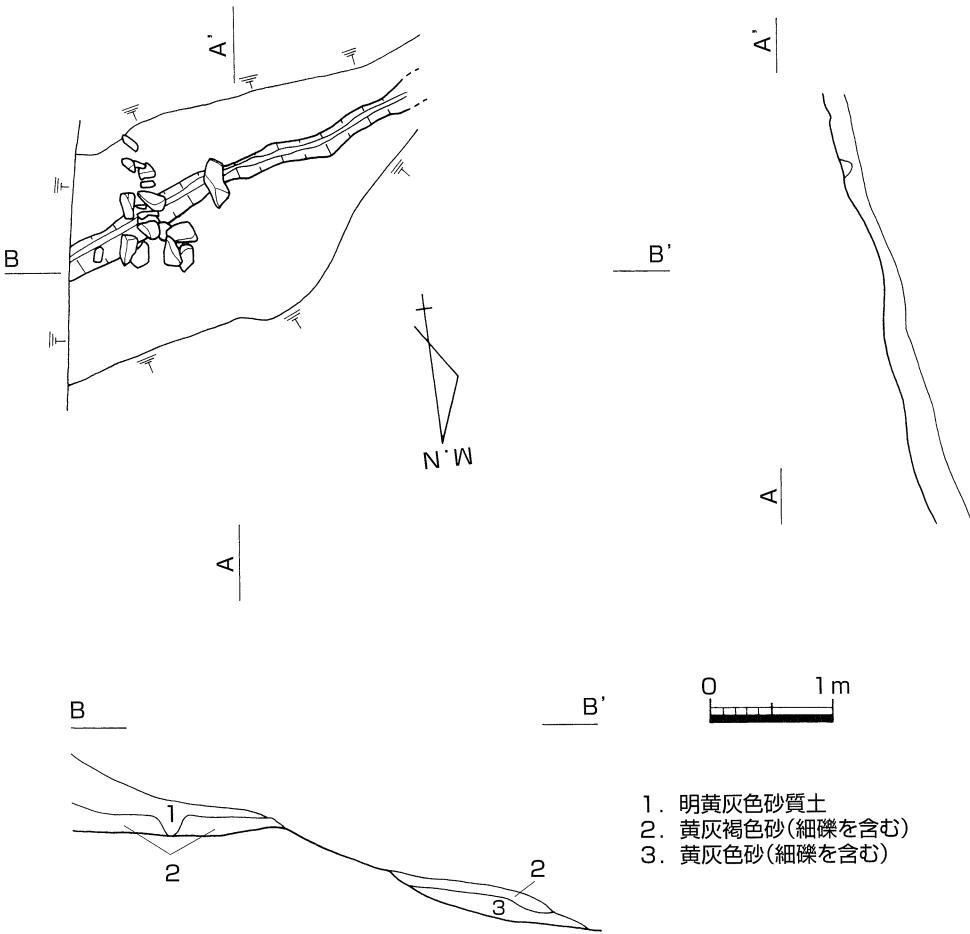
埋没している遺構の詳細を把握するため、前述の遺物の散布がみられた谷状地形と東側工事境界線の中間に、等高線に直交する長さ50m、幅50cmの試掘溝を設定した。試掘溝内の堆積土中のうち、山頂三角点からN - 25° - E、距離80mの地点およびN - 30° - E、距離70mの地点に、特に土器片が集中する黒褐色土層がみられたので、この2地点について、それぞれ4×4mおよび4×6mの拡張区を設け、遺構の確認を行った。開削部分中央付近でも遺物の散布が多い箇所があり、4×4mの範囲に試掘区を設定した（P1・P2およびP3）。久米山東墓地における試掘トレーナーの設定箇所、確認した遺構および遺物の採集範囲については第110図に示すとおりである。試掘溝等で明確な遺構が確認されたものについては遺構の全掘を行ったが、不明瞭な部分については、位置等を確認するにとどめた。

以下に立会調査を担当した末光甲正氏の記録を元に報告する。

### 第3節 遺構と遺物

#### 段状遺構1（P1）（第111・112図）

試掘トレンチの下方、上部端から35mのP1拡張区トレンチで確認した遺構である。遺構の東側は調査対象範囲から外れ、西側は削平されて残っておらず、遺構の全容がつかみにくい遺構である。確認した範囲での規模は長さ3m以上、最大幅1.8mの範囲が平坦になっており、その平坦地の中央部に等高線に合う溝を確認した。溝の規模は幅20cmと一定しているが、深さは西側ほど残りが悪く7~16cmと場所によって差がある。東側寄りで溝の上部には20cm大の石が20個ほど散乱している状況を確認した。柱穴と考えられるピットは確認していない。遺構に伴う覆土は2層認められ、第1層が明黄灰色砂質土、第2層が黄灰褐色砂（細礫を含む）である。遺構を確認した範囲は狭かったものの多くの遺物が細片となって出土している。

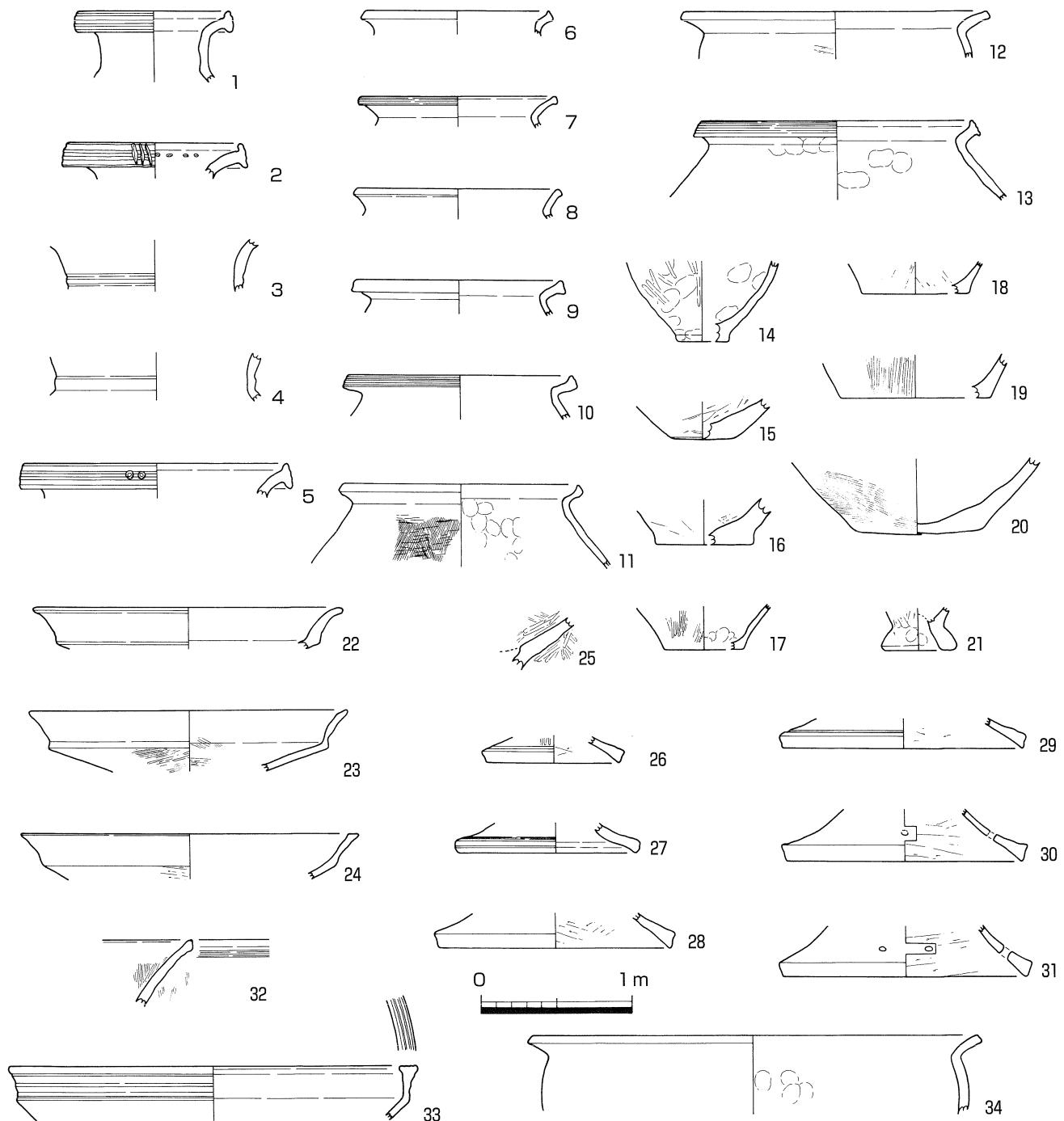


第111図 段状遺構1平面・断面図（縮尺1/30）

第112図に示したものが、段状遺構1から出土した遺物である。全て弥生土器である。

1~5が広口壺である。口縁端部に3条程度の凹線を巡らせるもの（1・2・5）、さらに棒状浮文や竹管文（2）、円形浮文（5）で加飾するもの頸部に凹線を巡らせる（3・4）などがある。6~13は甕である。口縁端部に3条程度の凹線を巡らせる（7・10・13）ものとそうでないものに分かれる。凹線を施さないが

口縁端部を肥厚させているものも一定量みられる。11などは下川津B類土器と呼称されている香東川東岸中流域に生産地がみられる土器の最も古い形態であると考えられる。14～20は底部である。14が壺である以外は甕の底部であると考えられる。15・16・18の内部調整にはヘラケズリが認められる。21は製塩土器の脚部と考えられる。22～31は高杯である。22～24は杯部である。外反する口縁部をもつ。24の口縁端部に多少拡張する口縁部が認められるが、それ以外は拡張せず、丸くおわる。26～31は高杯の脚部である。脚端部外面付近に凹線を巡らせるものは(26・27・29)少なく、脚部内面にヘラケズリ調整を施すものが多くみられる。32～34は鉢である。32は破片のため全容が不明であるが尖底になるものと考えられる。33は垂直に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部が両側に肥厚し、端部上面と側面に凹線を巡らせるものである。34は口径に比べて器高の低い形態になるものと考えられる。段状遺構1出土の土器所属時期については、

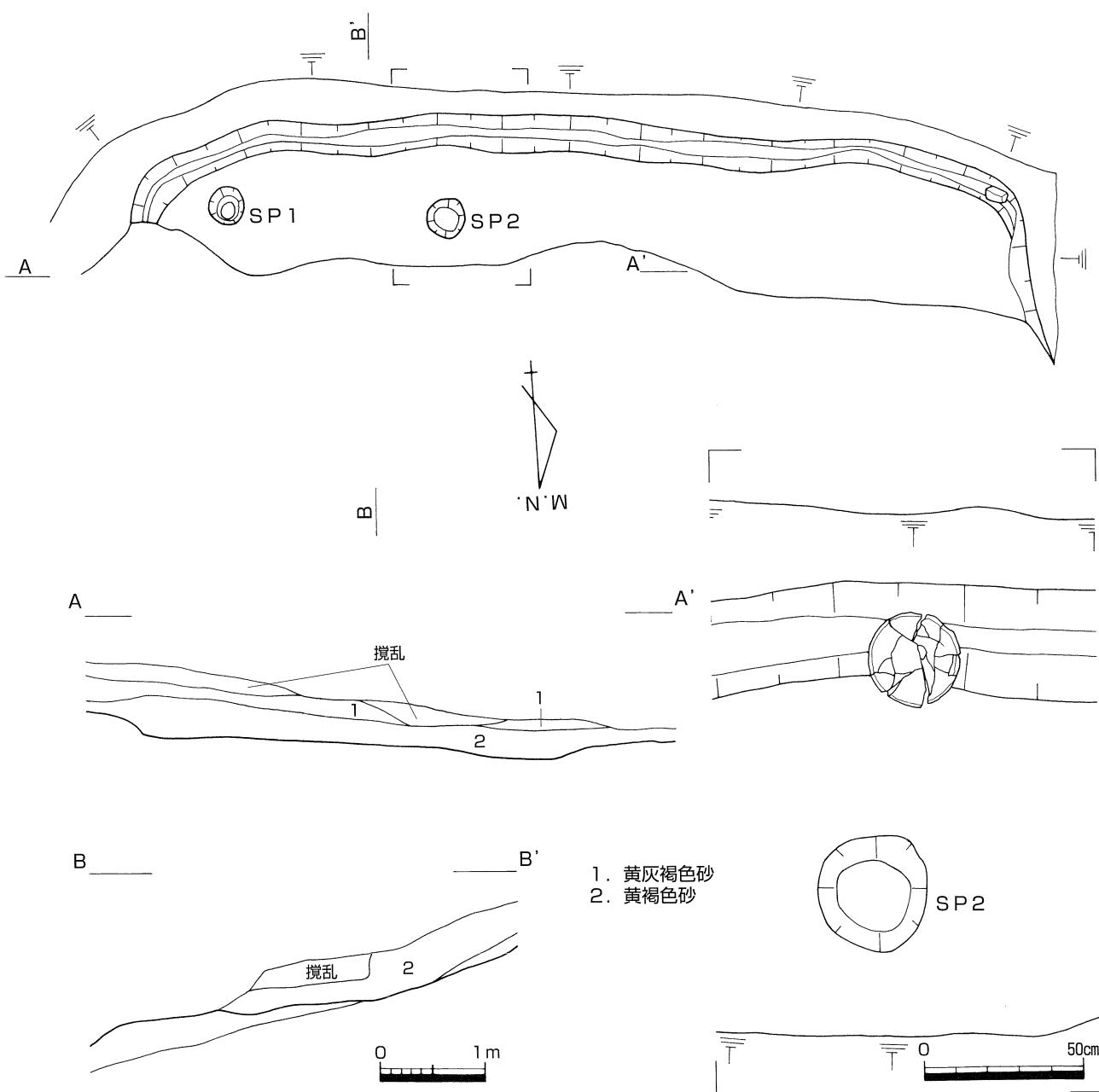


第112図 段状遺構1出土遺物実測図（縮尺1/4）

凹線を巡らせる個体が一定量含まれているが、口縁および脚部端部が肥厚するものの、凹線を施さないもののが多くみられることから弥生時代後期中葉頃の時期のものであると考えられる。

### 段状遺構2（P2）（第113・114図）

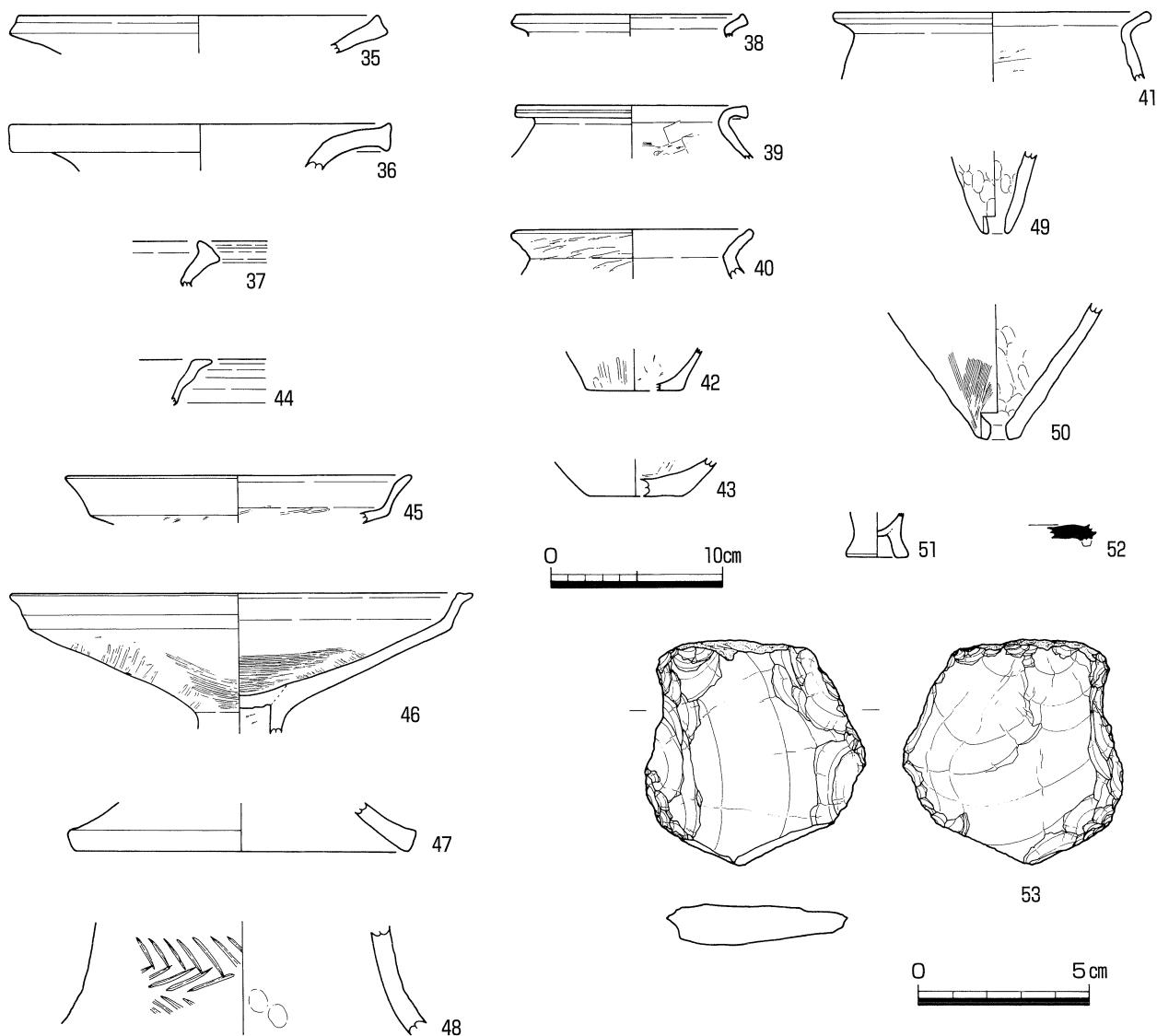
試掘トレンチの中央、上部端から25mのP2拡張トレンチで確認した遺構である。遺構の残存状況は悪かったものの、細片ながら多くの遺物が出土している。遺構は北側が削平を受けて残っていない。確認できた遺構の規模は東西8.5m、南北1.8m、深さ56cmである。遺構内はほぼ平坦であるが、東側から西側へ傾斜しており、両端で15cmの差が認められる。山側に近接して壁溝と考えられる幅50cm、深さ15cmの溝が存在する。遺構内の東側において柱穴と考えられるピットを2基確認した。SP1は東側に存在するピットで規模は南北53cm、東西48cm、深さ21cmである。SP2は西側に存在するピットで規模は南北52cm、東西51cm、深さ22cmである。両ピットとも規模が同様であり、現在は削平等で残っていないが、同様のピットが遺構内に存在していた可能性が考えられる。遺構内の覆土は2層存在し、第1層は黄灰褐色砂で、15cm程度の厚さがあり、第2層は黄褐色砂で、20~30cmの厚さで遺構内に堆積している。出土遺物ではSP



第113図 段状遺構2平面・断面・出土状況図（縮尺1/60、出土状況図は1/20）

2の背面に存在する溝の直上において杯部を上にした弥生土器高杯が出土している。当遺構の廃絶時期を考える上で重要な遺物である。このほか覆土中から土器が出土している。

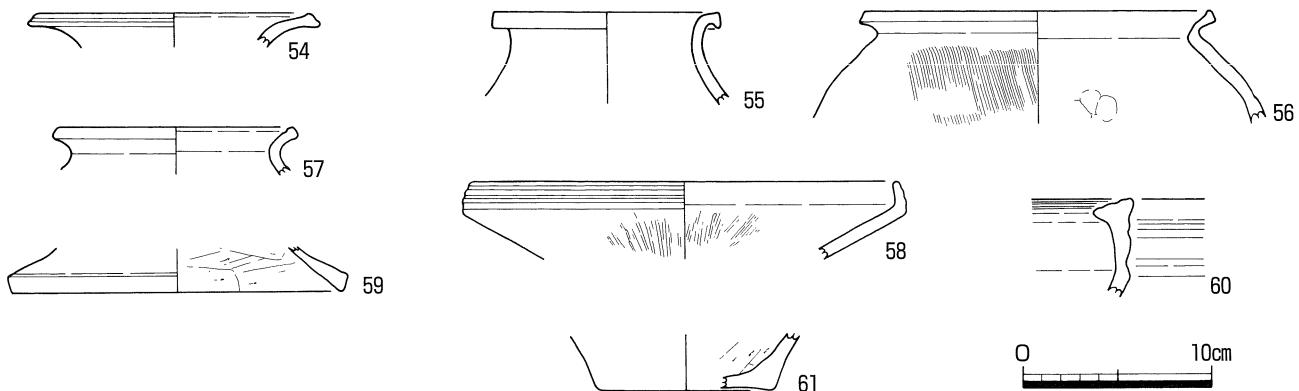
第114図に示したものが段状遺構2出土遺物である。35～37は広口壺である。38～41は甕である。39・41の内面調整のヘラケズリは頸部の下まで及んでいる。40は外面調整にタタキが認められる。42・43は底部である。いずれも内面にヘラケズリが認められる。44～46は高杯である。44・46の口縁端部は外側に拡張が認められる。47は高杯の脚部である。48は器台の体部である。外面に綾杉状の押圧文を施す。49・50は甕の底部であると考えられる。51は製塩土器の脚部である。52は混入と考えられる高台をもつ須恵器杯の底部である。53はサヌカイト製の打製石鍬である。上部は自然面を残し、側面部については敲打痕が顕著に残る。刃部は欠損して不明である。段状遺構2の出土土器の所属時期については、高杯の口縁端部に外側へ拡張する個体が認められることなどから段状遺構1と同様の弥生時代後期中葉頃の時期が考えられる。



第114図 段状遺構2出土遺物実測図（縮尺1/4, 53は1/2）

## S X O 1 (第115図)

開削部分中央付近においてP 3として試掘トレンチを設定した箇所である。トレンチ調査の結果、明確な遺構は確認されず、第115図に示す遺物を確認したのみである。54・55は壺である。54の広口壺の口縁端部外面は強いナデにより凹線状に窪む。55は短頸の壺であり、口縁端部が上下に拡張する。56・57は甕である。口縁端部について56は上方に57は若干上下に拡張する。58は「く」の字に屈曲する高杯である。口縁部外面に凹線を巡らせる。59は高杯の脚部である。60は大型の鉢の口縁部である。直立する口縁は端部で内傾し、左右に拡張する。拡張した口縁端部上面と外面に凹線を巡らす。61は甕の底部である。S X O 1の所属時期であるが、58・60のように凹線を多用して加飾する古相を呈するものもみられるが、他の器種の口縁部に凹線が認められることから弥生時代後期中葉の時期が考えられる。



第115図 S X O 1出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

## P 4 (第110図)

P 3の山側上方約25m地点に土器片を含む灰褐色土の堆積土がみられた。詳細な調査を行っていないので不明である。

## P 5 (第110図)

P 3の山側上方約15m地点に焼土塊が多数出土した。詳細な調査を行っていないので不明である。

## 遺物採集について (第110図)

対象地域については、7月26日と試掘調査開始前の10月4日に遺構・遺物の分布確認に合わせて、第110図に示すとおり対象地に散布する遺物を採集した。

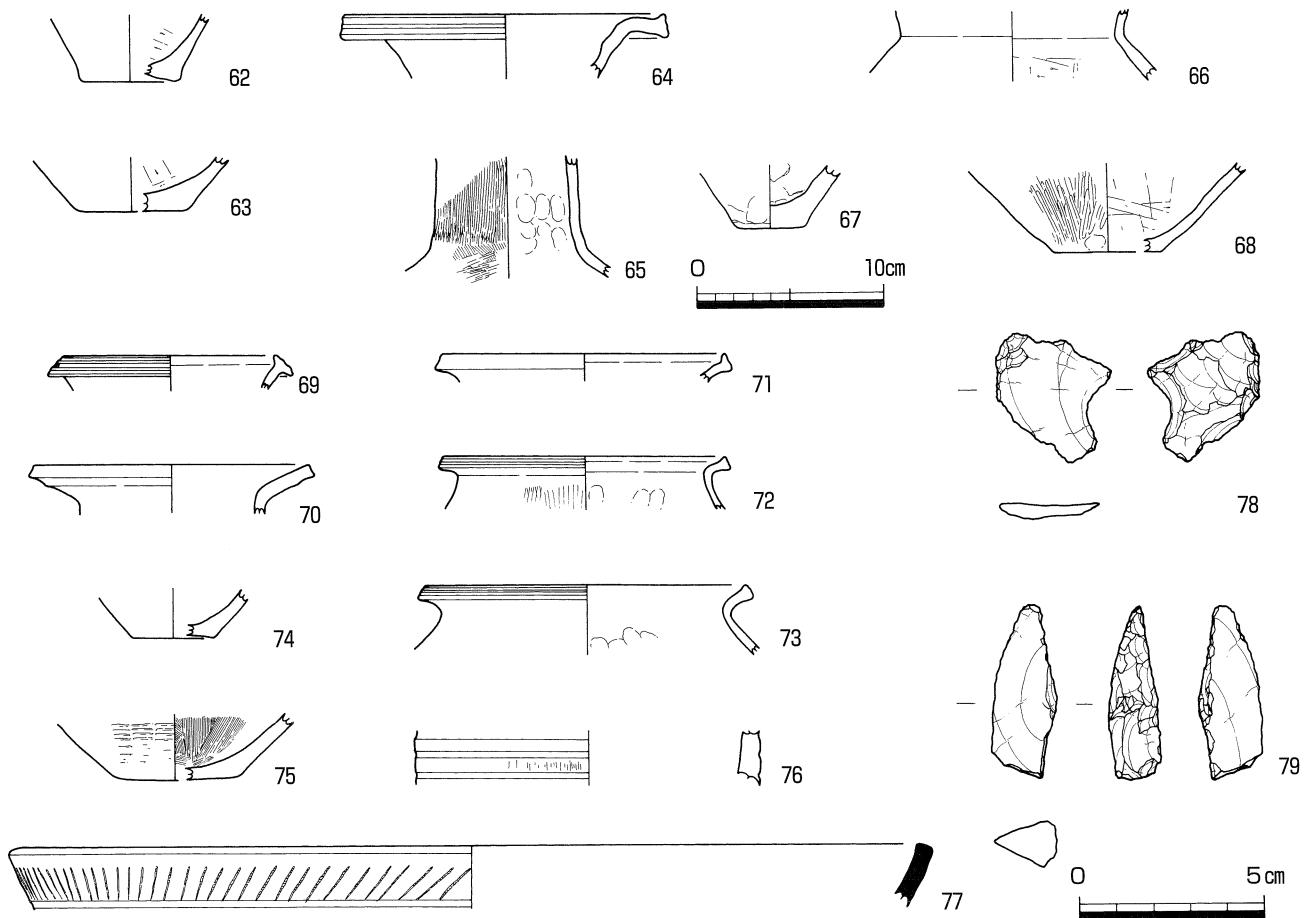
## 1993年7月26日採集遺物 (第116図)

採集地点が3箇所に分かれる。採集地点ごとに分けて報告する。62・63は第1地点採集の遺物である。いずれも弥生土器の甕底部である。64~68が第2地点採集の遺物である。64・65は壺である。64は広口壺で、口縁端部外面に凹線を巡らせる。65は長頸壺の頸部である。66は甕の頸部～体部の破片である。67は甕、68は壺の底部である。69~79は谷筋において採集した遺物である。69・70は壺である。69は拡張した口縁端部外面に凹線3条を巡らせる。70は直立した頸部から外反する口縁部をもつ。71~73は甕である。72・73の口縁端部には弱い凹線が巡る。75は壺の底部である。内面にはハケ、外面にはタタキが認められる。76は器台の体部である。外面には凹線3条現存する。77は須恵器の甕口縁部である。口縁部外面にはヘラ状工具による連続文が認められる。78はサヌカイトの剥片である。79はナイフ形石器である。

## 1993年10月4日採集遺物 (第117図)

最終地点が2箇所に分かれる。80~91が西半部において採集した遺物である。80~86は壺である。80は複合口縁の壺であると考えられる。81・82は広口壺である。口縁端部外面に凹線を巡らせる。83は長頸壺の頸部である。84・85は壺の頸部である。84は屈曲部外面に凹線1条を巡らせる。86は大型壺の体部片である。87は高杯の杯部である。88は高杯の脚部である。89・90は鉢である。90の内面にはミガキ調整が認

められる。91はサスカイト製の楔型石器である。92~100が東半部において採集した遺物である。92・93は壺である。92は口縁端部外面に凹線2条を巡らせる。94・96は土師器の甕である。直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。95は弥生土器の甕である。口縁端部を若干拡張する。97は高杯の口縁部である。端部を若干拡張する。98は水差し型土器の把手である。99は平底の甕の底部である。100はサスカイト製石庖丁の破片である。101~106は最終地点が不明な遺物である。101~103は甕である。101・102は弥生土器である。101は口縁端部を肥厚させる。102には口縁端部に凹線2条を巡らせる。103は土師器であると考えられる。104は高杯の脚部である。脚端部には凹線2条が巡る。105は甕・106鉢の底部であると考えられる。



第116図 1993年7月26日表採遺物実測図（縮尺1/4, 91・100は1/2）

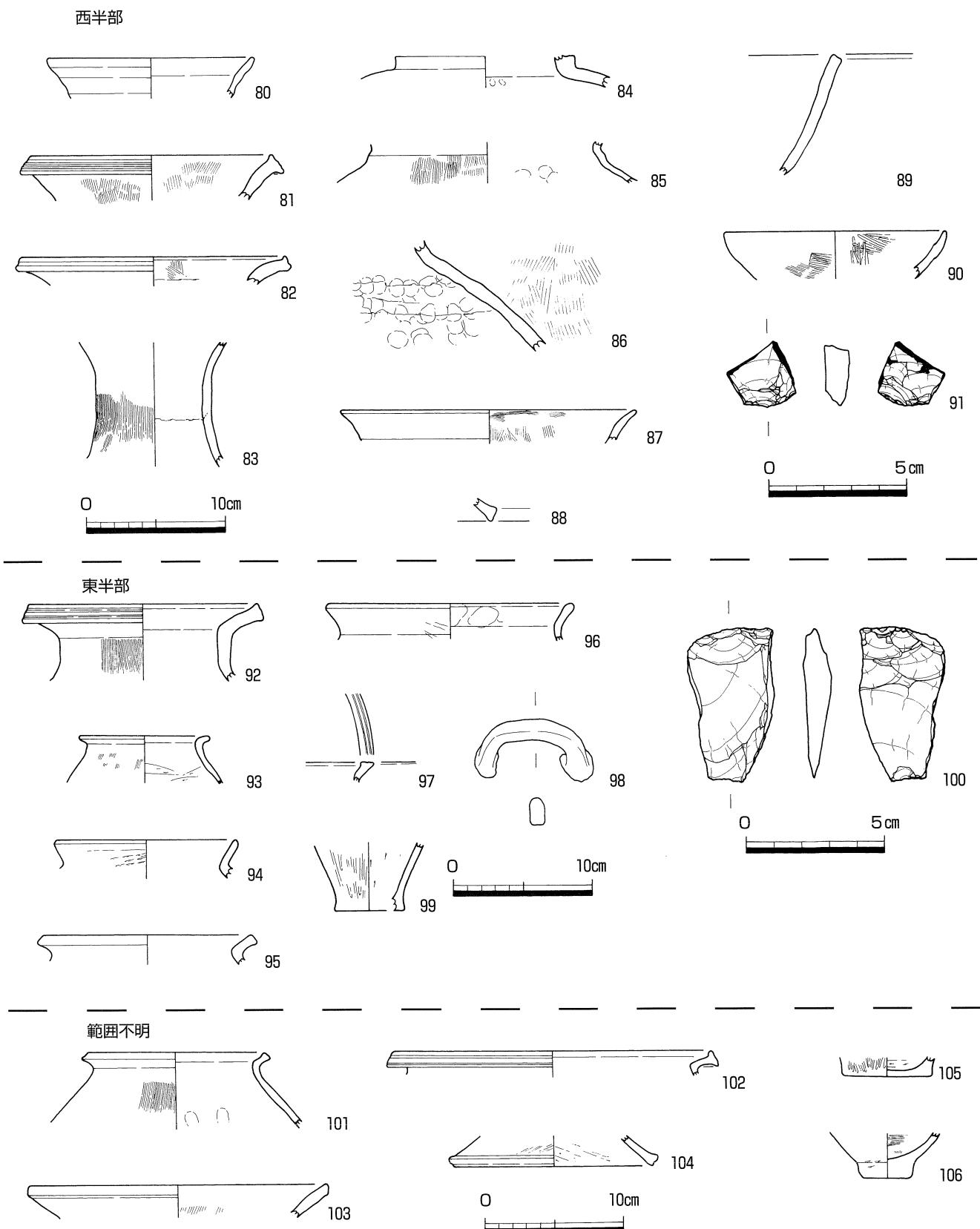
#### 第4節 まとめ

制約の多い確認調査であったが、これまで遺跡の状況が不明であった久米山東斜面の状況について少しであるが、明らかにすることができた。以下、今回の確認調査で判明した遺構の性格・時期について久米池南遺跡で確認されている遺構との関連について簡単にまとめておきたい。

#### 段状遺構について

久米山東墓地で確認したこれらの遺構については、丘陵斜面部をL字形に削平したのち、平坦面を造り、山側にそれぞれ幅20cm（段状遺構1）、幅50cm（段状遺構2）の直線的な溝をもつのが大きな特徴であり、多少、残りの良好な段状遺構2については、溝の両端で斜面側に伸びることを確認しているほか、ピットを2基確認した。これらの遺構は出土遺物から弥生時代後期中頃の時期が考えられる。検出規模は異なるが、同様な遺構は600mほど南東の丘陵上に存在した久米池南遺跡で確認されたテラス3と呼ばれた遺構に類似する。調査報告書によると延長は43.2m、最大幅3.5m、カット部分の最大幅は2.6mである。

平面形は遺構北端より14m程の部分で若干屈曲しており、ゆるやかな「L」字形を呈する。床面は北から南へ向かって3段のなだらかな階段状を呈して下がっており、1段の段差は約25cmであり、各段床面はほぼ平坦であり、山側の西壁沿いには幅10~15cm、深さ5~10cmの溝が設けられている。



第117図 1993年10月4日表採遺物実測図（縮尺1/4, 91・100は1/2）

報告書の記載にもあるとおり、複数のテラス遺構が重複した状況であると理解できる。壁溝で囲まれる範囲は概ね長さが10~12mの規模であると考えられ、久米山東墓地で確認した段状遺構2とほぼ同規模である。部分的な確認ではあるが、山側に直線的な溝をもつ段状遺構1についても同様であると考えられる。両遺跡で確認した遺構とも長さに比べて幅（奥行）が狭いのは、斜面側の床面が崩落してしまったことによるものと考えられ、本来は斜面側へ平坦地が伸びていたものと考えられる。これらの遺構の機能については、出土遺物などからの確認では特異な遺物は出土しておらず、想定の域を出ないが、久米池南遺

第11表 久米山遺跡群—久米山東墓地地区—出土遺物観察表①

第112図 段状遺構1出土遺物

※法量の( )は、残存値を表す。

報告 番号	器種	法量(cm) 口径 底径		調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
		口径	底径						
1	弥生土器 広口壺	10.0		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい褐7.5Y R5/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	口縁端部：凹線3条	
2	弥生土器 広口壺	11.3		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	外面：凹線3条、棒状浮文 内面：竹管文	
3	弥生土器 広口壺			外面：ナデ 内面：ナデ	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良	頭部：凹線2条（現状）	
4	弥生土器 広口壺			外面：ナデ 内面：ナデ	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良	頭部：凹線1条	
5	弥生土器 広口壺	17.4		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい橙7.5Y R6/4 内面：橙7.5Y R7/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良	口縁部：凹線3条 円形浮文2個	
6	弥生土器 甕	12.0		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい7.5Y R6/4 内面：にぶい橙7.5Y R6/4	1mmの石英・長石を含む	良		
7	弥生土器 甕	13.2		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい7.5Y R7/6～ 内面：明黄褐10Y R7/6～ 橙5Y R6/6	2mm以下の石英・長石を含む	良	口縁端部：凹線2条	
8	弥生土器 甕	13.2		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：7.5Y R7/6 内面：にぶい橙7.5Y R7/4	1mmの石英・長石を含む	良		
9	弥生土器 甕	13.5		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい黄橙10Y R7/4 内面：浅黄5Y R7/3	1mm以下の石英・長石を含む	良		
10	弥生土器 甕	14.8		外面：摩滅 内面：摩滅	外面：にぶい黄橙10Y R7/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	1mmの石英・長石を含む	良	口縁端部：凹線3条	
11	弥生土器 甕	15.4		外面口縁部：ヨコナデ 体部：細かい叩き後ハケ 内面口縁部：ヨコナデ 体部：指頭圧痕	外面：にぶい橙7.5Y R6/4 内面：にぶい橙7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		
12	弥生土器 甕	20.2		外面口縁部：ヨコナデ 体部上半：ナデ、叩き 内面口縁部：ヨコナデ 体部上半：ナデ	外面：にぶい黄橙10Y R7/3 内面：にぶい黄橙10Y R7/3	3mm以下の石英・長石を含む	良		
13	弥生土器 甕	18.3		外面口縁部：ヨコナデ 頸部：指押さえ 体部：ナデ 内面口縁部：ヨコナデ 体部：ナデ、軽い指押さえ	外面：明黄褐10Y R6/6 内面：明黄褐10Y R7/6	4mm以下の石英・長石を含む	良	口縁端部：凹線3条	
14	弥生土器 壺 底部		3.5	外面：指押さえ、ナデ後ハラミガキ 内面：ナデ、指押さえ	外面：黒褐7.5Y R3/1 内面：浅黄橙7.5Y R7/6	4mm以下の石英・長石を多量に含み、金雲母も含む	良		
15	弥生土器 甕 底部		4.5	外面：ナデ、ハケ 底面：細かいハケ 内面：ナデ、粗いハラ削り	外面：橙5Y R6/6～ 灰褐5Y R4/2 内面：灰褐5Y R6/6～ にぶい橙5Y R5/2	4mm以下の石英・長石を多量に含む	良		
16	弥生土器 甕 底部		6.4	外面体部：ナデ 内面体部：ヘラ削り	外面：にぶい橙7.5Y R7/4 内面：にぶい橙7.5Y R7/4	3mm以下の石英・長石、1mm以下の雲母・角閃石を含む	良		
17	弥生土器 甕 底部		5.2	外面：ヘラミガキ、下部はヨコナデ 内面：ナデ、指頭圧痕	外面：黄橙10Y R8/6 内面：浅黄橙10Y R8/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		体部下半～底部外面：黒斑有
18	弥生土器 甕 底部		1.2	外面：ハケ 内面：ヘラ削り	外面：にぶい黄橙10Y R4/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良		体部外面：黒斑有
19	弥生土器 甕 底部		9.8	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良		
20	弥生土器 甕 底部		9.1	外面：ハケ 内面：ナデ	外面：浅黄橙10Y R8/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	1～3mmの石英・長石を含む	良		外面：黒斑有
21	弥生土器 製塙土器		4.8	外面体部下半：ヘラ削り 脚部：指頭圧痕 内面：ナデ、指頭圧痕	外面：浅黄橙10Y R8/4 内面：浅黄橙10Y R8/4	1～3mmの石英・長石を含む	良		
22	弥生土器 高杯		20.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：橙5Y R6/6～ にぶい橙7.5Y R7/4 内面：橙5Y R6/6～ にぶい黄橙10Y R7/4	5mm以下の石英・長石を含む	良		
23	弥生土器 高杯		21.0	外面口縁部：ヨコナデ 杯部：ヘラミガキ 内面口縁部：ヨコナデ ハケ部：ハケ、ヘラミガキ	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		杯部外面：黒斑有
24	弥生土器 高杯		22.2	外面口縁部：ヨコナデ 杯部：ヘラ削り 内面口縁部：ヨコナデ 杯部：ヨコナデ	外面：明赤褐5Y R5/6 内面：橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良		
25	弥生土器 高杯			外面：ハケ後ヘラミガキ 内面：ハケ後ヘラミガキ	外面：明褐7.5Y R5/6 内面：明赤褐5Y R5/6～ 明黄褐10Y R6/6	2mm以下の石英・長石を含む、角閃石を含む	良		
26	弥生土器 高杯		8.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラ削り	外面：明褐7.5Y R5/6 内面：にぶい橙7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	脚部：凹線1条	
27	弥生土器 高杯		12.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい黄橙10Y R7/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	3mm以下の石英・長石を含む	良	脚端部：凹線1条	
28	弥生土器 高杯		15.4	外面：ヨコナデ 内面：ヘラ削り	外面：橙5Y R6/6 内面：橙5Y R6/6	1～2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
29	弥生土器 高杯		15.8	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	外面：浅黄橙10Y R8/4 内面：にぶい黄橙10Y R7/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	脚部：凹線1条	
30	弥生土器 高杯		15.6	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	外面：にぶい橙7.5Y R6/4 内面：にぶい橙7.5Y R5/4	1mm以下の長石・角閃石を含む	良		
31	弥生土器 高杯		16.0	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	外面：橙5Y R6/6 内面：にぶい橙7.5Y R7/4	1～2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
32	弥生土器 鉢			外面：ナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ハケ、ヨコ板ナデ	外面：橙5Y R6/8～ 褐灰7.5Y R4/1 内面：橙2.5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良		

第12表 久米山遺跡群一久米山東墓地地区－出土遺物観察表②

33	弥生土器鉢	26.8	外面口縁部:ヨコナデ 杯部:摩滅 内面口縁部:ヨコナデ 杯部:摩滅	外面:橙5Y R6/6 内面:橙5Y R6/6	1~3mmの石英・長石を含む	良	口縁端部:凹線3条	
34	弥生土器鉢	29.6	外面:ナデ 内面:ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:浅黄橙10Y R8/4	1~3mmの石英・長石を含む	良		

第114図 段状構造2出土遺物

報告番号	器種	法量(cm) 口径 底径	調整	色調	胎土	焼成	文様	備考	
35	弥生土器広口壺	21.0	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:黄橙10Y R8/6 内面:橙5Y R7/6	2mm以下の石英・長石を含む	良			
36	弥生土器広口壺	22.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:橙7.5Y R7/6 内面:橙7.5Y R7/6	1mmの石英・長石・角閃石を含む	良			
37	弥生土器広口壺		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい赤褐5Y R5/4 内面:にぶい赤褐5Y R5/4	1~2mmの石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線2条		
38	弥生土器甕	13.4	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5Y R5/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
39	弥生土器甕	13.7	外面:ナデ 内面:ヘラ削り, ナデ, ハケ	外面:灰黄褐10Y R4/2 内面:にぶい黄橙10Y R6/3 ～灰黄褐10Y R4/2	2mm以下の石英・長石を含む, 金雲母を含む	良	口縁端部:凹線1条		
40	弥生土器甕	13.6	外面:叩き 内面:ナデ	外面:明黄褐10Y R7/4 内面:明黄褐10Y R7/4	1mm以下の石英・長石を含む	良			
41	弥生土器甕	18.4	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上半:ヘラ削り	外面:にぶい黄橙10Y R6/4 内面:にぶい黄橙10Y R6/4	1mm以下の石英・長石を含む	良			
42	弥生土器底部	5.8	外面底部:指頭圧痕 底面:ヘラミガキ 内面体部下半～底部:ヘラ削り	外面:褐10Y R4/6 内面:明褐7.5Y R5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		外面底部～底面:黒斑有	
43	弥生土器底部	5.6	外面:摩滅 内面:ヘラ削り	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:にぶい橙7.5Y R6/4	4mm以下の石英・長石, 1mm以下の角閃石・雲母を含む	良			
44	弥生土器高杯		外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10Y R7/3 内面:明褐7.5Y R5/6	1~2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良			
45	弥生土器高杯	20.2	外面:ヨコナデ, ハケ 内面:ヨコナデ, ヘラミガキ	外面:明赤褐5Y R5/6 内面:明赤褐5Y R5/6	1mm以下の細かい石英・長石・雲母を含む	良			
46	弥生土器高杯	26.9	外面口縁部:ヨコナデ 杯部:ヘラ削り後 4分割ヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 杯部:4分割ヘラミガキ 脚部:ヘラ削り	外面:にぶい褐7.5Y R6/3 内面:にぶい橙7.5Y R6/4	1~3mmの石英・長石を含む	良			
47	弥生土器高杯	19.2	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:明赤褐5Y R5/6 内面:明赤褐5Y R5/6	1~2mm以下の石英・長石を含む	良			
48	弥生土器器台		外面:ナデ 内面:ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:にぶい黄褐10Y R4/	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	体部外面:綫衫状の押圧文		
49	弥生土器瓶	1.4	外面:ナデ, 指頭圧痕 内面:ナデ, 指頭圧痕	外面:橙5Y R6/6 内面:橙5Y R6/6	1~3mmの石英・長石を含む	良			
50	弥生土器瓶	2.7	外面:ハケ, ナデ 内面:指頭圧痕, 指ナデ	外面:橙5Y R6/6 内面:橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
51	弥生土器製塙土器	3.4	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄褐10Y R4/4 内面:褐10Y R4/4	1mm以下の石英・長石を含む	良			
52	須恵器杯身	長さ(2.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄2.5Y 7/3 内面:灰黄2.5Y 7/2	密	良			
53	打製石錐	長さ6.5	幅6.5		サスカイト			重量67.6g	

※法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径 底径	調整	色調	胎土	焼成	文様	備考	
54	弥生土器広口壺	14.3	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい褐7.5Y R5/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石を含む	良	口縁端部:凹線1条		
55	弥生土器短頸壺	12.0	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:にぶい黄褐10Y R4/	1mm以下の石英・長石を含む	良			
56	弥生土器甕	18.5	外面:ハケ 内面:板ナデ, ナデ	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:浅黄橙10Y R8/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
57	弥生土器甕	13.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:橙5Y R7/6	2mm以下の石英・長石を含む	良			
58	弥生土器高杯	12.6	外面:ヘラミガキ 内面脚部:ハケ, ヘラミガキ 底部:ヨコナデ	外面:橙7.5Y R7/6 内面:橙7.5Y R7/6	1~1.5mmの石英・長石・雲母を含む	良	口縁外面:凹線3条		
59	弥生土器高杯	17.6	外面:ヨコナデ 内面:ヘラ削り	外面:明赤褐2.5Y R5/6 内面:明赤褐5Y R5/6	1~2mmの石英・長石・角閃石を含む	良			
60	弥生土器大型鉢		外面:ナデ 内面:ナデ	外面:黄橙10Y R8/6 内面:黄橙10Y R8/6	1~2.5mmの石英・長石を含む	良	口縁端部:凹線3条 口縁外面:凹線3条		
61	弥生土器甕底部	9.0	外面:摩滅 内面:ヘラ削り	外面:浅黄橙10Y R8/4 内面:浅黄橙10Y R8/4	1~3mmの石英・長石を含む	良			

※法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径 底径	調整	色調	胎土	焼成	文様	備考	
62	弥生土器甕底部	5.0	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	外面:にぶい褐7.5Y R5/3 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1mmの石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
63	弥生土器甕底部	5.2	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	外面:橙5Y R6/6 内面:橙5Y R6/6	1~3mmの石英・長石を含む	良			
64	弥生土器広口壺	17.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:明赤褐5Y R5/6 内面:橙5Y R6/6	3mm以下の石英・長石を含む	良	口縁端部:凹線2条		
65	弥生土器長頸壺		外面頸部:綫方向にハケ 体部:斜め方向にハケ後 ヘラミガキ 内面:指頭圧痕	外面:橙7.5Y R6/6 内面:明褐7.5Y R5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
66	土師器甕	12.4	外面:摩滅 内面:ヘラ削り	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:にぶい黄橙10Y R7/4	1~2mmの石英・長石を含む	良			
67	弥生土器甕底部	4.0	外面:指押さえ, 板ナデ 内面:指押さえ, 板ナデ	外面:橙5Y R7/6 ～にぶい橙5Y R7/4 内面:浅黄2.5Y 7/4～ 黄灰2.5Y 4/1	5mm以下の石英・長石を含む	良			
68	弥生土器甕底部	5.8	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラ削り	外面:にぶい褐7.5Y R5/4 内面:橙7.5Y R7/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良			
69	弥生土器広口壺	11.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい橙5Y R6/4 内面:にぶい橙5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線3条 竹管文		
70	弥生土器広口壺	14.8	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:橙5Y R7/6 内面:にぶい黄橙10Y R7/4	1mmの石英・長石を含む	良			
71	弥生土器甕	15.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:赤褐5Y R4/6 内面:明赤褐5Y R5/6	1~2mmの石英・長石・角閃石を含む	良			

第13表 久米山遺跡群一久米山東墓地地区一 出土遺物観察表③

72	弥生土器 甕	15.2	外面口縁部:ヨコナデ 体部上半:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上半:指頭圧痕	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:にぶい橙7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	口縁端部:凹線2条	
73	弥生土器 甕	17.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、指頭圧痕	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:橙5Y R6/6		良	口縁端部:凹線2条	
74	弥生土器 底盤	4.4	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:橙5Y R6/6 内面:にぶい橙7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
75	弥生土器 甕底部	6.6	外面:叩き 内面:細かいハケ	外面:橙7.5Y R7/6 内面:橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
76	弥生土器 器台		外面:ハケ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10Y R5/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1~1.5mmの石英・長石・角閃石を含む	良	外面:凹線3条(現状)	
77	須恵器 甕	48.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:灰7.5Y 6/1 内面:灰5Y 6/1	密	良		
78	剥片	長さ 35	幅 31		サヌカイト			
79	ナイフ形 石器	長さ 4.6	幅 1.7		サヌカイト			

第117図 1993年10月4日表採遺物

※法量の( )は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径 底径	調整	色調	胎土	焼成	文様	備考
80	弥生土器 複合口縁壺	15.1	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:浅黄橙7.5Y R8/6 内面:橙7.5Y R7/6~褐灰7.5Y R5/1	3mm以下の石英・長石を含む	良		
81	弥生土器 広口壺	19.6	外面口縁端部:ヨコナデ 口縁部:ハケ 内面口縁部:ハケ	外面:淡黄2.5Y 8/4 内面:淡黄2.5Y 8/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線3条	
82	弥生土器 広口壺	20.0	外面:ヨコナデ 内面:ナデ、ハケ	外面:にぶい褐7.5Y R6/4 ~灰褐7.5Y R4/2 内面:黒褐7.5Y R3/2~にぶい褐7.5Y R6/4		良	口縁端部:凹線1条	接合痕
83	弥生土器 長頸壺		外面:ハケ 内面:ヨコナデ	外面:橙7.5Y R7/6 内面:にぶい黄橙10Y R7/4	2.5mm以下の石英・長石を含む	良		接合痕
84	弥生土器 壺		外面:摩滅 内面腹部:ナデ 体部:指頭圧痕	外面:橙2.5Y R7/6 内面:にぶい黄橙10Y R6/3	1~3mmの石英・長石を含む	良	屈曲部:凹線1条	
85	弥生土器 壺		外面:ハケ 内面:指頭圧痕	外面:橙5Y R6/6 内面:橙5Y R6/6	1mm以下の石英・長石を含む	良		
86	弥生土器 大型壺		外面:粗いハケ 内面:指頭圧痕	外面:橙7.5Y R6/6 内面:褐灰10Y R5/1	4mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		接合痕
87	弥生土器 高杯	21.2	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ハケ	外面:淡黄2.5Y 8/4 内面:淡黄2.5Y 8/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
88	弥生土器 高杯		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:明褐7.5Y R5/6 内面:明褐7.5Y R5/6	1mm以下の石英・雲母を含む	良		
89	弥生土器 鉢		外面:ヨコナデ 内面:ナデ	外面:黄橙10Y R8/6 内面:褐灰10Y R5/1	1mm以下の石英・長石を含む	良		
90	弥生土器 鉢	15.9	外面:ハケ 内面:ヘラミガキ	外面:橙7.5Y R6/6 内面:にぶい褐7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		
91	楔形石器	長さ (2.4)	幅 (2.4)			サヌカイト		重量5.1g
92	弥生土器 広口壺	16.4	外面口縁部:ヨコナデ 頭部:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 頭部:ナデ	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:明褐10Y R7/6	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	口縁端部:凹線2条	
93	弥生土器 甕	9.4	外面口縁部:ヨコナデ 体部上半:ハケ後ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上半:ヘラ削り	外面:にぶい橙5Y R6/4 内面:にぶい橙5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		
94	土師器 甕	12.8	外面:叩き 内面:ナデ	外面:浅黄橙10Y R8/4 内面:にぶい黄橙10Y R7/4	1~3mmの石英・長石を含む	良		接合痕
95	弥生土器 甕	15.0	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:淡黄2.5Y 8/3 内面:黄灰2.5Y 5/1	1~3mmの石英・長石を含む	良		
96	土師器 甕	18.0	外面:ナデ、ハケ 内面:ナデ、指押さえ	外面:にぶい赤褐7.5Y R5/3 内面:にぶい赤褐7.5Y R5/3	2mm程度の石英を多量に含む、長石を含む	良		
97	弥生土器 高杯		外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい褐7.5Y R5/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	口縁端部:凹線2条	
98	弥生土器 水指し型 土器		外面:ナデ	外面:浅黄橙10Y R8/4	1mm以下の石英・長石を含む	良		
99	弥生土器 甕底部	5.0	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラ削り	外面:明赤褐2.5Y R5/6 内面:明赤褐2.5Y R5/6	1~2mmの石英・長石・角閃石を含む	良		
100	打製石刀	長さ (3.1)	幅 5.5			サヌカイト		重量20.7g
101	弥生土器 甕	13.0	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ、指頭圧痕	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:にぶい褐7.5Y R5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良		
102	弥生土器 甕	23.0	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ		1mmの石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	口縁端部:凹線2条	
103	土師器 甕	21.4	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ、ハケ	外面:にぶい黄橙10Y R7/4 内面:橙5Y R6/6	3mm以下の石英・長石を含む	良		
104	弥生土器 高杯	14.4	外面脚部:ヘラミガキ 内面脚部:ヘラ削り	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:にぶい橙7.5Y R6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	脚端部:凹線2条	
105	弥生土器 甕底部	6.2	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラ削り	外面:にぶい褐7.5Y R5/3 内面:にぶい褐7.5Y R5/3	1mmの石英・長石・角閃石・雲母を含む	良		
106	弥生土器 鉢底部	3.4	外面体部:ナデ 底部:叩き 内面体部:ヨコナデ 底部:板ナデ、ハケ	外面:にぶい橙7.5Y R6/4 内面:にぶい赤褐5Y R5/3	2mm以下の石英・長石、1mm以下の角閃石・雲母を含む	良		体部~底部外面:黒斑有

跡においては斜面に造られた同時期の円形竪穴住居跡が多く確認されているのに比べ、テラス遺構と報告されたものは少ないことから、円形竪穴住居跡=居住用、テラス遺構(段状遺構)=作業用などの使い分けがなされていた可能性も考えられる。限られた範囲の類例確認であることから、この想定は十分ではなく、今後、対象範囲を広げ、分析を行うことで、正確を期したい。

## 参考文献

高松市教育委員会1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』

# 写 真 図 版



1 遺跡遠景（東から）



2 遺跡遠景（北から）



3 調査前風景（南側、東から）



4 調査前風景（北側、東から）



5 調査前風景（西側、南から）



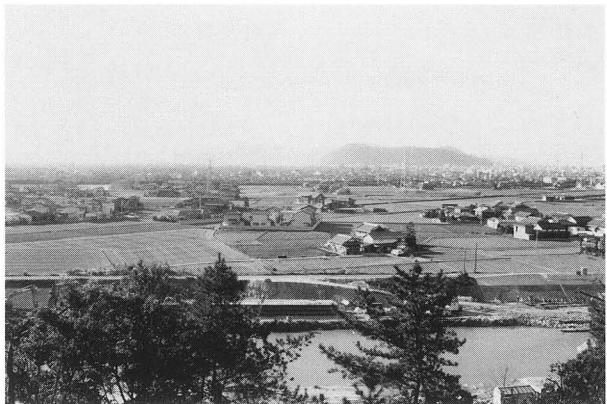
6 調査前風景（北東側、西から）



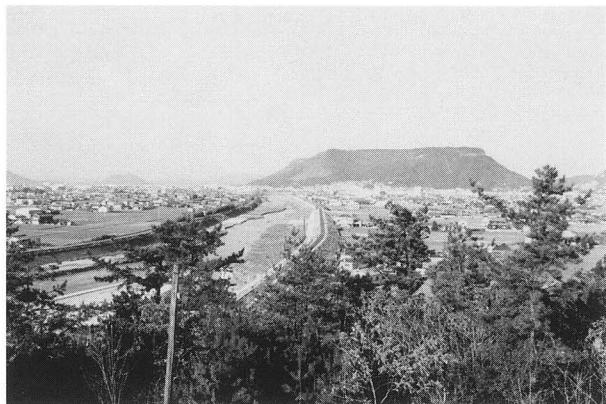
7 調査前風景（北側、北から）



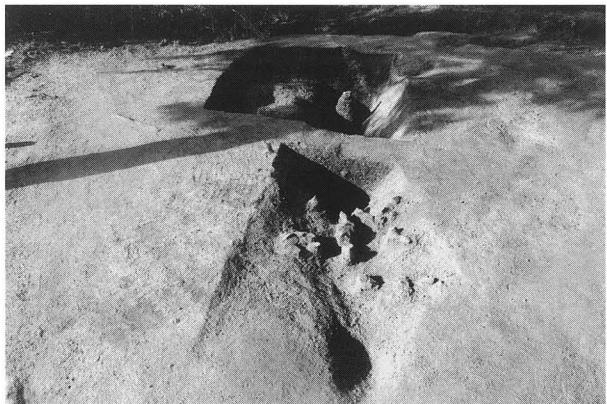
8 調査前風景（北西側、北から）



1 遺跡から西を望む



2 遺跡から北を望む



3 SD01遺物出土状況（東から）



4 SD01遺物出土状況（東から）



6 SD01 A断面（西から）



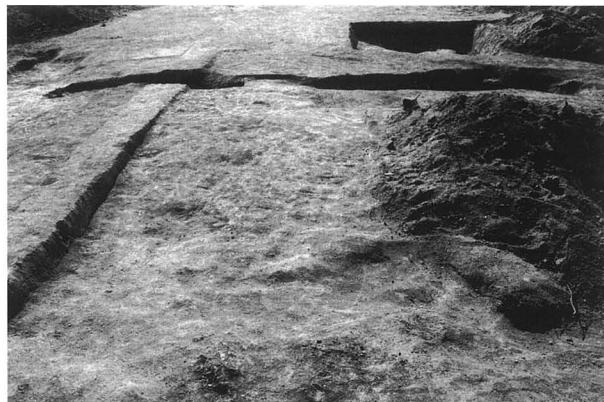
5 SD01完掘状況（東から）



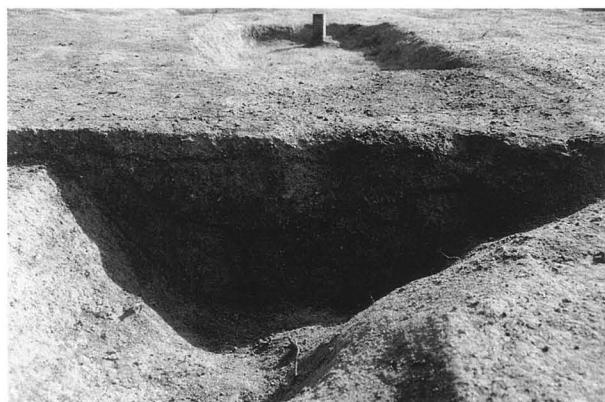
7 SD01 B断面（西から）



1 SD02完掘状況（東から）



2 SD02完掘状況（北から）



3 SD02断面（西から）



4 SD02遺物出土状況（東から）



5 SD02遺物出土状況（西から）



6 SD02遺物出土状況（西から）



7 SD02遺物出土状況（南から）



1 SD03 (東半) 完掘状況 (西から)



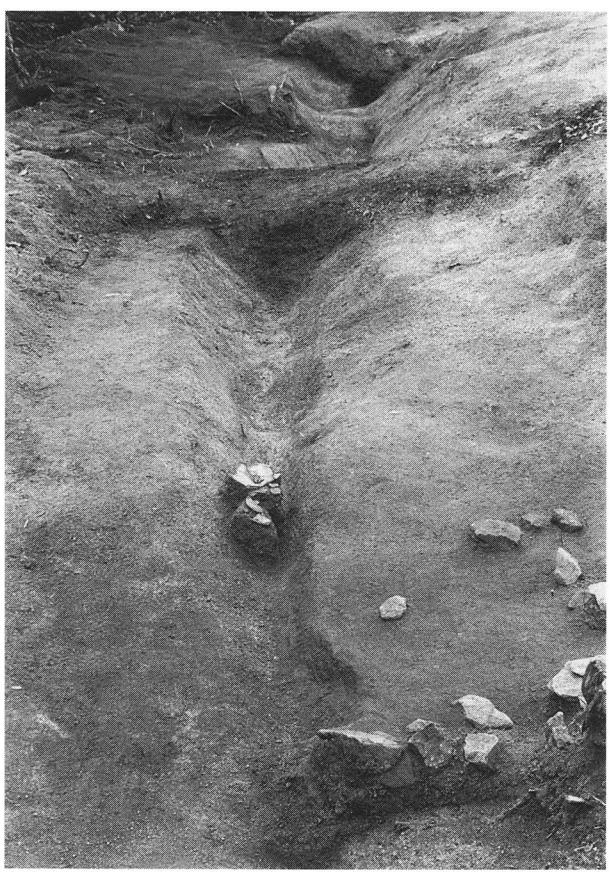
2 SD03 (東半) 完掘状況 (東から)



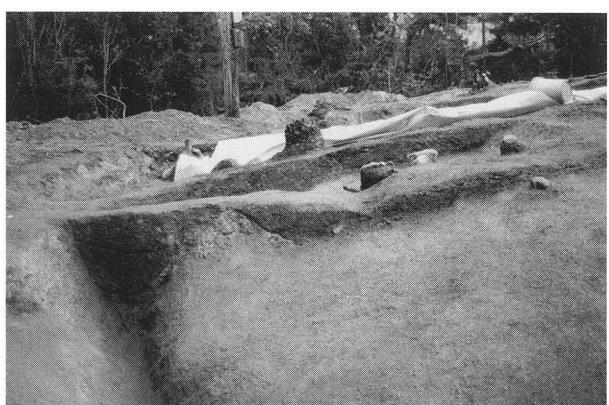
3 SD03 (東半) 完掘状況 (南東から)



4 SD03 (西半) 完掘状況 (西から)



5 SD03 (東半) 遺物出土状況 (西から)



6 SD03 (西半) B-B'断面 (西から)



7 SD03 (東半) B-B'断面 (東から)



1 SD03（西半）遺物出土状況（西から）



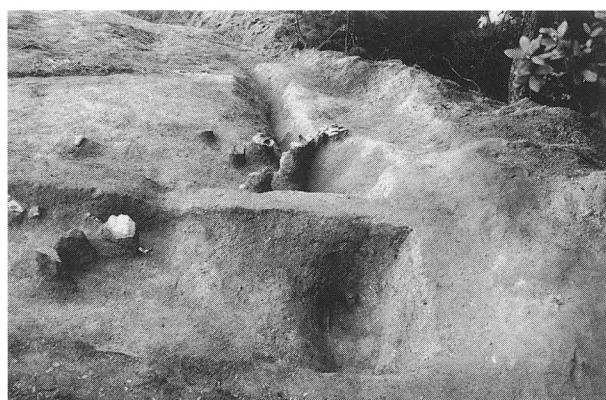
2 SD03（西半）遺物出土状況（北から）



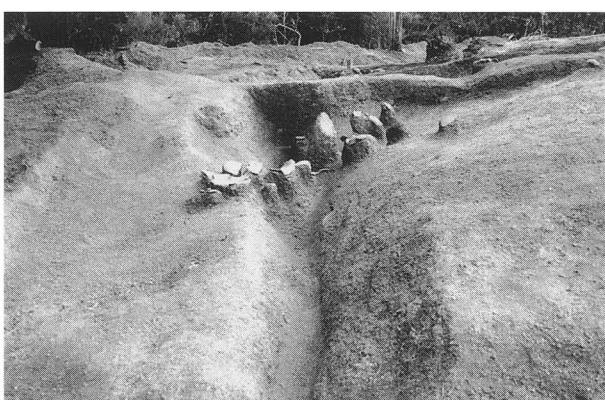
3 SD03（東半）遺物出土状況（北から）



4 SD03（東半）遺物出土状況（北から）



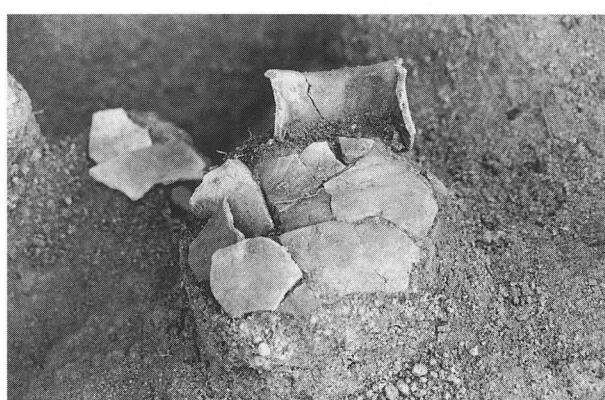
5 SD04遺物出土状況（東から）



6 SD04遺物出土状況（西から）



7 SD04遺物出土状況（南から）



8 SD04遺物出土状況（南から）



1 木棺墓1 遺物出土状況（南から）



2 木棺墓1 完掘状況（南から）



3 木棺墓縦断面（南東から）



4 木棺墓横断面（西から）



5 木棺墓1 遺物出土状況（東から）



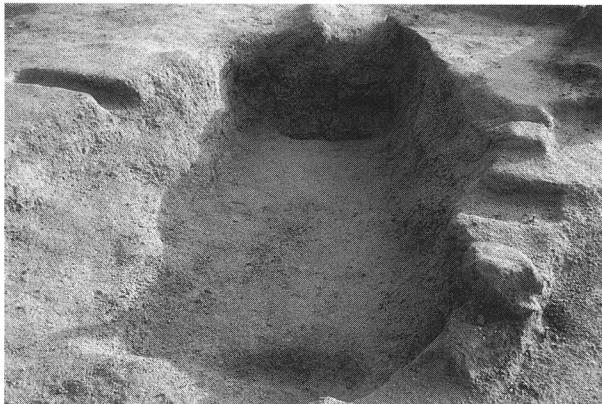
6 木棺墓2 完掘状況（北東から）



7 木棺墓2 完掘状況（北西から）



8 木棺墓2 断面（北西から）



1 木棺墓3完掘状況（西から）



2 木棺墓3完掘状況（北から）



3 木棺墓3完掘状況（東から）



4 木棺墓3と第1堅穴式石槨（西から）



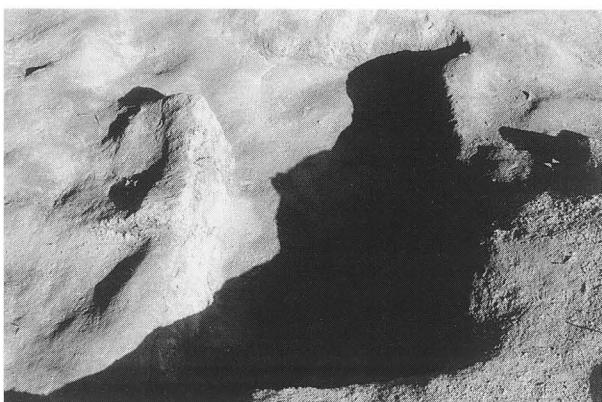
5 木棺墓3と第1堅穴式石槨（東から）



6 木棺墓3と第1堅穴式石槨（西から）



7 土壌墓完掘状況（北から）



8 土壌墓完掘状況（西から）



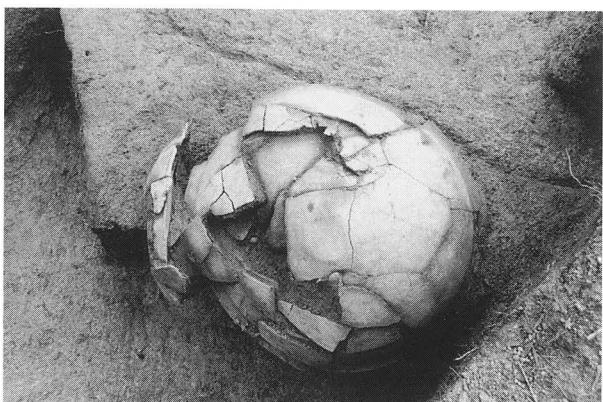
1 土器棺墓1検出状況（西から）



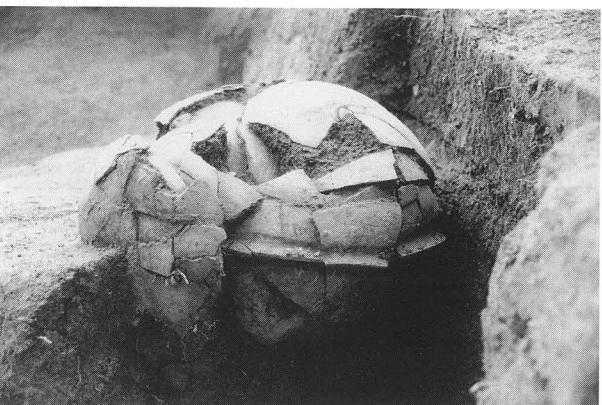
2 土器棺墓1検出状況（南から）



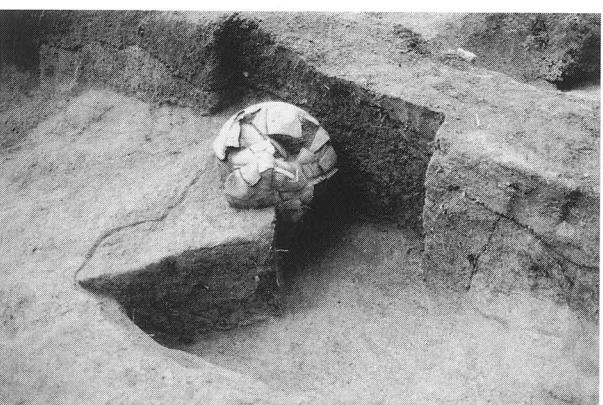
3 土器棺墓1検出状況（北西から）



4 土器棺墓1検出状況（北東から）



5 土器棺墓1半裁状況（北東から）



6 土器棺墓1半裁状況（北東から）



7 土器棺墓1棺身出土状況（北から）



8 土器棺墓2検出状況（北から）